

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXII

鳥取県鳥取市気高町

常松菅田遺跡Ⅱ

2016

鳥取県教育委員会

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXII

鳥取県鳥取市気高町

常松菅田遺跡Ⅱ

2016

鳥取県教育委員会



常松菅田遺跡出土形代類（人形・馬形・斎串・武器形・舟形）



常松菅田遺跡出土墨書土器

序

山陰自動車道は鳥取市を起点とし、山口県美祢市を終点とする、延長380キロメートルの自動車専用道路であり、国土交通省により整備が進められているところです。

鳥取県内の事業区間である「鳥取西道路」は、鳥取市本高から同市青谷町青谷を結ぶ延長19.3キロメートルの区間であり、その改築事業に伴う事前の発掘調査を平成20年度から当教育委員会が実施しています。平成21年度からは、財団法人鳥取県教育文化財団（平成25年度から公益財団法人に移行）に現地での発掘調査や出土遺物等の整理作業、報告書作成を委託して調査を進めているところです。

今回報告する常松菅田遺跡の調査では、これまで調査の手があまり入っていなかった気高町の瑞穂谷と宝木谷が合流する平野部において、縄文時代から古代にかけての人々の営みの跡を確認することができました。特に、木製形代類を用いた奈良時代の祭祀の具体的な姿がほぼそのまま残っていたことは、当時の人々の精神世界を鮮やかに再現することが可能であり、この地域の歴史を語る上で、欠かすことのできない発見となりました。

さらに現地説明会を開催し、これらの発掘調査成果について、地元を中心とした多くの方々に紹介してまいりました。このような取り組みは、先人が残した素晴らしい遺産を後世に伝承することとして、現在に生きる私たちの重要な責務と考えております。

本書をまとめるに当たり、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所並びに地元関係者の方々には、一方ならぬ御助言、御協力をいただきました。心から感謝し、厚く御礼申し上げます。

平成28年10月

鳥取県教育委員会
教育長 山本仁志

例 言

- 1 本書は、一般国道9号（鳥取西道路）改築工事に伴い、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所から委託を受け、平成26年度に実施した常松菅田遺跡（1区）の発掘調査報告書である。
- 2 常松菅田遺跡は、鳥取市気高町常松字菅田677～679に所在する。平成26年度の調査面積は6,710㎡である。現地調査は、平成26年4月1日から11月30日まで行い、調査記録と出土遺物の整理作業、報告書の作成は、平成28年3月31日まで行った。
- 3 本調査の名称は「常松菅田遺跡14（1区）」で、出土品等の注記には「ツネスガ14」の略号を用いた。
- 4 発掘調査の監理は、公益財団法人鳥取県教育文化財団（以下、財団）に委託した。
- 5 発掘調査に際し、埋蔵文化財発掘調査支援業務委託（常松大谷遺跡・常松菅田遺跡）島田組・アイコンヤマト共同企業体の支援を受けた。遺跡での掘削作業、記録作成と測量作業は財団の指示のもと、企業体が実施した。
- 6 調査で作成した図面の再編集、出土遺物の整理作業や記録作成は財団に委託し、同財団副主幹、文化財主事、整理作業員が行った。
- 7 遺物の写真撮影は、財団文化財主事 水村直人および河合章行が行った。
- 8 本書の執筆は目次に記し、編集は財団副主幹 駒井正明の協力を受けながら、水村が行った。
- 9 出土遺物のうち木製祭祀具については、播磨町郷土資料館大平茂氏（現ひょうご歴史研究室共同研究員）に御指導、御助言賜った。
- 10 自然科学分析（花粉分析、珪藻分析、植物珪酸体分析、放射性炭素年代測定）についてはパリノ・サーヴェイ株式会社に、木製品保存処理については株式会社吉田生物研究所に、それぞれ委託した。自然科学分析の結果については、論旨に影響しない範囲で成果報告書の語句等を財団で加筆修正し、第5章第1節に掲載した。第5章第2節には、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所村田泰輔氏より玉稿を賜った。記して感謝申し上げる。
- 11 出土した文字資料の釈読は、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所史料研究室の渡邊晃宏、馬場 基、山本 崇、桑田訓也、山本祥隆の諸氏に御指導、御助言賜った。また文字資料の写真撮影は、同研究所中村一郎氏によるものである。記して感謝申し上げる。
- 12 本調査に関する図面・写真等の記録および出土遺物は、全て台帳等に登録して収納しており、今後活用できるように、随時検索できる状態で鳥取県埋蔵文化財センターにて保管している。
- 13 現地調査、報告書の作成にあたって、下記の方々や機関から、様々な御指導、御助言、また御支援を賜った。記して感謝申し上げる（敬称略、順不同）。

鐵 英記、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所、公益財団法人大阪府文化財センター、兵庫県立考古博物館、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所、鳥取市、常松地区自治会

凡 例

- 1 本書に記載された測量成果については、世界測地系に基づいている。図中のX・Y座標は国土座標第V系によるものであり、m単位で表記している。平面図の方位は座標北を示している。
- 2 標高は海拔標高で示した。
- 3 本報告書に使用した地図は、国土地理院発行（1/25,000、1/200,000 地形図）を縮小、加筆して使用したものである。また、第1－2図は、測量法第43条に基づく複製承認を得て、鳥取市都市計画図を複製したものに加筆した（承認番号 平成27年6月15日付け鳥取市指令受都第63号）。
- 4 本遺跡の土層に示した土色は、小山正忠・竹原秀雄編著（2011）『新版標準土色帖』に基づき、土の色相、明度および彩度を判定したものである。地層観察用畦の観察面はシートで被覆する等して、湿った状態を保つように留意した。また、地層の粒度の記載に関しては、地質学で標準的に用いられるWentworth(1922)の区分を使用した。同一地層内に粒度が幅をもって認められるときには、より主体を占める粒径を先にして、「シルト～粗砂」、「極粗砂～細砂」のように記載した。
- 5 発掘調査時に付した遺構番号、遺構名は第3章第2節で詳述する。また調査時に用いた層名が些か煩雑なため、同節にて再整理した結果を記載した。以下本書では新層名で記述をすすめる。
- 6 遺構平面図や断面図の縮尺は統一していないが、挿図ごとにスケールバーと縮尺を示している。
- 7 遺物実測図の縮尺については、基本的に土器を1/4、土製品を1/4、石器を2/3、木製品を1/4、1/8および1/16、金属製品を1/4で示した。
- 8 遺物実測図の断面は須恵器を黒塗り、それ以外のものは白抜きで示した。
- 9 遺物観察表の法量記載における高は器高、口は口径、底は底径を、さらに※は推定復元値、△は残存値を示す。
- 10 本書における遺構、遺物の時期決定は以下の文献を主な参考としている。

田辺昭三 1981『須恵器大成』 角川書店

谷口恭子・前田 均編 1991『岩吉遺跡Ⅲ』 鳥取市教育委員会・鳥取市遺跡調査団

清水真一 1992「因幡・伯耆地域」正岡陸夫・松本岩雄編『弥生土器の様式と編年－山陽・山陰編－』 木耳社

牧本哲雄 1999「古墳時代の土器について」牧本編『長瀬高浜遺跡Ⅷ・園第6遺跡』
財団法人鳥取県教育文化財団鳥取県埋蔵文化財センター

岡田裕之・八峠 興 2014「鳥取における古代から中世前期の土器編年－須恵器と回転台土師器を基に－」『調査研究紀要5』 鳥取県埋蔵文化財センター

目次

序、例言、凡例

目次

挿図一覧、挿表一覧、巻頭図版一覧、文中写真一覧、写真図版一覧

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯(駒井)	1
第2節 調査の経過(駒井)	3
第3節 調査体制(水村)	5

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境(水村)	7
第2節 歴史的環境(駒井)	9

第3章 調査の方法

第1節 調査地の地区割(駒井)	13
第2節 発掘調査と記録の対象(駒井)	14
第3節 出土遺物の整理(駒井)	16

第4章 1区の調査成果

第1節 調査の概要(駒井・水村)	17
第2節 基本層序(駒井)	18
第3節 中世以降の調査成果(駒井・水村)	29
第4節 古代の調査成果(駒井)	39
第5節 古墳時代以前の調査成果(水村)	45
第6節 出土遺物(駒井・水村)	60
第7節 遺物観察表	96

第5章 自然科学的調査の成果

第1節 常松菅田遺跡の古環境解析	105
第2節 1区南壁谷部付近の堆積構造(村田)	120

第6章 総括

第1節 遺跡の変遷と評価(水村)	127
第2節 木製祭祀具の年代と変遷(駒井・水村)	138

参考文献

Summary (水村)

写真図版

抄録・奥付

挿図一覧

第1-1図	鳥取西道路路線と調査地位置図	1	第4-39図	8面遺構・X層以下出土土器	68
第1-2図	調査地周辺図	2	第4-40図	石器	69
第2-1図	遺跡の位置	7	第4-41図	刀子	71
第2-2図	遺跡周辺地形図	8	第4-42図	漆器	72
第2-3図	周辺遺跡分布図	10	第4-43図	人形(1)(Ⅷ層、47・48流路)	74
第3-1図	調査区割図	13	第4-44図	人形(2)(48流路)	75
第4-1図	常松菅田遺跡全図	17	第4-45図	人形(3)(48流路、谷部(上層))	76
第4-2図	東壁土層断面図	19	第4-46図	馬形(1)(47・48流路)	77
第4-3-1図	西壁土層断面図(1)	20	第4-47図	馬形(2)(48流路)	78
第4-3-2図	西壁土層断面図(2)	21	第4-48図	馬形(3)(Ⅸ層、7面精査、谷部(上層)1)	79
第4-4-1図	南壁土層断面図(1)	22	第4-49図	馬形(4)(谷部(上層)2)	80
第4-4-2図	南壁土層断面図(2)	23	第4-50図	武器形(1)(47・48流路)	81
第4-5図	北壁土層断面図	24	第4-51図	武器形(2)(Ⅸ層、谷部(上層))	82
第4-6-1図	サブトレンチ5土層断面図(1)	25	第4-52図	鳥形・エブリ形・鋤形・舟形・櫛	83
第4-6-2図	サブトレンチ5土層断面図(2)	26	第4-53図	斎串(1)(47・48流路)	85
第4-7-1図	南北サブトレンチ土層断面図(1)	27	第4-54図	斎串(2)(谷部(上層)1)	86
第4-7-2図	南北サブトレンチ土層断面図(2)	28	第4-55図	斎串(3)(谷部(上層)2)	87
第4-8図	1～4面平面図	29	第4-56図	建築部材(1)	88
第4-9図	1畦畔	30	第4-57図	建築部材(2)	89
第4-10図	5面平面図	31	第4-58図	杭・矢板	91
第4-11図	45土坑	32	第4-59図	農具・漁労具・紡織具	92
第4-12図	41・43・44・47・48流路断面図	33	第4-60図	容器、槽・盤類	94
第4-13図	47・47(新)・48流路断面図	35	第4-61図	法華経棒	95
第4-14図	41流路	37	第4-62図	不明木製品	95
第4-15図	43・44流路	38	第5-1図	調査地点の断面模式図	106
第4-16図	42流路	39	第5-2図	暦年較正結果の比較	111
第4-17図	6面平面図	40	第5-3図	主要珪藻化石群集の層位分布	113
第4-18図	47・48流路	41	第5-4図	花粉化石群集の層位分布	115
第4-19図	47流路遺物分布図	42	第5-5図	植物珪酸体含量密度の層位分布	116
第4-20図	47(新)流路想定図	43	第5-6図	南壁土層断面と試料層位	121
第4-21図	7面平面図	45	第5-7図	軟X線撮像図(左)と堆積構造を 解釈した加筆図(右)(試料層位1～3)	123
第4-22図	46杭列	47	第5-8図	軟X線撮像図(左)と堆積構造を 解釈した加筆図(右)(試料層位4～6)	124
第4-23図	8面平面図	50	第5-9図	軟X線撮像図(左)と堆積構造を 解釈した加筆図(右)(試料層位7～9)	125
第4-24図	竪穴建物1	52	第5-10図	軟X線撮像図(左)と堆積構造を 解釈した加筆図(右)(試料層位10～12)	126
第4-25図	61土坑	53	第6-1図	常松菅田遺跡と常松大谷遺跡の 変遷(1)	129
第4-26図	62土坑	53	第6-2図	常松菅田遺跡と常松大谷遺跡の 変遷(2)	130
第4-27図	68土坑	54	第6-3図	常松菅田遺跡と常松大谷遺跡の 変遷(3)	132
第4-28図	60ピット	54	第6-4図	常松菅田遺跡と常松大谷遺跡の 土地利用に関する概念	136
第4-29図	63～67ピット	55	第6-5図	常松地区で想定される遺跡の 立地模式図	137
第4-30図	49溝	56			
第4-31図	59溝	57			
第4-32図	9・10面平面図	59			
第4-33図	Ⅷ層出土土器・土製品	61			
第4-34図	Ⅸ層出土土器・土製品	61			
第4-35図	47(新)・48流路出土土器	63			
第4-36図	谷部(上層)・46杭列出土土器	64			
第4-37図	谷部(下層)出土土器(1)	66			
第4-38図	谷部(下層)出土土器(2)	67			

第6-6図	木製祭祀具出土分布図	139	第6-9図	7世紀後半から12世紀にかけての 木製祭祀具および共伴土器の変遷	145
第6-7図	砂入遺跡出土木製祭祀具	141			
第6-8図	常松菅田遺跡出土斎串の型式分類	143			

挿表一覧

第3-1表	新旧層位名対照表	14	第4-13表	木製祭祀具観察表(3)	102
第4-1表	層位・遺構別出土土器点数表	60	第4-14表	木製祭祀具観察表(4)	103
第4-2表	層位・遺構別出土木製祭祀具点数表	73	第4-15表	木製祭祀具観察表(5)	104
第4-3表	型式別斎串点数表	84	第5-1表	分析対象一覧	105
第4-4表	土器観察表(1)	96	第5-2表	放射性炭素年代測定および 暦年較正結果	110
第4-5表	土器観察表(2)	97	第5-3-1表	珪藻分析結果(1)	112
第4-6表	土器観察表(3)	98	第5-3-2表	珪藻分析結果(2)	113
第4-7表	石器観察表	99	第5-4表	花粉分析結果	114
第4-8表	鉄器観察表	99	第5-5表	植物珪酸体分析結果	116
第4-9表	木器観察表(1)	99	第6-1表	砂入遺跡と常松菅田遺跡の人形の特質	141
第4-10表	木器観察表(2)	100	第6-2表	砂入遺跡と常松菅田遺跡の馬形の特質	142
第4-11表	木製祭祀具観察表(1)	100			
第4-12表	木製祭祀具観察表(2)	101			

巻頭図版一覧

巻頭図版1	常松菅田遺跡出土形代類 (人形・馬形・斎串・武器形・舟形)	巻頭図版2	常松菅田遺跡出土墨書土器
-------	----------------------------------	-------	--------------

文中写真一覧

写真1	現地説明会風景	写真2	59溝遺物出土状況(東から)
-----	---------	-----	----------------

写真図版一覧

写真図版 1	1 調査区遠景(北東から)		
	2 調査区遠景(南から)		
写真図版 2	1 調査区遠景(東から)		
	2 調査区遠景(西から)		
写真図版 3	1 調査区西壁断面(東から)		
	2 調査区南壁断面(北から)		
	3 調査区南壁断面(部分拡大)		
写真図版 4	1 調査前風景(北東から)		
	2 1面完掘状況(南西から)		
写真図版 5	1 2面完掘状況(南西から)		
	2 1畦畔土層断面(北から)		
	3 暗渠検出状況(1)(東から)		
	4 暗渠検出状況(2)(東から)		
	5 暗渠検出状況(3)(北から)		
写真図版 6	1 3面完掘状況(北半)(東から)		
	2 3面完掘状況(南半)(北東から)		
写真図版 7	1 4面完掘状況(北半)(東から)		
	2 26畦畔検出状況(西から)		
	3 30ピット土層断面(南から)		
	4 28土坑土層断面(東から)		
	5 36土坑土層断面(南から)		
写真図版 8	1 5面完掘状況(北東から)		
	2 45土坑土層断面(東から)		
	3 41~44流路完掘状況(南西から)		
	4 41流路土層断面および遺物出土状況(南西から)		
	5 42流路土層断面(南から)		
写真図版 9	1 VIII層土馬(Po4)出土状況(北東から)		
	2 6面完掘状況(西から)		
写真図版 10	1 47・48流路土層A-A'断面(1)(南から)		
	2 47・48流路土層A-A'断面(2)(南から)		
	3 47・48流路土層A-A'断面(3)(南から)		
	4 47・48流路土層A-A'断面(4)(南から)		
	5 47・47(新)・48流路土層B-B'断面(南東から)		
写真図版 11	1 47・48流路完掘状況(東から)		
	2 47流路木製祭祀具出土状況(北から)		
写真図版 12	1 47流路木製祭祀具出土状況(南東から)		
	2 47流路ウシ右下顎第3後臼歯出土状況(南東から)		
	3 47(新)流路土器(Po22・25)出土状況(南東から)		
写真図版 13	1 7面完掘状況(西から)		
	2 谷部(上層)遺物出土状況(北東から)		
	3 谷部(上層)土器(Po33)出土状況(東から)		
	4 谷部(上層)土器(Po36)出土状況(西から)		
写真図版 14	1 46杭列検出状況(南から)		
	2 46杭列断割状況(北西から)		
	3 46杭列断割状況(南東から)		
	4 46杭列断割状況(北西から)		
	5 46杭列断割状況(東から)		
写真図版 15	1 8面完掘状況(西から)		
	2 8面完掘(北半)状況(東から)		
写真図版 16	1 谷部(下層)W146・147出土状況(北東から)		
	2 谷部(下層)W153出土状況(北から)		
	3 谷部(下層)倒木およびPo34・35出土状況(南から)		
写真図版 17	1 谷部(下層)W175出土状況(南から)		
	2 谷部(下層)Po67出土状況(南から)		
	3 68土坑土層断面(南西から)		
写真図版 18	1 66ピット土層断面(西から)		
	2 63ピット土層断面(西から)		
	3 62土坑土層断面(南から)		
写真図版 19	1 61土坑土層断面(西から)		
	2 49溝土層断面(北東から)		
	3 49溝土器(Po74)出土状況(南西から)		
写真図版 20	1 竪穴建物 1 50溝土層断面(南から)		
	2 竪穴建物 1 53柱穴 A・C土層断面(南から)		
	3 竪穴建物 1 55柱穴 B・D土層断面(南から)		
写真図版 21	1 竪穴建物 1 52溝土層断面(南から)		
	2 竪穴建物 1 完掘状況(北西から)		
写真図版 22	1 59溝土層断面(南から)		
	2 59溝遺物出土状況(東から)		
	3 67ピット土層断面(北から)		
写真図版 23	1 9面完掘状況(西から)		
	2 9面土器(Po77)出土状況(東から)		
写真図版 24	1 10面完掘状況(西から)		
	2 調査区完掘状況(東から)		
写真図版 25	1 VIII層出土土器		
	2 IX層出土土器		
	3 47(新)流路出土土器(1)		
写真図版 26	1 47(新)流路出土土器(2)		

写真図版26	2	48流路出土土器(1)			
	3	48流路出土土器(2)			
	4	46杭列出土土器			
写真図版27	1	谷部(上層)出土土器(1)			
写真図版28	1	谷部(上層)出土土器(2)			
	2	8面検出遺構・Ⅺ層出土土器			
	3	68土坑出土土器			
	4	9面出土土器			
写真図版29	1	谷部(下層)出土土器(1)			
写真図版30	1	谷部(下層)出土土器(2)			
写真図版31	1	谷部(下層)出土土器(3)			
写真図版32	1	Ⅷ・Ⅸ層出土土製品			
	2	出土石器			
写真図版33	1	出土漆器(内面)			
	2	出土漆器(外面)			
写真図版34	1	47・48流路出土人形			
	2	48流路出土人形			
	3	谷部(上層)出土人形			
	4	47流路出土馬形			
写真図版35	1	48流路出土馬形(1)			
	2	48流路出土馬形(2)			
	3	48流路出土馬形(3)			
	4	Ⅸ層および谷部(上層)出土馬形			
写真図版36	1	7面および谷部(上層)出土馬形			
	2	谷部(上層)出土馬形(1)			
	3	谷部(上層)出土馬形(2)			
	4	谷部(上層)出土馬形(3)			
写真図版37	1	谷部(上層)出土馬形(4)			
	2	腹孔棒残存状況			
	3	47・48流路および谷部(上層)出土武器			
					形(1)
写真図版37	4	47・48流路および谷部(上層)出土武器			形(2)
写真図版38	1	エブリ形・鳥形・鋤形・櫛			
	2	47・48流路および谷部(上層)出土斎串			
	3	谷部(上層)出土斎串(1)			
	4	谷部(上層)出土斎串(2)			
写真図版39	1	建築部材(1)			
	2	建築部材(2)			
	3	建築部材(3)			
	4	建築部材(4)			
写真図版40	1	建築部材(5)			
	2	建築部材(6)			
	3	建築部材(7)			
	4	建築部材(8)			
写真図版41	1	46杭列出土杭・矢板			
	2	舟形、容器類、不明木製品			
	3	農具			
	4	漁労具			
写真図版42	1	紡織具・杭			
	2	容器類			
	3	48流路出土鞘付き刀子			
写真図版43	1	文字資料(1)			
	2	文字資料(2)			
	3	文字資料(3)			
写真図版44	1	文字資料(4)			
	2	文字資料(5)			
写真図版45	1	微化石顕微鏡写真(珪藻)			
写真図版46	1	微化石顕微鏡写真(花粉)			
写真図版47	1	微化石顕微鏡写真(植物珪酸体)			

第1章 調査の経緯と経過

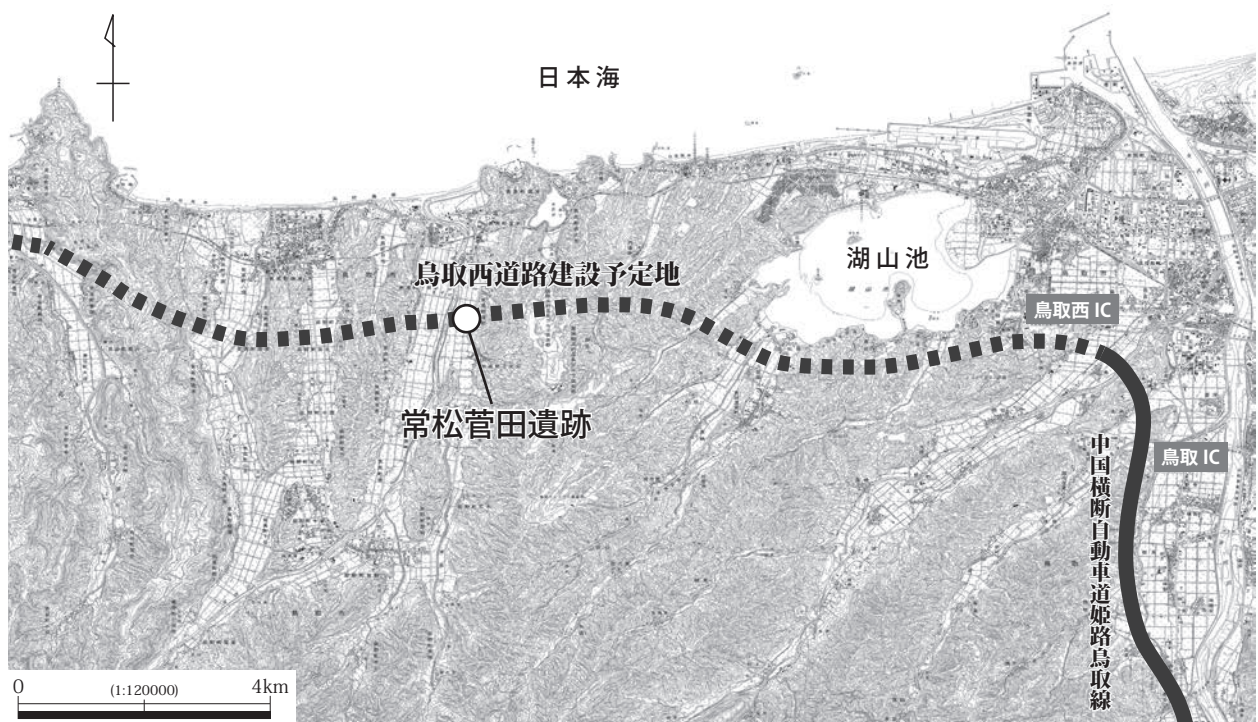
第1節 調査に至る経緯

一般国道9号(鳥取西道路)改築工事に伴い、鳥取市気高町の宝木谷と瑞穂谷が合流する谷底平野所在の常松菅田遺跡の発掘調査を、平成25年度から平成26年度にかけて実施した。平成25年度には2区を、引き続き平成26年度には隣接する1区の発掘調査を行った。

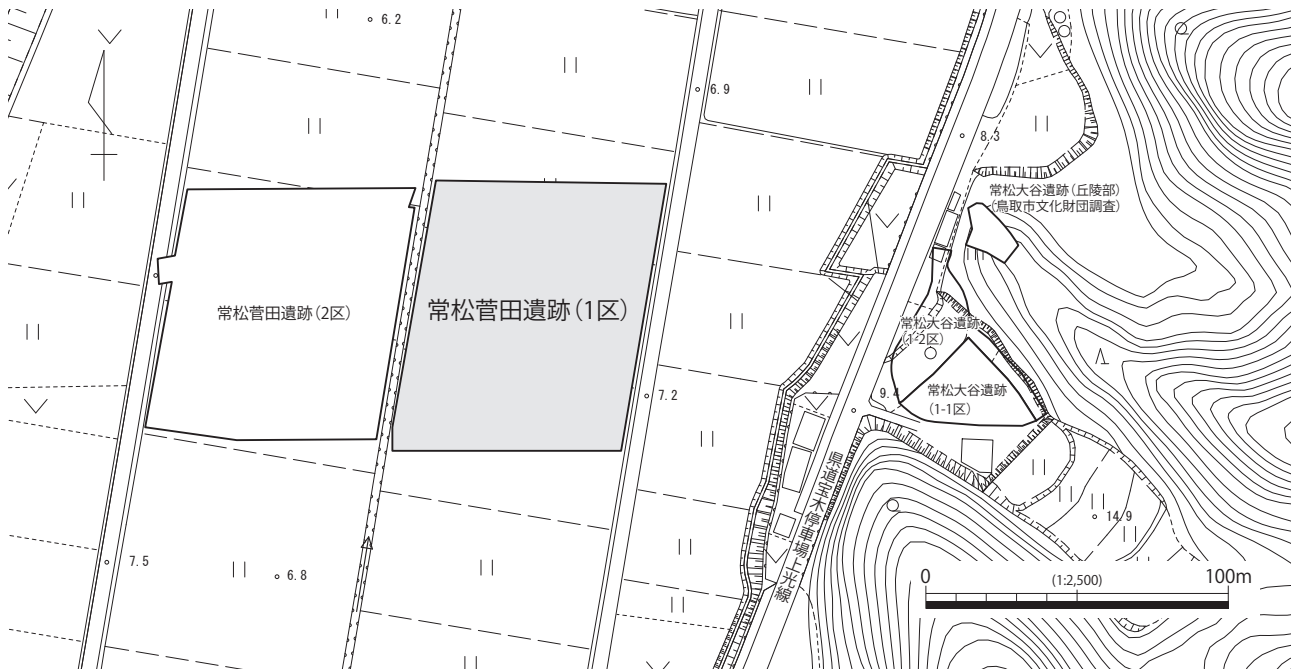
山陰地方では、観光、物流等の地域活性化をめざした幹線道路ネットワークの形成、交通渋滞の解消および緩和、また災害時の緊急輸送路確保等を目的とし、中国横断自動車道姫路鳥取線や山陰自動車道等の国土開発幹線道路の整備が進められている。鳥取市本高と鳥取市青谷町青谷を結ぶ全長19.3kmの鳥取西道路もその一環として、山陰自動車道の一部となる事業である(第1-1図)。

この鳥取西道路の計画地内には、数多くの遺跡が存在している。建設に先立って、国土交通省中国地方整備局鳥取河川国道事務所(以下、国土交通省)、鳥取県、鳥取市により埋蔵文化財の取扱いについて協議がもたれ、まず、計画地内に存在する遺跡の状況を把握する必要性が確認された。これを受け、平成17年度からは、計画地内の踏査による分布調査や鳥取市教育委員会による試掘調査が逐次行われ、これら調査結果に基づき道路事業と埋蔵文化財保護との調整が図られている。文化財保護法94条による手続きを踏まえ、記録保存のための発掘調査が必要である場合には、国土交通省の委託を受け、鳥取県教育委員会、または鳥取市教育委員会が調査を実施した。

本遺跡が位置する常松地区の道路計画地内では、平成24年度に鳥取市教育委員会が試掘調査を行った結果、中世の遺構や遺物等が事業地内に存在することが確認された(谷岡他2013)。



第1-1図 鳥取西道路路線と調査地位置図



第1-2図 調査地周辺図

この結果を受けて、国土交通省、鳥取県、鳥取市で協議した結果、道路盛土部分となる13,120㎡を対象として記録保存のための発掘調査が行われることになり、鳥取県教育委員会が国土交通省の委託を受けて平成25年度に6,410㎡(2区)、平成26年度に6,710㎡(1区)の発掘調査を実施した(第1-2図)。本書で報告するのは、平成26年度に実施した1区^{つねまつおたに}の発掘調査成果であり、2区の調査成果については、既に『常松菅田遺跡I』として平成27年10月に刊行している(水村編2015)。なお、常松菅田遺跡の東方には、県道を挟んで常松大谷遺跡が所在する。こちらについても、弥生時代から近世まで断続的に活動が営まれた遺跡として、常松菅田遺跡と同様に、平成23年度に試掘調査が、また平成25年および平成26年度に発掘調査を実施している。

常松菅田遺跡1区^{つねまつおたに}の発掘調査にあたっては、現場での発掘作業、出土遺物の整理作業、および報告書の作成を公益財団法人鳥取県教育文化財団(以下、財団)に再委託した。また、財団が1区^{つねまつおたに}の発掘調査を行う中で、現地での発掘作業・調査記録作業等については、島田組・アイコンヤマト共同企業体に発掘調査支援を委託した。

第2節 調査の経過

調査は、財団と島田組・アイコンヤマト共同企業体との間で、平成26年3月10日に発掘調査の支援業務にかかる委託契約を締結した後、4月1日から基準点測量、調査区現況地盤測量等の現地調査に着手した。

調査区中央には平成25年度調査で生じた残土搬出用の仮設道路があったため、それ以外の箇所を現況地盤測量、段階確認作業を実施した。調査区北側の表土掘削は4月7日から開始、ほどなく圃場整備の際東西方向に等間隔に埋設された陶管暗渠を検出した。調査区全体で検出した暗渠は、埋設深度が数十cmに及んだため、同時に検出した鳥取市による試掘トレンチ2とともに、当面土層観察用のトレンチとした。機械掘削の進捗と併せて、壁面保護を考慮した位置に土層観察を兼ねた側溝を調査区四周に掘削した。さらに表土掘削では、圃場整備直前まで機能していた南北方向の溝(現代溝)とともに、それに取り付く近世溝を掘削した。

4月15日には南半部の表土掘削を開始、鳥取市が実施した試掘トレンチ1を確認した。4月22日仮設進入路を除いて表土掘削完了。昨年度調査区に仮置きした残土搬出が終了する5月2日を待って、5月7日から12日まで仮設道路の重機掘削を実施した。

5月19日から北半部のⅡ層(2層)の人力掘削を開始し()内の層名は調査時の名称を指す)、近世溝左岸で検出した耕作面を1面として記録作成を行った。またサブトレ5を拡幅し、近世溝西側に設けた南北トレンチ1を、後述する48流路完掘までの間土層観察に利用した。その後の調査は、サブトレ5を境に調査区を北半部・南半部に二分して進めた。

Ⅲ層(3層)下面検出の2面は、南北の水田を分ける畦畔と暗渠22条を確認。暗渠は構造材や構築方法から6種類に分類し、新旧関係を推定した。

Ⅳ層(4層)の広がりと同層上面での遺構検出を目的とした3面調査の結果、近世溝に先行する25溝および畦畔を検出した。さらにⅣ層(4層)下面遺構として検出した4面は、調査区北東部で畦畔、溝、土坑、ピットを確認した。

5面は25溝西側のⅣ-2層(4-2層)、同溝東側のⅤ層(A層)掘削後に検出した下面遺構で、25溝東側を中心に中世に帰属する41~44溝、土坑1基を検出し、完掘後の8月5日全景撮影を実施した。

6面はⅥ層(6層)・Ⅶ層(8層)を掘削した後に検出した遺構面で、南西から北東へ流れる47・48流路を検出した。48流路は25溝東側、調査区南東隅を除くほぼ全域に広がる流路で、最大幅約25m、最深1m余を測る。鳥取市による試掘トレンチ1はこの47流路内に設定されており、両流路埋土内から後述する多量の木製祭祀具が出土した。この流路の調査は、検出作業開始から掘削作業完了に至るまでかなりの日時を要したが、10月9日に48流路の完掘写真を撮影することができた。これに先立つ10月3日、鳥取県教育委員会事務局文化財課と財団が現地協議を実施し、調査終了面の確認を行った。

7面は、調査区西側を中心に堆積したⅨ層(B層)掘削後に検出した遺構面で、谷部(上層)を検出した。谷埋土の粗砂層から木製祭祀具が出土、他の埋土中からは、古墳時代後期から飛鳥時代の須恵器・土師器等が出土した。これと平行して、調査区中央に設定した東西・南北のアゼの記録作業を行い、作業終了後順次撤去作業を実施した。

第1章 調査の経緯と経過

続く8面は、谷部(上層)に先行する谷部(下層)および北側微高地にある竪穴建物や杭列、溝を検出し、記録作業を進めた。谷最下層では、これまで主体的に出土していた古墳時代後期以降の遺物とは異なり、弥生時代中期～古墳時代前期にかけての遺物が散見されるようになり、調査区南壁等の検討結果、先行する谷の存在を確認した。竪穴建物は後世の削平により、壁溝および支柱穴の確認にとどまった。またこれらの作業と並行して、調査区四周の断面記録作業を順次行った。

9面は2区の7面・8面に相当するが、今年度調査区では、遺構を確認することができなかった。11月28日、高所作業車からの10面の完掘写真およびラジコンヘリによる全景撮影を実施した。翌29日は、常松地区をはじめとする周辺地区住民を対象とした常松大谷・常松菅田遺跡現地説明会(天候不良のため室内での出土遺物説明を実施)を開催し、約40名の参加を得た(写真1)。同日、今年度の常松菅田遺跡の調査を完了した。



写真1 現地説明会風景

第3節 調査体制

平成26年度

鳥取県教育委員会

教 育 長 山本 仁志

鳥取県教育委員会事務局文化財課

課 長 木本 美喜

歴史遺産室長 松井 潔

課長補佐 土山 和俊

文化財主事兼係長 野口 良也

文化財主事 岡野 雅則

公益財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 井上 善弘
(平成26年6月30日まで)野村 勇二
(平成26年7月1日から)

事 務 局 長 石本 富正

副 主 幹 岡田 美津子

調査室

室 長 北浦 弘人 (※1)

次長兼総務企画課長 中川 眞一
(平成26年4月30日まで)民木 一美
(平成26年5月1日から)

総務係長 川村 悟 (※1)

主 事 福島 亘 (※1)

事務職員 田中 絵理子
(兼事務局事務職員)

調査企画設計係長 玉木 秀幸 (※1)

文化財主事 浅井 達也 (※1)

第2工区担当

主 幹 西川 徹 (※1)

副 主 幹 駒井 正明 (※2)

文化財主事 水村 直人 (※1)

西山 昌孝 (※1)

森本 のぞみ (※1)

平成27年度

鳥取県教育委員会

教 育 長 山本 仁志

鳥取県教育委員会事務局文化財課

課 長 木本 美喜

歴史遺産室長 松井 潔

課長補佐 土山 和俊

文化財主事兼係長 野口 良也

文化財主事 北 浩明

公益財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 野村 勇二

事 務 局 長 石本 富正
(平成27年6月30日まで)畑中 弘子
(平成27年7月1日から)

副 主 幹 岡田 美津子

調査室

室 長 北浦 弘人 (※1)

次 長 民木 一美

総務係長 川村 悟 (※1)

主 事 西村 あかね (※1)

事務職員 田中 絵理子
(兼事務局事務職員)

調査企画設計係長 玉木 秀幸 (※1)

文化財主事 浅井 達也 (※1)

副 主 幹 駒井 正明 (※2)

文化財主事 水村 直人 (※1)

※1 鳥取県教育委員会から派遣

※2 公益財団法人大阪府文化財センターから派遣

※1 鳥取県教育委員会から派遣

※2 公益財団法人大阪府文化財センターから派遣

第1章 調査の経緯と経過

平成28年度

鳥取県教育委員会

教 育 長 山本 仁志

鳥取県教育委員会事務局文化財課

課 長 片山 暢博

歴史遺産室長 山橋 雅美

課長補佐 土山 和俊

文化財主事兼係長 野口 良也

文化財主事 北 浩明

公益財団法人鳥取県教育文化財団

理 事 長 野村 勇二

事 務 局 長 畑中 弘子

副 主 幹 岡田 美津子

調査室

室 長 牧本 哲雄 (※1)

次 長 民木 一美

主 事 岡 梓 (※1)

西村 あかね (※1)

事 務 職 員 田中 絵理子

(兼事務局事務職員)

調査企画設計係長 茶谷 満 (※1)

副 主 幹 駒井 正明 (※2)

文化財主事 水村 直人 (※1)

※1 鳥取県教育委員会から派遣

※2 公益財団法人大阪府文化財センターから派遣

発掘調査支援業者

平成26年度 鳥田組・アイコンヤマト共同企業体

現場代理人 中川 健二

現場副代理人 中西 靖憲

支援調査員 鳥田 裕弘 藤本 信幸 國分 篤志

調査補助員 結城 香 上本 力 山本 宗昭 熊中 博之 木下 満代 中尾 君則

測 量 士 平井 利尚

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 位置と地理的環境

常松菅田遺跡は、鳥取県鳥取市気高町常松字菅田に位置する(第2-1図)。鳥取県は中国山地の北部にあり、南北20~60km、東西約120kmと東西に長い県域である。中国山地は、扇ノ山と大山等の火山地、氷ノ山等の非火山地からなる。それらの山地が県土の約8割を占め、残りが沖積低地である。

鳥取県は、律令体制下では県東部を因幡国、中西部を伯耆国と呼称していた。遺跡の所在する鳥取市気高町は因幡国に属し、鳥取県の東部にある。昭和30年以降、気高町は青谷町・鹿野町とともに気高郡に属していた。しかし、平成16年度に気高町を含めた周辺の8つの町村を合併し、鳥取市となった。鳥取市の面積は約765.31km²、人口は約19万1千人(平成28年6月末現在)である。

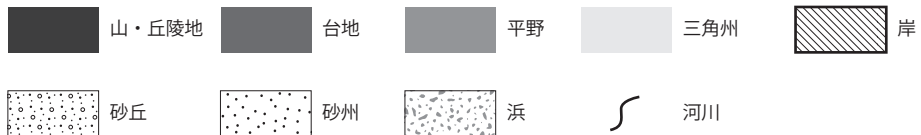
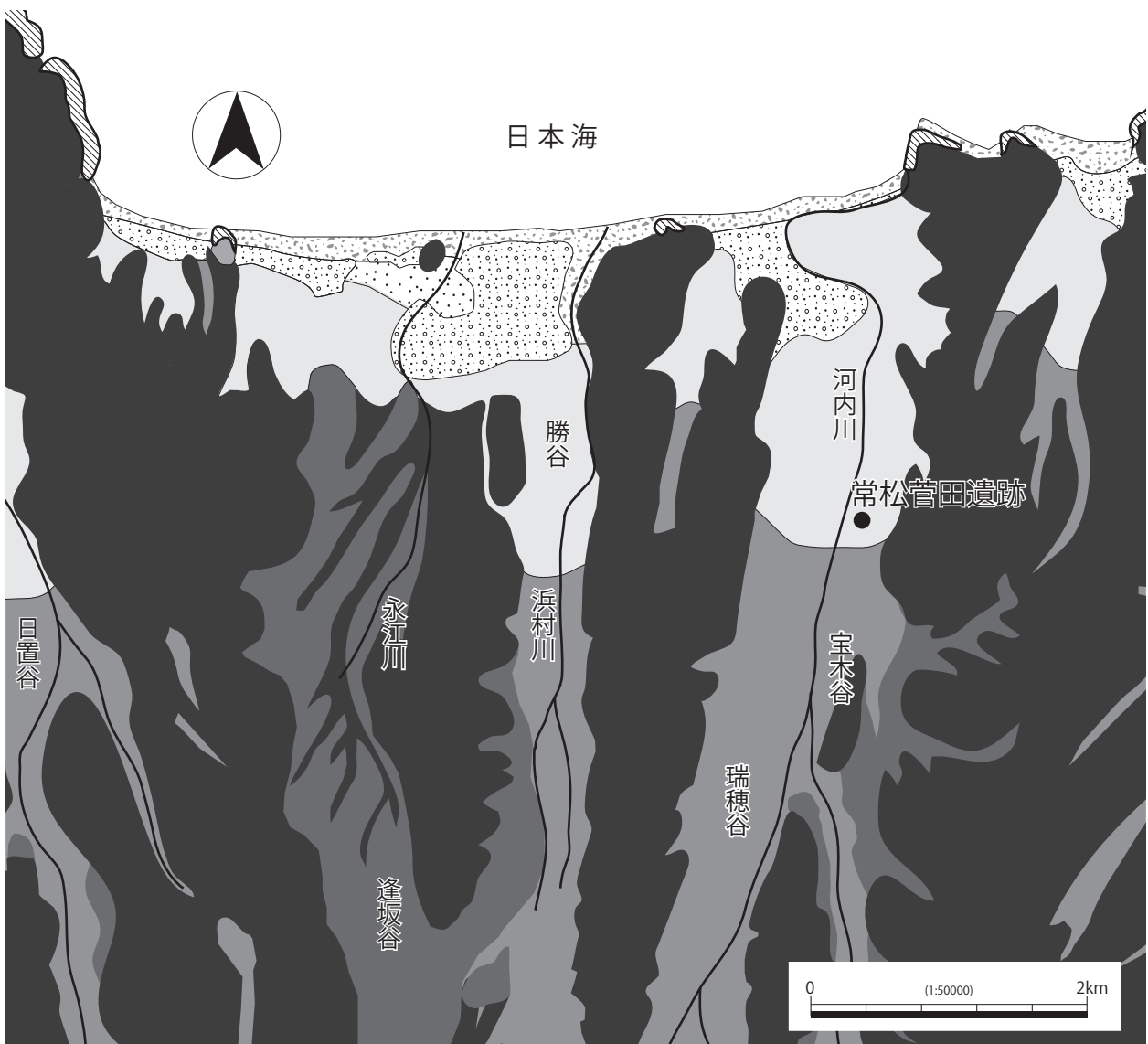
気高町は鳥取市の西部にあり、北は日本海、西は青谷町、南は鹿野町に接する。町内は、主に河川の浸食し残した山地、砂丘、谷筋を埋める沖積平野で構成される。河川の浸食によりできた山地のため、周辺に高峰は存在しない。ただし、鹿野町には中国山地の支脈、独立峰である鷲峰山(標高920m)がそびえる。この山は、花崗岩類の基盤を覆った第三紀鮮新世の安山岩によって形成される。



第2-1図 遺跡の位置

第2章 遺跡の位置と環境

気高町域の地質は、まず中生代白亜紀に鳥取花崗岩が形成される。新世代第三紀中新世になると、大規模な火山活動が起き、河原火砕岩が堆積した。その後、安山岩質溶岩が噴出し、火砕流や火砕泥流となり堆積したのが白兔礫層である。第三紀鮮新世には、鉢伏山の火山活動により安山岩が流れ出し、溶岩台地を形成した。これらの岩石や地層が河流で侵食され、河谷が発達した。第四紀更新世中期になると大山が噴火を繰り返し、大山軽石や火山灰が東風によって運ばれ、河川が侵食してできた平地に土砂が堆積して完新世に沖積平野となった。第四紀完新世以降は、海退や海進を繰り返し、後述する河岸段丘や砂丘が発達した。そして、入江が砂丘によって堰き止められ潟湖が形成された地区と、河川の運んだ土砂が埋積してできた沖積平野が広がる地区ができた。また、海岸域はほとんど砂丘地である。これは、河川により浸食・風化され海まで運び込まれた砂が海岸に打ち寄せられ、風の働きで陸地を覆い形成されたものである。一方、東部には近くの崖を形成する岩石や地層が崩れ落ち



第2-2図 遺跡周辺地形図

てできた礫や粗砂で構成された礫浜がある。

気高町から鹿野町にかけては、南北にわたる細長い丘陵性山地と谷底平野が三列にわたり平行する地形が残る。谷底平野は西から逢坂谷^{おうさか}、勝谷、瑞穂谷^{ほうき}、宝木谷である。勝谷や瑞穂谷、宝木谷では沖積地が、一方逢坂谷は、大山火山軽石や火山灰が堆積する河岸段丘が広がる。山地と谷底平野の間には、河内川や浜村川、永江川が流れる。鷲峰山の南西麓に源を発して北流する河内川は、地殻変動に起因する断層線の発達により幾度も流路が変わる。氷河時代には比較的早い速度で逢坂谷を流れていたが、時代が下るにつれ勝谷に流路を変え、現在は瑞穂谷と宝木谷の間を流れる。当遺跡は、その河内川の東岸の丘陵裾に位置する(第2-2図)。

第2節 歴史的環境

気高町は、先述した河内川の度重なる流路変更により形成された谷底平野に所在する。そのため谷ごとの様相を捉えながら、常松菅田遺跡(1)周辺の歴史的環境を概観する(第2-3図)。

【旧石器・縄文時代】

旧石器時代の遺物は、八束水^{やつかみ}の砂丘地で槍型尖頭器・有舌尖頭器が採集されているが、出土経緯や位置は不明である。

瑞穂谷最奥にある柄杓目遺跡(101)で縄文時代早期の押形文土器が出土したが、気高町で本格的な人間の活動が確認出来るのは中期以降である。

中期には、河内川中流域の丘陵裾や砂丘で活動を確した。瑞穂谷の土居正寿寺裏山麓斜面の土坑状遺構から土器が、短尾遺跡(39)でも土器や石鏃等が採集された。

後期以降になるとさらに活動の場を広げ、逢坂谷の緩やかな傾斜地にある山宮笹尾遺跡(62)では落とし穴や石組炉、土坑を検出し、後期から晩期の土器、石鏃、蛇紋岩製首飾りが出土した。さらに高江では打製石斧、黒曜石製石斧を、郡家では打製石鏃を、山宮では磨製石斧を、殿では凹石をそれぞれ採集した。宝木谷の宝木高浜遺跡(122)から磨製石鏃と石斧が出土し、柄杓目遺跡から後期の溝状遺構、晩期の土坑を検出した。

【弥生時代】

気高町内の前期の様相は不明瞭ながら、青谷町の国史跡青谷上寺地遺跡(9)では、縄文時代終盤の洪水堆積により潟湖内に形成された微高地上で、弥生時代前期から古墳時代前期にかけて集落が営まれた。遺跡の中心には、弥生時代後期の大規模な護岸施設や水田の他、当時の生業を示す鍬・鋤類・石包丁等の農工具、漁労具が多数出土した。さらに、木製形代や獣骨等の祭祀関連遺物が溝から出土し、集落内では長期間にわたり祭祀を行っていたようである。

中期には、後期まで継続する遺跡が逢坂谷を中心に展開する。土坑を検出した上原遺跡(65)、中期から後期の竪穴建物を検出した上原南遺跡(67)や会下^{えげ}・郡家遺跡(52)、竪穴建物や土坑を検出した三王尻遺跡(61)である。宝木谷の当遺跡では、安山岩製の石針を伴う中期中葉の玉作跡が見つかった。

後期には、瑞穂谷にある柄杓目遺跡から竪穴建物と袋状土坑を検出した。平成26年度に調査した下坂本清合遺跡(111)では、山裾平坦面から炭化した垂木や茅等の建築部材がよく残存した終末期の焼失竪穴建物が見つかった。さらに日置谷^{ひおき}の青谷町大口第1～3遺跡(26～28)、早牛宝免遺跡(30)、蔵



- 1 常松菅田遺跡 2 常松大谷遺跡 3 長尾鼻古墳群 4 長尾鼻1号墳 5 青谷第1遺跡 6 青谷第2遺跡 7 青谷下和田所在遺跡 8 東山古墳
 9 青谷上寺地遺跡 10 青谷イタラズ遺跡 11 善田傍示ヶ崎遺跡 12 善田古墳群 13 青谷横木遺跡 14 阿古山古墳群 15 阿古山2号墳 16 阿古山22号墳
 17 奥崎古墳群 18 小丸山城 19 養郷古墳群 20 大坪イカウ松遺跡 21 大坪天神第2遺跡 22 大坪大縄手遺跡 23 大坪大縄手遺跡 24 山田城 25 大口古墳群
 26 大口第1遺跡 27 大口第2遺跡 28 大口第3遺跡 29 カヤマ遺跡 30 早牛宝免遺跡 31 早牛古墳群 32 蔵内古墳群 33 蔵内水船遺跡
 34 蔵内上長谷第2所在遺跡 35 姫路城跡 36 姫路所在遺跡 37 八束水古墳群 38 八束水7号墳 39 短尾遺跡 40 北短尾墳墓群 41 下原古墳群
 42 八幡第1遺跡 43 八幡第2遺跡 44 谷奥所在遺跡 45 谷奥古墳群 46 谷奥横穴 47 谷奥1号墳 48 会下古墳群 49 会下横穴 50 会下城跡
 51 会下遺跡 52 会下・郡家遺跡 53 睦逢遺跡 54 郡家遺跡 55 郡家寺ノ上横穴 56 郡家口三谷遺跡 57 睦逢古墳群 58 睦逢1号墳 59 睦逢11号墳
 60 篠尾柵跡 61 三王尻遺跡 62 山宮笹尾遺跡 63 山宮茶畑遺跡 64 山宮阿陀陀森遺跡 65 上原遺跡 66 上原西遺跡 67 上原南遺跡 68 上原古墳群
 69 飯里古墳群 70 飯山城跡 71 西浜遺跡 72 浜村古墳群 73 浜村城跡 74 勝見古墳群 75 勝見15号墳 76 勝見17号墳 77 勝山城跡 78 梶掛遺跡
 79 梶掛古墳群 80 乙亥正屋敷廻遺跡 81 乙亥正大角遺跡 82 藤山城跡 83 観音山古墳群 84 観音山城跡 85 西中園古墳群 86 西中園8号墳
 87 西中園遺跡 88 谷田遺跡 89 宮谷遺跡 90 寺内古墳群 91 寺内廃寺 92 寺内京南遺跡 93 寄馬場遺跡 94 東中園遺跡 95 石ヶ谷遺跡
 96 宮方遺跡 97 馬池古墳群 98 下石城跡 99 神越山古墳群 100 神越山6号墳 101 柄杓目遺跡 102 閉野1号墳 103 櫛ヶ脇城 104 日光古墳群
 105 日光長谷遺跡 106 矢口陣屋跡 107 西山古墳群 108 西山1号墳 109 下坂本古墳群 110 下坂本遺跡 111 下坂本清合遺跡 112 二本木第1遺跡
 113 二本木第2遺跡 114 二本木古墳群 115 二本木7号墳 116 重高古墳群 117 重高4号墳 118 重高5号墳 119 漆谷横穴 120 土居古墳群
 121 丸山城跡 122 宝木高浜遺跡 123 酒津古墳群 124 湊山岩跡 125 宝木古墳群 126 宝木1号墳 127 宝木16号墳 128 富古城跡 129 常松第1遺跡
 130 常松第2遺跡 131 堤知光城跡 132 下光元古墳群 133 下光元3号墳 134 持木横穴 135 大杉横穴墓 136 堤谷横穴墓 137 大杉城跡
 138 夏ヶ谷遺跡 139 下光元第1遺跡 140 下光元第2遺跡 141 上光古墳群 142 上光10号墳 143 後谷横穴墓 144 高尾口横穴墓 145 上光第1遺跡
 146 弥平衛山城跡 147 上垣城跡 148 灰谷遺跡 149 灰谷横穴墓 150 山崎横穴 151 挟間遺跡 152 戸島遺跡 153 馬場遺跡 154 宿古墳群
 155 西分横穴 156 熊ヶ坪城跡 157 夏ヶ谷遺跡 158 宿第1遺跡 159 宿第2遺跡 160 熊ヶ坪遺跡

第2-3図 周辺遺跡分布図

内水船遺跡(33)でも集落が形成される等、分布が広がる。

逢坂谷の上原遺跡で長方形プランの木棺墓、上原南遺跡で後期の方形周溝墓、会下・郡家遺跡では中～後期の土坑墓、睦逢遺跡(53)で木棺墓をそれぞれ調査した。

【古墳時代】

古墳時代に入っても、会下・郡家遺跡、山宮阿弥陀森遺跡(64)、上原南遺跡で前期の竪穴建物を、山宮笹尾遺跡では前期から中期の竪穴建物を検出する等、弥生時代に引き続き逢坂谷を中心に生活を営んだ。また日置谷の大口第1～3遺跡やカヤマ遺跡(29)、勝谷の寺内京南遺跡(92)でも前期の集落を形成した。後期では、平成25年度の調査で宝木谷の常松大谷遺跡(2)で竪穴建物を、また終末期では当遺跡で総柱掘立柱建物を6棟検出した。

前期古墳は、長方形を呈した方墳の二本木7号墳(115)がある。地山整形後に盛土した墳丘上で、土壙墓4基を検出した。墳丘上・裾の溝から古墳時代前期の土器が出土した。

その後中期にかけて古墳の数が増加する。宝木・瑞穂谷には、旧気高郡内最大規模の前方後方墳である西山1号墳(墳長約47m)(108)をはじめ、宝木1号墳(126)、16号墳(127)、重高4号墳(117)、5号墳(118)、上光10号墳(142)といった前方後円墳が集中する。しかし勝谷や逢坂谷では墳長約38mの前方後方墳の八束水7号墳(38)を除くと、明瞭な首長墳は未確認である。また神越谷6号墳(100)や勝見古墳群中の刀子を副葬した15号墳(75)、仿製捩文鏡を副葬した17号墳(76)は、いずれも箱式石棺を主体部とする。

後期には、各丘陵部に群集墳が形成され、各々地域性をもつ。逢坂谷の西側丘陵にある円墳の主体部は、板状節理輝石安山岩の板石で架構した横穴式石室が多い。中でも西中園8号墳(86)は綾杉文、睦逢11号墳(59)は鳥・格子状・綾杉文等石室内に線刻を施す。また谷奥1号墳(47)の横穴式石室から、須恵器と銅鏡、金環、金銅製鏝、刀装具、銅鏡、馬鐸、玉類等多くの遺物が出土した。一方宝木・瑞穂谷の丘陵では、下光元古墳群(132)や重高古墳群(116)等に横穴墓があり、漆谷横穴(119)は四注式ドーム型天井を有し、綾杉文の線刻がある。

【古代】

律令体制下、気高町は因幡国気多郡に属し、『和名類聚抄』によると大原郷・坂本郷・口沼郷・勝見郷・大坂郷・日置郷・勝部郷の7郷からなっていたという。当遺跡周辺は、大原郷と推定される。

当時の政治的拠点である気多郡衙は、逢坂谷に所在する山宮阿弥陀森遺跡と上原遺跡に比定される。7世紀末～8世紀の郡庁とされる山宮阿弥陀森遺跡は、「コ」字状に配置した長大な建物が、「郡家」「中」「智」と記された墨書土器、転用硯等とともに見つかった。上原遺跡では二面廂付掘立柱建物を検出、「郡」「大領」と記された墨書土器、転用硯等が出土し、9世紀以降郡庁が南へ移転したと考えられている。また上原南遺跡では、7世紀後半から10世紀の郡関連施設と推定される掘立柱建物や柵列を確認し、上原西遺跡(66)には、正倉の一部が正倉院外の正倉と考えられる総柱建物群がある。

近年調査された会下・郡家遺跡は、10世紀頃の大型掘立柱建物群が検出され、それらを区画する溝や道路状遺構もあることから、公的施設の存在が想定される。その南西には、倉庫群を含む掘立柱建物が検出され、豪族の居館とされる睦逢遺跡も存在する。

一方、宝木谷最奥に位置する戸島遺跡(152)や馬場遺跡(153)は、規格性の高い建物群が見つかった。

第2章 遺跡の位置と環境

上原遺跡の遺構・遺物は郡衙そのものである可能性が高く、戸島・馬場遺跡は坂本郷に7世紀後半から9世紀代にかけて設置された評・郡衙の出先機関、あるいは郷衙を兼ねた施設と評価できる。近年継続的な調査が実施された青谷横木遺跡(13)は、山陰道の一部かと推定される道路状遺構が見つかり、多量の木製祭祀具や出挙の返納に関する木簡、「天曆□年」「沽買布納帳」と記された題箋軸等が出土した。この遺跡は、古代山陰道の山崎駅、佐尉駅、敷見駅を経た因幡国気多郡柏尾駅と伯耆国笏賀駅との間に位置し、道路痕跡は青谷上寺地遺跡でも見つかっている。さらに、同遺跡が立地する日置谷周辺では、大坪イカウ松遺跡(20)・善田^{よしだ}傍^{ぼう}示^じヶ崎^{がさき}遺跡(11)から人形・馬形・斎串等が、カヤマ遺跡から土馬が出土したとの報告があり、律令祭祀の様相が明らかになりつつある。

勝谷最奥には、郡寺と推定される寺内廃寺(91)があり、塔心礎を検出したうえ、因幡国西部の寺院や上原遺跡と同文の細弁十二葉蓮華文軒丸瓦、藤原宮式軒丸瓦が出土した。この他三王尻遺跡、山宮茶畑遺跡(63)、山宮笹尾遺跡においても集落が営まれていたようである。

【中世以降】

鎌倉時代に関して、文献資料では不明な点が多いが、調査例はいくつかある。会下・郡家遺跡では、土壙墓と掘立柱建物を検出し、中国・朝鮮の陶磁器類が出土した。その他上原南遺跡で土壙墓と掘立柱建物、柄杓目遺跡で石組遺構、寺内京南遺跡では墓域、北短尾墳墓群(40)で塚を検出した。また、河内川左岸にある下坂本清合遺跡では、鎌倉時代頃の流路から多数の漆器が出土した。

南北朝時代になると、山名時氏が因幡守護となり気多郡もその支配下となる。尼子氏や武田氏による争乱が勃発するものの、山名氏の支配は約200年間続く。しかし、永禄6(1563)年には武田高信が守護権力から離反し、但馬山名氏と争い勝利する。その後、武田氏と結んだ安芸毛利氏が台頭する。山名数豊と武田高信が天神山城で戦い、敗れた山名氏は鹿野に退去する。その翌年鹿野麓の合戦で山名氏は毛利勢との戦いに敗れ、以後、毛利・武田氏が台頭する。その後元亀4(1573)年には尼子勝久による因幡侵攻が行われる等、動乱期が続く。

この頃、峠や港等の交通の要衝に20を超える山城が築かれる。『因幡誌』には、宝木谷に所在する富吉城(128)、勝谷に所在する勝山城(77)等の山城が描かれる。大杉城(137)では山麓の集落の南に堀切や曲輪が見られ、会下古墳群(48)では会下城跡(50)の付属施設とされる堀や曲輪を検出した。

天正8(1580)年以降、豊臣秀吉の2度にわたる因幡攻めが行われる。その結果、因幡城主は降伏または自害し、因幡は統一政権による支配となり、因幡内の各城に大名をおくこととなる。鹿野城の城主は亀井茲矩が任ぜられ、気多・高草郡の3万8000石を統治した。慶長20(1615)年の一国一城令後には国替えが行われ、姫路城主であった池田光政が鳥取城主に転封された。鹿野藩を治めていた亀井政矩は鳥取藩の池田長幸と共に所領没収となり、鹿野藩は鳥取藩領に属した。

第3章 調査の方法

第1節 調査地の地区割

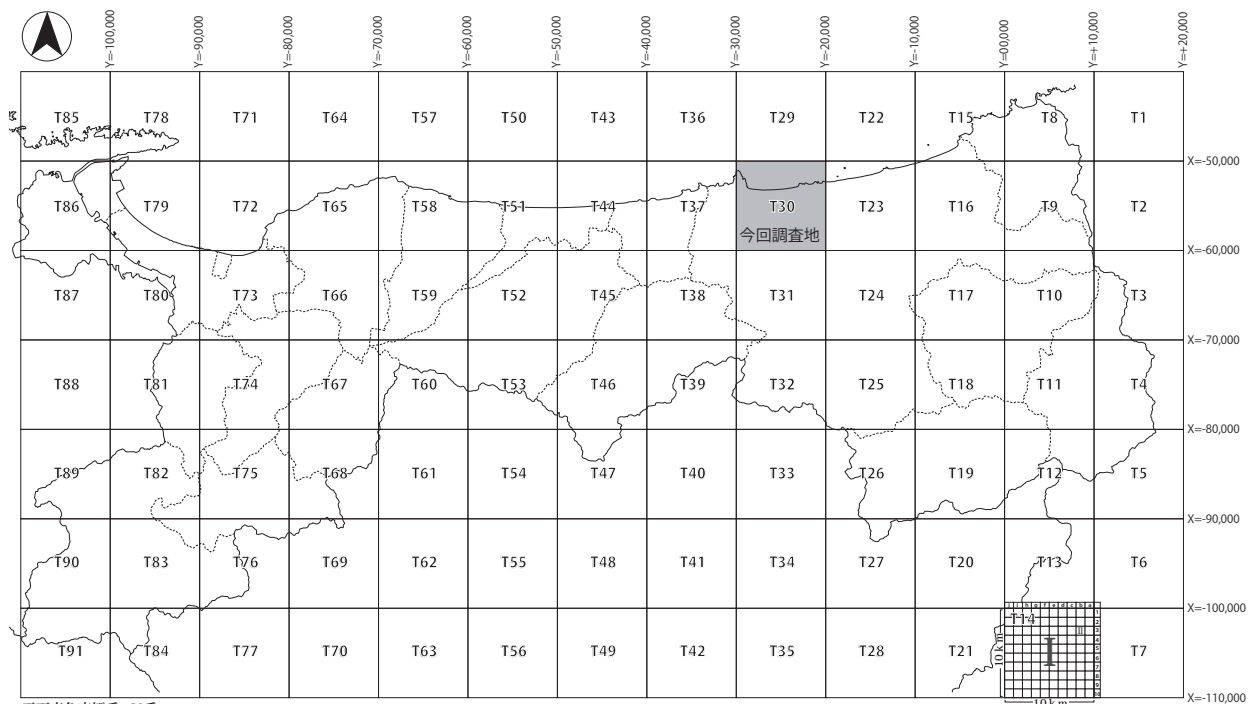
調査区割

鳥取県教育委員会が財団に委託した鳥取西道路関連の発掘調査では、調査成果の標準化を図るため、世界測地系に基づく平面直角座標系第V系を基準として、10mを単位とした方眼により調査区割(グリッド)を設定し、遺跡や遺構の位置表示、遺物の取上げに使用している。また、実測図作成の基準としても使用し、調査に際してはグリッド交点に杭を打設している。

グリッドの名称は、以下のように大区画のI区画から順に細分し、第3-1図に示したように第I区画-第II区画-第III区画-第IV区画で表す。

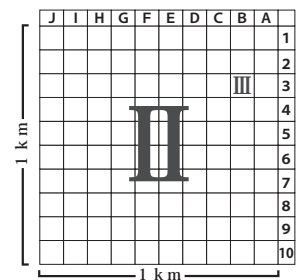
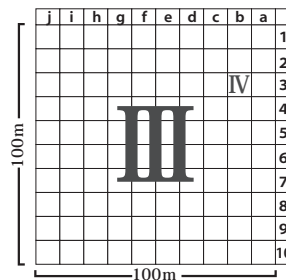
第I区画：鳥取県の全域に設定した大区画である。10,000m×10,000mで、1～91の区画を設け北東隅からT1～T91の記号を付した。

第II区画：第I区画の1区画内を100等分した区画である。1,000m×1,000mを第II区画の1区画とし南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、各区画を1a～10jと呼称した。



平面直角座標系：V系
 N 36° 00' 00" を座標原点 (X=0, Y=0) とする
 E 134° 20' 00"

区画名称例				
区画の大きさ	10000m	1000m	100m	10m
単位区画	I	II	III	IV
区画名称	(*区画北東の座標値に基づいて名称を付与する)			
例1. X=-55,270.00 Y=-23,150.00	T30	- 6d	- 3B	- 8f
例2. X=-55,310.00 Y=-23,130.00	T30	- 6d	- 4B	- 2d



第3-1図 調査区割図

第3章 調査の方法

第Ⅲ区画：第Ⅱ区画を100等分した区画である。100m×100mを第Ⅲ区画の1区画とし、南北軸に1～10、東西軸にA～Jを付し、各区画を1A～10Jと呼称した。

第Ⅳ区画：第Ⅲ区画を100等分した区画である。10m×10mを第Ⅳ区画の1区画とし、南北軸に1～10、東西軸にa～jを付し、各区画を1a～10jと呼称した。

常松菅田遺跡における地区割

本書で報告する平成26年度調査範囲は、T30(第Ⅰ区画)内に位置しており、文中で遺構・遺物位置について地区割を用いながら記載する際には、第Ⅰ、第Ⅱ、第Ⅲ、第Ⅳ区画の記号を用いてT30-6d-3A-9hのように記す(第6-6図参照)。

第2節 発掘調査と記録の対象

発掘調査と記録の対象

平成26年度の調査対象は、平成25年度調査区の東側6,710m²であり、掘削は表土掘削を重機で、包含層および遺構の検出・掘削は人力で行い、調査の記録作業は表土除去後から対象として行った。

遺構名称の設定

鳥取県教育委員会が財団に委託した鳥取西道路関連の発掘調査では、検出順に遺構番号を付与することを基本方針としている。遺構名称は、遺構番号の後ろに検出された遺構の種別を組み合わせることで「1土坑」や「2溝」のようになるが、種別については、調査が進む中で変更されることもある。一方で、一度付与された遺構番号については不変であり、本書においても調査時の遺構番号を用いて報告を行っている。ただし、現地調査時に遺構番号を付したものについても、調査の結果、攪乱や自然地形であることが明らかとなった場合、欠番とした。

層位名

層位名は、新たに上から順にアラビア数字もしくはアルファベットを付与し、細分が必要な土層については枝番号を付けた。具体的には、25溝を挟んだ東西では堆積環境が大きく異なったので、同溝西側の土層を基本としてアラビア数字(1層、2層、3層等)を付与し、同溝東側の土層のうち直接西側と対応しない土層には、土壌化層や自然堆積層と区別するため、大文字のアルファベットを付けた(A層、B層等)。ただし、平成25年度調査区(2区)の7層、8層は1区においても確認しており、アラビア数字の前にH25-を入れてH25-7層、H25-8層と記した。

なお凡例でも記したように、本書では第3-1表のように再整理した層名で記述する。

第3-1表 新旧層位名対照表

調査時の層名	1層	2層	3層	4層	A層	6層	8層	6・8層	B層	H25-7層	H25-8層
本書での層名	I層	II層	III層	IV層	V層	VI層	VII層	VIII層	IX層	X層	XI層

図面記録および写真撮影

現地での記録作業は、支援業者の調査員と測量士が監理者の指示、確認を受けながら行った。

図面記録に関しては、平断面図はトータルステーションを用いた測量と写真計測を、対象遺構や壁面の状況によって使い分けている。作成した図面は、監理者の確認後に、現地での一次記録である〈素図〉として管理し、最終的には情報をデジタルデータとして整理、統合し、〈編集図〉を作成した。成果品としての編集図は、主にベクトルデータで構成され、adobe Illustrator CS4以上での再編集が可能な形で保存(ai形式)している。

写真の撮影は、撮影対象、範囲、アングル、使用機材等に関する発掘調査監理者の指示をもとに支援調査員が行った。撮影用機材としては、中型(6×7判)一眼レフカメラ、小型(35mm判)一眼レフカメラ、デジタル一眼レフカメラ(センサーサイズ APS-C以上、有効画素数1220万画素以上)を併用し、対象によって機材を適宜選択しながら行った。また、中判、小型一眼レフカメラに使用したフィルムは、富士フィルム社プロビア100F(リバーサル)、富士フィルム社ネオパン100ACROS(黑白フィルム)である。

デジタル一眼レフカメラによる撮影はRAW・JPEG形式の同時保存により行った。また、デジタル一眼レフカメラによる撮影は、写真撮影を行う全ての対象に対して実施するとともに、撮影対象や日付などの撮影内容を記載した写真ラベルも合わせて撮影している。これにより、撮影した画像データを他のフィルムカメラの整理、検索用資料として使用出来るようになり、写真記録管理用の〈写真台帳〉の作成時に有用なだけでなく、効率的な写真の管理と活用が可能となっている。

出土遺物の取り上げ

遺物の取り上げには、財団調査室が用意した遺物カードを使用した。取上番号は通し番号とし、遺物カードに記載された項目に基づいて遺物取上台帳を作成し、出土した遺物を取り上げ、管理した。遺物カードの記載項目・内容は以下の通りである。

遺跡名 「常松菅田遺跡14」と記載。「14」は2014年(平成26年)度に調査を実施したことを示す。

地区名遺物の取上げは、10m×10mのグリッドを基本とし、第Ⅰ～Ⅳ区画で構成される地区割を記載した(第3章第1節参照)。

層位名 遺物が帰属する包含層や遺構内に堆積した層位の番号ないし名称を記載した。

遺構名 遺物が帰属する遺構の名称を記載した。

取上No. 取上げ順に通し番号を記載した。

出土年月日 検出日ではなく、取上げ日を記載した。

図面 遺物の出土状況が記録された図面の有無と図面のスケールを記載した。

備考 特記事項を記載した。

時代・時期 取上げた遺物の帰属時期を記載するが、この度の調査では記載を省略した。

種別 土器や鉄器等素材によって大別される遺物の種別を記載した。

その他上記の記載項目とは別に、取上げ時に座標値が記録されたものについては、遺物カードのメモ欄に座標値を記載した。

第3節 出土遺物の整理

出土遺物については、現地での取上げ後、財団調査室に持ち帰って、以下のような整理作業を行った。

土器、土製品

調査終了後に洗浄、接合、注記(マーキング)、復元および実測を行った。器種および形状が判明ないし復元出来る個体を実測の対象とした。

石器

調査終了後に洗浄、接合、注記(マーキング)、実測を行った。本調査の出土品は、器種や用途が判明出来るものの他、使用痕が明瞭な個体について実測対象とした。

木製品

調査終了後に洗浄および実測を行った。器種や用途、または特徴的な加工が施されているものを実測の対象とした。

金属製品

調査終了後、近年のものと判断されるものを除き実測を行い、保存処理を施した。

写真撮影

以上の出土遺物を対象に、デジタル一眼レフカメラ(センサーサイズ フルサイズ)で撮影を行った。

保管

図面および写真の記録類、出土遺物は全て台帳に登録して収納作業を行った。

第4章 1区の調査成果

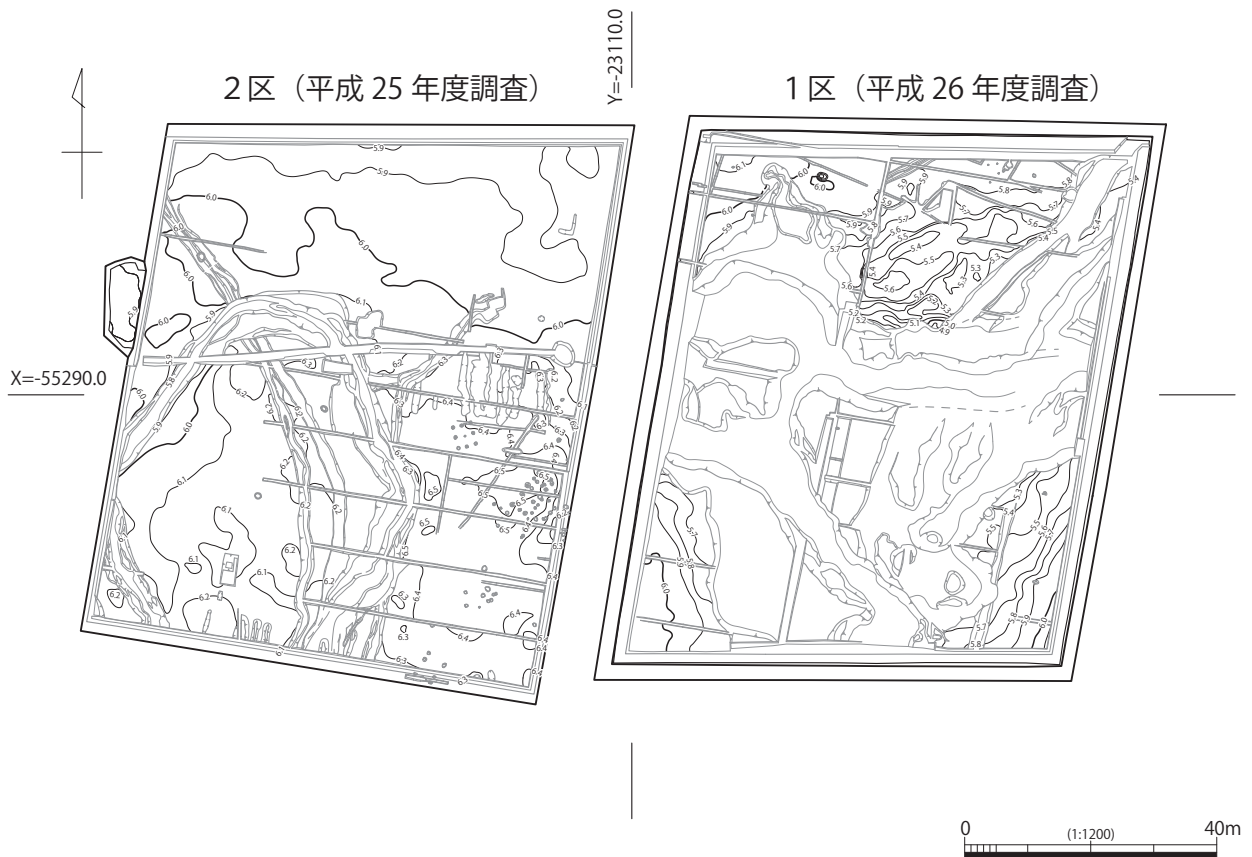
第1節 調査の概要

常松菅田遺跡(1区)は、第4-1図に示したように、平成25年度に調査を実施した調査区(2区：6,410m²)とは農業用排水路(河田川)を挟んで東側に対峙し、その調査対象面積は6,710m²を測る。鳥取市教育委員会による試掘調査成果(谷岡他前掲)に基づき、本調査区内には谷地形を想定した9面調査を予定していたが、最終的にはそれよりも1面多い計10面の調査を実施した。以下、簡潔に各遺構面の特征について述べる。

最上面である1面から5面までは、中世以降の遺構面を検出した。特徴的な遺構として、調査区中央南端から北東端へ流れる近世溝、それらに面した水田とそれに伴う畦畔や暗渠、また近世溝に先行する溝、さらには中世の流路等がある。

古代以前の成果としては、6面および7面がある。6面では、奈良時代の土器と共に、多量の木製祭祀具を出土した47および48流路が挙げられ、一方7面は、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての土器が出土した谷部(上層)が調査区の大半を占める。

古墳時代前期以前の成果としては、8面から10面の調査がある。このうち、8面で検出した谷部(下層)は、谷部(上層)の先行形態で、弥生時代中期から古墳時代前期に至る遺物を包含している。また、調査区北側の微高地上では、竪穴建物や溝、杭列等を確認した。これに対し9面および10面は、隣接



第4-1図 常松菅田遺跡全図

する2区の7面もしくは8面に相当する遺構面であるが、1区においては、9面では顕著な遺構を確認することが出来なかったため、地形測量を行ったのみである。

第2節 基本層序（第4-2～4-7図）

平成26年度調査区内の基本層序の把握にあたっては、表土掘削後に調査区四周に側溝を掘削し、壁面の検討・記録化を進めた。さらに圃場整備の際設置された東西方向の暗渠の一つと、それに直行するトレンチを近世溝西側に設け、土層観察用のアゼとしてより詳細な土層観察を行った。

その結果、今回の調査区は、平成25年度調査区の東側に隣接するにも関わらず、堆積環境は大きく異なることが明らかとなった。以下各層の概要を記す。

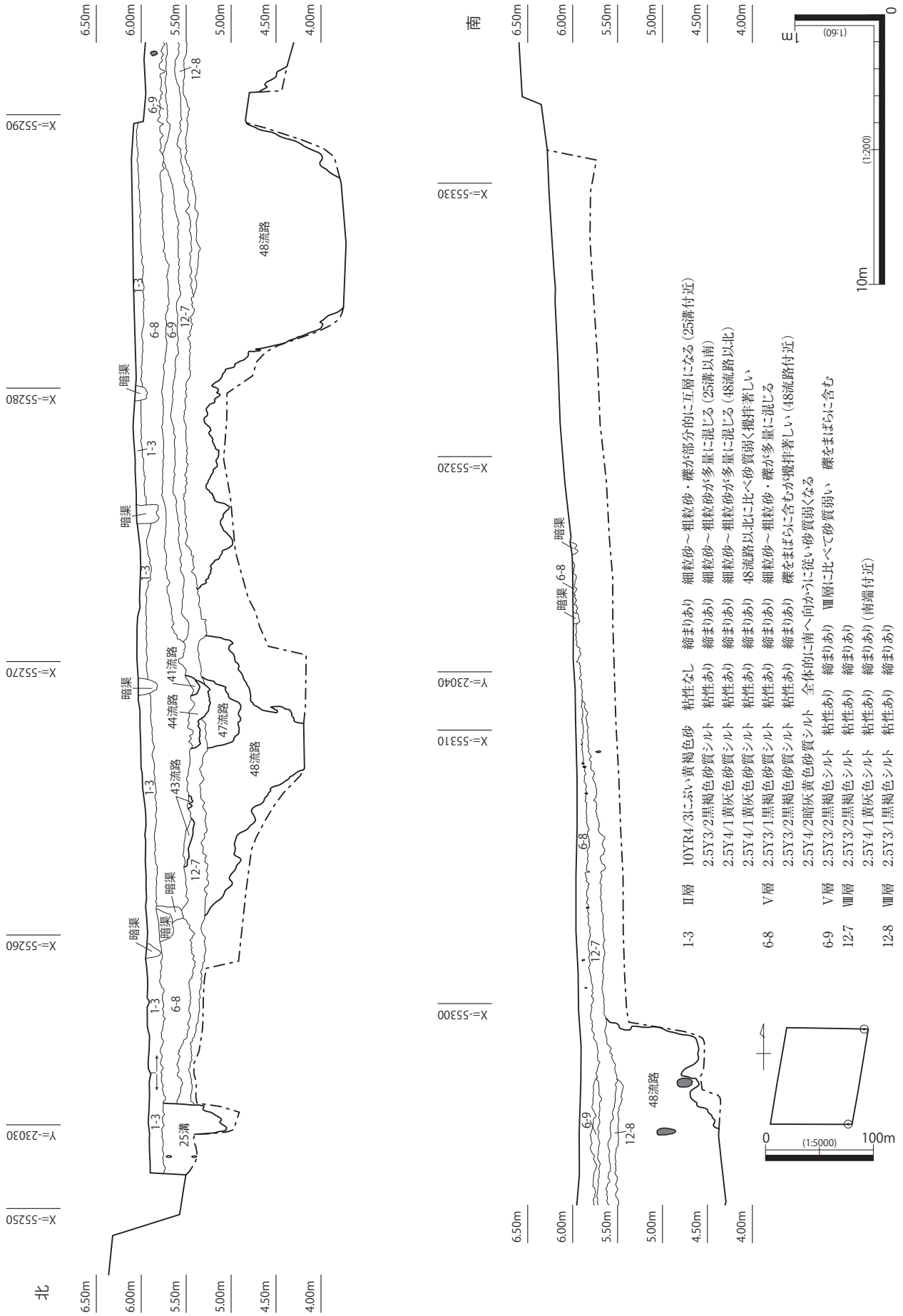
I層(1層)は現代耕作土、圃場整備による盛土等、II層(2層)は調査区全体で検出した黒褐色・黄灰色砂質シルトの近代作土層である。I層上面の現地盤の標高は6.4m(調査区北側)～6.6m(同南側)を測り、このI層・II層を表土掘削の対象として掘削した結果、全体的に北東側へ緩やかに下ることとなった。

III層(3層)は黄灰色砂質シルト層で、調査区北半中央のいびつな方形を呈する範囲にのみ堆積した、25溝に面する耕作地の作土層である。III層上面を1面とし、同層下面を2面として畦畔1条、暗渠22条を検出した。III層中には、下層から巻き上げられた須恵器および土師器とともに、近世陶磁器を一定量含む。

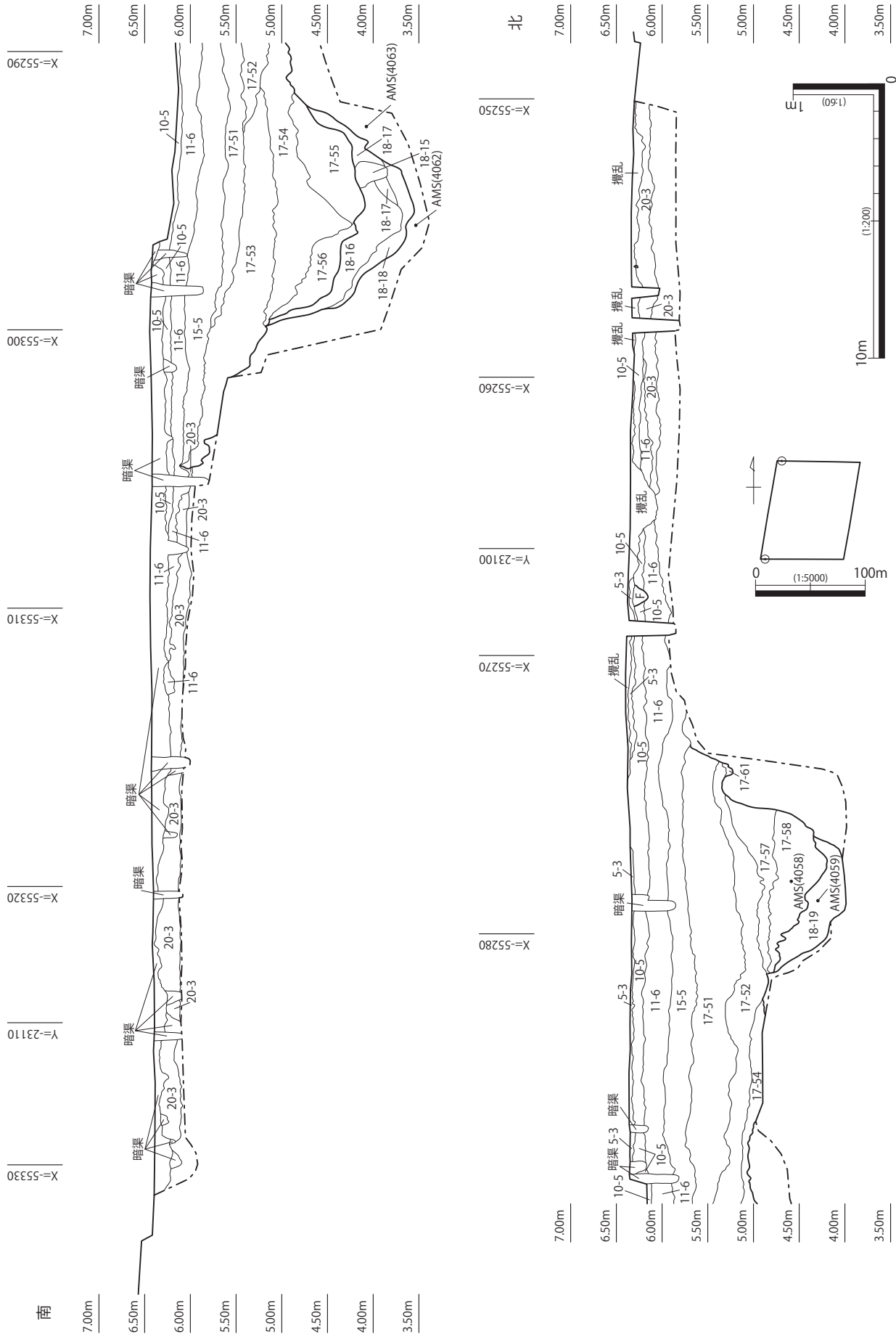
IV層(4層)は黒褐色砂質シルト層で、その分布範囲は調査区西端や北端では希薄(西端は暗渠による攪乱のため、全体としてはほとんど堆積していないように見える)だが、調査区南へ向って厚みを増し、調査区南半中央では40cm前後を測る。粗粒砂・小礫が均質に攪拌された作土層で、砂粒の含有量に差異は概してない。調査時は、小礫の含有量の少ない部分を4-2層と細分していたが、帰属時期に大差なく、最終的にIV層と統合した。出土遺物は下層からの須恵器および土師器に加え、瓦質土器、近世陶磁器がある。IV層上面を3面として25溝および26畦畔を、IV層下面を4面として調査区北端のピット群を、それぞれ検出した。

V層(A層)は、25溝東側に堆積した小礫や粗粒砂を多量に含む黒褐色、もしくは黄灰色砂質シルト層である。小礫や砂粒の含有量により数層に細分可能である。調査区北東側では、特に粗粒砂の含有が顕著である一方、同南東側に向かって希薄となる。V層下面で検出した41～44流路氾濫堆積層を作土化した結果、部分的に最大50cmもの層を形成することとなった。また25溝際ではラミナのある薄層が数層確認でき、25溝の前身が頻繁に右岸側に土砂を供給、攪拌を繰り返していたことがわかる。出土遺物は、IV層同様瓦質土器や近世陶磁器を含むことから見て、IV層とほぼ同時期に堆積したと考える。41～44流路(42流路の一部は4-2層下面)を検出したV層下面をもって5面とした。

VI層(6層)は、調査区北西隅、南西隅の微高地から25溝にかけて堆積する灰黄褐色砂質シルト層である。層厚は10～30cm程度を測る。粘性が強く、湿地状の環境下で堆積した土壌層であろう。続くVII層(8層)とは極めて類似するが、若干シルト質が強い。VI層として取り上げた遺物は極めて少なく、瓦質鍋片1点以外は全て須恵器および土師器で占める。最終的には、鎌倉時代頃に堆積を終えたと考ええる。



第4-2図 東壁土層断面図



第 4 - 3 - 1 図 西壁土層断面図(1)

5-3	Ⅳ層	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	粗粒砂混じる
10-5	Ⅵ層	10YR4/2灰黄褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	11-6層に比べて砂質弱くシルト質強い
11-6	Ⅶ層	10YR4/2灰黄褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	鉄分沈着著しい
15-5	Ⅸ層	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	
17-51	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	所々に炭化粒・木質若干混じる 自然堆積層
17-52	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト 5Y4/1灰色シルト質砂	粘性あり	締まりあり	西壁北側の凹み付近から砂質が顕著になる
17-53	谷部(上層)	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	所々に炭化粒混じる 自然堆積層
17-54	谷部(上層)	5Y2/1黒色シルト	粘性あり	締まりあり	炭化物多量に混じる 自然堆積層
17-55	谷部(上層)	5Y4/1灰色砂	粘性なし	締まりなし	炭化物若干混じる (17-54層との層境付近のみ) 自然堆積層
17-56	谷部(上層)	5Y3/1オリーブ黒色シルト	粘性あり	締まりあり	炭化粒混じる 自然堆積層 漸移的に砂質に変化
17-57	谷部(上層)	2.5Y3/3暗オリーブ褐色砂 5Y4/1灰色シルト質砂	粘性なし	締まりなし	粗粒砂～礫顕著 自然堆積層
17-58	谷部(上層)	5Y3/1オリーブ黒色シルト	粘性あり	締まりあり	自然堆積層(凹み中央より南側付近から)
18-15	谷部(下層)	5Y6/2灰オリーブ色砂	粘性なし	締まりなし	炭化物・木質多量に含む 自然堆積層
18-16	谷部(下層)	5Y5/2灰オリーブ色砂	粘性なし	締まりなし	数cm大の礫多数含む 自然堆積層 南端付近はシルト層 他は砂～礫 自然堆積層
18-17	谷部(下層)	2.5Y4/1黄灰色砂	粘性やや弱い	締まりあり	シルトラミナあり 炭化物含む 自然堆積層
18-18	谷部(下層)	7.5Y3/2オリーブ黒色砂	粘性なし	締まりなし	粗粒砂のみ 自然堆積層
18-19	谷部(下層)	5Y5/1灰色砂	粘性なし	締まりなし	部分的に炭化物を多量に含むシルトラミナあり 自然堆積層
20-3	X層	2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	
		2.5Y5/3黄褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	(谷以北)
F	6層上面の遺構か	2.5Y4/1黄灰色シルト	粘性あり	締まりあり	

第4-3-2図 西壁土層断面図(2)

Ⅵ層の下位層である灰黄褐色砂質シルトのⅦ層も、Ⅵ層とほぼ同様の範囲に堆積するが、層厚は30cmを超える箇所もある。Ⅵ層に比べ若干砂質が強く、鉄分沈着が顕著である以外差異はない。湿地状の環境下で堆積した土壌であろう。調査では、Ⅵ層とⅦ層の近似性とⅦ層上面から切り込む遺構がなかったため、ほどなくまとめて掘削した(Ⅷ層(6・8層)として遺物取り上げ)。このⅧ層から出土した遺物の中には、微量ながら内面黒色処理を施した平安時代中期頃の黒色土器埴片が調査区北西側で、また平安時代末以降(12世紀後半以降)の瓦質鍋を含む瓦質土器片が、量的にはわずかながら広範囲に出土した。

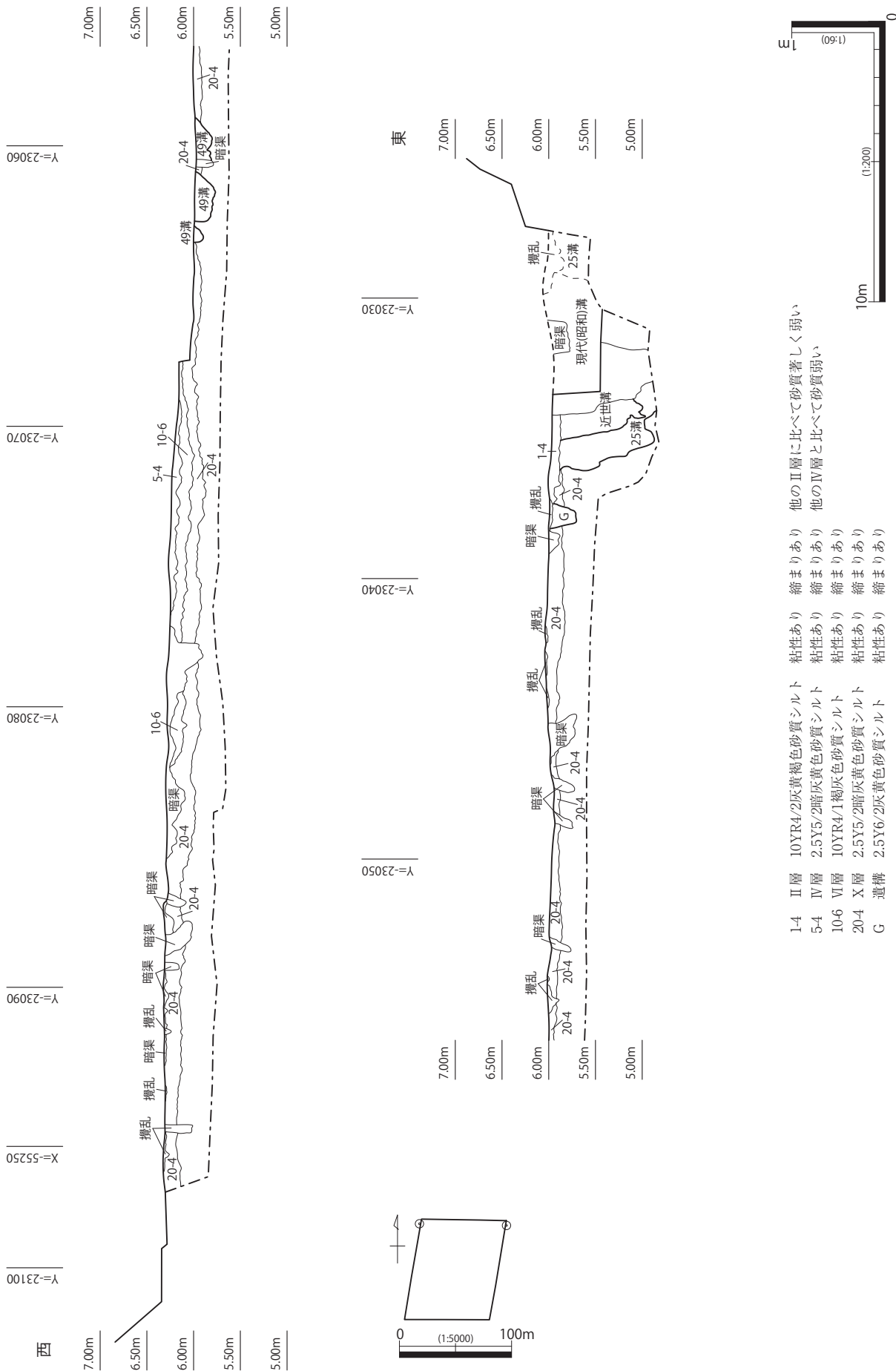
これに対し、25溝東側ではⅥ層やⅦ層を確認することが出来なかったが、Ⅴ層とⅨ層(B層)との間に堆積した黒褐色・黄灰色砂質シルト層をⅧ層と見做して、一括して掘削した。このⅧ層は、粗粒砂～細粒砂を若干量あるいは所々砂質ブロックを含み、弱い攪拌を受けていることから作土の可能性がある。若干量の瓦質土器片が出土した。このⅧ層下面で、多量の木製祭祀具が出土した47・48流路を検出し、これを6面とした。

Ⅸ層は黒褐色もしくは灰黄褐色砂質シルト層で、粘性が強く、部分的に炭化物が混じる。25溝西側の谷部(上層)上面の湿地状の環境下で堆積した、層厚平均50cmを測る土壌層である。出土遺物には須恵器や土師器、若干量の木製祭祀具がある。これらの遺物から飛鳥時代に堆積を終えたと考える。サブトレンチ5や調査区南端の断面では明瞭ではないが、47および48流路はこのⅨ層を切って形成している。同層下面から、古墳時代後期から飛鳥時代の遺物が出土した谷部(上層)を検出し、これを7面とした。

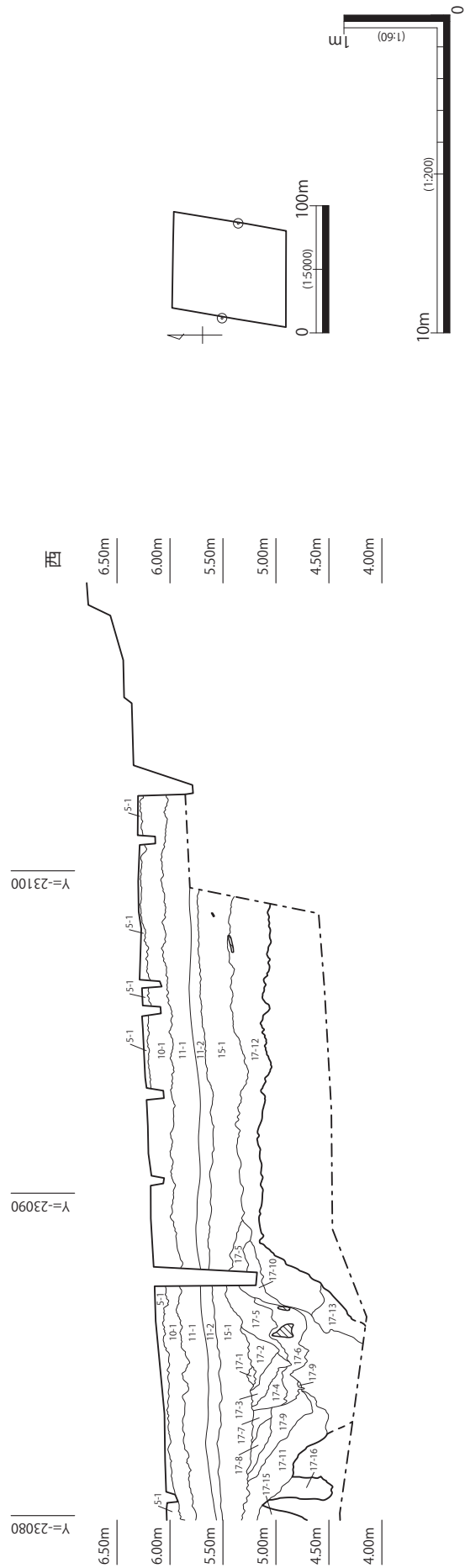
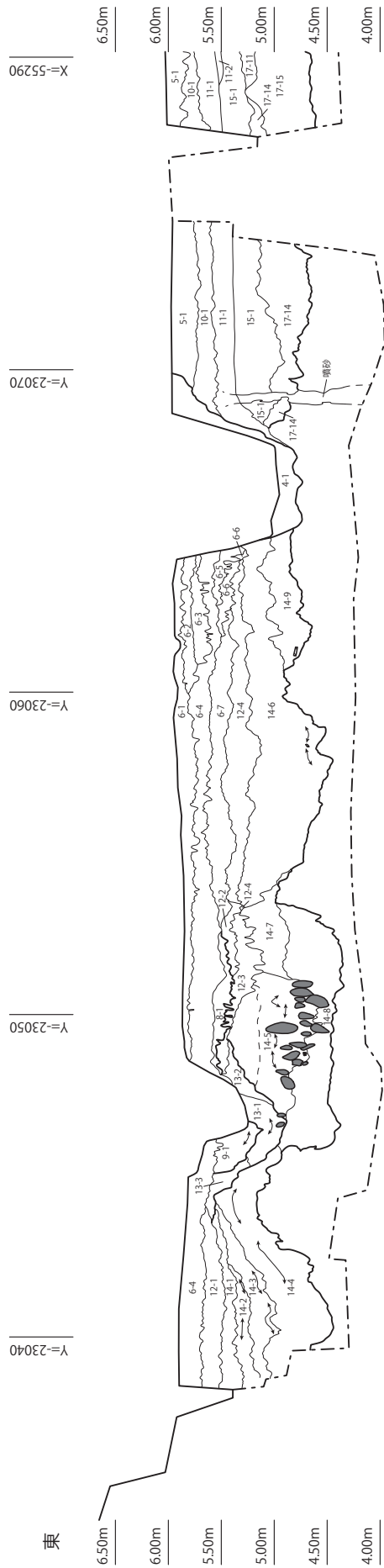
X層(H25-7層)は暗灰黄色もしくは黄褐色砂質シルト層で、平成25年度調査区に続く調査区北西

1-2	Ⅱ層	10YR3/2黒褐色砂質シルト	粘性あり	縮まりあり	粗粒砂多く含む
2-1	近世溝	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	縮まりあり	
2-2	近世溝	2.5Y5/4黄褐色砂	粘性なし	縮まりなし	礫～細粒砂ラミナあり 自然堆積層
4-2	25溝	5Y3/1オリーブ黒色シルト	粘性あり	縮まりあり	
4-3	25溝	10YR4/3にぶい黄褐色砂	粘性なし	縮まりあり	2.5Y3/1黒褐色シルトブロック含む 自然堆積層
4-4	25溝	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	縮まりあり	所々に10YR5/6黄褐色粗粒砂～極細粒砂ラミナあり 自然堆積層
4-5	25溝	2.5Y4/2暗灰黄色砂	粘性なし	縮まりなし	自然堆積層 (礫～細粒砂)
4-6	25溝	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	縮まりあり	下半は礫～極細粒砂ラミナあり 自然堆積層
4-7	25溝	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	縮まりあり	粗粒砂多量に含む
4-8	25溝	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	縮まりあり	
5-2	Ⅳ層	10YR3/2黒褐色砂質シルト	粘性あり	縮まりあり	粗粒砂わずかに含む
6-10	Ⅴ層	10YR3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	縮まりあり	
7-1	41流路	10YR4/6褐色砂	粘性なし	縮まりなし	自然堆積層
8-2	43流路	10YR4/6褐色砂	粘性なし	縮まりなし	自然堆積層
9-2	44流路	2.5Y5/3黄褐色砂	粘性なし	縮まりなし	細粒砂～礫のラミナあり 自然堆積層
10-3	Ⅵ層	10YR3/2黒褐色シルト	粘性あり	縮まりあり	
10-4	Ⅵ層	10YR3/2黒褐色シルト	粘性あり	縮まりあり	10-3層に比べやや砂質あり
11-5	Ⅶ層	10YR4/3にぶい黄褐色シルト	粘性あり	縮まりあり	
12-5	Ⅷ層	5Y4/1灰色シルト	粘性あり	縮まりあり	
12-6	Ⅷ層	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	縮まりあり	
13-4	47流路	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	縮まりあり	自然堆積層
14-10	48流路	10YR2/1黒色シルト	粘性あり	縮まりあり	自然堆積層
14-11	48流路	5Y3/1オリーブ黒色シルト	粘性あり	縮まりあり	自然堆積層
14-12	48流路	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	縮まりあり	所々に礫～細粒砂ラミナあり 木質含む 自然堆積層
15-4	Ⅸ層	2.5Y3/2黒褐色シルト	粘性あり	縮まりあり	
16-3	Ⅸ層	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	縮まりあり	
16-4	Ⅸ層	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	縮まりあり	16-3層に比べやや黒みが強い→16-3層の一部か
17-49	谷部(上層)	5Y4/1灰色シルト	粘性あり	縮まりあり	自然堆積層
17-50	谷部(上層)	2.5Y5/3黄褐色砂	粘性なし	縮まりなし	礫～極細粒砂ラミナあり 自然堆積層
18-1	谷部(下層)	2.5Y5/1黄灰色砂質シルト	粘性あり	縮まりあり	若干の炭化物含む 自然堆積層
18-2	谷部(下層)	2.5Y5/1黄灰色シルト	粘性あり	縮まりあり	自然堆積層
18-3	谷部(下層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	縮まりあり	下部は粗粒砂～細粒砂ラミナあり 自然堆積層
18-4	谷部(下層)	7.5Y4/1灰色砂	粘性なし	縮まりなし	2.5Y3/1黒褐色シルトブロック多量に含む 自然堆積層
18-5	谷部(下層)	10YR3/1黒褐色シルト	粘性あり	縮まりあり	木質・炭化物多量に含む 自然堆積層
18-6	谷部(下層)	2.5Y5/1黄灰色シルト	粘性あり	縮まりあり	ブロック状に堆積 自然堆積層
18-7	谷部(下層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	縮まりあり	下部に細粒砂ラミナあり 木質・炭化物含む 自然堆積層
18-8	谷部(下層)	2.5Y4/1黄灰色シルト	粘性あり	縮まりあり	炭化物含む 自然堆積層
18-9	谷部(下層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	縮まりあり	ベース土のブロック土?混入
18-10	谷部(下層)	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	縮まりあり	下部は細粒砂～極細粒砂ラミナあり 炭化物多量に含む ベース土のブロック土混入
18-11	谷部(下層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	縮まりあり	木質・炭化物多量に含む 自然堆積層
18-12	谷部(下層)	2.5Y4/2暗灰黄色砂	粘性なし	縮まりなし	部分的にシルトラミナあり 自然堆積層
18-13	谷部(下層)	10YR3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	縮まり弱い	自然堆積層
18-14	谷部(下層)	5Y4/1灰色砂	粘性なし	縮まりなし	砂礫のみの自然堆積層
20-2	X層	2.5Y5/2暗灰黄色砂質シルト	粘性あり	縮まりあり	
C	遺構	5Y5/1灰色シルト	粘性あり	縮まりあり	底部は5Y4/1灰色シルト
D	遺構	2.5Y4/1黄灰色シルト	粘性あり	縮まりあり	
E	遺構	2.5Y4/1黄灰色シルト	粘性あり	縮まりあり	

第4-4-2図 南壁土層断面図(2)



第4-5図 北壁土層断面図



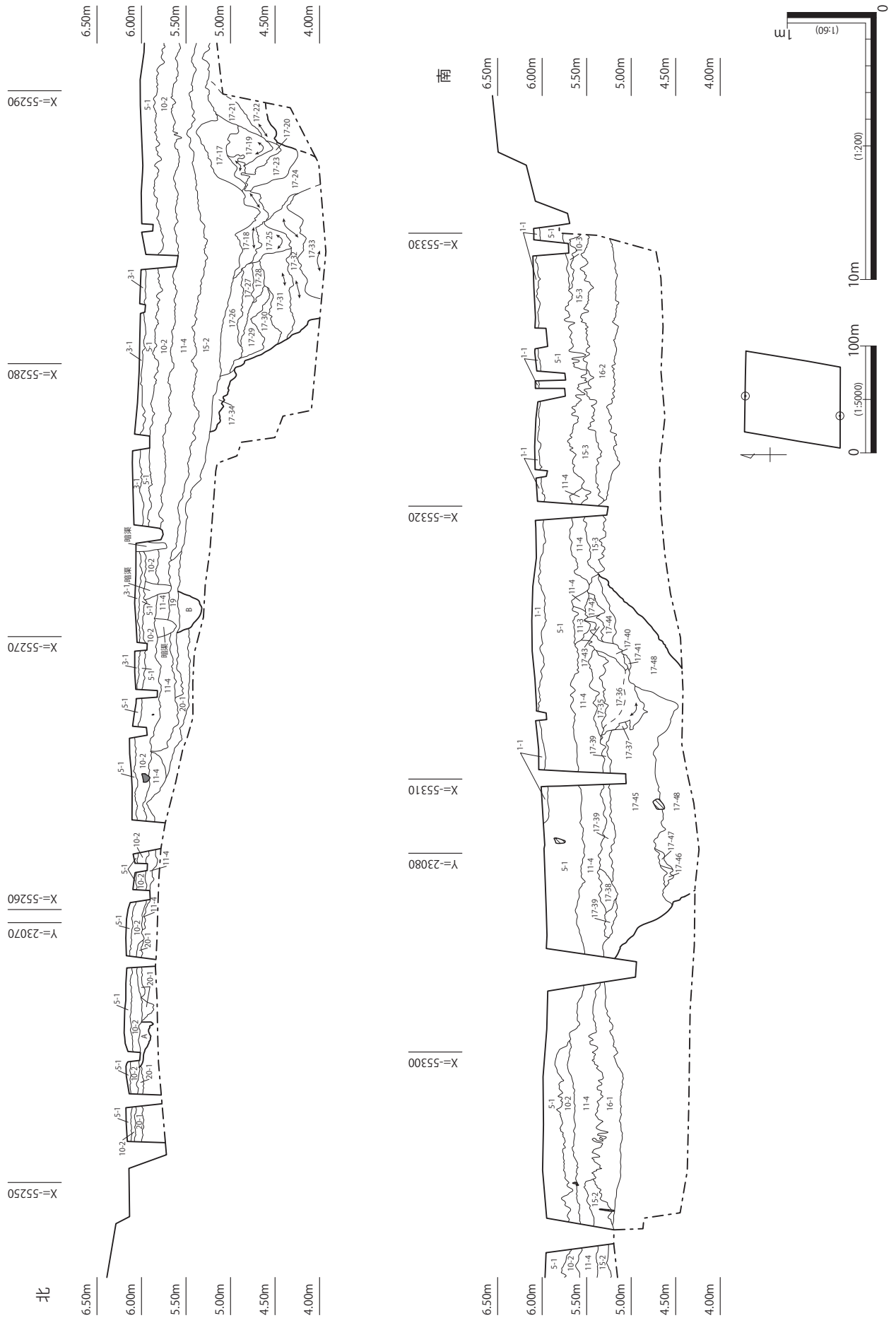
第4-6-1図 サブトレンチ5土層断面図(1)

第4章 1区の調査成果

4-1	25溝	5Y3/1オリーブ黒色シルト質砂	粘性あり	締まりあり	攪拌受ける
6-1	V層	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	粗粒砂～細粒砂多量に含む 踏み込みによる凹みが顕著に残る
6-2	V層	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	粘性強い	締まりあり	
6-3	V層	10YR3/3暗褐色砂	粘性なし	締まりあり	粗粒砂～細粒砂による自然堆積層が弱い攪拌を受ける
6-4	V層	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	礫・粗粒砂～細粒砂多量に含む
6-5	V層	10YR3/3暗褐色砂	粘性なし	締まりあり	中粒砂～細粒砂による自然堆積層が弱い攪拌を受ける
6-6	V層	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	粗粒砂～細粒砂混じる
6-7	V層	5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト	粘性強い	締まりあり	25溝東側では砂層が顕著に残るが東へ向かうに従い 踏み込みもほとんどなくなる
8-1	43流路	10YR4/3にぶい黄褐色砂粘性弱い	粘性弱い	締まりあり	粗粒砂～シルトのラミナあり 自然堆積層
9-1	44流路	2.5Y4/1黄灰色砂	粘性やや弱い	締まりあり	シルト～細粒砂のラミナあり
10-1	VI層	10YR4/2灰黄褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	11-1層に比べて砂質弱くシルト質強い
11-1	VII層	10YR4/2灰黄褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	
11-2	VII層	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	IX層ほどシルト質ではない
12-1	VIII層	2.5Y4/1黄灰色シルト	粘性あり	締まりあり	粗粒砂～極細粒砂若干含む
12-2	VIII層	2.5Y3/2黒褐色シルト質砂	粘性やや弱い	締まりあり	不十分な攪拌受ける
12-3	VIII層	5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト	粘性強い	締まりあり	やや不十分な攪拌受ける 砂ブロックや14-7層ブロック混じる
12-4	VIII層	5Y3/1オリーブ黒色シルト	粘性強い	締まりあり	V層に比べシルト質顕著
13-1	47流路	2.5Y4/3オリーブ褐色砂	粘性弱い	締まりあり	シルト～粗粒砂のラミナあり 自然堆積層
13-2	47流路	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性強い	締まりあり	細粒砂含む 13-1層と類似
13-3	47(新)流路	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性強い	締まりあり	粗粒砂～細粒砂含む
14-1	48流路	10YR3/2黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	極細粒砂ブロックあり
14-2	48流路	10YR3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	部分的にラミナあり
14-3	48流路	2.5Y3/2黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	シルト～極細粒砂のラミナあり 若干の木質含む 自然堆積層
14-4	48流路	5Y3/1オリーブ黒色砂	粘性弱い	締まりあり	シルト～粗粒砂のラミナあり 木質含む 自然堆積層
14-5	48流路	2.5Y3/2黒褐色砂	粘性弱い	締まりあり	礫～シルトのラミナあり 木質含む 大型礫が多量に混じる 上端付近は土壌化(5Y3/2オリーブ黒色シルト)
14-6	48流路	5Y3/1オリーブ黒色シルト	粘性強い	締まりあり	中央付近には粗粒砂～細粒砂のラミナ顕著 土器片や木製品出土
14-7	48流路	2.5Y3/2黒褐色シルト	粘性強い	締まりあり	ベース層ブロック(2.5Y4/3オリーブ褐色シルト)や木質含む
14-8	48流路	2.5Y3/2黒褐色シルト質砂	粘性あり	締まりあり	上端付近は自然堆積層
14-9	48流路	5Y3/2オリーブ黒色シルト質砂	粘性あり	締まりあり	攪拌受ける 木製品・木質含む
15-1	IX層	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	細粒砂・炭化物混じる
17-1	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	細粒砂～粗粒砂混じる
17-2	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	炭化物含む
17-3	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト質砂	粘性あり	締まりあり	細粒砂～シルト攪拌受ける 炭化物・木片含む
17-4	谷部(上層)	5Y3/1オリーブ黒色シルト	粘性あり	締まりあり	部分的に細粒砂混じる 炭化物・木片含む
17-5	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	部分的にラミナ残り細粒砂ブロックあり 炭化物・木片含む
17-6	谷部(上層)	2.5Y4/2暗灰黄色砂	粘性なし	締まりあり	シルト～粗粒砂のラミナあり 中央付近に木片・木製品等が集中する
17-7	谷部(上層)	5Y3/1オリーブ黒色シルト	粘性あり	締まりあり	部分的に細粒砂ブロックあり 炭化物含む
17-8	谷部(上層)	5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	
17-9	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	炭化物含む
17-10	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	ラミナあり 炭化物層形成
17-11	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	炭化物含む
17-12	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	
17-13	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	
17-14	谷部(上層)	2.5Y2/1黒色シルト	粘性あり	締まりあり	炭化物若干混じる 南北サブトレンチ1の17-21層と同一
17-15	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト質細粒砂	粘性あり	締まりあり	南北サブトレンチ1の17-22層と同一
17-16	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト質細粒砂	粘性あり	締まりあり	

※48流路(14-8層→14-7層→14-6層→14-5層→14-1～4層)→47流路(13-1・2層)→47(新)流路(13-3層)と変遷する

第4-6-2図 サブトレンチ5土層断面図(2)



第4-7-1図 南北サブトレンチ土層断面図(1)

第4章 1区の調査成果

1-1	Ⅱ層	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	粗粒砂多量に混じる
3-1	Ⅲ層	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	粗粒砂混じる
5-1	Ⅳ層	10YR2/2黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	礫・粗粒砂多量に混じる
10-2	Ⅵ層	10YR4/2灰黄褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	
11-3	Ⅶ層	2.5Y3/2黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	地震攪拌受ける 所々に礫混じる
11-4	Ⅷ層	2.5Y3/2黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	地震による下層の巻き上げあり
		10YR3/2黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	若干の粗粒砂混じる(谷部(上層)以南)
15-2	Ⅸ層	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	
15-3	Ⅹ層	10YR5/2灰黄褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	所々に極細粒砂ブロック混じる
16-1	Ⅹ層	10YR3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	
16-2	Ⅹ層	7.5Y4/1灰色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	細粒砂ブロックあり 炭混じる
17-17	谷部(上層)	10YR2/3黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	部分的に弱い攪拌受ける 細粒砂ラミナあり
17-18	谷部(上層)	10YR2/1黒色シルト	粘性あり	締まりあり	シルト～粗粒砂ラミナあり 炭・木質多量に含む
17-19	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	炭多量に含む 自然堆積層
17-20	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	細粒砂混じる 土壌化層で極細粒砂～細粒砂ブロックあり
17-21	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	炭多量に含む 自然堆積層 サブトレッチ5の17-14層と同一
17-22	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	炭含む 自然堆積層 サブトレッチ5の17-15層と同一
17-23	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	炭多量に含む
17-24	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	炭含む
17-25	谷部(上層)	10YR3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	炭含む 自然堆積層
17-26	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	炭含む
17-27	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	所々に極細粒砂～細粒砂ラミナあり 炭含む 自然堆積層
17-28	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト質砂	粘性あり	締まりあり	極細粒砂～細粒砂ラミナ顕著 炭含む 自然堆積層
17-29	谷部(上層)	5Y3/1オリーブ黒色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	細粒砂ブロックあり
17-30	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	極細粒砂ブロックあり
17-31	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	部分的に極細粒砂ラミナあり 炭含む 自然堆積層
17-32	谷部(上層)	5Y3/1オリーブ黒色シルト	粘性あり	締まりあり	自然堆積層
17-33	谷部(上層)	10YR3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	細粒砂ラミナあり 炭含む 自然堆積層
17-34	谷部(上層)	10YR3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	炭・木質若干含む
17-35	谷部(上層)	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	弱い攪拌受ける
17-36	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	下半は自然堆積層で木質含む
17-37	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	細粒砂ラミナあり 自然堆積層
17-38	谷部(上層)	10YR3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	
17-39	谷部(上層)	10YR3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	
17-40	谷部(上層)	10YR3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	細粒砂～粗粒砂ラミナあり 17-40・42層ブロック含む 自然堆積層
17-41	谷部(上層)	5Y2/2オリーブ黒色砂質シルト	粘性あり	締まりあり	17-42層ブロック含む 自然堆積層
17-42	谷部(上層)	10YR3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	地震攪拌受ける
17-43	谷部(上層)	2.5Y3/2黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	
17-44	谷部(上層)	5Y4/1灰色シルト	粘性あり	締まりあり	
17-45	谷部(上層)	10YR2/2黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	炭・木質含む 自然堆積層
17-46	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性やや弱い	締まりあり	自然堆積層
17-47	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	自然堆積層
17-48	谷部(上層)	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり	締まりあり	自然堆積層
19-1		2.5Y4/3オリーブ褐色砂	粘性やや弱い	締まりあり	
20-1	Ⅹ層	5Y5/1灰色砂	粘性あり	締まりあり	炭若干含む
A	遺構	2.5Y5/2暗灰黄色砂	粘性あり	締まりあり	
B	遺構	5Y5/1灰色砂	粘性あり	締まりあり	炭含む

第4-7-2図 南北サブトレッチ土層断面図(2)

隅、南西隅の微高地上に堆積する。層厚は20cm余である。層中から縄文時代晩期の土器片が出土した。この層上面で検出した遺構のうち、弥生時代から古墳時代にかけての遺構を8面とし、縄文時代に帰属するものを9面、同層下面をもって10面とした。

Ⅺ層(H25-8層)は平成25年度調査区から続く基盤層で、グライ化のため変色した細粒砂～シルト層である。

第3節 中世以降の調査成果

第1項 1～4面

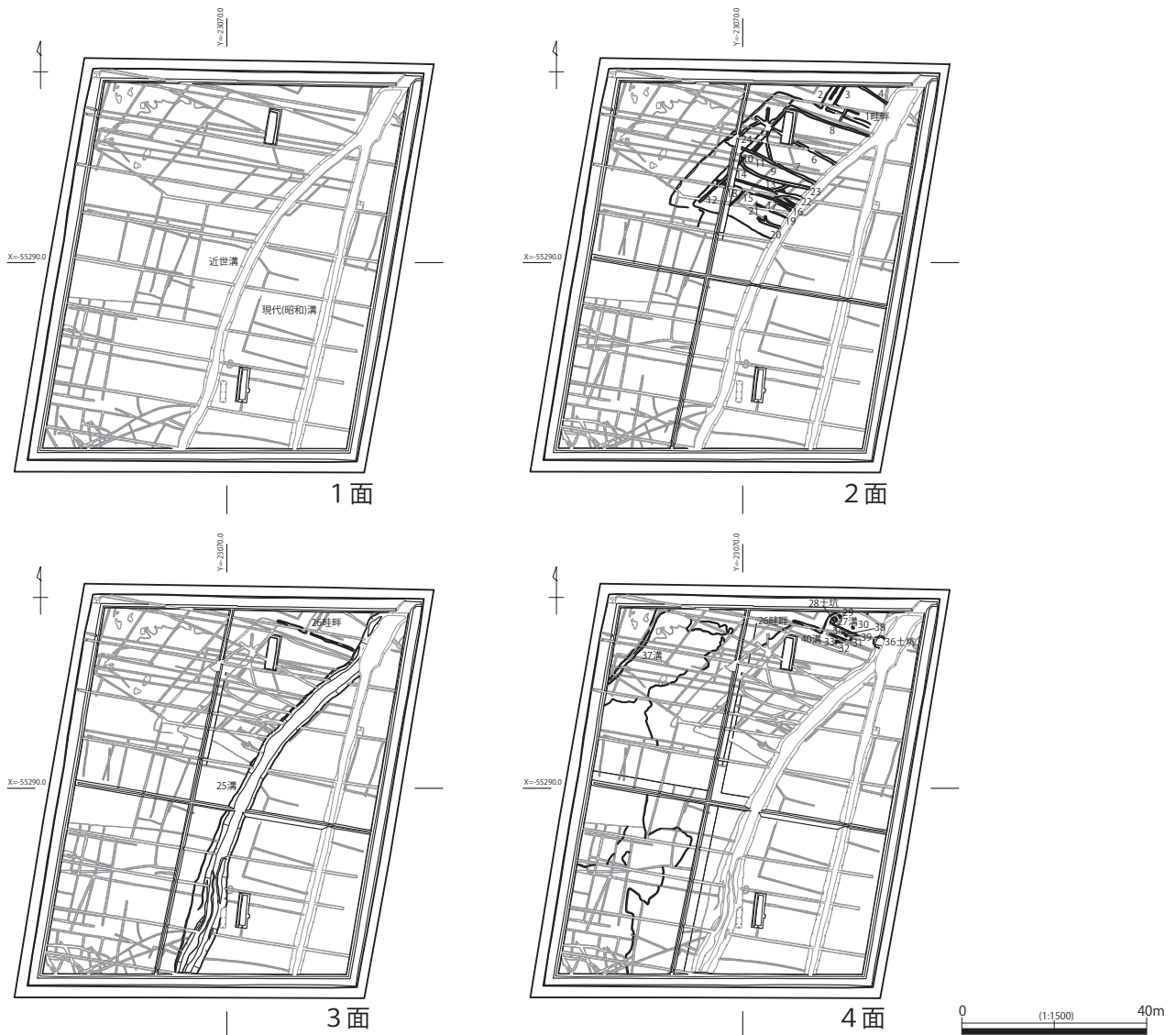
1 概要

ここでは、近世の遺構と判断した1～4面をまとめて記載する(第4～8図)。

1面では、I・II層(1・2層)の表土掘削後、現代溝とそれに取り付く近世溝を、さらにこの近世溝に平行する水田区画を検出したが、近世溝東側では確認出来なかった。

III層(3層)掘削後に検出した2面では、畦畔1条とその南北に広がる2筆の水田、また22条の暗渠を検出した。検出した畦畔は、北西に向かって先細りする残存長約18mを測るもので、IV層(4層)段階で機能した畦畔を改築したものである。この北西側には水口が1箇所設けられており、取水栓として機能した横板材とその両端を支える杭が遺存していた(第4～9図および写真図版5-2)。

暗渠は、近世溝の前身(25溝)に注ぐ東西方向のものを基幹とし、それに接続するよう南北方向のものを構築する。これらの暗渠は、個々を構成する丸太や礫等の構造材と、それらの構築方法から6種類に分類した。概ね丸太のみを用いたものから、円礫を併用するものへと変遷するようである。

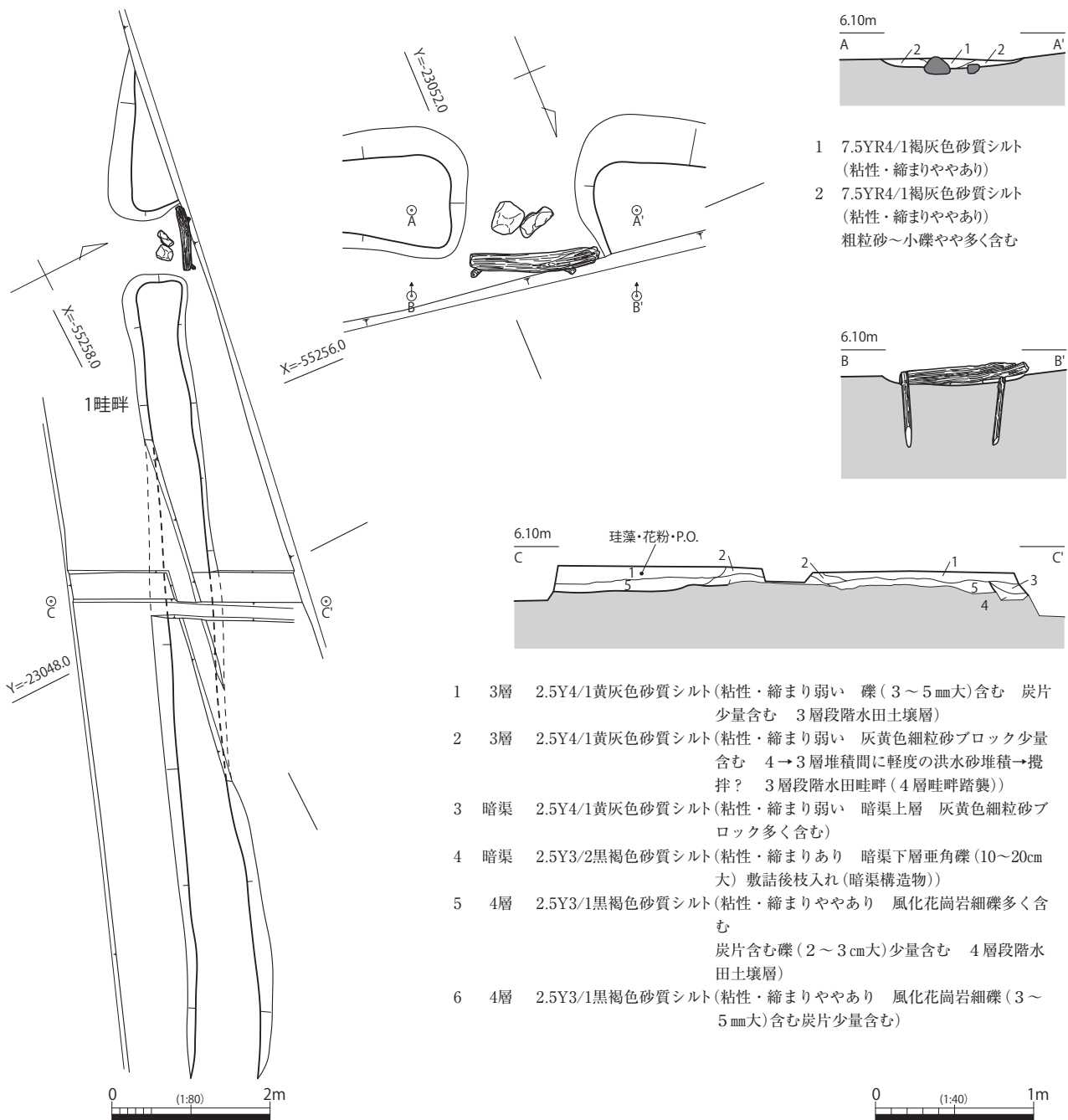


第4～8図 1～4面平面図

第4章 1区の調査成果

IV層(4層)上面で検出した3面は、溝1条と畦畔1条を検出した。この25溝は、幅4m前後、深さ約1mを測り、流芯部分を再掘削したものが近世溝となる。2面で検出した暗渠群は、全てこの25溝に注ぐよう構築されていることから、当該期基幹水路として開削されたと考える。畦畔は、IV層段階の水田に伴うものである。

IV層(4層)掘削後に検出した下面遺構を4面とし、畦畔1条、溝3条、土坑2基、ピット8基を検出した。これらは、37溝以外全て調査区北東隅で見つかっている。26畦畔の南側法面と先端には、水田区画の明示、もしくは法面強化の目的で計8本の木杭を打設してあった。27溝や40溝はともに26畦畔と主軸を同じくするが、40溝は畦畔直下で検出しており、この畦畔造成以前の耕作痕と考えられる。土坑およびピットからは明瞭な遺物がなく、帰属時期や性格の詳細は不明である。



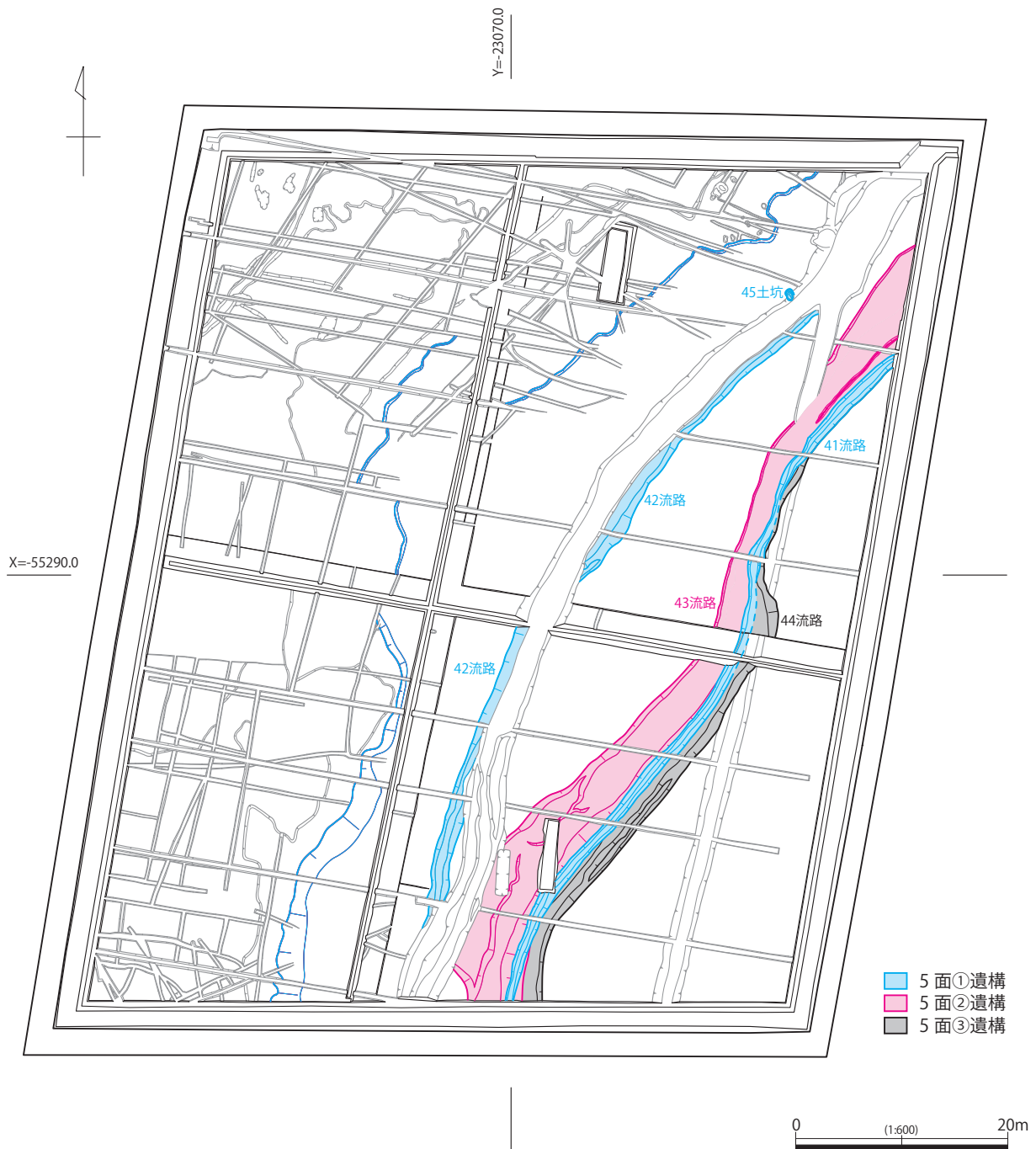
第4-9図 1 畦畔

第2項 5面

1 概要

25溝西側ではⅣ層(4層)除去後に、同溝東側ではⅤ層(A層)除去後に検出した遺構面である(第4-10図)。検出面は、南端付近が約6.0m、北端が約5.8m、北東隅が約5.5mを測り、北東側に向かって緩やかに傾斜する。検出した遺構は41・42・43・44流路と45土坑で、いずれも調査区東半に偏る。

Ⅳ層・Ⅴ層から出土した遺物には、近世陶磁器が混じるが、上記4条の溝から若干量の須恵器・土師器や漆器が出土することから、中世の遺構と考える。なお、45土坑からの出土遺物はない。



第4-10図 5面平面図

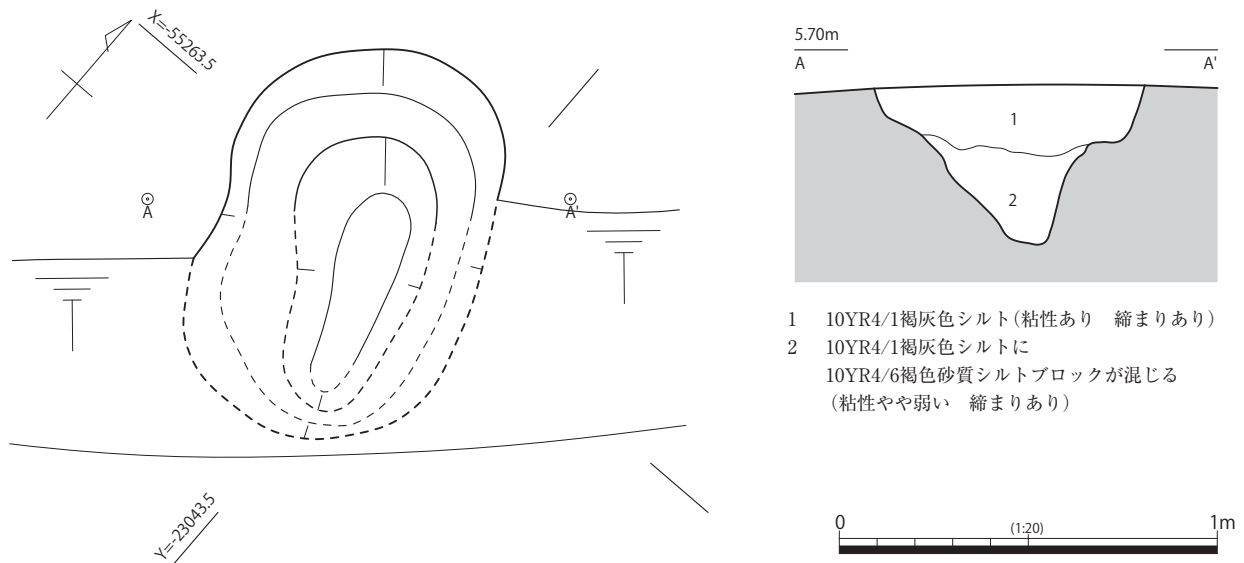
2 調査の成果

(1) 土坑

45土坑 (第4-11図)

調査区北東、T30-6d-3A-7eで検出した遺構である。東半部を3面検出の25溝に切られているため、全貌は不明である。5面では41～44流路以外に遺構はなく、西方から42流路へ注ぐ溝の一部とは考えられず、単独の土坑と捉えるのが妥当であろう。残存箇所から推測するに、平面形は概ね楕円形を呈し、狭まった土坑下半の埋土は、上半の埋土に地山ブロックが混じる。

出土遺物は全くないが、IV・V層下面で検出していることから、近世以前の遺構と考える。



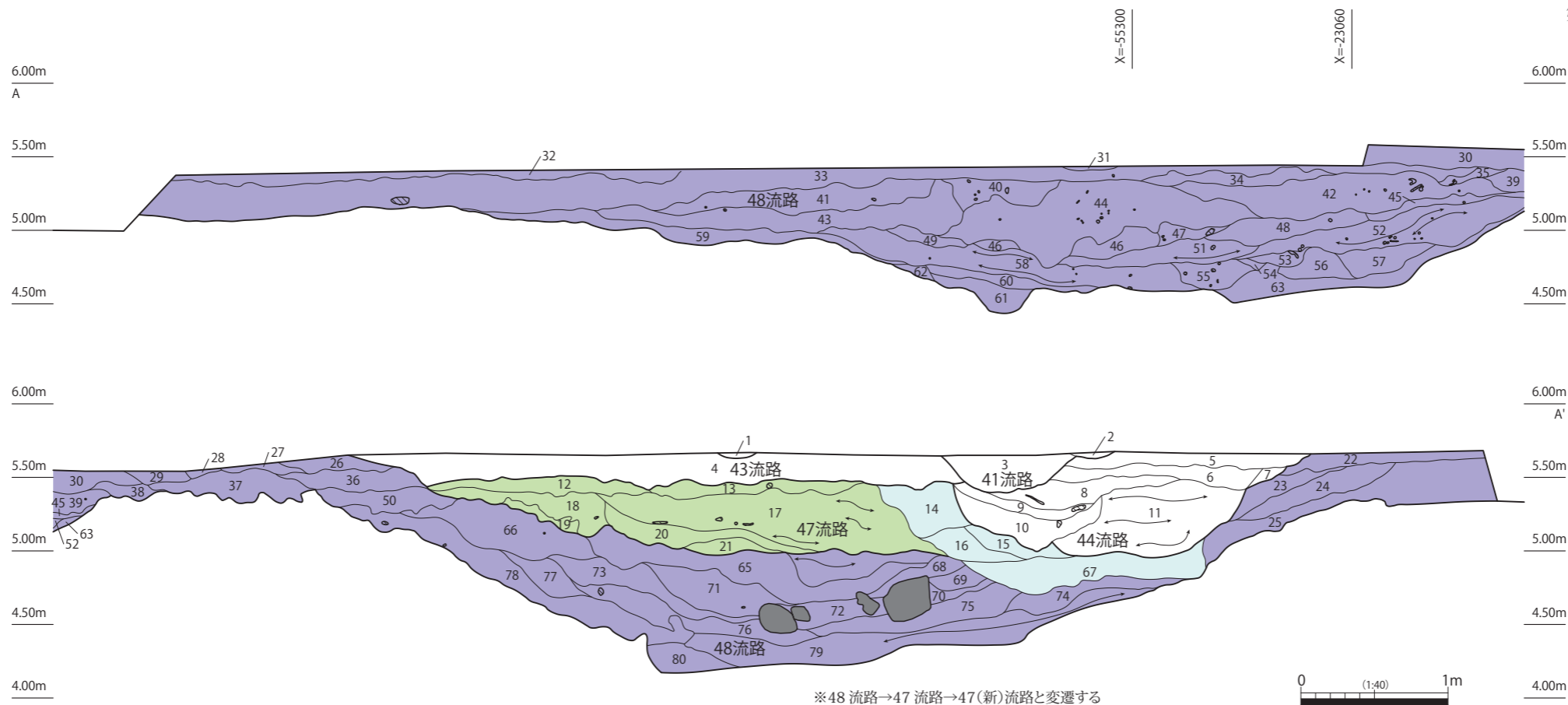
第4-11図 45土坑

(2) 流路

41～44流路 (第4-12・14～16図)

4条のうち、42流路は調査区南端中央付近から緩やかなカーブを描きながら調査区北東端へ、残る41・43・44流路は、同じく南端中央付近から調査区東寄りを緩やかに蛇行しながら東壁北端付近へ流れる。このうち41・43・44流路は、ほぼ同じ場所で流路幅・深さを変えながら東西に移動したもので、切り合い関係から44→43→41流路への変遷が明らかである。一方42流路は、他の3条の流路と全く交錯しないため、それらとの前後関係は不明である。想像逞しくすれば、3面検出25溝とほぼ重複することから、その前身と考えることも出来る。

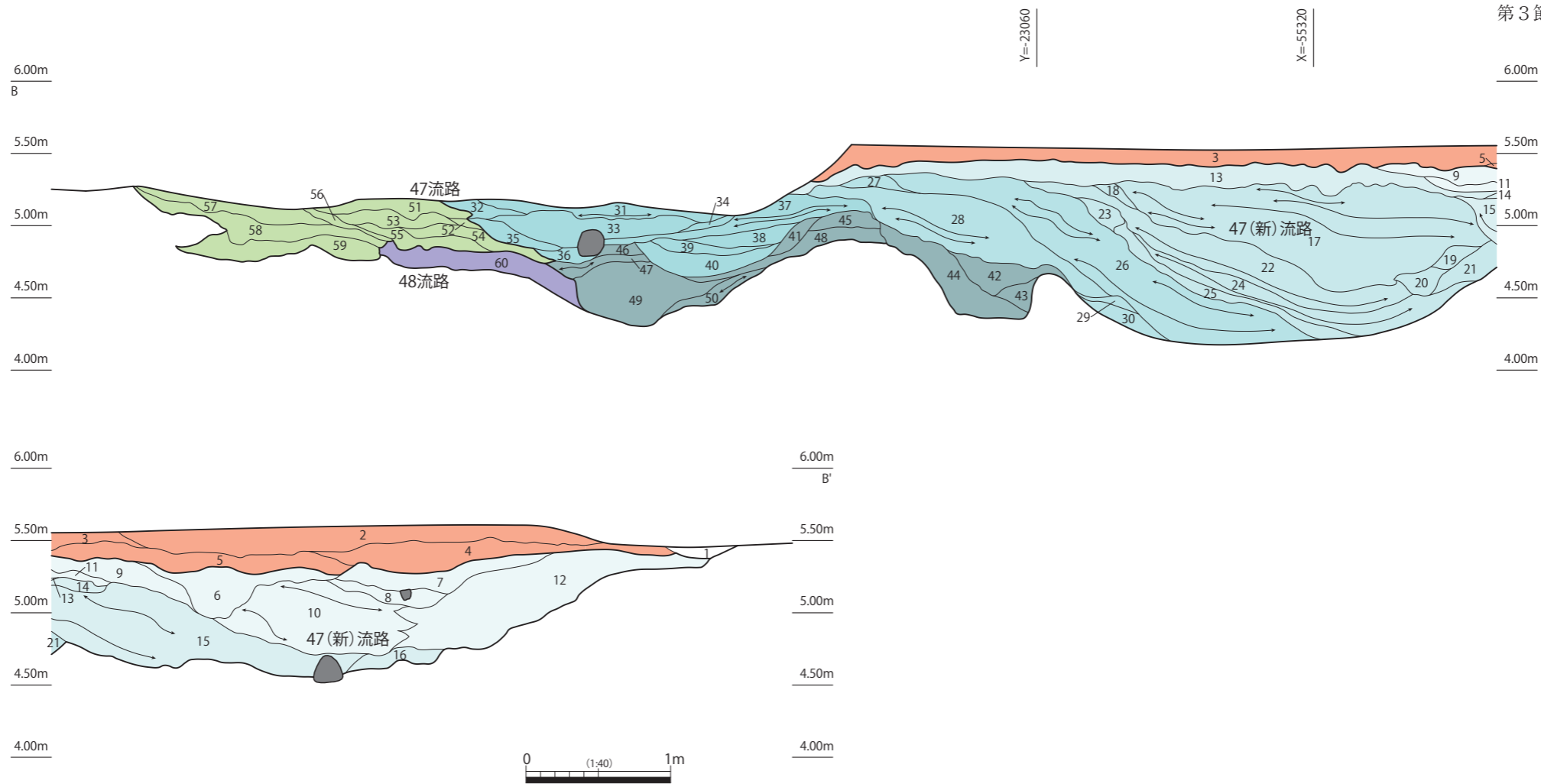
3条の流路の計測値や特徴は以下の通りである。44流路は幅約3m、深さ約0.7mを測る。南壁や東壁では顕著ではないが、第4-12図によれば、3条の流路の中では最も深く、数段階を経て埋積したことがわかる。中世陶器片が出土した。43流路は3条の中では幅が約5mと最も広く、逆に深さは約0.15mと最も浅い。これは、埋没後一帯が耕地化される過程で著しい攪拌を受けた結果と考えられる。41流路は幅約1.2m、深さ約0.3mを測る。3条の流路の最終形態である。調査区南端付近の右岸側で、木製構造物を検出した。出土遺物のうち土器類はいずれも極めて少なく、時期特定を可能にする資料はないが、近世陶磁器は出土しておらず、数個体出土した漆器椀(第4-42図 W1～4)は、黒漆地に赤漆によって施文したもので、中世に帰属すると考える。



1	42層	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 極粗粒砂～細礫多く含む(花崗岩風化)	43	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性弱い 締まり弱い 淡黄色細粒砂ブロック少量含む
2	41流路	2.5Y5/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 粗粒砂・炭片含む	44	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 淡黄色細粒砂ブロック多く含む 左半部に特に多く含むが乱れが著しい
3	41流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まり弱い 細礫混ラミナとシルト層の互層3組あり	45	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性弱い 締まり弱い 淡黄色細粒砂混在
4	43流路	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性ややあり 締まり弱い 細粒砂ラミナと粗～極粗粒砂ラミナあり その間にシルト層挟む 踏み込みによる乱れ	46	48流路	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性ややあり 締まり弱い
5	44流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い	47	48流路	2.5Y5/1黄灰色シルト混極粗粒砂	
6	44流路	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まり弱い 炭片少量含む	48	48流路	2.5Y5/1黄灰色シルト混細礫	
7	44流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 極粗粒砂やや多く含む	49	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い
8	44流路	2.5Y4/1黄灰色シルト	粘性あり 締まりややあり 5cm大の木片少量含む 淡黄色細粒砂ブロック極わずかに含む	50	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 層下部に淡黄色中～粗粒砂ブロック含む(足跡?)
9	44流路	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まり弱い 8層よりも砂質強い	51	48流路	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性ややあり 締まり弱い 淡黄色中粒砂と極粗粒砂がやや帯状に近い形でまとまって入る 木片やや多く含む
10	44流路	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まり弱い 8・9層よりも砂質強い 8→10層へ漸次的に砂つまくなる	52	48流路	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり 締まりややあり 灰黄色細～中粒砂のラミナ発達するもの圧を受けたように凹んで変形 層下半に木片やや多く含む
11	44流路	2.5Y5/1黄灰色シルト混極粗粒砂	層下半に木片片多く含む	53	48流路	2.5Y5/1黄灰色シルト混細礫	径～1cmの亜角礫わずかに含む 木片(板状)わずかに含む
12	47流路	2.5Y3/1黒褐色シルト混粗粒砂	木片・炭片少量含む 全体的に攪拌を受けたような乱れの様相	54	48流路	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	粘性あり 締まりややあり 泥流堆積か
13	47流路	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まり弱い 淡黄色細粒砂の小ブロックが点在 木片わずかに含む	55	48流路	2.5Y4/1黄灰色シルト混極粗粒砂	帯がねじれたように砂層が変形している
14	47(新)流路	2.5Y4/1黄灰色シルト	粘性あり 締まりややあり 木片わずかに含む	56	48流路	2.5Y5/2暗灰黄色シルト	粘性あり 締まりややあり 54層に酷似するがこちらは炭片が多く含まれている
15	47(新)流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まりややあり 灰黄色細粒砂が横方向に並ぶ(ラミナとは違い、短く切れる)	57	48流路	2.5Y5/2暗灰黄色シルト混極粗粒砂	特に層上部に砂ブロックが集中する 木片少量含む
16	47(新)流路	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まりややあり 15層よりシルト質強い(≒14層よりシルト質弱い)	58	48流路	2.5Y3/1黒褐色砂混シルト	粘性ややあり 締まりややあり 浅黄色細～中粒砂ラミナあり 一部は踏み込み(?)による乱れ
17	47流路	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり 締まりあり 層の右半中心にマーブル状の淡黄色中粒砂ブロック点在 下半中心に木片多く含む	59	48流路	2.5Y3/1黒褐色砂混シルト	粘性ややあり 締まりややあり 58層より均質的
18	47流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まりややあり 灰黄色シルトブロック含む	60	48流路	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり 締まりややあり
19	47流路	2.5Y5/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まりややあり 18層よりも多く灰黄色シルトブロック含む	61	48流路	2.5Y4/2暗灰黄色砂混シルト	粘性ややあり 締まりややあり 淡黄色細粒砂ブロック少量含む
20	47流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まりややあり 木片多く含む	62	48流路	7.5Y7/2灰白色砂質シルト	粘性ややあり 締まりややあり ベース層の一部泥質化した層か? 他の層とは違質的
21	47流路	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性あり 締まりあり 20層よりもシルト質強い	63	48流路	2.5Y5/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まりややあり
22	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 細礫含む 炭片少量含む	64	48流路	5Y4/1灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まりややあり 細～極粗粒砂が混在した淡黄色砂ブロックを含む 土色からして若干グライ化が進行している?
23	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 22層よりも細礫含む	65	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まり弱い 木片やや多く含む
24	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 23層より細礫含む割合は低いが炭片やや多く含む	66	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まり弱い 65層よりも多くの木片含む
25	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まり弱い	67	47(新)流路	2.5Y5/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 本来はラミナであった砂層が多く含まれるがマーブル状に攪拌している 一見正級化構造のように見える
26	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 細礫やや多く含む	68	48流路	2.5Y3/1黒褐色砂混シルト	粘性ややあり 締まりややあり 黒泥化が進んだような色調と土質を示す 炭片やや多く含む
27	48流路	2.5Y5/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 26層に比べ細礫含む割合低い	69	48流路	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 灰白色細粒砂が層中に均質に混じる 木片やや多く含む
28	48流路	2.5Y8/3淡黄色中粒砂	上層からの踏み込みか	70	48流路	2.5Y3/1黒褐色砂混シルト	粘性弱い 締まり弱い 68層に類するが炭片はさほど含まない
29	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性弱い 締まり弱い	71	48流路	2.5Y5/1黄灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まり弱い 淘汰の良い泥流堆積
30	48流路	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト	粘性弱い 締まりなし 細礫やや多く含む	72	48流路	2.5Y3/1黒褐色シルト混礫	極粗粒砂より粒度の細かいものを含まず、20cm大の(亜)角礫もある
31	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 炭片少量含む	73	48流路	10YR6/1褐灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まり弱い 泥流堆積か 炭片少量含む
32	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まりなし 極粗粒砂～細礫をブロック状に含む 炭片含む	74	48流路	10YR6/1褐灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まり弱い 73層に類する 炭片やや多く含む
33	48流路	2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 炭片多く含む 細礫まばらに含む 10cm大の木片わずかに含む	75	48流路	10YR6/1褐灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まり弱い 73・74層に比して砂質強し 炭片・木片含む
34	48流路	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	粘性弱い 締まりなし 炭片少量含む	76	48流路	2.5Y4/1黄灰色シルト混極粗粒砂	
35	48流路	2.5Y3/2黒褐色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 木片少量含む 淡黄色細粒砂ブロック混じる	77	48流路	2.5Y6/1黄灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まり弱い 灰白色(2.5Y8/2)の細粒砂が極わずかに入るが比較的均質なシルト層≒泥流堆積か
36	48流路	2.5Y4/1黄灰色シルト混粗粒砂	上半の一部は極細粒砂～細礫で構成	78	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まり弱い 77層よりも土壌化(?)が進行しているのか黒みが強い
37	48流路	2.5Y4/1黄灰色シルト混中粒砂	36層より淘汰が良いが細礫が点在	79	48流路	2.5Y5/1黄灰色シルト混極粗粒砂	76層はやや攪拌を受けているがこちらはラミナが発達したままの状態
38	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まりややあり 淡黄色細粒砂ブロック少量含む	80	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まり弱い 部分的に腐植土ブロックが入る
39	48流路	2.5Y5/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まり弱い 淡黄色極細粒砂がマーブル状に入る				
40	48流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 2～3cm大の木片やや多く含む				
41	48流路	2.5Y5/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 細礫をやや多く含む(層中均質に) 木片少量含む				
42	48流路	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 淡黄色極細～極粗粒砂がマーブル状に入る 正級化構造状を呈するがかなり乱れている 5cm大の木片含む				

※断面位置は第4-18図・第4-20図(A-A')参照

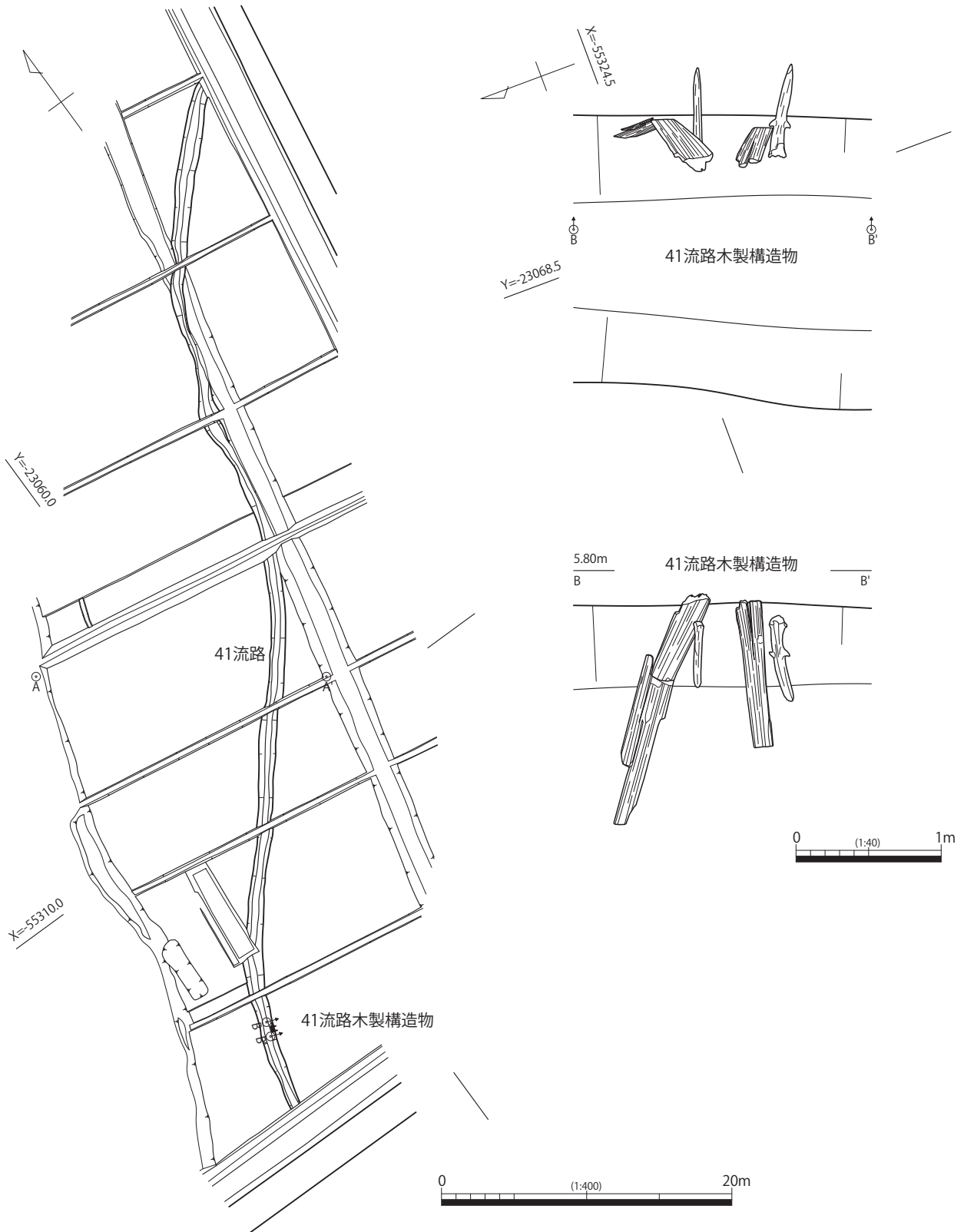
第4-12図 41・43・44・47・48流路断面図



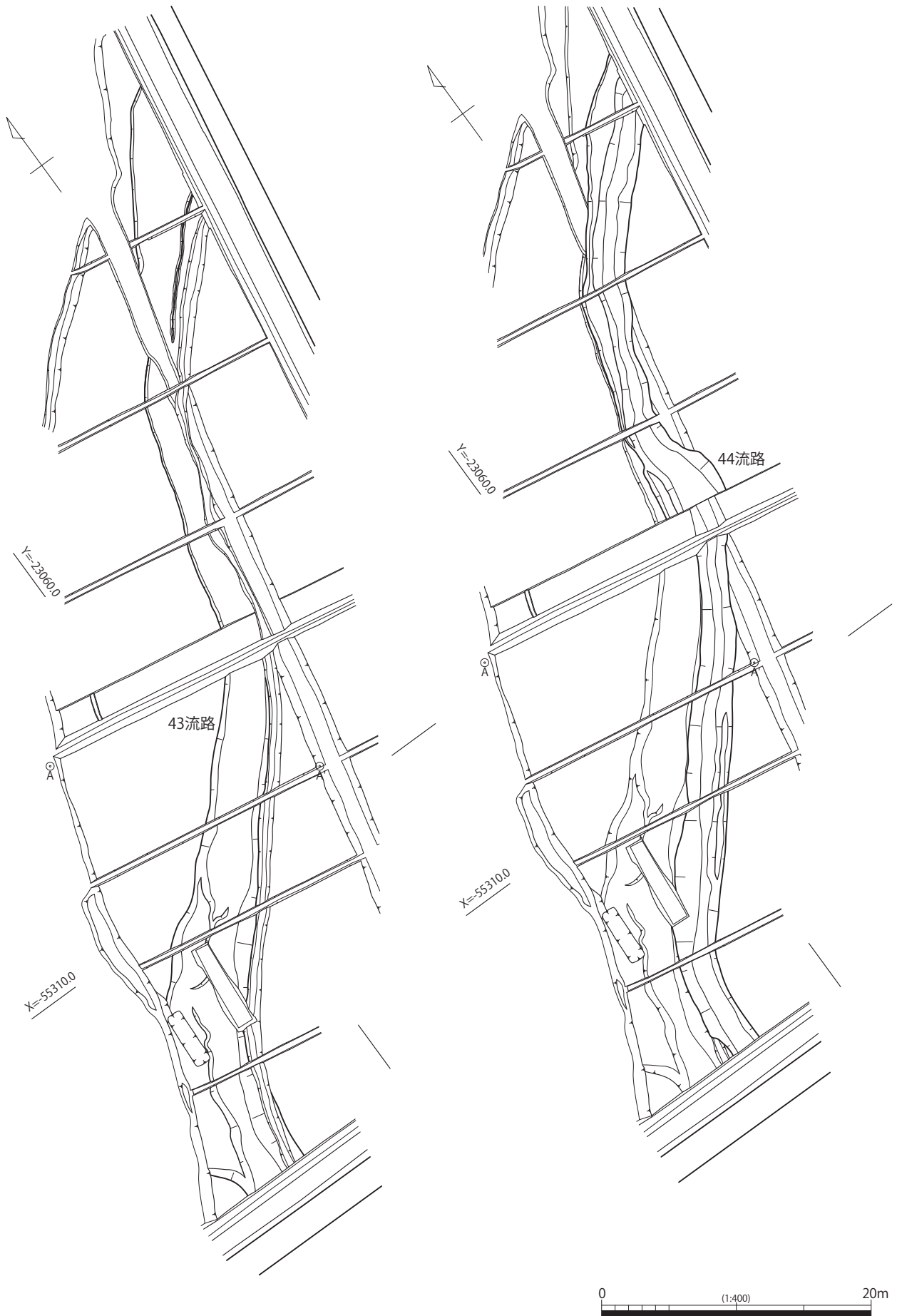
1	昭和溝	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まりややあり 淡黄色細粒砂多く含む(昭和溝掘り残し)	31	47(新)流路5	2.5Y2/1黒色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 細～粗粒砂多く含む 炭片少量含む
2	作土	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まりややあり 黄色シルトブロック多く含む	32	47(新)流路5	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性あり 締まりあり 灰黄色シルトブロック多く含む
3	作土	2.5Y3/1黒褐色砂混シルト	粘性あり 締まりあり 黄色シルトブロックやや多く含む	33	47(新)流路5	2.5Y2/1黒色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 灰黄色細～粗粒砂ブロック多く含む 植物片含む
4	作土	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まりややあり 灰色シルトブロック含む 炭片・植物片含む	34	47(新)流路5	2.5Y4/1黄灰色シルト	粘性強い 締まり強い 泥流堆積か
5	作土	2.5Y3/1黒褐色砂混シルト	粘性ややあり 締まりややあり 黄色シルトブロック少量含む 炭片やや多く含む	35	47(新)流路5	2.5Y3/1黒褐色砂混シルト	粘性あり 締まりあり 黄灰色細粒砂ブロック少量含む
6	47(新)流路1	2.5Y3/2黒褐色シルト	粘性あり 締まりあり 植物片(未分解)多く含む 黄色シルトブロック含む	36	47(新)流路5	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	
7	47(新)流路1	2.5Y3/1黒褐色砂混シルト	粘性ややあり 締まりややあり 炭片・植物片含む 灰色シルトブロック含む	37	47(新)流路5	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い ラミナ発達 下端に植物質集中
8	47(新)流路1	2.5Y3/2黒褐色砂混シルト	粘性あり 締まりあり 炭片・植物片少量含む	38	47(新)流路5	5Y4/1灰色砂混シルト	粘性強い 締まりややあり 黄色細粒砂ブロック少量含む 淡黄色シルトブロック極わずかに含む
9	47(新)流路1	2.5Y3/1黒褐色シルト	粘性あり 締まりあり 細かな黄色ブロック多く含む	39	47(新)流路5	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 黄色細粒砂ブロック含む 植物片わずかに含む
10	47(新)流路1	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり 締まりあり 極細粒砂のラミナ発達 径1～2cmの枝多く含む 東側27層との層界は指交関係	40	47(新)流路5	2.5Y3/1黒褐色腐植土	粘性あり 締まりあり
11	47(新)流路1	7.5Y4/1灰色砂質シルト	粘性あり 締まりあり 極粗粒砂混じり 黄色シルトブロック含む	41	47(新)流路6	2.5Y3/1黒褐色砂混シルト	粘性あり 締まりあり 黄色細粒砂ブロック含む
12	47(新)流路1	7.5Y4/1灰色砂混シルト	粘性あり 締まりあり 径～1cmの枝含む 黒褐色シルトが部分的に混入(かき回された様相か)	42	47(新)流路6	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性あり 締まり弱い 黄色細粒砂ブロック少量含む 腐植土化しつつある土壤
13	47(新)流路2(離水か)	5Y4/1灰色砂質シルト	粘性あり 締まり弱い ラミナまで発達しないが黄色砂の帯が短く連続する	43	47(新)流路6	2.5Y4/1黄灰色シルト混粗粒砂	
14	47(新)流路2(離水か)	5Y4/1灰色中粒砂	炭片わずかに含む	44	47(新)流路6	2.5Y4/1黄灰色シルト混粗粒砂	ラミナ発達するが二次的にかき回された様相を呈する
15	47(新)流路2	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性ややあり 締まりややあり 粗～極粗粒砂(粗粒砂主体)のラミナ発達 植物片を多く含む層を挟む ラミナはややねじれる等変形著しい	45	47(新)流路6	2.5Y3/1黒褐色砂混シルト	粘性あり 締まり弱い 木片多く含む 腐植土化進む
16	47(新)流路2	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まり弱い 粗粒砂のブロックやベース(H25年度8層)のブロック含む	46	47(新)流路6	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まりややあり 黄色細粒砂ブロック含む 炭片わずかに含む
17	47(新)流路3	2.5Y4/1黄灰色細粒砂～極細粒砂	正級化構造(一つの単位)示す 植物片等は上半にのみ点在	47	47(新)流路6	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性あり 締まりあり 植物片・炭片極わずかに含む
18	47(新)流路3	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性あり 締まり弱い 黄色細粒砂ブロック少量含む	48	47(新)流路6	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性ややあり 締まり弱い 黄色細粒砂ブロックマーブル状に多く含む
19	47(新)流路3	5Y4/1灰色シルト	粘性あり 締まりあり 炭片極わずかに含む	49	47(新)流路6	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性強い 締まりあり 径1～3cmの植物片やや多く含む 炭片少量含む 部分的に腐植化進行
20	47(新)流路3	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性ややあり 締まりややあり 微小植物片やや多く含む	50	47(新)流路6	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性ややあり 締まりややあり 層下部に極細粒砂が部分的に堆積
21	47(新)流路3	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まりややあり 黄色細粒砂ブロック多く含む	51	47流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まり弱い 灰黄色細粒砂ブロックマーブル状に多く含む 植物片含む
22	47(新)流路3	2.5Y4/1黄灰色細粒砂～極粗粒砂	ラミナ間に腐植土層挟む 全体的には逆級化構造	52	47流路	2.5Y7/2灰黄色粗粒砂	
23	47(新)流路3	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まり弱い 黄色細粒砂ブロック多く含む 植物片含む	53	47流路	2.5Y4/1黄灰色砂混シルト	粘性あり 締まりあり 炭片少量含む 灰黄色細粒砂ブロック少量含む
24	47(新)流路3	2.5Y3/1黒褐色腐植土	粘性弱い 締まり弱い 植物茎・葉多く含む 黄色細粒砂ブロックが混入	54	47流路	2.5Y7/3浅黄色極粗粒砂	15層より淘汰悪い 細礫含む
25	47(新)流路3	2.5Y3/1黒褐色砂混シルト	粘性強い 締まりあり 炭片少量含む	55	47流路	2.5Y7/3浅黄色極粗粒砂	粘性ややあり 締まりややあり 灰黄色細粒砂ブロック含む
26	47(新)流路4	5Y4/1灰色細～粗粒砂	ラミナ間に腐食土層狭在 下端に植物片やや集中	56	47流路	2.5Y4/1黄灰色砂質シルト	粘性弱い 締まり弱い 炭片少量含む
27	47(新)流路4	5Y4/1灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まり弱い 黄色細粒砂ブロック多く含む 炭片極わずかに含む	57	47流路	2.5Y4/2暗灰色砂質シルト	粘性ややあり 締まり弱い ベース層を浸食しているため指交関係 ベース層のブロック含む 黄灰色細粒砂～中粒砂ブロック点在
28	47(新)流路4	2.5Y4/1黄灰色極粗粒砂	小角礫わずかに含む ラミナとシルト層互層発達 全体的に逆級化構造的様相	58	47流路	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性ややあり 締まりややあり 黄灰色極粗粒砂ブロック多く含む 齋串・土器含む(奈良期)
29	47(新)流路4	2.5Y3/1黒褐色腐植土	粘性弱い 締まり弱い 炭片少量含む	59	47流路	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	粘性あり 締まりあり ベース層のブロック含む 植物片・炭片少量含む
30	47(新)流路4	5Y4/1灰色細粒砂	植物片少量含む	60	48流路	2.5Y3/1黒褐色砂質シルト	層下部に極細粒砂が部分的に堆積

※断面位置は第4-18図・第4-20図(B-B')参照

第4-13図 47・47(新)・48流路断面図



第4-14図 41流路



第4-15図 43・44流路

第4節 古代の調査成果

第1項 6面

1 概要

Ⅵ層・Ⅶ層を除去して検出した遺構面で、調査区東半で47および48流路の2条の流路を確認した(第4-17図)。この流路は調査区南端から北東端へ向かって流れており、当初は、検出時の状況から複数回の流路が複雑に走向を変えた48流路と、最終埋積時の47流路から成ると考えていた。しかし以下に述べるように、47流路埋積後も、48流路と認識して調査した一部が平安時代後期(11世紀～12世紀代)まで機能していたことが明らかとなった(以下、「47(新)流路」)。

47(新)流路および48流路からは、奈良時代～平安時代にかけての須恵器や土師器(墨書土器3点を含む)が、さらに48流路からは、多量の木製祭祀具が見つかった。一方、47流路から時期判定出来る土器は出土しなかったが、一定量の木製祭祀具がまとまって出土した。

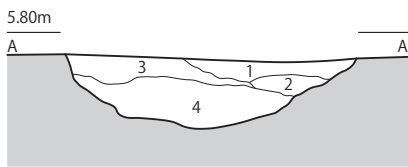
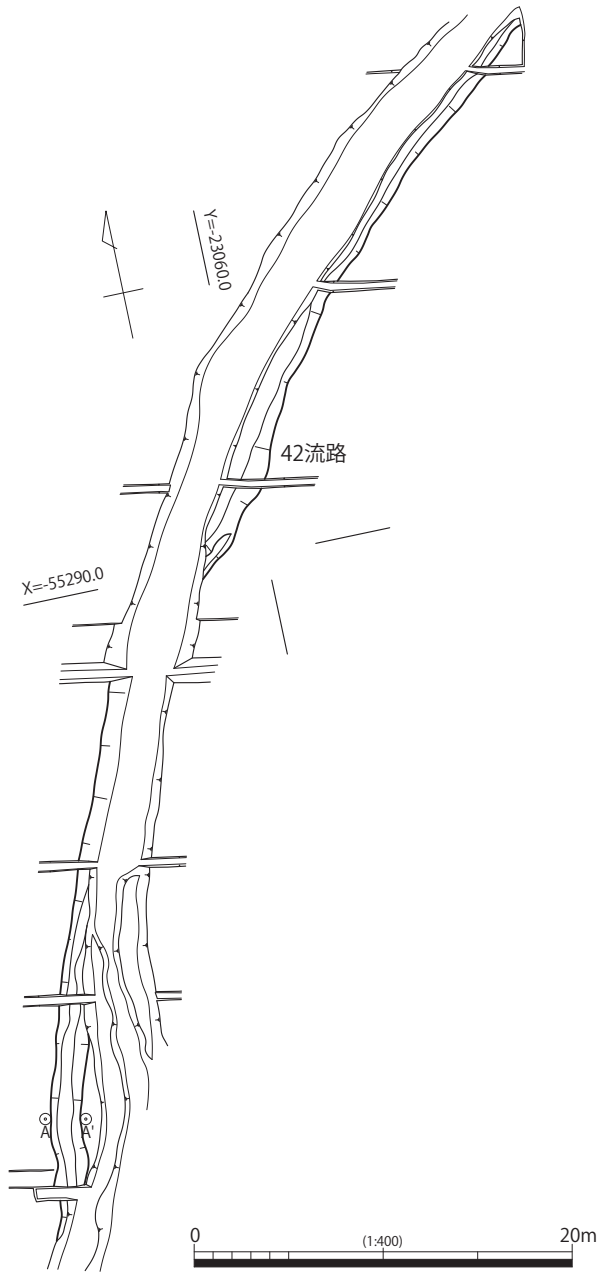
2 調査の成果

(1) 流路

47流路 (第4-17～20図)

47流路は、幅約6m(北東端付近では同約3m)、深さ約1.2mを測る。前身の48流路が複雑な走向であったのに対し、48流路埋没後ほぼ中央をゆるやかなS字カーブを描きながら北流する。埋土は砂質シルトもしくは砂で、48流路の埋土(シルトもしくは砂質シルト)とは比較的明瞭な差違があったものの、全域にわたり必ずしも容易に検出出来たわけではない。

鳥取市教育委員会設定の試掘トレンチ1東側(T30-6d-4A-2g)において、47流路埋土最下層から、若干量の土器細片とともに、人形・馬形・斎串といった多量の木製祭祀具が第4-18図(左)および第4-19図に示した状態で出土した。



- 1 10YR4/1褐灰色砂質シルト(粘性ややあり 締まり弱い 淡黄色粗粒砂ブロック多く含む)
- 2 2.5Y8/3淡黄色極粗粒砂(4層よりもシルトの割合が高い)
- 3 10YR4/1褐灰色砂混シルト(粘性あり 締まりあり 淡黄色粗粒砂ブロック少量含む)
- 4 2.5Y8/3淡黄色極粗粒砂



第4-16図 42流路

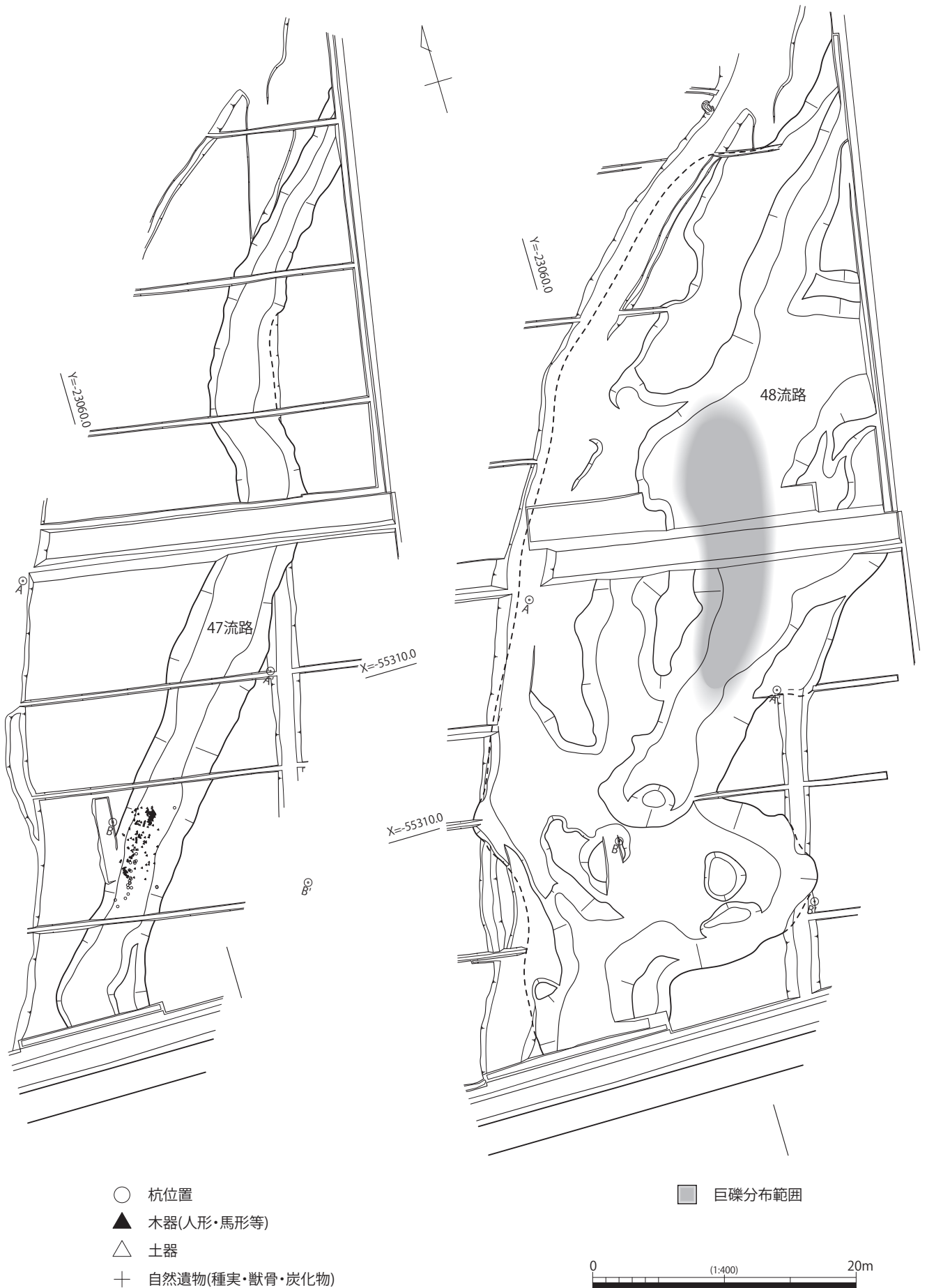


第4-17図 6面平面図

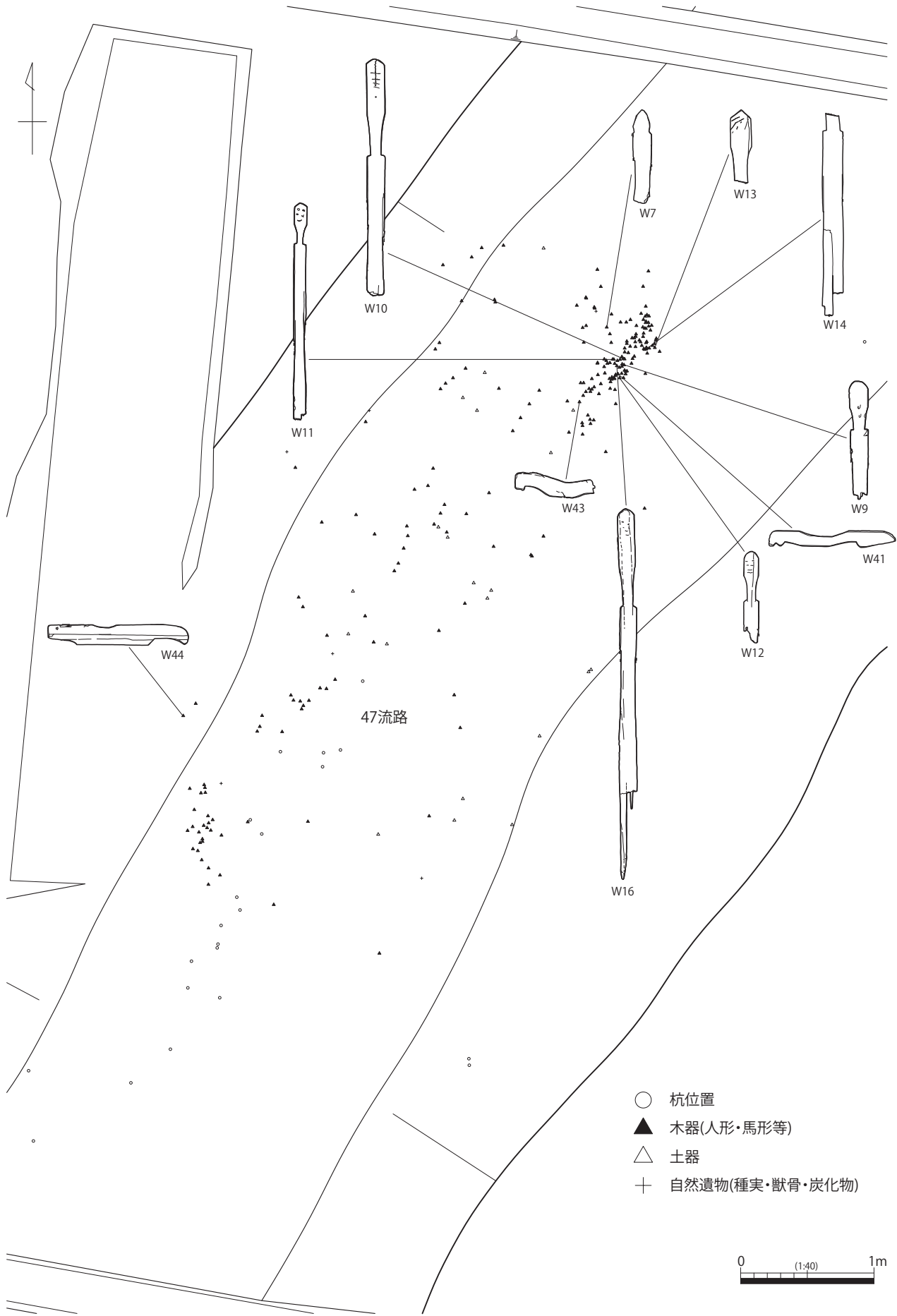
同流路内の木製祭祀具は、T30-6d-4A-2g以外ではほとんど見つからず（第6-6図下段）、さらに上流にあたる調査区南端からも出土しなかった。このことから、今回検出した祭祀具の集中箇所は、上流からの流れ込みではなく、極近辺で執り行われた祭祀の一端を示すのではないかと推測する。

一方、集中箇所の南側で、長さ30cm、径5cm未満の枝の先端を鋭利に加工し、不規則に打設した杭列を確認した。この杭列と木製祭祀具との因果関係は、不明瞭である。

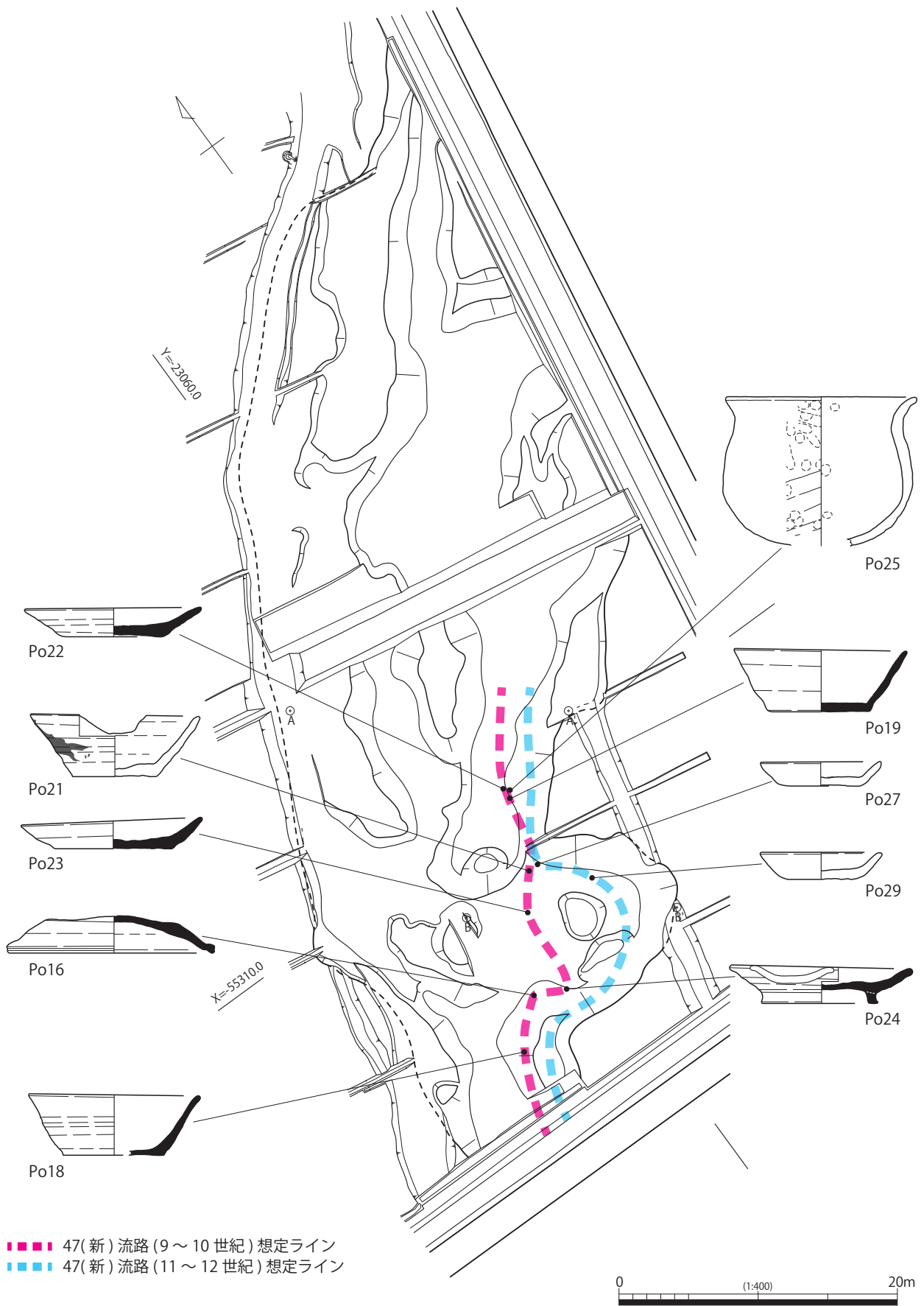
付近から古墳時代後期の須恵器坏片が出土したものの、明らかな当該期の土器片は見当たらなかった。祭祀具の特徴等から、流路は奈良時代後半（8世紀後半）に埋没したのではないかと考えている。



第4-18図 47・48流路



第4-19図 47流路遺物分布図



第4-20図 47(新)流路想定図

調査区南端付近の47流路東側で、流路が大きく膨らんだ箇所を検出し、当初は48流路として掘削した。第4-20図で示したように、T30-6d-4A-1f~3f、T30-6d-4A-1g~3gから、平安時代前期(9~10世紀代)、平安時代後期(11世紀後半~12世紀前半)の土器が出土した。これは47流路埋没後、新たな流路(47(新)流路)が、南端付近で東側へ蛇行しながら47流路に沿って北流した結果と考えることが出来る。

出土遺物は、倒立状態で出土した土師器甕(第4-35図 Po25)を除くと全て小型器種(供膳具)であり、完形品もしくはそれに近い状態で見つかっている。

48流路 (第4-17・18図)

48流路は調査区東半部で検出した流路で、流路西岸は25溝と重複するため、同溝よりやや東側を流れる北端以外はほとんど検出出来なかった。これに対し東岸は、当初48流路と考えた南端付近で東側へ大きく膨らんだ箇所も含め、調査区中央付近で東壁に接するまで、概ね確認することが出来た。48流路は走向を複雑に変化したため、結果的に最大幅約25mの流路として検出した。最深約1.2mを測る。

サブトレンチ5、47および48流路A・B断面の3箇所の堆積状況を検討した結果、この流路は当初流路中央あたりを北流していたが、やがてやや西側に振れ、再び中央に戻り埋没したと考えるに至った(第4-6-1・2図、第4-12・13図)。なおサブトレンチ5を中心とする南北約20mの範囲内で、流路埋土中に20~50cm大の垂角礫を多量に含み、その上端付近で土壌化が認められた箇所があった(第4-18図右)。

出土遺物には、土師器・須恵器、木製祭祀具、刀子があり、時期判別可能な個体は決して多くはないが、それらの帰属時期はおおよそ奈良時代後半(8世紀後半)と考える。

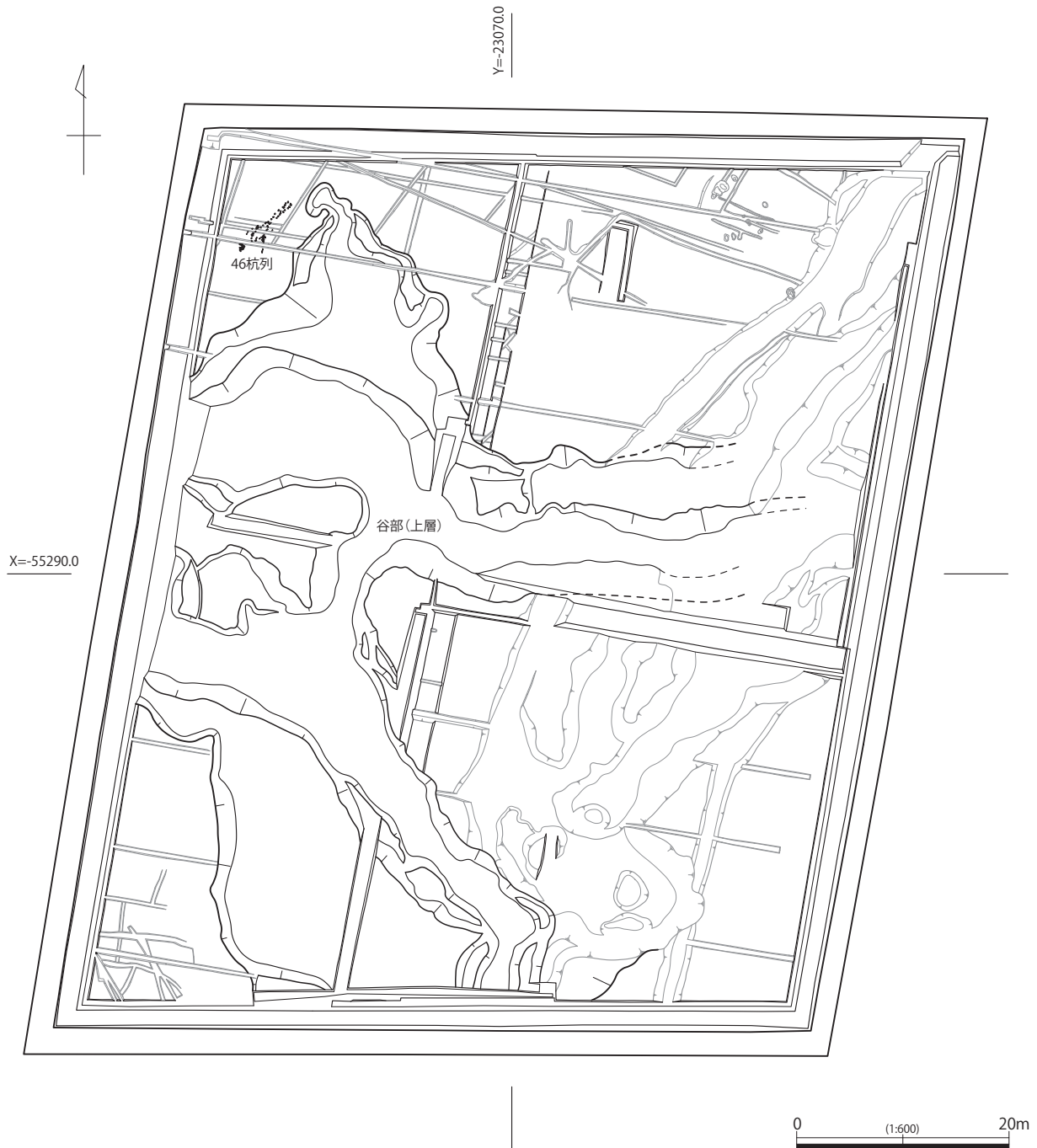
人形・馬形・武器形・斎串等から成る木製祭祀具は、西側流路のサブトレンチ5付近に堆積する粗粒砂層を中心に多量に出土した。人形は頭部や脚部の削り込みが明瞭で、人面を墨描したものもある。刀子は、刀身にわずかな木質が付着した状態で出土したことから、鞘付きだったと考える。また、弥生時代中~後期の土器片や石器等も散見されることから、流路周辺には先行する弥生時代の包含層または遺構等があった可能性がある。

第5節 古墳時代以前の調査成果

第1項 7面

1 概要

古土壌であるⅨ層の下面で検出した遺構面である。標高は約5.1～6.3mで、北西および南西隅付近が高く、北東側へ向かって傾斜していく。調査区北西および南西付近の高さは、河田川を挟んで西側の平成25年度調査区(2区)から大きな変動はなく、引き続き微高地状の地形が続いていることを示す。



第4-21図 7面平面図

本遺構面で検出した遺構は46杭列のみであるが、これに加え、自然地形である谷部(上層)が確認された。この谷部は本遺構面の半分近くを占めるもので、特に調査区西半は、前掲の微高地部分を除いた部分全てがこの谷地形となる。この谷部は調査区外西側および南側へと続いていくが、その本体は2区には続かないことから、両調査区の間地形変換点が存在すると考える。

谷部(上層)の埋没開始時期は古墳時代前期後半と推定され、飛鳥時代後半(7世紀後半)までには埋没する。結果として、この谷部が埋没することで地形の平坦化が働き、縄文時代晩期以降継承されてきたこの周辺の地形の凹凸は解消される。地形の平坦化は、これ以降の近辺の耕作地化を進行させる。前掲の46杭列は、この段階において、調査区北西隅付近の谷部崖線付近に構築される。

2 調査の成果

(1) 杭列

46杭列(第4-22図)

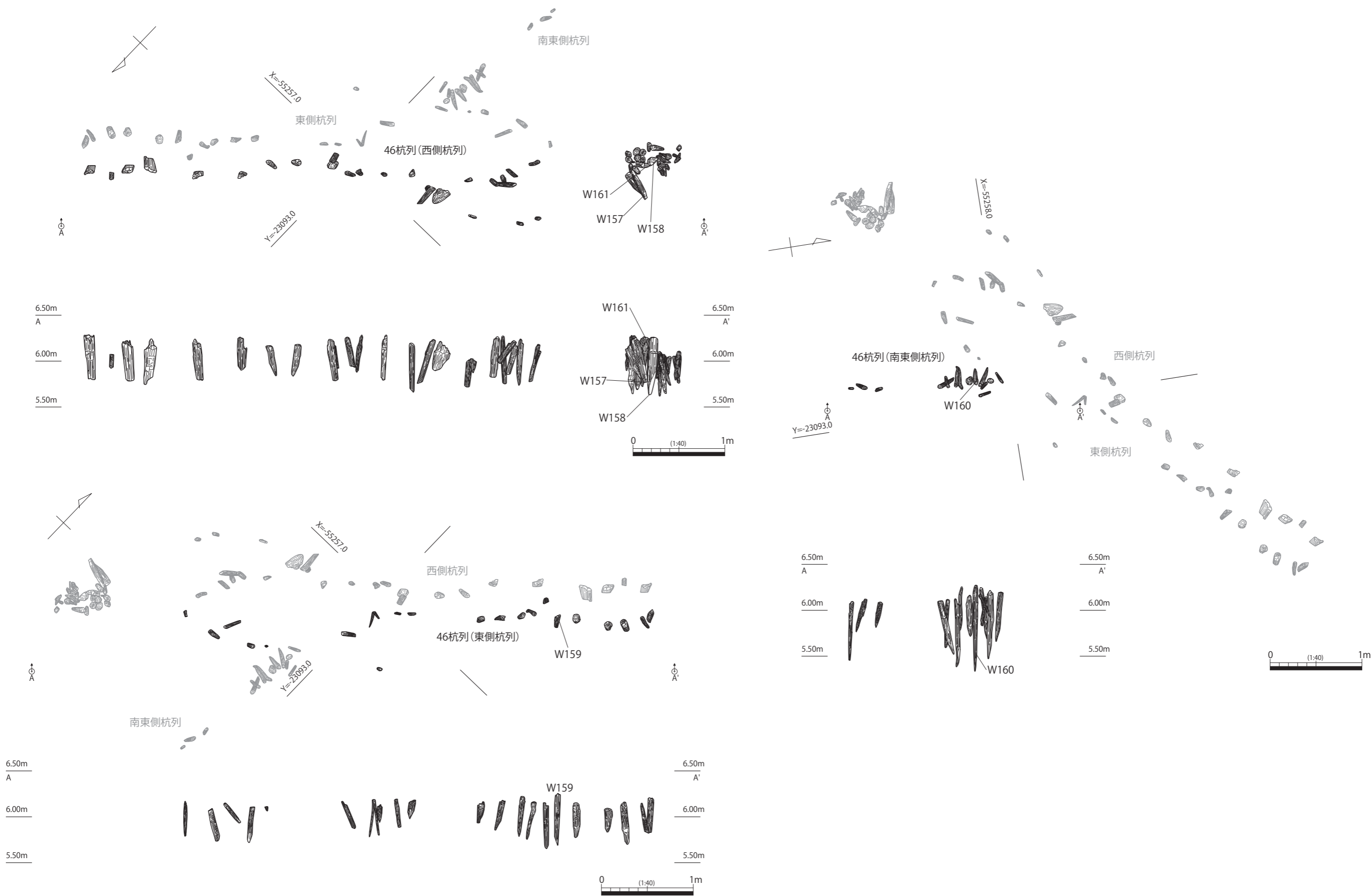
T30-6d-3A-6jにおいて検出した杭列である。杭列は大きく3条認識出来、位置関係からそれぞれ「西側杭列」「東側杭列」「南東側杭列」と称して区別した。そのうち2条(西側杭列・東側杭列)は、北東から南西方向(N-47°-E)へ走る。それぞれ、約5m分確認出来た。それら2条に加えて、東側杭列から南北方向(N-8°-E)へ派生する南東側杭列があり、これは上記両列に比べて短く、1.7mの検出に留まった。

杭列を構成する材は、第4-58図に示すように角材、芯持材、みかん割材を素材とした杭がその大半を占め(W158~161)、先端はいずれも尖頭化されている。ただし、西側杭列の南側一部においては矢板(W157)が用いられ、杭と共に打設されている。打設の角度は、遺構面に対してほぼ垂直を呈している。杭の先端は、標高5.7~5.8mでほぼ統一されているため、杭はほぼ時期差なく打設されたと推測する。ただし、それよりも深く打設された杭や、逆に浅い打設の杭も少数ながら確認出来る。

これらの杭列については、当初、平成25年度調査(2区)において検出した「4溝」の北東方向延長部分に相当すると想定していたため、落ち込み遺構にかかる護岸施設の構造物との認識をもって調査を進めた。しかしながら、調査区西壁および北壁において、この杭列とそれに関連する溝状の落ち込みが確認出来ず、杭列も調査区内で収まること、また一方で、これらの杭列が芯となるような凸状の遺構も断面上で見受けられなかった。このことから、これらの杭列は、機能時は杭部分が地表面にある程度露出した形の構造物であったと推定した。

また、2区検出の4溝は、弥生時代中期以降古墳時代中期前半頃まで断続的に機能していたと考えられるが、1区ではそれらの時期に関連する遺物の出土がほとんどない。杭付近からは、古墳時代終末期頃の須恵器短頸壺(第4-36図 Po46)が出土していることから、杭列と4溝との時期的な関連性について、積極的な評価はし難い状況にある。飛鳥時代後期末には、堆積している直上の包含層(Ⅸ層)に覆われている杭も確認出来ることから、少なくともそれ以前には杭は既に打設されていたと推測出来る。

杭列の位置を周辺の地形環境と照合すると、杭を境にしてその西側はやや標高が高く、杭から東は最終埋没の段階を迎える谷部(上層)へと向かう。つまり、杭は傾斜地に沿って打設されている。このことから、これらの杭は、地形変換点における目印的な役割を果たしていた可能性を指摘し得る。



第4-22図 46杭列

(2) 自然地形

谷部(上層)

Ⅸ層を調査後、調査区の広い範囲にわたって黒(褐)色系統のシルト層が平面的に広がることを確認し、断面観察からも、垂直方向に非常に長大な落ち込みが想定された。その内部の堆積状況は、黒褐色系の砂質シルトを主体とし、部分的にラミナ層を介在させる自然堆積でほぼ占められる。人的な掘り込み等の行為が想定しづらいこと等から勘案して、凹部の自然地形が形成されていることが明らかとなった。谷部完掘時には、深さ1.5～2 m程度で、平面的に調査区西半部の広範囲にわたった谷地形であることが判明し、出土遺物から上下2層に大別した。本遺構面では、この谷部の上層部分が対象時期に該当する。

検出範囲についてやや詳細に見ていくと、調査区西半側は、2区から続く微高地部分(H25-7層以下)を除く全ての部分が該当する一方、東半は微高地部分の範囲が拡張することに加え、谷が埋没して以降に開析される48流路等複数の流路に切られるため、谷部と認定出来る部分自体を減じながら、調査区東側へと抜けていく。

調査区西側の延長部分には、平成25年度に調査を実施した2区が近接するが、2区にはこの谷部に相当する大きな落ち込みは存在しない。ただし、微視的には調査区東側は100落ち込みと判断した浅い凹地になっている。この凹地部分は、時期的および位置的關係性から勘案して、1区谷部の最上部(西側縁辺部)に該当する可能性がある。以上の状況から古代の古地形を想像出来るが、今回調査を実施した谷の主体部は、現在1区と2区を隔てている河田川を境にして西側へと隆起し、舌状台地である微高地へと移行するものと考えられる。

谷部上層内には、暗灰色系の中～粗粒砂によって構成される層も部分的に確認でき、これらは前述の砂質シルト層を切るかたちを取る。またこの砂層中には、谷部を覆うⅨ層堆積後に形成された48流路等において多数出土した8世紀以降の形代類も含まれている。谷部上層が埋没し、その谷部を覆うⅨ層もまた、7世紀後半までには堆積することが判明している。谷部を充填する堆積は、基本的に黒色もしくは黒褐色砂質シルトが優占する。これらの堆積層はさらに分層出来、上層を中心に炭化物を含んでいる。

谷部(上層)出土の遺物としては土器や木器が代表的であるが、製品となり得る資料の数はさほど多くない。土器の一部には縄文時代晩期から弥生時代の土器が含まれ(第4-36図 Po31～35)、これらは後述の谷部の下層出土の主体的土器群となることから、谷部(下層)からの巻き上げと判断できる。それ以外は、古墳時代前期後半頃から7世紀後半までの土器で占められる。このことから、これらが谷部上層の埋没期間を示すと判断する。埋土中のクリ等を用い年代測定を実施したところ、 $1,040 \pm 20\text{yrBP}$ 、 $1,620 \pm 20\text{yrBP}$ の値を得た。よって後者の年代が、当該層位の埋没開始時期に近い値を示していると考ええる。

木器については、調査した面積の割には出土は少なく、製品として掲載するのは田舟(W164)や田下駄(W167)等に限定される(第4-59図)。

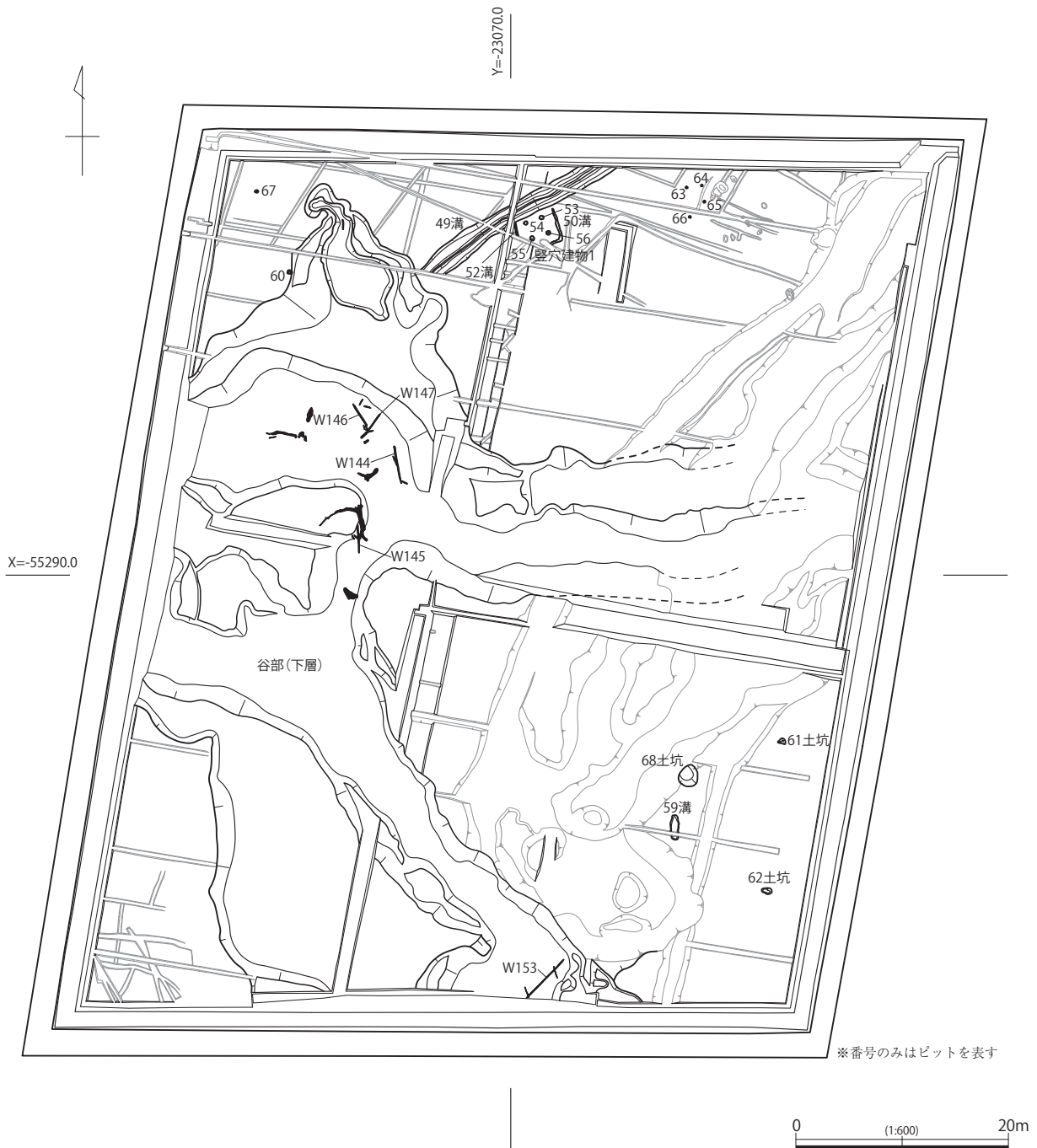
第2項 8面

1 概要

古土壌であるX層の上面で検出した遺構面である。本遺構面に伴う遺構として、溝、竪穴建物、土坑、ピットを検出した。また、この遺構面の時期と並行する自然地形として、谷部(下層)を確認した(第4-23図)。

遺構面の半分近くは谷部が占め、7面で検出した谷部(上層)と平面形もほぼ類するが、調査区南端付近で若干形状を変える。調査区内においては、谷部以外は微高地となり、その面はほぼ平坦な地形を成す。当該遺構面で検出した遺構は、全てこれらの微高地上に存在する。

この遺構面は、出土遺物や遺構の特徴等から、既往の調査(2区)における5層もしくは7層上面に



第4-23図 8面平面図

相当する蓋然性が高いが、本調査区には2区の5層に対応する層が存在しない。8面上層に堆積する古土壌との連続堆積となっているため、本来の層上面は、上層形成時に消失していると考えられる。このため、本遺構面で検出した遺構の上部に相当する部分は、既に消失している可能性が高い。

時期については、出土土器から、縄文時代晩期後半～弥生時代前期以降と考える。

2 調査の成果

(1) 竪穴建物

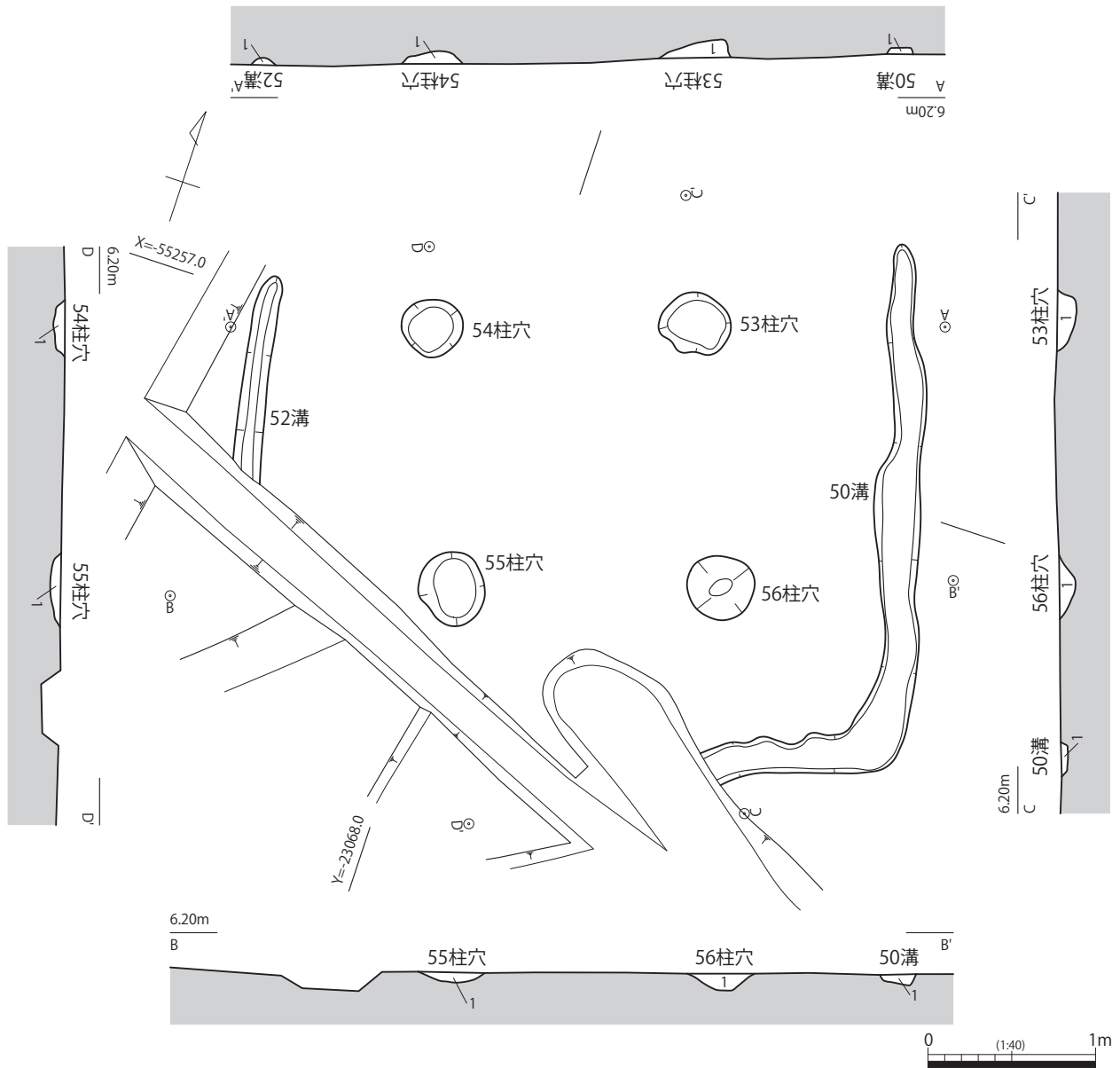
竪穴建物1(第4-24図)

T30-6d-3A-6gにおいて検出した竪穴建物である。建物の南西側付近は、複数の攪乱と暗渠により破壊され、消失している。また、遺構の北側についても、検出段階で既に消失していたことから、元来の平面形四隅のうち、残存しているのは南東隅のみである。その南東隅の様相等から、平面形は隅丸方形を呈していたと推定され、子細にみれば、隅丸方形プランの中でも、隅丸部の弧が小さく、辺が直線的なタイプに該当する。現況では、東西の辺長約3.68m、南北の辺長約3mを測り、北辺はさらに北側へ伸びる可能性が高いことから、長方形に近い平面プランも想定される。建物の主軸方位は、N-17°-Wである。

検出時の状況からは、竪穴加工時および機能時本来の深さは大きく削平されていると考えられ、また床面・硬化面の認定には至らなかった。建物自体を構成する要素としては、周壁溝と考えられる小溝の一部と主柱穴4基を検出したのみであり、炉跡等付設の施設は確認していない。

主柱穴(53～56柱穴)はいずれも平面形35～45cm程度の円形を成し、検出面からの深さは5cm程度と非常に浅い。これらの柱穴では、柱痕は確認できない。周壁溝掘方についてはさらに浅く2～4cm程度であり、最底部が遺存しているにすぎない。このため、この建物を対象とした本来の生活面は、検出面よりかなり上部にあったと推測する。

主柱穴および周壁溝のいずれからも、時期決定に寄与する遺物は出土していない。ただし、周壁溝から土師器小片が出土していること、また建物の平面形が古墳時代前期以降に主流となるタイプと推定出来ることから、あくまで類推の域を出ないが、古墳時代前半頃の建物の可能性を指摘したい。なお、竪穴建物の北隣には弥生時代後期初頭の溝(49溝)があるものの、両者の切り合い関係は確認出来ない。



50溝

1 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト(粘性弱い 締まりなし 淡黄色シルトブロック含む 炭片少量含む)

52溝

1 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト(粘性弱い 締まりなし)

53柱穴

1 2.5Y4/2暗灰黄色砂質シルト(粘性弱い 締まりなし 炭片少量含む)

54柱穴

1 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト(粘性弱い 締まりなし)

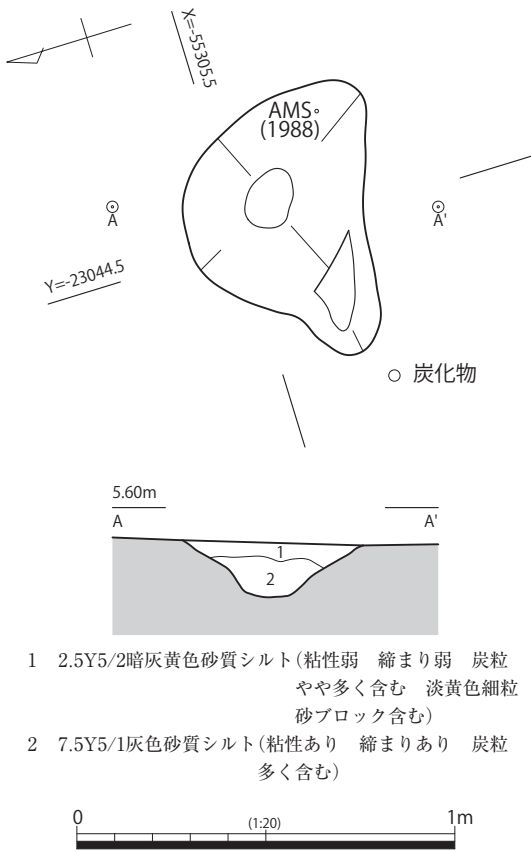
55柱穴

1 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト(粘性弱い 締まりなし)

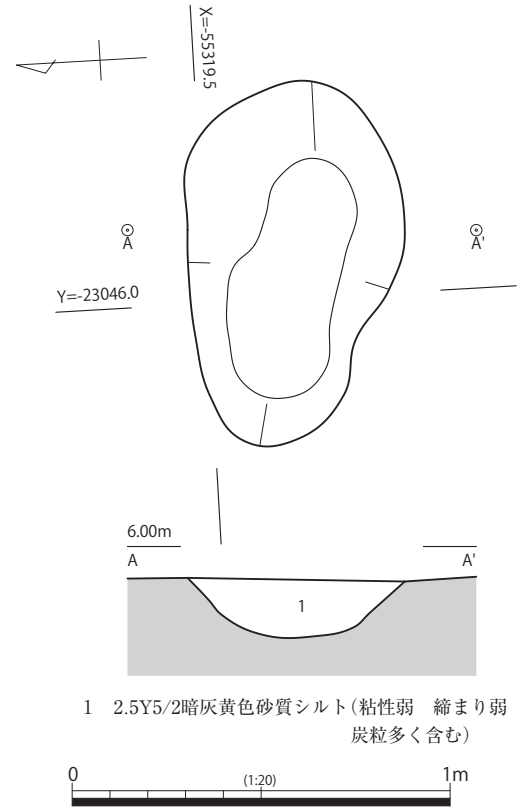
56柱穴

1 2.5Y5/3黄褐色砂質シルト(粘性弱い 締まりなし)

第4-24図 竪穴建物1



第4-25図 61土坑



第4-26図 62土坑

(2) 土坑

61土坑(第4-25図)

T30-6d-4A-1eにおいて検出した土坑である。長軸、短軸共に最大0.6m前後を測るが、短軸は0.25m程度まで縮まるため、平面は西側を頂点としたいびつな瓢箪形を成す。埋土は上下2層に明瞭に分けられ、上層は暗灰黄色砂質シルト、下層は灰色砂質シルトであり、両層共に炭粒を多く含んでいる。

遺物は出土していないが、埋土上層より採取した炭化物の年代測定を実施したところ、 $2,760 \pm 30$ yrBPという値を得た。

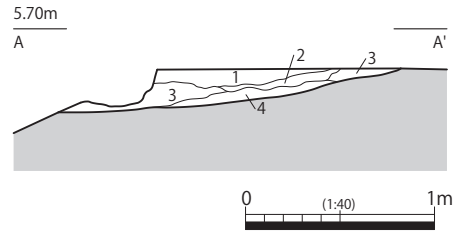
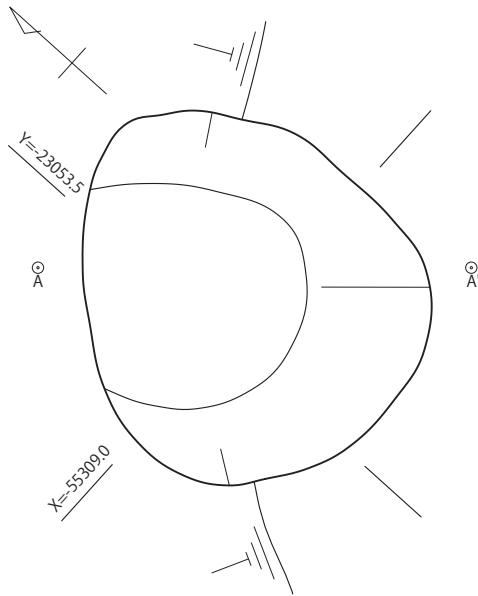
62土坑(第4-26図)

T30-6d-4A-2e・3eにおいて検出した土坑である。南北方向に0.6m、東西方向に1mを測り、平面は東西方向に細長い形状を成す。埋土は暗灰黄色砂質シルトの単層で、層中には帯状の炭が不規則に広がっている。遺物は出土しておらず、詳細な帰属時期は不明である。

68土坑(第4-27図)

T30-6d-4A-1fにおいて検出した土坑である。西半は大部分が48流路に切られているため、本来の2/3程度の残存状態と考える。現況では長軸2.00m、短軸1.84mを測る。

埋土は黄灰色砂質シルトを基本とし、上層を中心に炭化物を非常に多く含んでいる。出土遺物は少ないが、弥生時代中期中葉頃に位置づけられる甕Po71が出土している(第4-39図)。埋土中の炭化物を用いて年代測定したところ、 $2,240 \pm 30$ yrBPとやや古い値を得た。



- 1 2.5Y6/1黄灰色砂質シルト(粘性弱い 縮まり弱い 炭片多量に含む)
- 2 2.5Y6/1黄灰色砂質シルト(粘性弱い 縮まり弱い 炭片やや多く含む黄色細粒砂ブロック含む)
- 3 2.5Y5/1黄灰色砂混シルト(粘性ややあり 縮まり弱い 黒褐色シルトブロック含む II～III様式土器含む)
- 4 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト(粘性弱い 縮まり弱い 炭片少量含む)

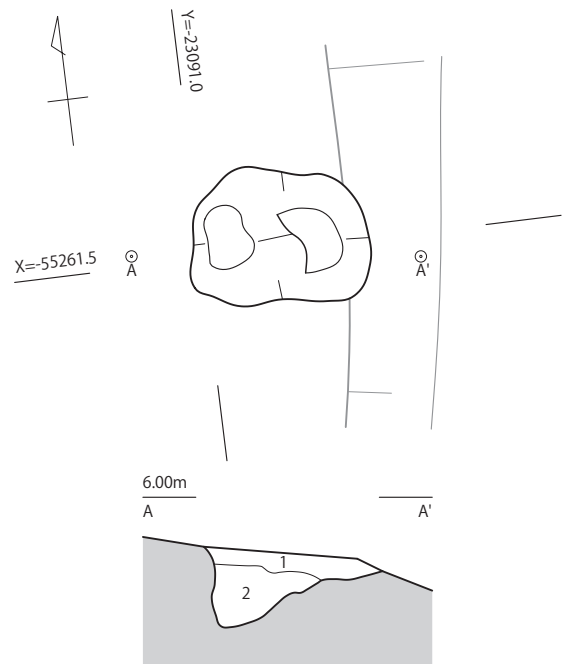
第4-27図 68土坑

(3)ピット

60ピット(第4-28図)

T30-6d-3A-7jにおいて検出したピットである。谷部が北へ向かって張り出す箇所、すぐ西側に位置する。谷部(上層)部分を掘削後に検出したため、掘削時期は古墳時代前期以前であることは確実であるが、遺物が出土していないため詳細な帰属時期は不明である。南北方向0.37m、東西方向0.48mの平面規模を測り、主軸はほぼ東西方向に沿う。

埋土は上下2層に分けられ、上層は黄灰色砂質シルト、下層は黒褐色砂質シルトである。上層には、特に炭片が含まれている。その上層はほぼフラットに堆積するが、下層部分の掘方が西方へ傾斜しているため、両層の境目付近は東へ向かって弱いテラス状を呈する。これらの断面状況から、60ピットについては柱採取穴の可能性も想定したが、周囲に同様なピット状の遺構がない単独遺構であるため、積極的に建物や柵列にかかる柱穴とは評価しづらい。

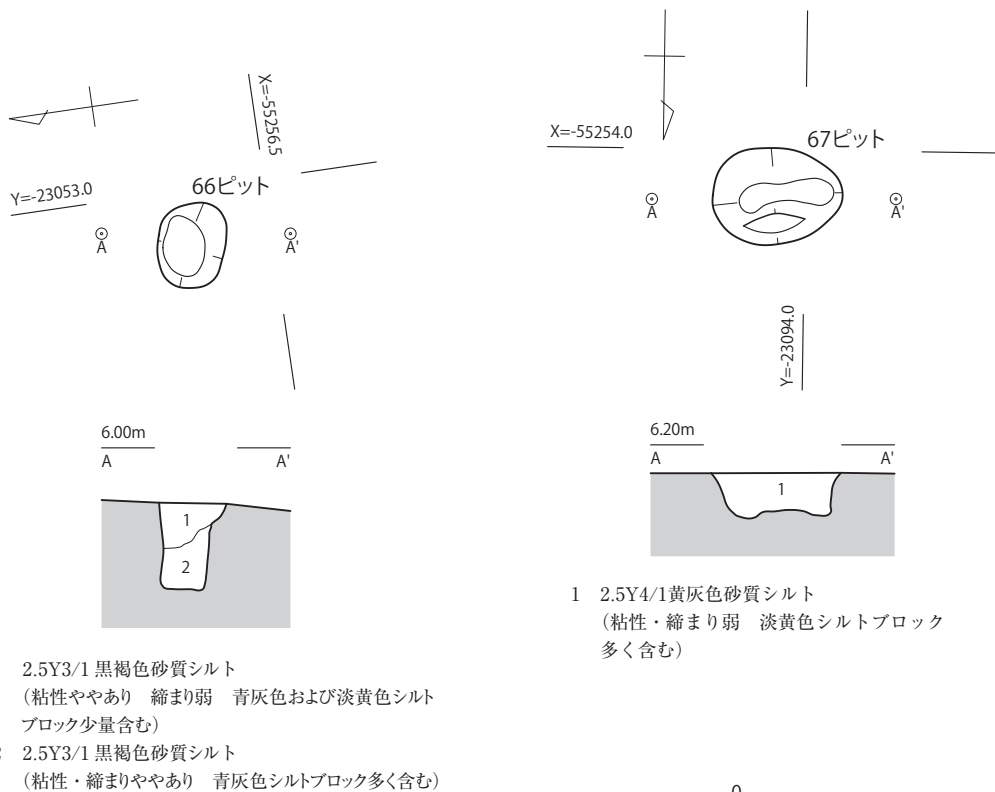
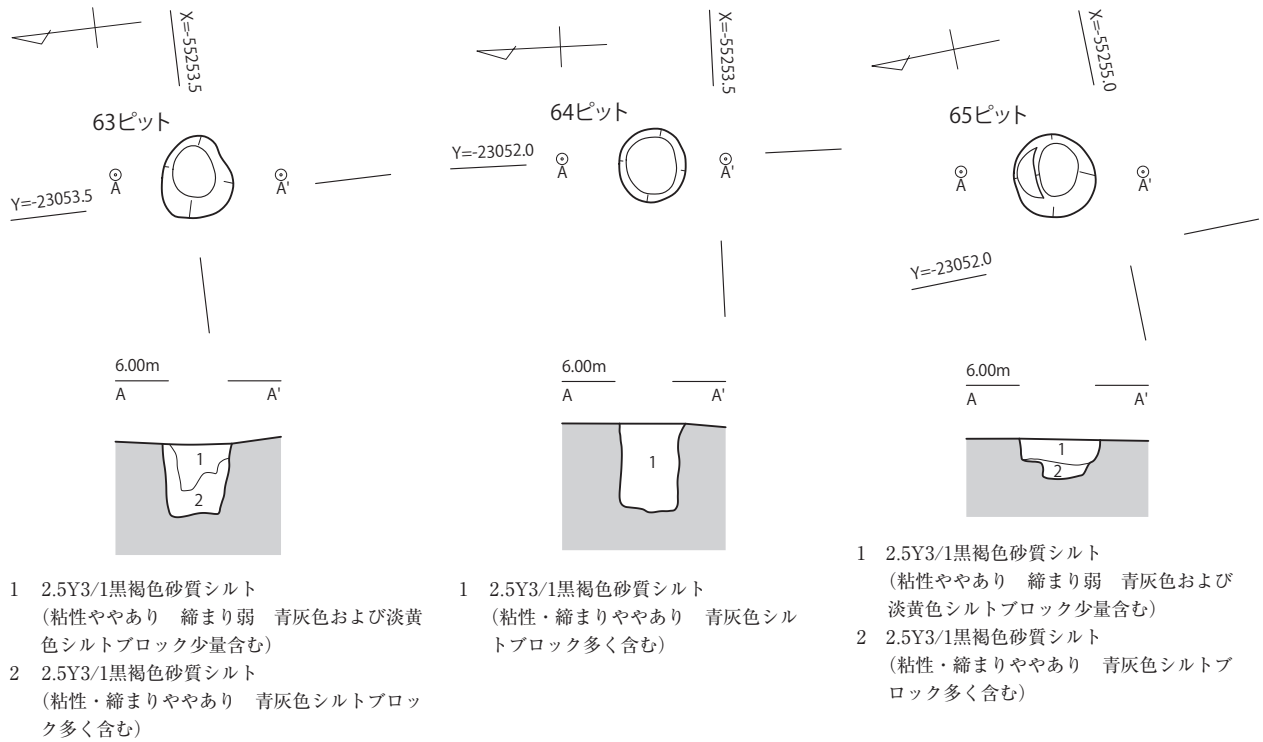


- 1 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト(粘性あり 縮まりあり 炭片含む淡黄色シルトブロック少量含む)
- 2 2.5Y3/1黒褐色砂質シルト(粘性あり 縮まりあり 青灰色シルトブロック、炭片少量含む)

第4-28図 60ピット

63～66ピット(第4-29図)

T30-6d-3A-6fにおいて検出した、一連のピット群である。いずれも平面は円形を成し、径も15～20cmとほぼ揃う。また、埋土も黒褐色砂質シルトを主体とし、層中に含まれるシルトブロックも類似性を見せる。



第4-29図 63~67ピット

これら4基のピットは、2m以内の近接範囲で検出したため、建物の主柱穴を構成する可能性も考慮した。しかし66ピットは、想定される主柱穴の構成プランよりもやや南西にずれること、また65ピットのみが、その他のピットより10cm程度浅いことに加え、このピット群以外に、竪穴建物や掘立柱建

第4章 1区の調査成果

物を構成する要素が周囲からは確認出来なかったため、最終的にはいずれも単独のピットと評価するに至った。

これらのピット群からは、いずれも遺物の出土を見ておらず、詳細な帰属時期は不明である。

67ピット (第4-29図)

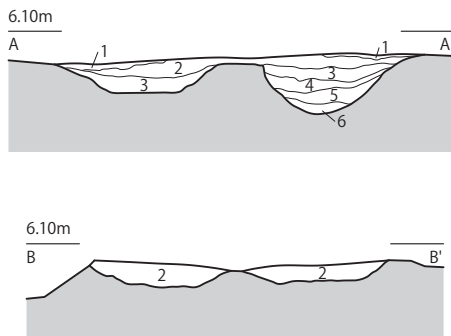
T30-6d-3A-6jにおいて検出したピットである(第4-29図右下)。南側には46杭列が位置するが、この周辺には同様なピットはなく、単独での検出である。長軸0.35m、短軸0.26mを測り、主軸は東西方向にほぼ沿う。埋土は黄灰色砂質シルトの単層である。

遺物は出土しておらず、正確な帰属時期は不明である。

(4)溝

49溝 (第4-30図)

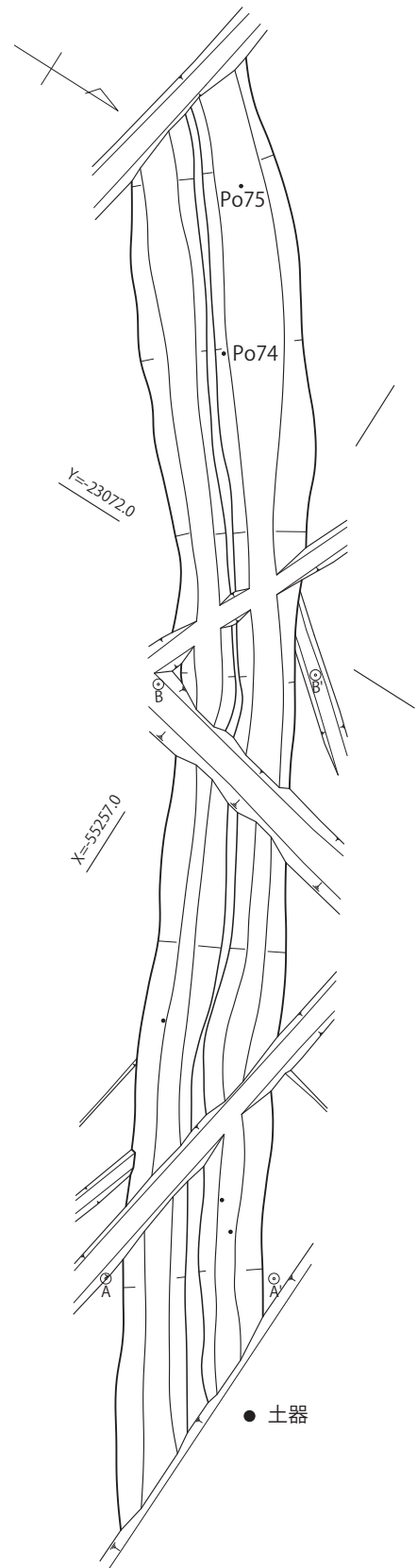
T30-6d-3A-6g・7g・7hにおいて検出した溝である。北側は調査区外へと延伸し、一方南側は暗渠によって切られており、その南方には続かない。現存長は約18.2m、幅は1.95～2.35m程度である。深さは10～30cmと、地点によって差異が見受けられ、検出した範囲では北側が深い。主軸はN-57°-Eである。



- 1 2.5Y3/1黒褐色砂質シルト(粘性弱 締まりなし)
- 2 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト(粘性弱 締まりなし 白色中粒砂多く含む
淡黄色シルトブロック少量含む)
- 3 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト(粘性・締まり弱 淡黄色砂混シルトブロック含む)
- 4 2.5Y5/1黄灰色砂質シルト(粘性弱 締まりなし)
- 5 2.5Y5/1黄灰色シルト混細粒砂
- 6 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト(粘性ややあり 締まり弱 炭片わずかに含む)



第4-30図 49溝



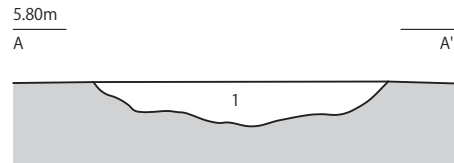
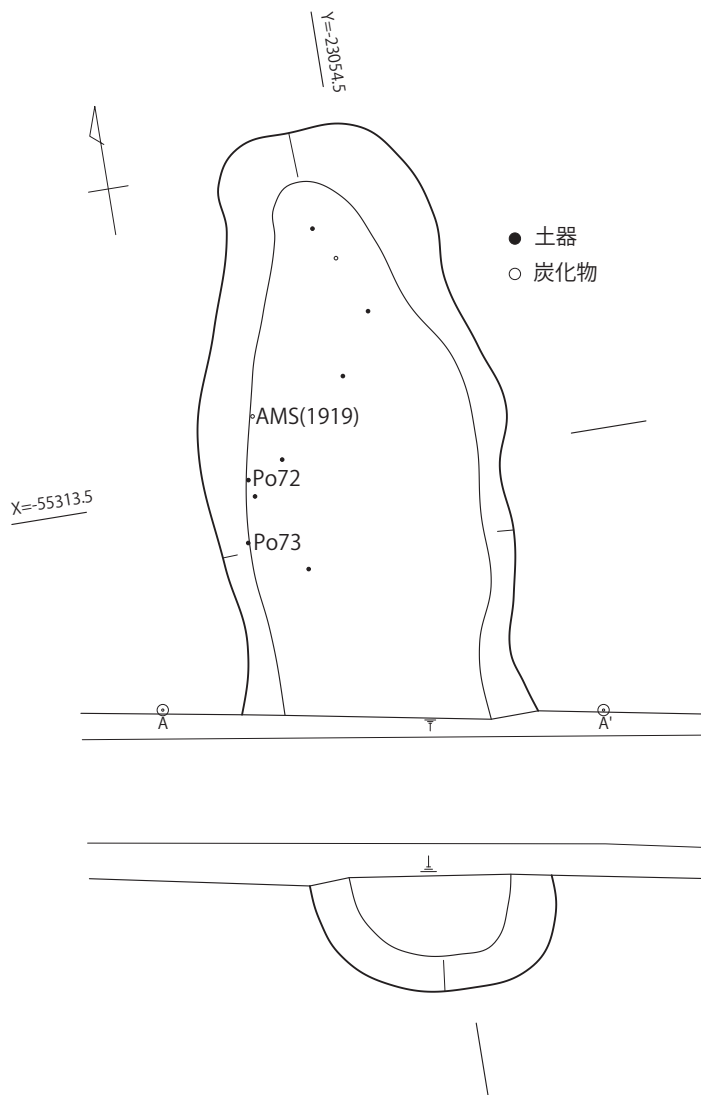
溝幅の中央付近で凸状を呈するように2条に分かれている部分が大半であるうえ、北壁では3条になっていることも確認出来る。このため、複数の小溝がほぼ同一方向に走っている状況として捉えることも可能であるが、これらは切り合い関係にないうえ、いずれも同様な埋土で占められていることから、単一の溝と判断した。

埋土は黄灰色砂質シルトが主体を成しており、堆積状況からは常時流水があった様相は見受けられない。出土遺物は少ないが、Po74・75（第4-39図）といった弥生時代中期末から後期初頭頃の土器片が出土しており、これらが49溝の時期を示すと考える。

59溝（第4-31図）

T30-6d-4A-2fにおいて検出した溝である。検出長2.31mと短く、幅は約0.8mで推移する。ほぼ南北軸に沿っており、主軸はN-2°-Eである。

埋土は黄灰色砂質シルトで、層中に炭化物の薄層を挟んでいる。第4-39図のPo72やPo73といった弥生時代中期末から後期初頭の甕が、北西半に集中して出土した。土器に伴って確認した炭化物を用いて年代測定したところ、 $2,080 \pm 30 \text{yrBP}$ となり、考古学的年代観よりもやや古いと考える値であった。



1 2.5Y4/1黄灰色砂質シルト(粘性・縮まり弱 淡黄色シルトブロック多く含む炭片含む)



写真2 59溝遺物出土状況（東から）



第4-31図 59溝

(2)自然地形

谷部(下層)

本遺構面において検出した谷地形である。谷地形自体は古代まで残るが、出土遺物と検出遺構面の時期との整合性を考え、谷の下半部については「谷部(下層)」とし、上層部分とは分離して調査を実施した。

検出範囲および平面形は谷部(上層)とほぼ重複し、調査区西半を中心にかなり広範囲に分布するが、調査区の南端では、一部で谷部上層との平面的差異が見受けられる。遺存度の良好な箇所では、谷部(下層)のみで深さ約1.7mが確認できる。

埋土は黄灰色砂質シルトや黒褐色砂質シルトが大半を占めるが、底部付近は灰オリーブ砂やオリーブ褐色砂といった極細～細砂層、また中～極粗砂、もしくは角丸の小礫で構成されている。このことから、谷部が形成された当初からしばらくの間は、基盤層を削るような流水の環境が想定できる。自然科学分析の結果(第5章第1節参照)も、このような推定環境を支持しよう。

谷部(下層)からは、土器と木器が出土している。点数はさほど多くない。この層位からは須恵器が全く出土しないことから、谷部(上層)とは明確な時期差が存在する。谷部(下層)で主体を成すのは、弥生時代中期中葉～後葉頃に比定される土器である(第4-37図 Po56～Po61)。ただし、谷部底面付近の砂層中においても、古墳時代前期の甕(第4-38図 Po67)が確実に含まれている。このことから、景観としての深い谷部が存在していた期間は、縄文時代晩期後半以降古墳時代前期頃までの長期に渡ることが想定される。埋土中の生木を用いて年代測定を実施したところ、 $1,620 \pm 20\text{yrBP}$ および $1,640 \pm 20\text{yrBP}$ の値を得ており、埋没開始時期が4世紀頃になると推定した考古学的年代観とほぼ一致した。

木器については、槽・盤類(W175)や建築部材(W144～W147、W153)といった中・大型製品が、谷の底面付近を中心に出土している(第4-56・57・60図)。建築部材には、最大で3～5m級を誇る柱材や大引が含まれる。これらには二次的な利用痕跡が見受けられないことから、実際に使用された場所(=集落域)の近在を想起させる。建築部材とともに検出した流木の一部には、石斧による加工の痕跡も見受けられる。これら大型の木器については、谷部北西側において東および南東から伸びてくる二股の細い谷部が合流する箇所と、調査区南端部分との2箇所に集中する。なお、これら大型木器の出土時の主軸については、谷の走向の軸とはさほど一致していない(第4-23図)。

第3項 9面

1 概要

H25年度実施2区の7層(H25-7層)対応層であるX層上面で検出した。調査区の北西から南西にかけて存在する微高地部の最上層で検出した遺構面である(第4-32図左)。本遺構面の標高は約4.9～6.1mであり、北西側が最も高く、調査区中央から北東部にかけてが低い。基本的にこの地形の高低差の傾向は、これ以降の遺構面においても踏襲されることとなる。

弥生時代以降の遺構については8面として記録し、それ以前の時期に該当する遺構については本遺構面对応として調査したが、本遺構面に該当する遺構は検出されなかった。

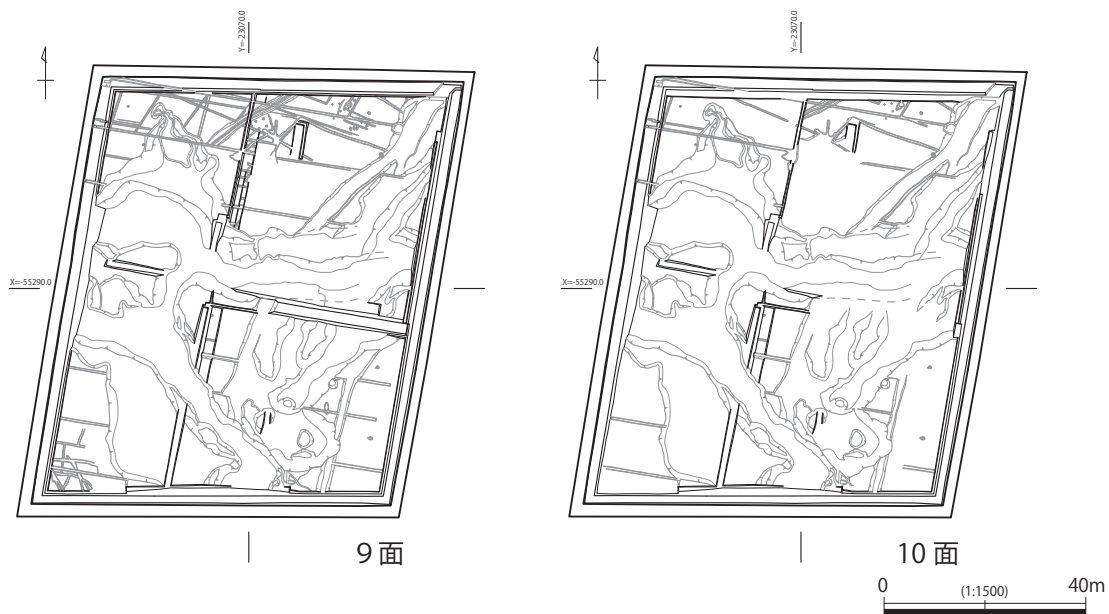
第4項 10面

1 概要

H25年度実施2区の7層(H25-7層)対応層であるX層を除去し、微高地部の最上層で検出した遺構面である(第4-32図右)。本遺構面はH25-7層に対する下面調査であり、下面遺構の確認を目的とする。

結果として、9面に引き続き、本遺構面对応の関連遺構は検出されなかったが、遠賀川式土器および縄文時代晩期後半帰属と考える凸帯文土器を確認した。また、本層対応層の年代測定(No.4062)を実施したところ、 $2,420 \pm 20\text{yrBP}$ の値を得た。隣接する2区調査時に実施した年代測定(H25-7層)では、 $2,150 \pm 30\text{yrBP}$ および $2,540 \pm 30\text{yrBP}$ という値を得ている。このことから、常松菅田遺跡における人々の活動痕跡は、約2,500年前の縄文時代から弥生時代移行期に始まると見てよい。本遺構面は、2区における最終遺構面(8面)に対応するが、出土遺物の帰属時期および年代測定の結果からも、その整合性が追認された。

なお、この遺構面以深は、青灰色の砂層および砂質シルト層を中心とした水成堆積と推定される堆積が連綿と続いており、XI層との境界付近で凸帯文土器片(第4-39図 Po76)が確認出来たのみで、その以深では遺物が全く出土していない。このことから、この面より下位については、層相からも沖積層上部砂層の一部であることが推測され、縄文時代晩期以前には、調査区自体が依然水面下の景観であったことを示していよう。そのため、2区と共に、この遺構面を調査の最終遺構面として取り扱うこととした。なお2区においては、当該遺構面を形成するH25-8層の下位約1mの灰色シルト層中の炭化材を年代測定したところ、 $3,170 \pm 30\text{yrBP}$ という値を示している。



第4-32図 9・10面平面図

第6節 出土遺物

1区の調査では、土器6,804点、石器15点、木器2,177点(うち祭祀具951点)、金属器(青銅器・鉄器)10点が出土した他、100点以上の種実(トチ・モモ等)やウシ等の獣骨に代表される自然遺物が確認出来る。ただし、調査区が6,000㎡以上に渡り、遺構面も二桁に届くほどであることを考慮すれば、出土遺物の絶対数はむしろ少ないと言えよう。

この要因としては、本調査区の大半が、上位面では耕作地といった土地利用の性格、またその下位では本節で報告した谷部といった自然地形に占められることに加え、集落等の存在が想定された微高地部分においても、遺構密度が想定より非常に低かったことが挙げられる。本項では、Ⅷ層以下から出土した遺物について、土器・石器・金属器・木器の順に報告する。

第1項 土器

Ⅷ層以下出土の土器は、土師器が47および48流路における対須恵器比3：1、谷部(上層)5：1と、いずれも高率を占める。8面以下では須恵器は全く出土せず、むしろ弥生土器の点数が最多となり、微量ながら縄文土器も含まれる(第4-1表)。

第4-1表 層位・遺構別出土土器点数表

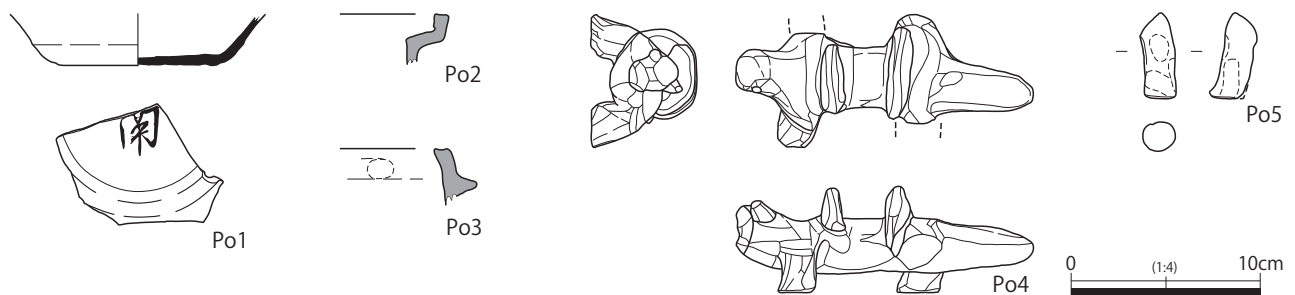
出土層位・遺構	縄文	弥生	土師器	須恵器	黒色	瓦質	陶磁器	その他	計
機械掘削	0	9	125	103	2	17	262	12	530
Ⅲ層	0	4	60	17	1	9	39	3	133
2面1畦畔	0	0	0	1	1	0	0	4	6
2面暗渠群	2	1	8	3	0	1	1	0	16
3面25溝	0	0	51	39	0	12	65	2	169
3面26畦畔	0	0	1	0	0	0	1	0	2
Ⅳ層	1	4	254	94	0	33	47	2	435
4面遺構	0	0	12	3	0	1	0	0	16
Ⅴ層	0	1	62	40	3	14	8	0	128
5面41～44流路	0	4	30	8	1	0	1	0	44
Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ層	1	35	476	324	2	10	2	5	855
6面47・48流路	8	435	1015	313	0	2	4	10	1787
Ⅸ層	5	27	178	140	0	0	0	4	354
7面谷部(上層)	11	71	443	84	0	1	0	4	614
7面46杭列	0	81	5	5	0	0	0	0	91
Ⅹ層	27	47	5	2	1	0	0	0	82
8面49溝	0	13	1	0	0	0	0	0	14
8面50溝	0	2	1	0	0	0	0	0	3
8面57落ち込み	13	6	17	0	0	0	0	0	36
8面谷部(下層)	33	499	457	6	0	0	0	1	996
8面59溝	0	49	16	0	0	0	0	0	65
8面60ピット	0	1	0	0	0	0	0	0	1
8面68土坑	0	17	4	0	0	0	0	0	21
Ⅺ層	5	3	0	0	0	0	0	0	8
トレンチ等	7	25	249	99	0	8	7	3	398
計	113	1334	3470	1281	11	108	437	50	6804

1 Ⅷ層出土土器・土製品(第4-33図 Po1~5)

Ⅷ層出土の土器総破片数は、後述する47および48流路出土土器の約半数(破片数)である。出土遺物の大半を占めるのは、古代以前の須恵器や土師器で、回転糸切り痕の残る須恵器坏片(Po1)は、外面底部に「南」を墨書する。奈良時代後半(8世紀後半)以降の所産であろう。

当該層の時期を示す遺物は極めて少なく、瓦質土器(Po2・3)小破片2点を図化するとどまった。ともに口縁部附近の破片で、平安時代末以降(12世紀後半以降)と考える。

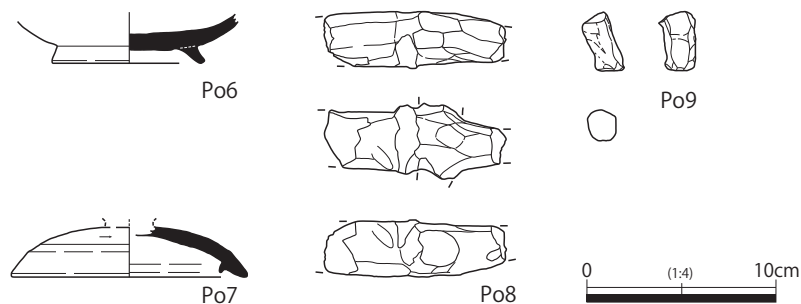
Po4は、鞍を表現することから土馬としたが、頭部の形状、太く短い脚部、太い尾等の特徴から、一見馬とは見做しにくい。右前足および左後足は欠損する。Po5は、Po4とは太さが異なることから、別個体の土馬の脚部片であろうか。



第4-33図 Ⅷ層出土土器・土製品

2 Ⅸ層出土土器・土製品(第4-34図 Po6~9)

Ⅸ層出土土器は、須恵器と土師器がほぼ1:1の割合で出土したが、総破片数は極めて少ない。後述する谷部(上層)と出土総点数こそ異なるが、時期判別可能な遺物は、共に古墳時代後期~終末期(6世紀後半~7世紀初頭)の須恵器が目立ち、極わずかに飛鳥時代後期(7世紀後半)の須恵器(Po6・Po7)を含む。Po8は土馬の胴体部分片、Po9は同脚部片である。



第4-34図 Ⅸ層出土土器・土製品

3 47(新)・48流路出土土器(第4-35図 Po10~30)

47(新)および48流路からは、古墳時代から奈良・平安時代にかけての須恵器および土師器を中心に、一定量の弥生土器、またさらに、極微量の縄文土器が出土した。既述したように、谷部(上層)およびⅨ層は7世紀末には堆積を完了したと考えている。そこで図示する遺物は、若干飛鳥時代以前の土器も掲載するが(Po10~12)、主として奈良時代(8世紀代:Po13~15)、平安時代前期(9~10世紀代:Po16~25)、平安時代後期(11世紀後半~12世紀前半:Po26~30)、の土器である。

飛鳥時代以前の遺物としては、弥生時代中期の高坏(Po10)、7世紀後半の須恵器蓋(Po11)、古墳時代後期頃の須恵器鉢(Po12)等が出土した。

8世紀代の遺物は、(Po13~15)の3点を図化した。9世紀以降の土器に比べ、当該時期に関連し図化しうる資料は多くないが、これらは後述する47および48流路出土木製祭祀具にかかる帰属時期の一端を示すと考える。Po13は、内面底部に「大垣」と墨書することから高台付坏と考えたが、Po14と比較しても明らかなように、やや大型で全体的に器壁が厚い。台付壺の体部を打ち欠き、墨書したものであろう。また、小片のため未図化であるが、内面に粗い布目圧痕がわずかに残る製塩土器片も出土した。これらは、8世紀代でも後半に属するものと考えられる。

9世紀前半のつまみのない須恵器蓋には、外面天井部に「□井」と墨書するPo16と、糸切り痕のあるPo17がある。

Po18~21は、9世紀後半から10世紀前半にかけての坏である。Po20は破片資料のため、外面底部の墨書は判読困難である。内外面体部に墨が付着し、内面に磨り面のあるPo21は、口縁端部のみ欠損する。無高台の皿(Po22・23)は9世紀代、内面に墨痕や磨り面が、さらに高台内側に墨痕があり、口縁端部を欠損する高台付皿(Po24)は9世紀~10世紀の所産である。Po22と近接して出土した土師器甕(Po25)は、9世紀代から出現し、続く10世紀代に本格化するもので、内外面はナデ調整を施すのみである。底部の破断面は、やや摩耗している。

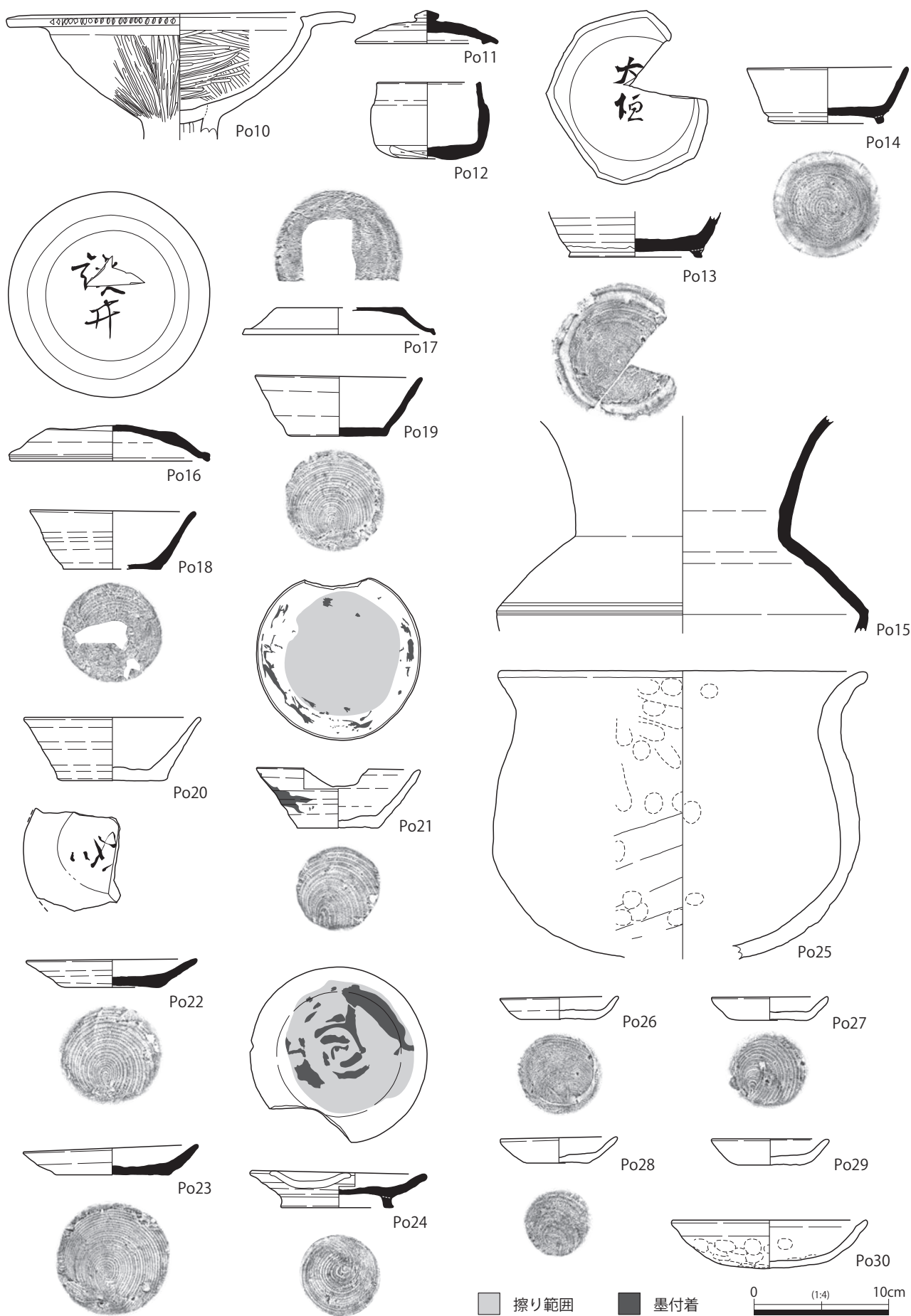
土師器皿(Po26~29)は、いずれも口径8.6cmを測る回転台成形で、Po29以外は完形品である。これに対し、土師器坏(Po30)は、外面体部の指オサエが顕著である。

第4節で詳述したように、これら9世紀から12世紀にかけての土器は、出土地点や帰属時期を考慮すると、47流路埋積後の47(新)流路の遺物と見做すべきであろう。

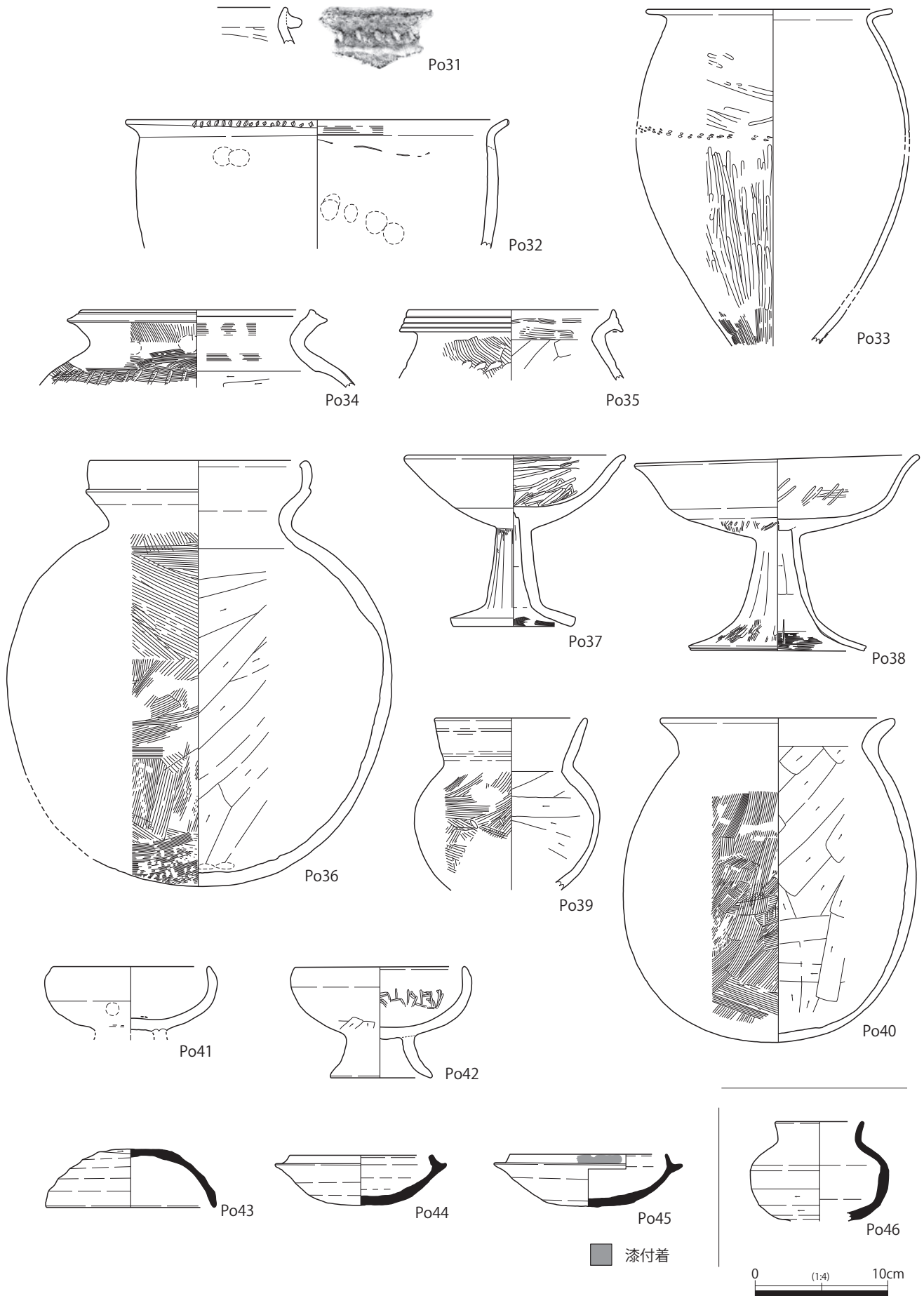
4 谷部(上層)・46杭列出土土器(第4-36図 Po31~46)

7面の谷部(上層)とその段階の微高地縁辺部に築かれた46杭列からは、第4-36図に示した土器が出土した。この土器群は、古くは縄文時代晩期後半に遡る凸帯文土器から、TK209もしくはTK217併行段階の須恵器まで、幅広い時期の土器を含んでいる。上下層位との関係から、縄文土器および弥生土器は谷部(下層)からの巻き上げに起因する混入とするのが妥当である。谷部(上層)が機能し、埋没するまでの時期を表す土器はPo36~Po45であり、具体的には古墳時代前期後半頃から7世紀にかけてとなる。

Po31は縄文土器深鉢の口縁部である。先端がやや丸みを帯びる口縁端部から下がった位置に、凸帯が貼り付けられている。厚みをもつ凸帯自体も、その先端部自体が丸みを帯びる。Po32は小さく「く」の字状に外反する口縁端部上半に刻目を付けた甕、Po33は器壁が薄い甕である。それぞれ弥生時代前期前半、弥生時代中期中葉頃の様相を示す。Po34は外面に赤彩が薄く残存している甕、またPo35



第4-35図 47(新)・48流路出土土器



第4-36図 谷部(上層)・46杭列出土土器

は内面のケズリが頸部にまで達している甕で、後者は弥生時代後期初頭まで下るか。

Po36は短くほぼ直立する複合口縁をもつ大型の土師器甕で、口縁外面に一条の凹線を施すことで下端部の屈曲を強調し、上端部はやや内側に肥厚している。Po37および38は土師器高坏である。Po37の坏部内面には、やや雑なヘラミガキが良く残っている。Po41および42は、共に口縁部が丸みを帯びて内湾気味に立ち上がる脚付埴である。

Po43および44は焼成のやや甘い須恵器坏身と蓋のセット、Po45は口縁端部外面に漆が付着した須恵器坏身である。いずれもTK209～217併行と考える。46杭列からは、TK209併行の短頸壺(Po46)が出土したのみである。

5 谷部(下層)出土土器(第4-37・38図 Po47～70)

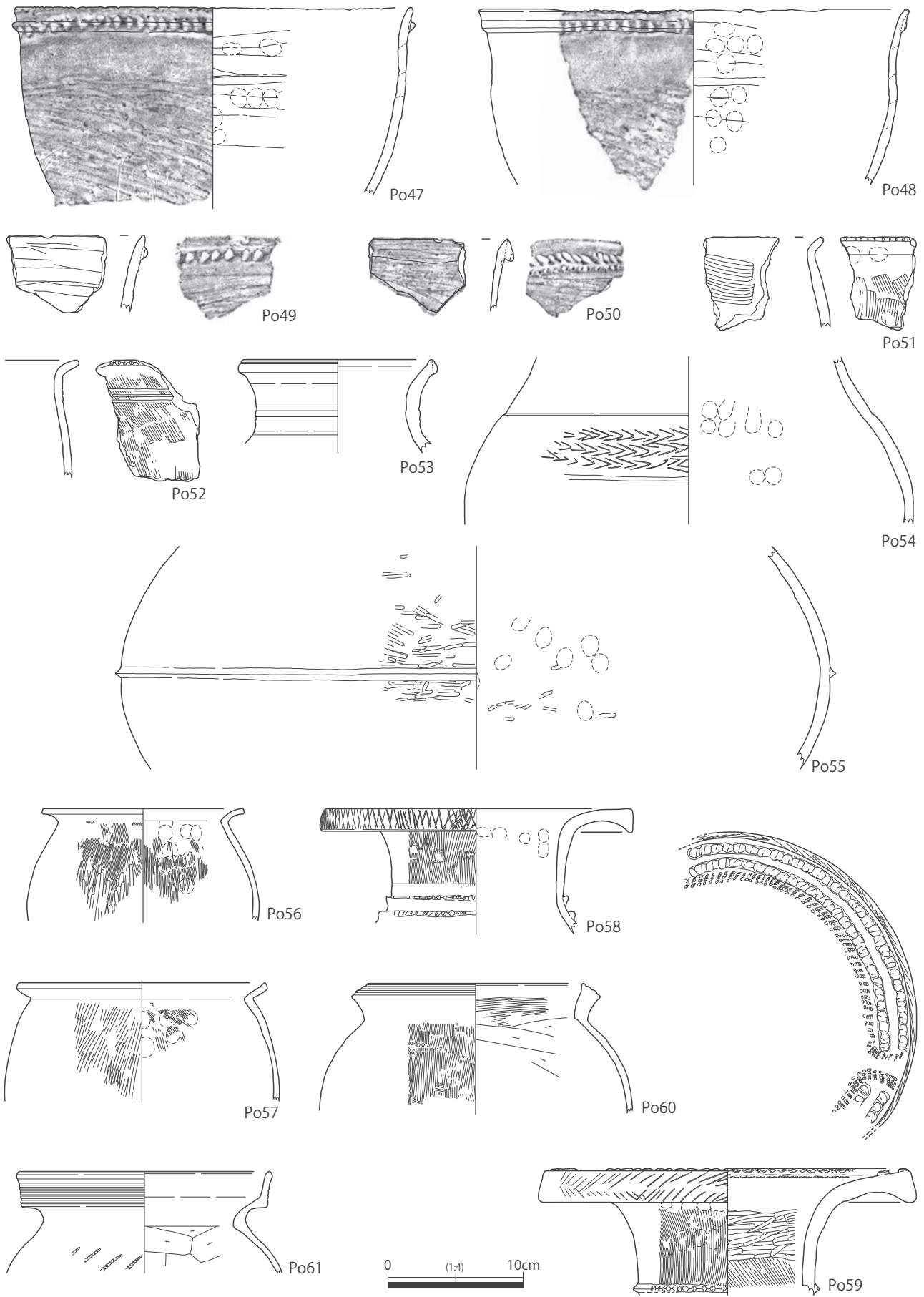
谷部(下層)においても、縄文時代晩期～古墳時代前期まで幅広い時期の土器が出土している。これらは、谷部が開口もしくは湿地化し、その下半が埋没するまでの時期幅を示している。関連するこの層位には須恵器を全く含まず、層相も異なるため、谷部(上層)とは断絶が生じていることは明らかであり、明確に時期区分出来る。

谷部(下層)の底面付近からは、縄文土器の出土が多いものの、弥生土器も一定量伴い、また同一レベル(層位)より古墳時代前期の甕も出土している。このことから、谷の埋没が本格的に開始されるのは古墳時代前期以降であることが推し量れる。つまり、谷部(上層)の最古段階の土器との関係から、谷部が埋まり始め、その下半が埋まり切るまでの堆積速度は、比較的速かったと考えられる。

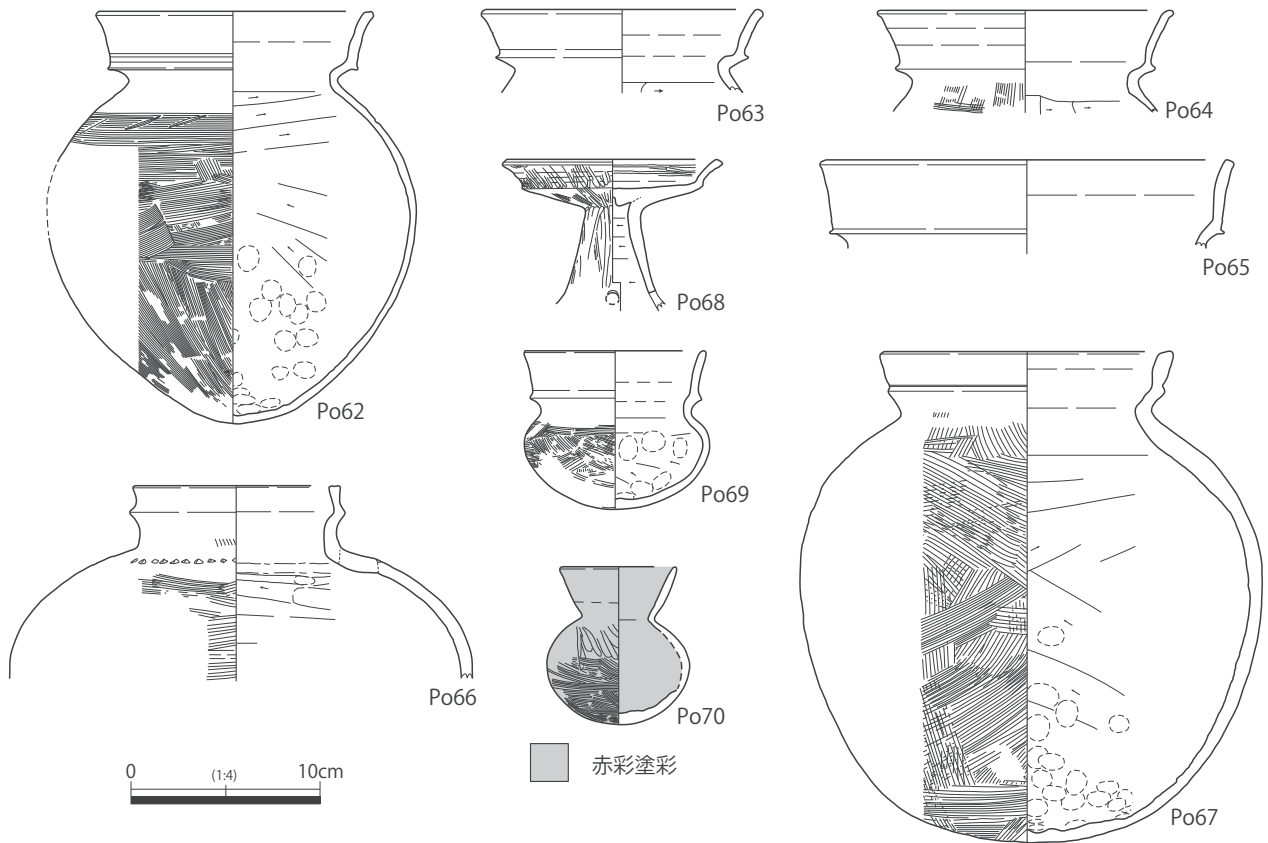
Po47および48は、いずれも縄文土器深鉢で、口縁部が外反し、その端部に刻目が入る。凸帯はやや下がった位置に付いている。縄文時代晩期後半の中では、古い段階に相当する土器となろう。Po51～55は、いずれも弥生時代前期に帰属する壺・甕である。Po51および52は、口縁端部に刻目を施し、後者については、「く」の字状に外反する口縁直下に、3条のヘラ描沈線も施されている。Po54は胴部やや上側に有段、Po55は胴中央部に断面三角形貼付凸帯を施している。なお、Po50の縄文土器とPo51の弥生土器は、谷部北端付近で共伴して出土した。この例のように、凸帯文土器と遠賀川式土器の共伴出土の関係は、近年鳥取県東部の当該時期の遺跡においては、主体的になりつつある動向である(例えば大柵遺跡や本高弓ノ木遺跡等)。

Po56～59は、いずれも弥生時代中期中葉頃の壺・甕である。後者2点は特に装飾性に富み、口縁部・口唇部に綾杉文や斜格子文、また列点文を施したり、頸部に指頭圧痕貼付凸帯を施したりしている。Po60は弥生時代後期初頭、Po61は弥生時代後期中葉頃の甕である。Po60は建築部材(第4-56図W147や148)と共に出土した。

土師器についても、壺・甕・高坏が一定量出土している。小型丸底壺(Po69・70)も認められ、そのうちPo70の内外面は、赤彩に塗色されている。高坏(Po68)の脚柱部には、穿孔が施されている。



第4-37図 谷部(下層)出土土器(1)



第4-38図 谷部(下層)出土土器(2)

6 8面遺構出土土器(第4-39図 Po71~75)

8面では、本章第5節第2項にて報告したように、微高地上において遺構が検出されたものの、それらに伴う土器を始めとした遺物はあまり出土せず、図化に耐えうるものも少なかった。ここでは、各遺構に伴う特徴的な土器について報告する。

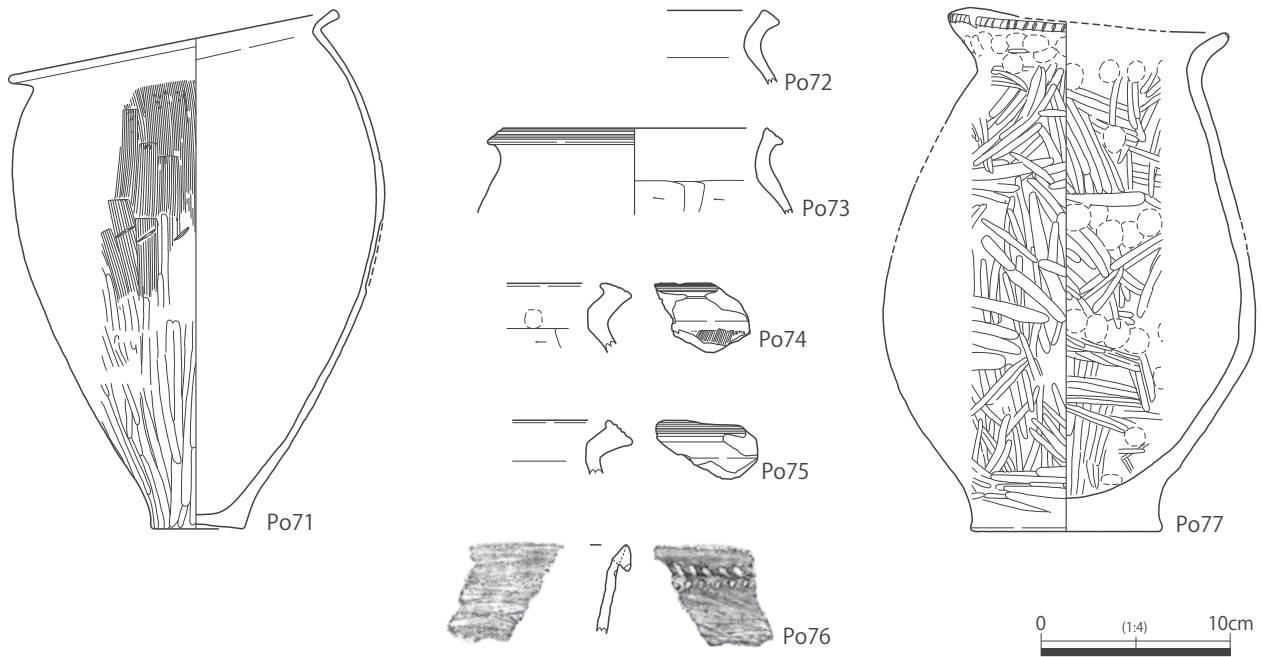
Po71は、68土坑出土の甕である。調整は外面上半ハケ、下半タテミガキ、口縁端部から頸部ヨコナデである。薄い器壁をもち、胴部中央の最も幅を有する箇所にはキザミ目を施す。弥生時代中期中葉頃の様相を示す。

Po72および73はいずれも59溝出土の甕の口縁部片で、外面には煤付着もしくは黒斑が認められる。Po73は、口縁端部に3条の凹線を施す。いずれも、弥生時代中期末から後期前葉頃の特徴を有する。

Po74および75は、49溝出土の甕口縁部片である。口縁端部に4条の凹線を施す。近畿第IV-3様式程度に口縁部が立ち上がっているものの、内面において頸部までヘラケズリが達しているため、その帰属時期は弥生時代後期初頭頃まで下ろう。

7 X層以下出土土器(第4-39図 Po76・77)

X層以下からは、土器を始めとした遺物量が僅少となる。Po76は、XI層出土の凸帯文土器である。なお、平成25年度に調査を実施した常松菅田遺跡(2区)において、XI層に相当する層位であるH25-8層以下は無遺物層という判断であった。しかし本調査区において、その同一層上面より土器が出土



第4-39図 8面遺構・X層以下出土土器

したことから、当該層上部は、縄文時代晩期後半であることが判明した。

Po77は、口縁端部に刻目を施した広口壺である。器体がやや傾いている。内外面のヘラミガキが顕著で、底部は安定した平底である。弥生時代前期後半頃の特徴を示す。9面出土。

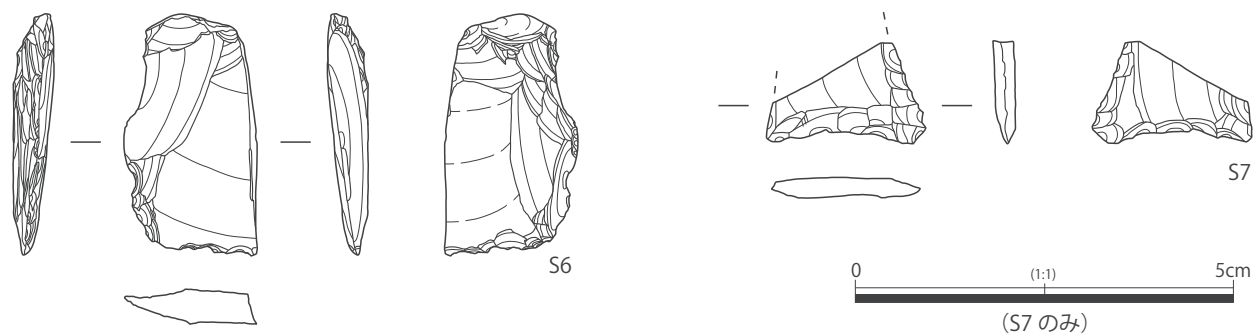
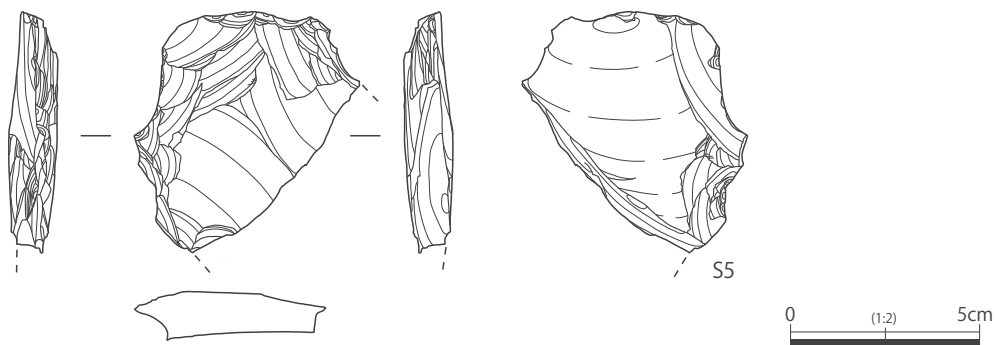
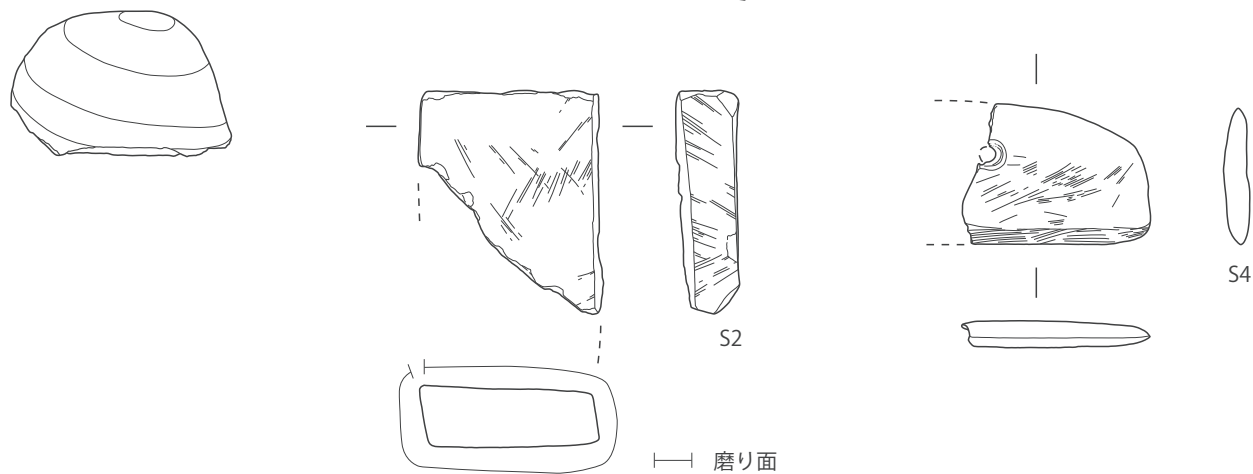
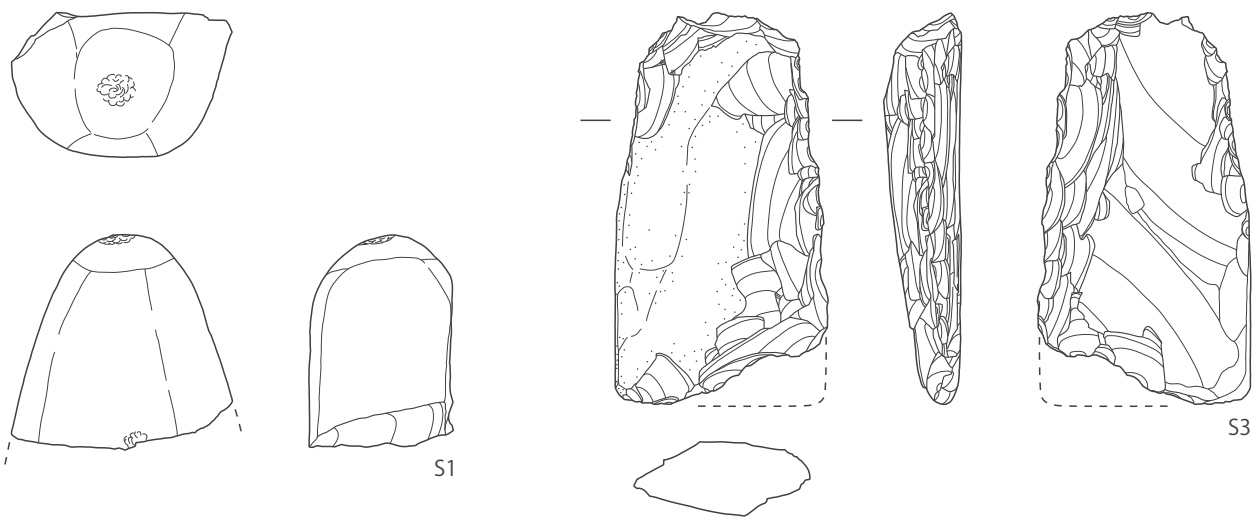
第2項 石器

本調査区から出土した石器については、器種として認定し得たもので述べれば、礫石器(敲石・台石・擦石)が7点、剥片石器として石鏃、石包丁、石鋏が各1点、および二次加工剥片が2点を数えるのみである。この組成内容に、未加工の軽石や暗渠で使用された未加工の大型礫等が加わる。隣接区(2区)において、碧玉や安山岩を素材とした玉作関連資料が3,200点以上出土した状況とは対照的である。以下、礫石器および剥片石器の中で、主だった石器について第4-40図に掲載・報告する。

S1は敲石である。元来は棒状の礫を素材とした敲石と推測するが、その器体の大部分は折損により失っている。おそらく、正面下端部付近の平坦面を利用して敲打した際に器体が分割されてしまったと考えるが、明瞭な敲打痕跡が見受けられないため欠損理由は不明である。ただし、器体の長軸端部と目される部分に、わずかながら敲打痕が認められることから敲石と認定した。敲打痕跡の範囲は1cm程度の楕円形範囲に収まり、かつ凹部を形成するには至っていないことから、その使用頻度はさほど高くないと考える。素材は凝灰岩と推測する。162g。

S2は砥石である。表裏面および両側面を砥面として利用している。元来の全体像は復元しかねるが、両側面を結ぶ幅から考えれば、さほど大きな砥石にはなるまい。各面ともに、ほぼ平坦な面を形成している。線状痕等、砥石として利用した直接的な証拠は、正面および右側面にやや顕著に見受けられる。JIS規格では概ね100~120砥石目に該当することから、粗粒砥石の部類になる。素材は花崗岩、57.5g。

S3は短冊形の石鋏である。裏面側には比較的大きな剥離面を残しており、素材の主剥離面の可能



第4-40図 石器

性がある。正面右側縁には連続して交互剥離を施している一方、左側縁は上半に比較的細かな剥離を施しているのみである。両側縁からは、素材中央付近にまで届くような大きな剥離は施されていないため、特に長軸方向上半は厚みを保持している。上端は、裏面側から連続剥離を施し整形している。素材に対して最低限の加工のみで石鋏としての形状を仕上げている。

側面および平面ともに、摩耗により丸みを帯び稜線が確認出来ない箇所が多い。また、刃部と推定される箇所も磨滅し、刃こぼれらしき剥離も見受けられるうえ、刃部が長軸方向に対して斜行する状態である。このような状況から、この石鋏は、使用頻度が高い状態を示した資料であると推測する。素材は板状安山岩、139g。

S4は石包丁で、全体の1/3程度の残存率である。正面左側に両面穿孔の孔が残っていることから、石製穿孔具の回転等により孔が穿たれたことが分かる。孔内には数条の線状痕が明瞭に見受けられる。孔の上部側にはこの線状痕が途切れている箇所があるが、これは使用による紐づれに起因する可能性もあろうか。表裏面ともに、丁寧に研磨して凸部を除去している。裏面側は特に、素材時には既に加工により平坦面とした部分よりも凹んでいた部分が多く残っている。刃部はほとんど刃こぼれしていないが、刃先から4mm程度内側まで、横方向の線状痕が顕著に見受けられる。ただし、コーングロスといった光沢は全く観察出来ないことから、この線状痕は刃部形成時に生じた可能性もある。素材は凝灰岩と推測する。18.3g。

S5は二次加工剥片である。裏面側からの衝撃により、器体の右下半を折損している。裏面側には主剥離面が残る。正面側には礫面が認められず、正面に残る古い段階の剥離面は、正面図上下からの打撃により生じていることが分かる。

二次加工は基本的に裏面側から連続して施され、厚みのある器体を薄く剥ぐ意図が見受けられる。裏面右下の剥離では、ノッチ状に縁辺が抉られるほどの打撃が加えられているものの、内部の夾雑物により剥離が通らず、器体中央にまで達していない。本資料には明瞭な刃部形成が成されていないことから断定は避けるが、スクレイパーや打製石包丁等の石器を製作する際の調整加工中に、偶発的に折れて廃棄された資料と考える。素材は板状安山岩、42g。

S6は二次加工剥片である。同石材と考えられるS5に比して風化が進行しており、やや白みがかった色調を呈している。長軸に沿うように折断しており、ちょうど器体の右半分が無い状態か。折断面は、これに接する全ての剥離面に先行されることから、折損の段階を経て最終的に廃棄されたものと推測する。裏面側には主剥離面および打面の一部が残存している。

正面図下辺および左側縁下半に細かな連続調整剥離を施して、刃部を形成している。左側縁上半にはそれらよりもやや器体中央にまで達する剥離を施し、やや鋸歯状を呈する。器体の残存長からして、元来スクレイパー等刃器の機能を有していたと考える。素材は安山岩、27g。

S7は凹基無茎石鋏の基部である。裏面側からの衝撃により、上半を折損している。残存する部分の加工の程度や均質的な厚さから判断すると、製作途上の偶発剥離による折損ではなく、使用時もしくは埋没時の破損の可能性が高い。折断面の風化が比較的進行しており、折断面の生成は製作時とさほどタイムラグは無いものと考えられるため、使用時の衝撃による折損とすべきか。

石鋏自体の最大幅は現存しており2cmを測る。現況からは、完形時の最大長は約3cmであったと推測する。表裏面ともに主剥離面もしくはそれに近い段階の剥離面を大きく残し、その後両側縁および基部付近には細かな連続剥離を施して形状を整えている。素材は安山岩と推測する。0.9g。

第3項 金属器

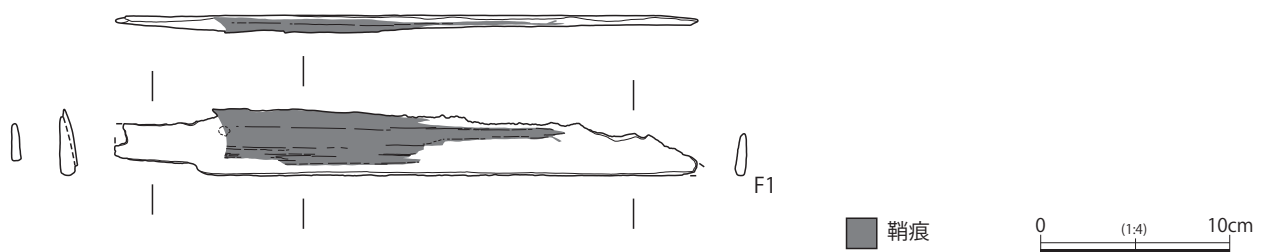
出土した金属器は、近世以降のキセルや古銭を含めても10点を数えるのみで、そのうち遺構に伴う資料は、鉄製刀子(第4-41図)1点である。なお、鉄滓と認定した小塊が2点出土しているが、これに関連する遺構は確認していない。

F1は、48流路から出土した刀子である。刀身部・茎部ともにほぼ残存しているが、切先(鋒)と茎尻の両端を成す部位は欠失している。刀身には反りが無い。本資料は全体的に錆膨れ等の二次的な形状変化等がさほど進行しておらず、破損部分を除けば、現況においてもほぼ全体形状を把握することが出来る。

刃部は切先に近い部分ほど刃こぼれが顕著で、これは実用性の高さを示すのであろう。関については、背関は明瞭に斜角(行)の関を観察できる一方、刃関に相当する部分については、前述の刃部の遺存状態から、無関なのかもしれないか判断し難い。茎はそれほど細くならず、茎幅は比較的広く、現存する刃部の幅の半分程度を占めている。茎部の端部上半が丸みを帯びていることから、これはいわゆる栗尻の形態を示している可能性がある。また、残存している茎端中央部分の弧状の痕跡は、目釘穴の一部を示していると考えられる。棟側は平棟である。

本資料出土時には、切先を正面右側とした場合の上面に、厚さ1~1.5mm程度の薄い木材が付着していた。正面右側は細く裂けた状態にあり刃部先端まで覆っていないが、その逆側では材の端部に向かって厚みを帯び、ちょうど刀身部と茎部の境界部分で、やや内湾する(半月形)ように材が加工されている。刀身の裏側部分には同様の木材が見当たらなかったが、出土時の状況や一部に残る半円状の加工痕等から勘案するに、この木片は刀子に伴う鞘の可能性が高い。なお、この鞘と考える材には、黒漆等で塗り固められた状況は看守出来ない。また、目視による判定ではあるが、針葉樹である可能性が高い。以上の状況から判断すれば、本資料における鞘と柄との固定方法は、鞘口を弧状に削り込み、そこへ半円形に削り出した柄木をはめ込むいわゆる「呑口式」とであると判断するのが妥当と考える。

県内では、柄縁が円弧状を呈した拵えであることから呑口式と判断された鉄刀が、秋里遺跡(鳥取市)検出の平安時代中期の井戸から出土している(井殿・藤本・杉谷編1996)。この資料は、形状・法量ともに常松菅田遺跡出土品と非常に類似している。ただし、秋里遺跡出土例については、鞘自体は残存していない。



第4-41図 刀子

第4項 木器

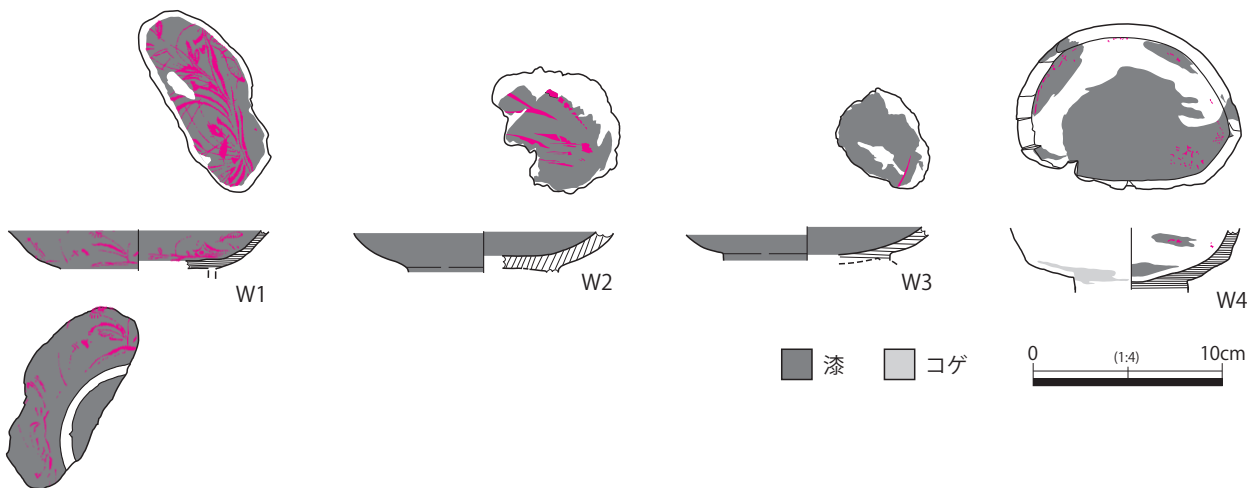
1区の調査においては、2,200点弱の木器を取り上げた。これらについて、取り上げ・洗浄の後、『木器集成図録 近畿古代編』(町田・上原編1985)や『島根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』(中川・内田・東山編2006)、また鳥取県埋蔵文化財センターホームページにある「建築部材データベース」・「木器データベース」(<http://db.pref.tottori.jp/aoya-iseki.nsf>)等を参考に、器種の認定と分類に努めた。

出土木器のうち、大半を占めるのは古代の祭祀具である。斎串を筆頭に、人形や馬形等の祭祀具が、当該期の流路や谷部内より出土している。また、谷部の最下層付近からは、弥生時代から古墳時代の建築部材がややまとまって出土した。その多くは部位を判断しかねる資料だが、中には柱や梯子、また床材等、具体的な部材名を認識出来るものも含まれている。これらには、数mを超える長大なものも見受けられる。この他に容器類等の破片も出土しているが、点数は僅少である。

1 漆器(第4-42図 W1~4)

W1およびW2は、41流路から出土した漆器椀片で、黒漆地に両面に赤漆で細かな草花を描くW1と、内面にのみ赤漆で草花を描くW2とがある。高台は共に欠損した状態である。

W3は44流路出土漆器椀で、内面にわずかに赤漆で描いた草花が残る。V層出土のW4は、内面に施文した赤漆が痕跡程度に残るのみで、大半の漆は剥落している。外面底部から体部の一部にコゲがある。残存する高台はやや高い。これらの漆器は、V層出土のW4を除き、いずれも中世以降の所産であろう。



第4-42図 漆器

第4-2表 層位・遺構別出土木製祭祀具点数表

出土層位・遺構	人形	馬形	舟形	武器形	斎串	斎串片	計
41～43流路	0	0	0	0	6	0	6
VIII層	1	1	0	0	6	2	10
47・48流路	27	41	2	15	271	131	487
49溝	0	0	0	0	2	0	2
IX層	0	5	0	1	2	0	8
7面精査	0	2	0	0	0	0	2
谷部(上層)	8	49	3	20	311	45	436
計	36	98	5	36	598	178	951

2 木製祭祀具(形代)

今回の調査で出土した木製品のうち、圧倒的多数を占めるのは古代の木製祭祀具(形代)である。

図化するに際し、木製祭祀具の種類を特定するため、主として次の基準を満たすものを選択した。人形は、上半身・下半身の形態的特徴から当該器種と認識出来るもの、馬形は完形、もしくはほぼ完形の状態のもの、または特徴的形態を示すもの、武器形は完形品、もしくは柄部分の特徴が明らかな破片であるもの、斎串は完形品、もしくは斎串と認定し得る頭部(上端)が明瞭に残るもの、である。

出土した形代類の点数を第4-2表にまとめた。それによると、人形・馬形・舟形・斎串の総点数は、47および48流路と谷部(上層)でほぼ同数出土したにもかかわらず、馬形が人形の2倍前後に達するという特徴を示す。以下、大きく47および48流路(VIII層出土の1点を含む)と谷部(上層)(IX層・7面精査出土を含む)に分け、器種毎に記述する。

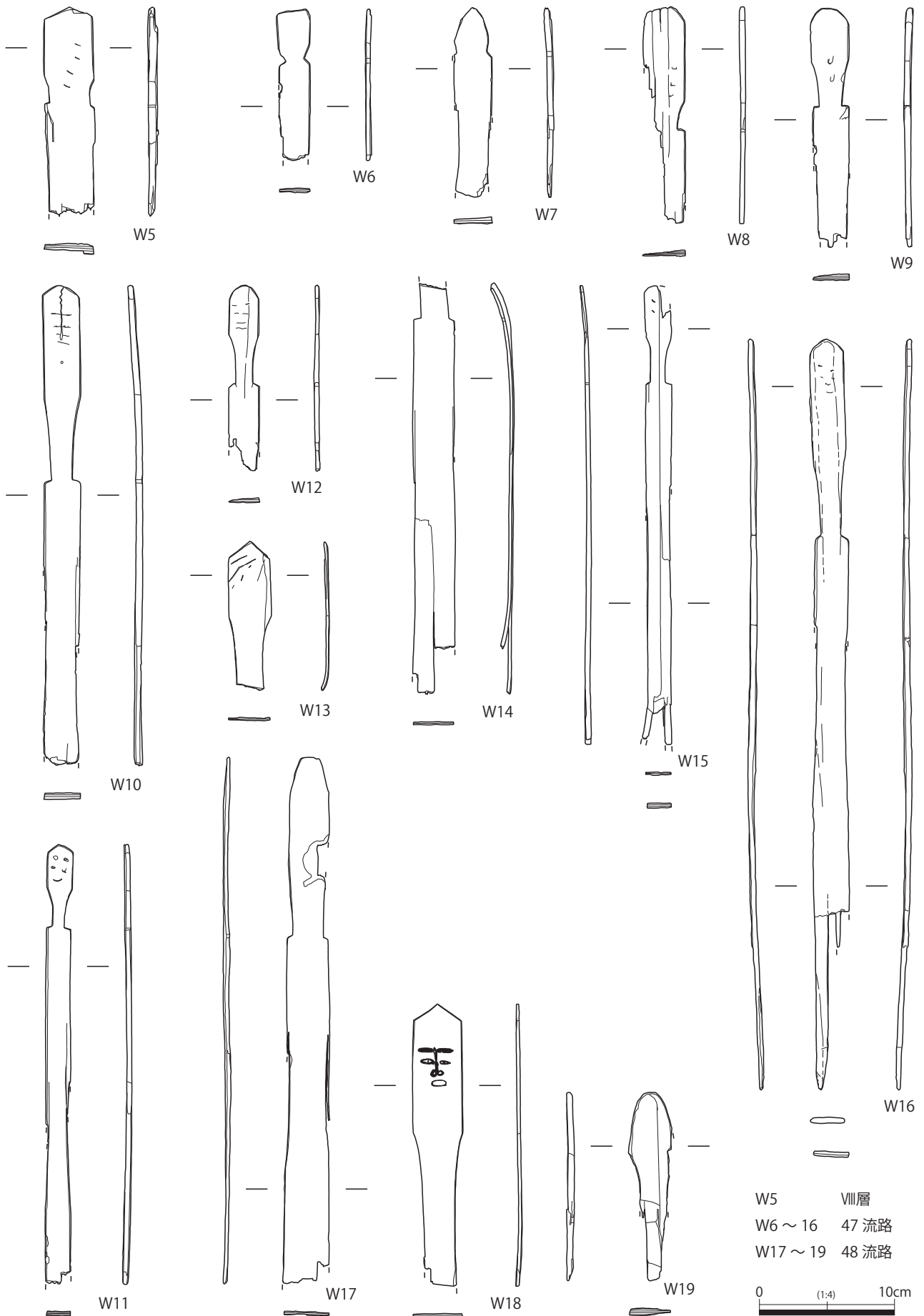
2-1 人形(第4-43～45図 W5～40)

図化した人形36点中、全身がほぼ残存する個体は比較的全長の短い4～5点に限られ、残りは上半身を中心とした破片である。出土点数に注目すると、47および48流路から27点出土したのに対し、谷部(上層)からは8点を数えるのみで、圧倒的に流路内出土の方が多い。

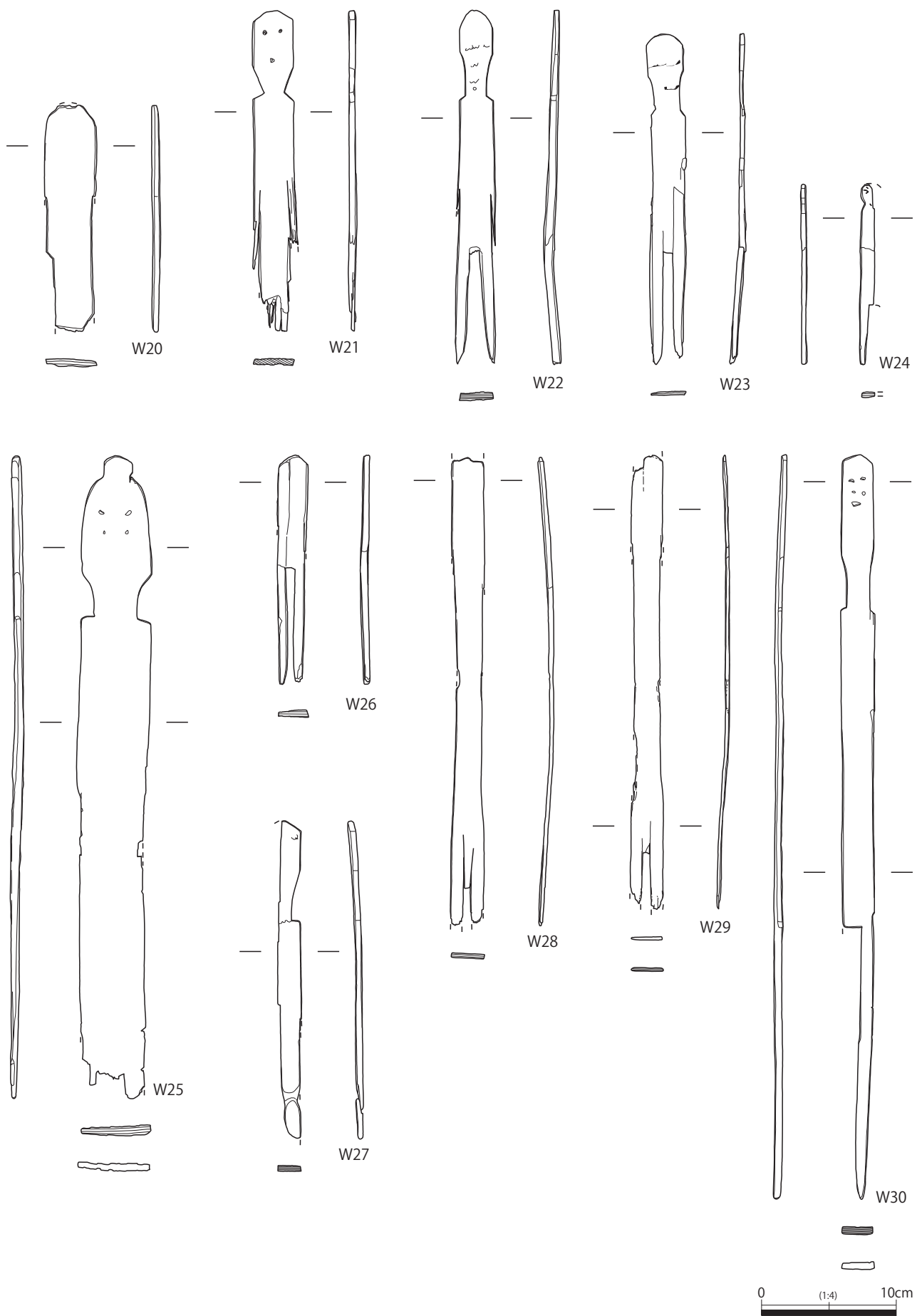
流路内出土人形の特徴の一つは、面長、長い頸部と怒り肩、そして面長に呼応するかのような長い胴部にあり(W10・11・15等)、W16のように、全長60cmを越える例もある。W25の頭部は、冠もしくはマゲを表現したものであろうか。顔表現のうち、墨画による人形はW18の1点のみで、他はW11・12・16・21のように刻画によるが、W5・8・9のように、一見顔を表現しているとは判断し難い資料もある。また、両足の表現はあるものの、肩部の切り欠きがないW26や35、あるいは頭部片と見做してよいか即断し難い表現もしくは加工の不明瞭なW19も存在する。48流路出土人形については、概して全長の長いものと短いものが混在する。

これに対し谷部(上層)出土人形は、全長が明らかなものは全て30cm以下のもので占められ、切り欠きで撫で肩を表現するものが多い。

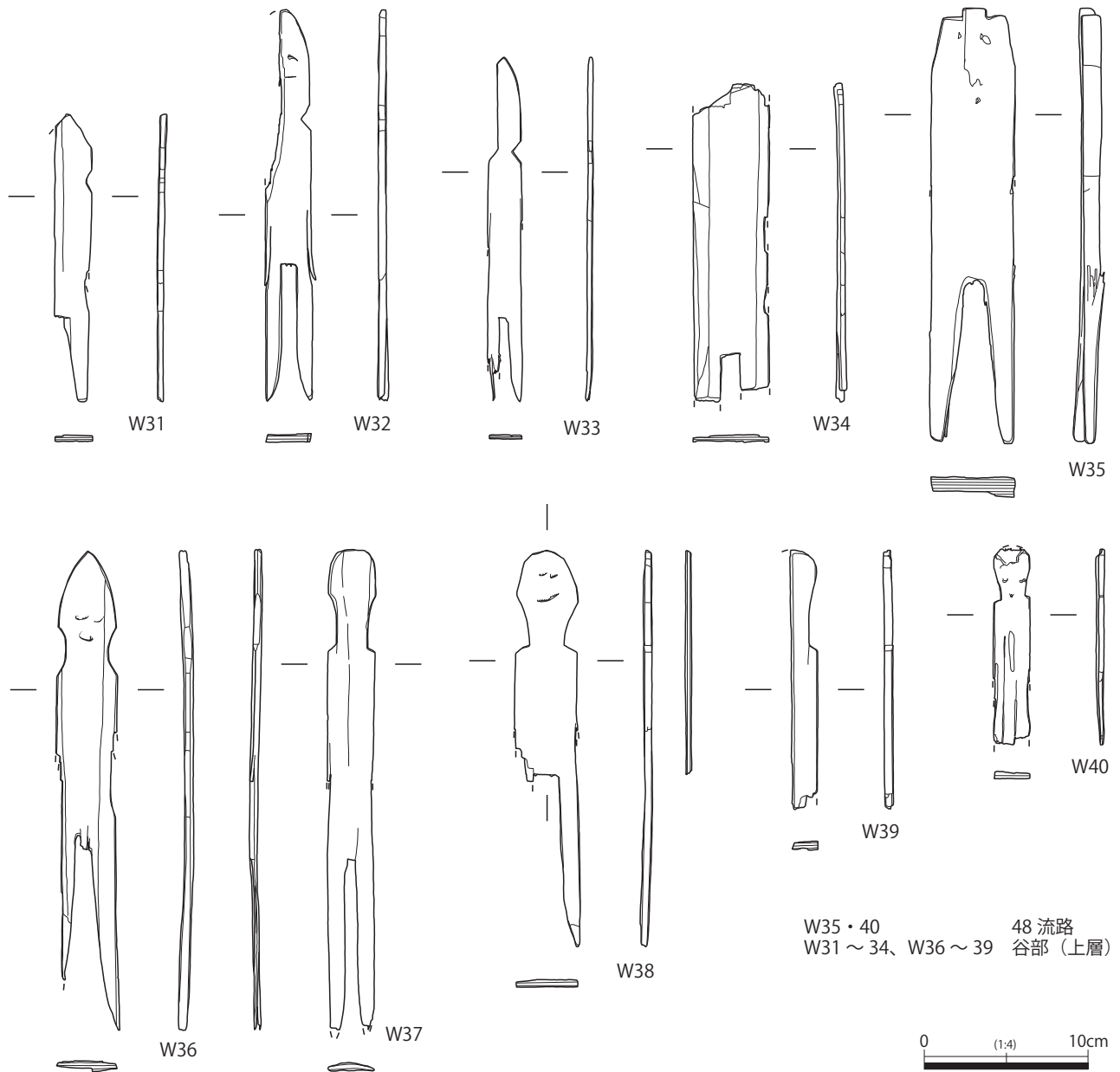
大平茂氏(1993・1995・2008)による人形の分類・変遷に照らし合わせると、谷部(上層)の人形は、撫で肩(I類a型式)もしくは下がり肩(I類b型式)で占められたのに対し、47および48流路では、怒り肩(I類c型式)が主体となる。



第4-43図 人形(1)(Ⅷ層、47・48流路)



第4-44図 人形(2)(48流路)



第4-45図 人形(3) (48流路、谷部(上層))

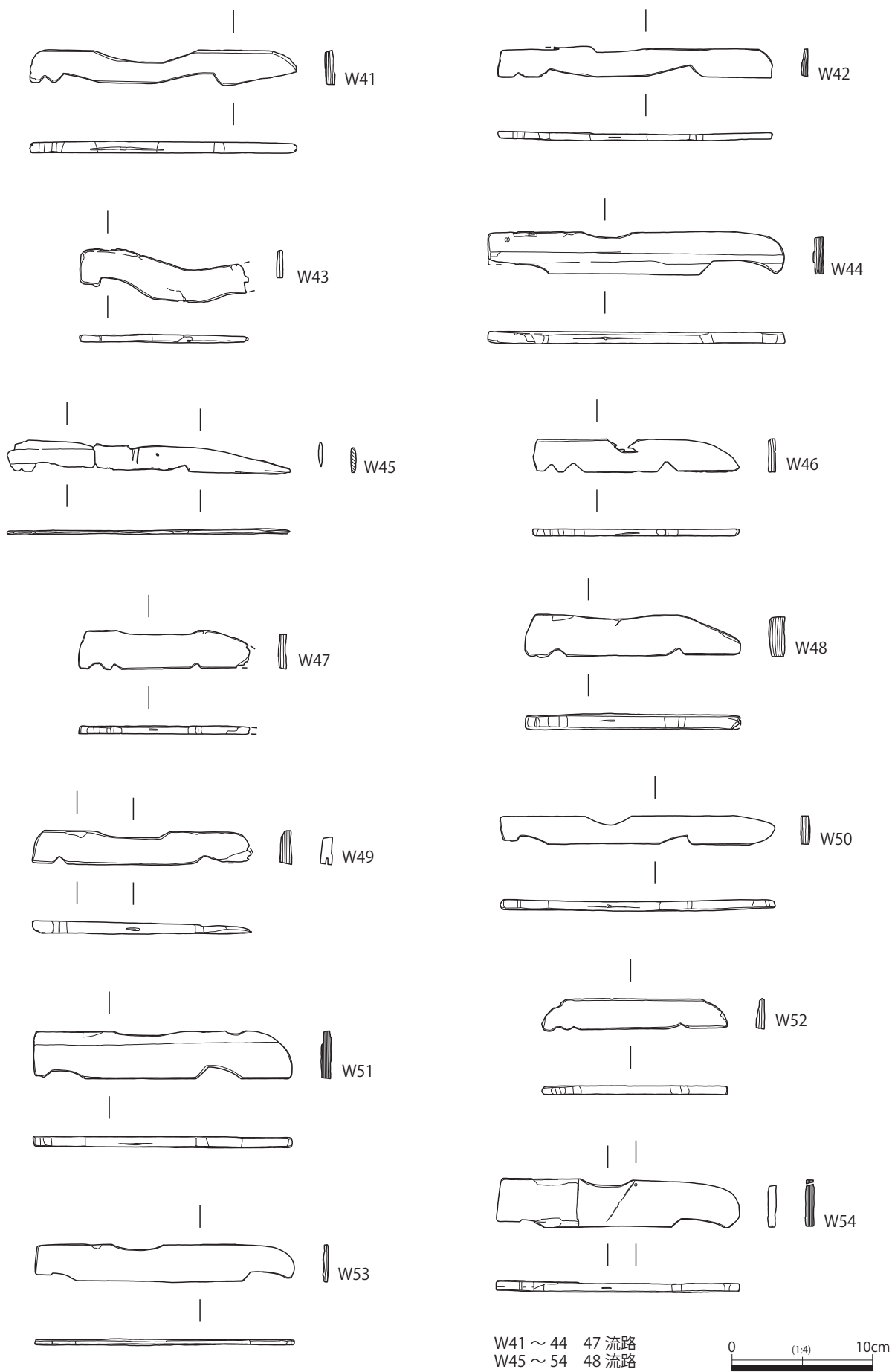
2-2 馬形(第4-46~49図 W41~90)

点数比では、47・48流路出土馬形は41点(うち図化したもの21点)、谷部(上層)出土は49点(同24点)と、人形の場合とは逆に、谷部(上層)の方がやや多い。鞍を表現する「飾馬」は48流路出土の1点(W45)のみで、残る40点は、全て鞍を有しないいわゆる「裸馬」であることは特筆すべきである。

明確な顔やたてがみの表現は確認出来なかったが、47流路出土のW44や谷部(上層)出土のW68のように、刃物で切り込みを入れて目?を表現した例や、47流路出土W42のように、たてがみの跡?の残る例もある。

馬形の各部位の形態的特徴については、以下の通りである。

まず頸部の形態を表現するにあたり、V字の切り欠きをするものが47および48流路(W46~49)や谷



第4-46図 馬形(1)(47・48流路)

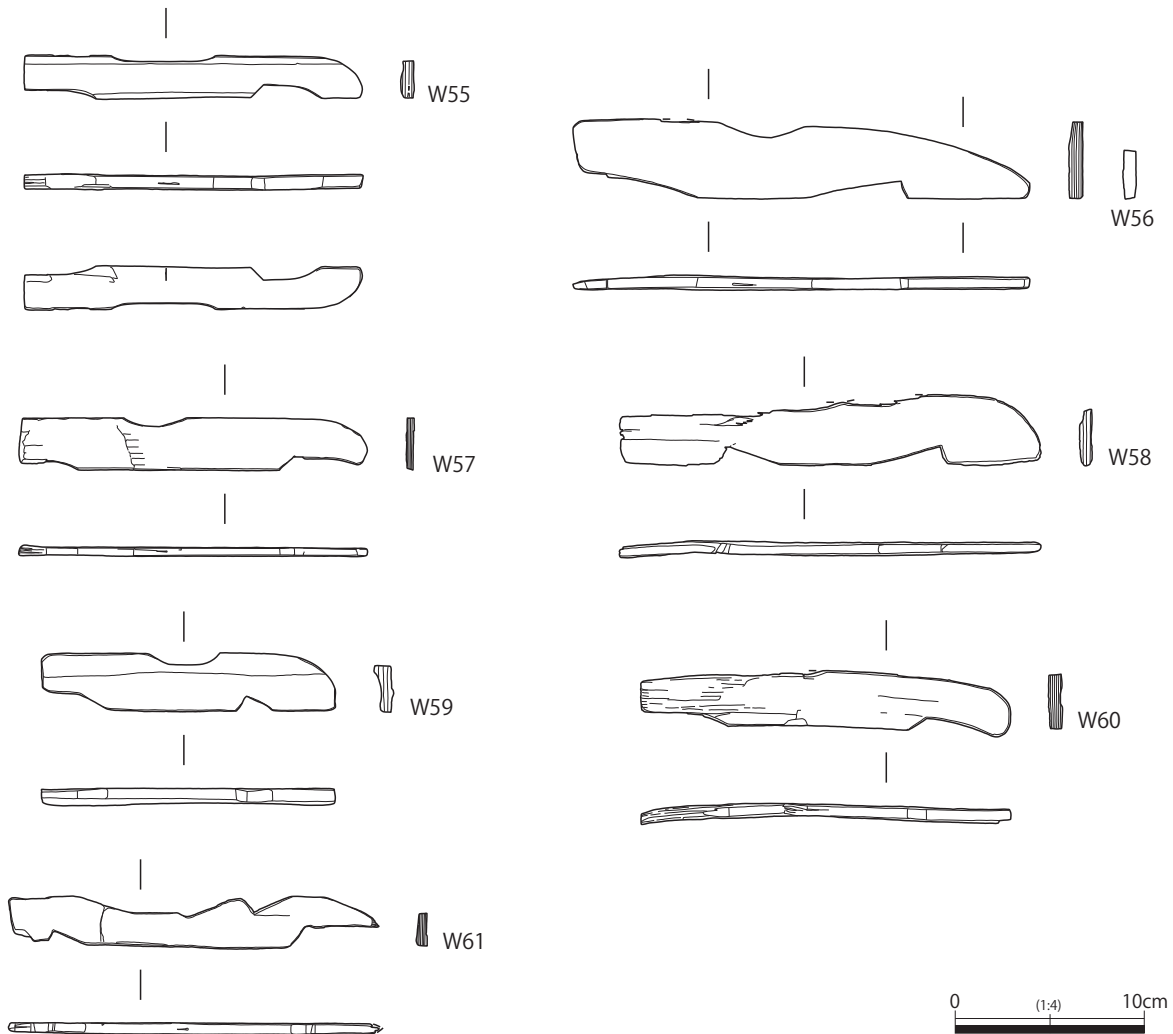
部(上層)(W67・70・83)にあり、尾部側を斜めに切り欠くものも、47および48流路(W43・50・51・53)や、IX層・谷部(上層)(W64・74・80・89)にある。

一方尾部は、丸くおさめるものが47および48流路(W42・44・46・49・51・53～55・57～60)と谷部(上層)(W67～69、W73・74・76・79)で一定量存在するが、斜め上方へ切り欠いたもの(谷部(上層)W72)や、端部の幅を細くするもの(47および48流路W61、谷部(上層)W66)は、極少数にとどまる。また、口を表現するものも47および48流路(W45・46・48)、谷部(上層)(W65・73・79)に存在する。

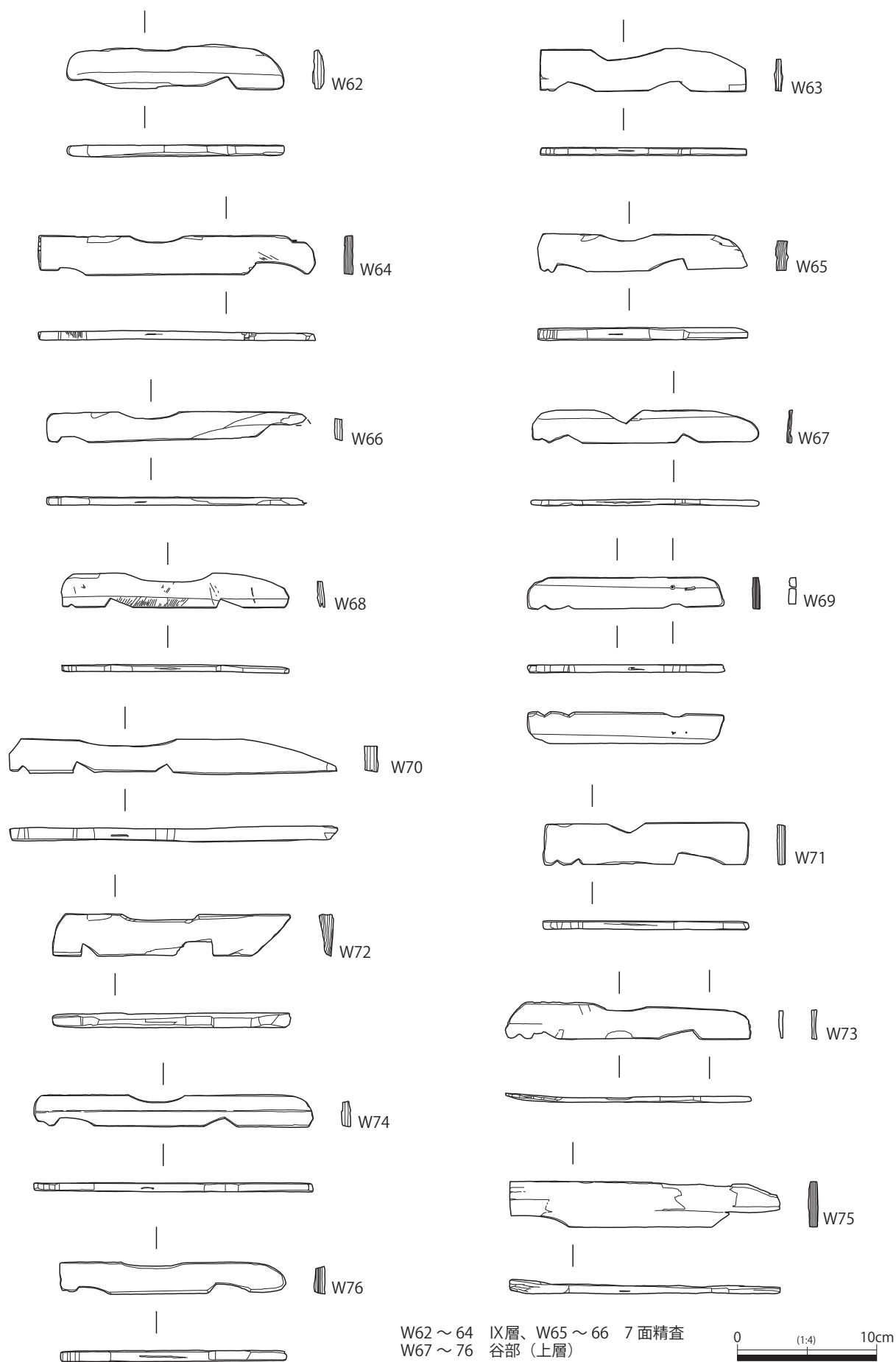
47および48流路、谷部(上層)を問わず、4本足を表現した馬形は確認出来なかったが、腹孔をあけた1本足の馬形は、32点確認出来た。その中には、棒状の木片(腹孔棒)が孔内に残存した状態の資料が4点(W41・50・51・81)あった(写真図版37-2参照)。

馬形の頸部と人形の肩部の切り欠きの形状には、類似点があると言われる(藤田編1997)が、今回出土した馬形は、鞍を表現したW45を除くと他はすべて「裸馬」であり、47および48流路と谷部(上層)の間では、明らかな差違を認めることは出来なかった。

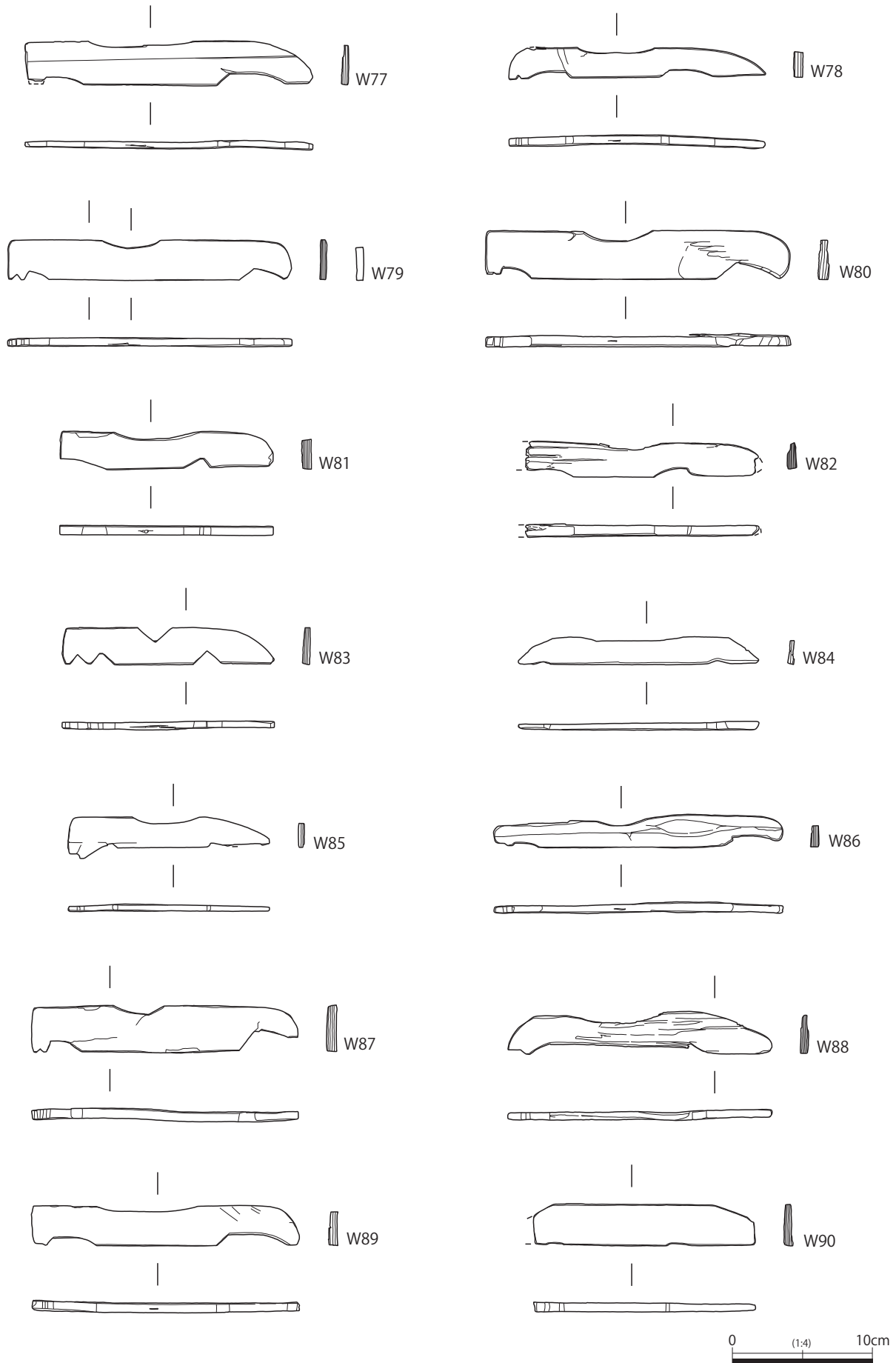
なお、特徴的な形態として、頭部端から下腹部にかけて切り欠くものが47および48流路(W44・55・57・59・60)、谷部(上層)(W81・82)から出土している。



第4-47図 馬形(2)(48流路)



第4-48図 馬形(3)(Ⅸ層、7面精査、谷部(上層)1)



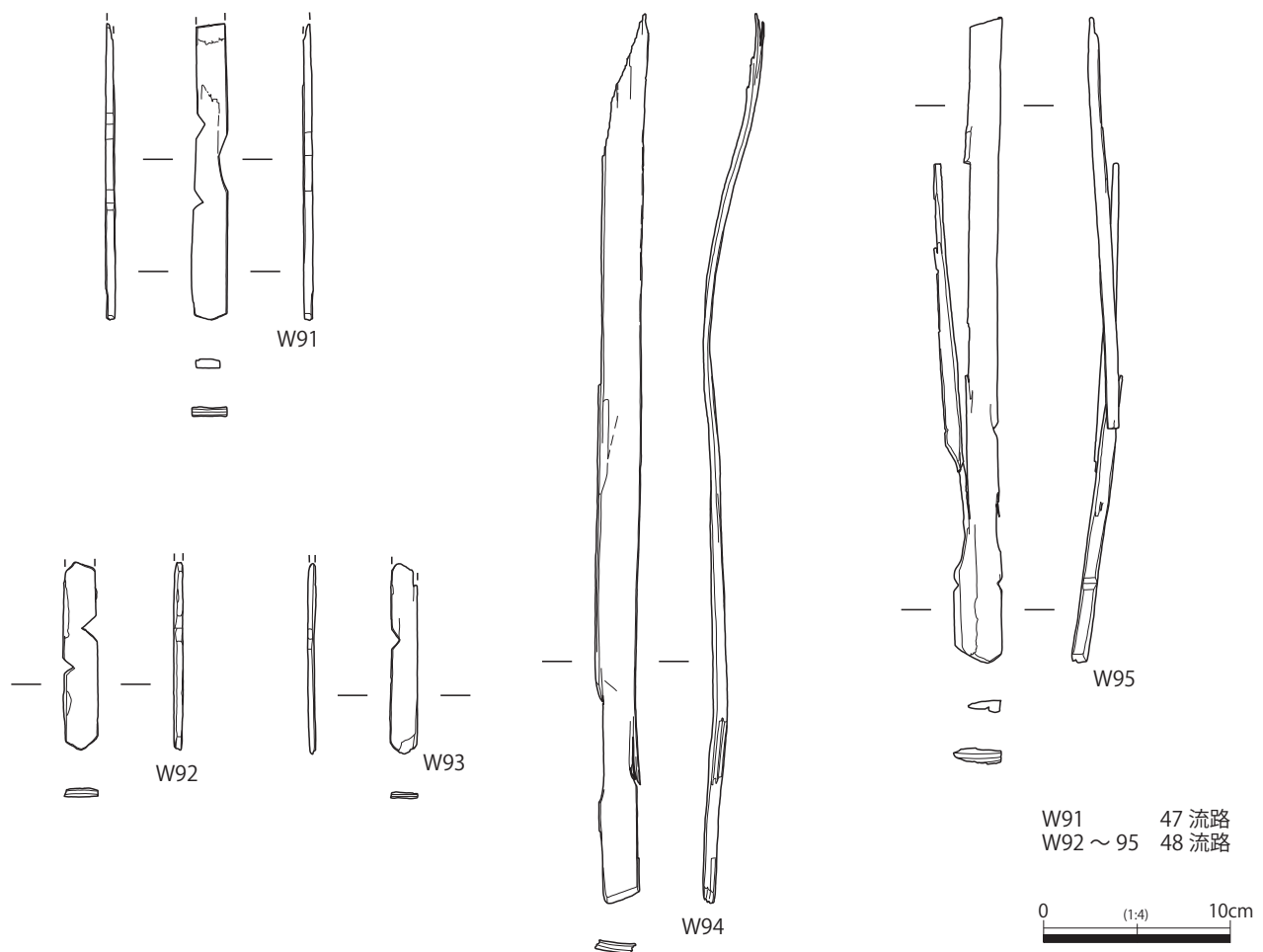
第4-49図 馬形(4)(谷部(上層)2)

2-3 武器形(第4-50・51図 W91~105))

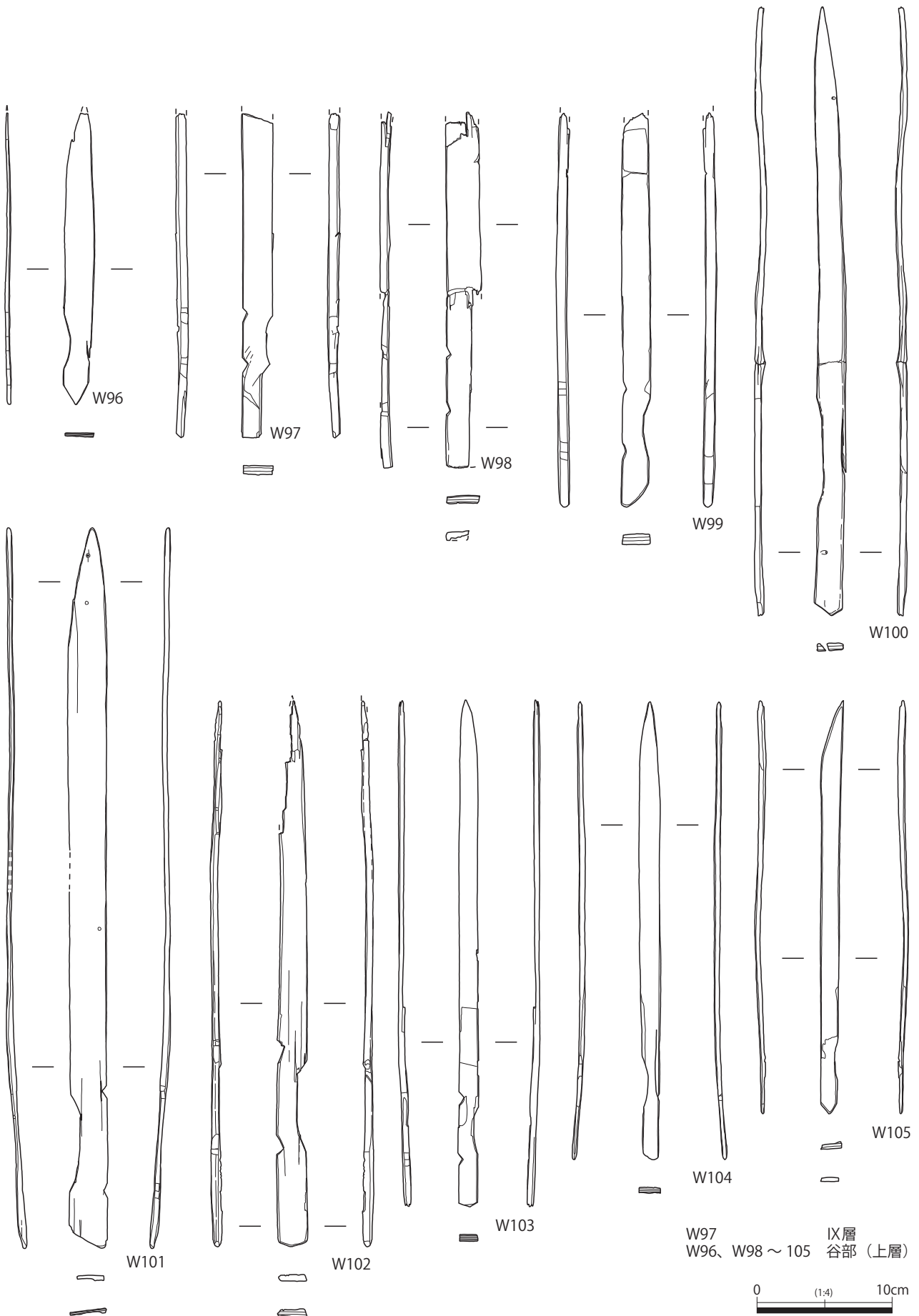
ここでは、片刃で表現された形代を刀形、両刃を剣形とし、両者の総称として武器形と呼称する。切先の形状は、W105(片刃)やW104(両刃)のような明瞭なものばかりとは限らない。共に先端の形状は圭頭を主とし、柄の形状に注目すると、A型：一側縁に弧状の切り欠きを、他方に切り掛けを施すもの(W94・96・104・105)と、B型：一側縁に弧状の切り欠きを、他方にV字形の切り欠きを2箇所施すもの(W91・97・101~103)とがある。前者は一見斎串と見まがう一群であるが、正面形状における左右の対称性等を基に、斎串と区別した。

柄の破片として図化したW92は、両側縁に1箇所ずつ、B型の可能性のあるW93は一側縁に、それぞれV字形の切り欠きがある。W92は、「2-5 斎串」における分類に当てはまらない斎串となる可能性も否定出来ない。

判別出来た武器形は、谷部(上層)や47および48流路等から36点出土したが、時期的変遷を辿るまでには至っていない。



第4-50図 武器形(1)(47・48流路)

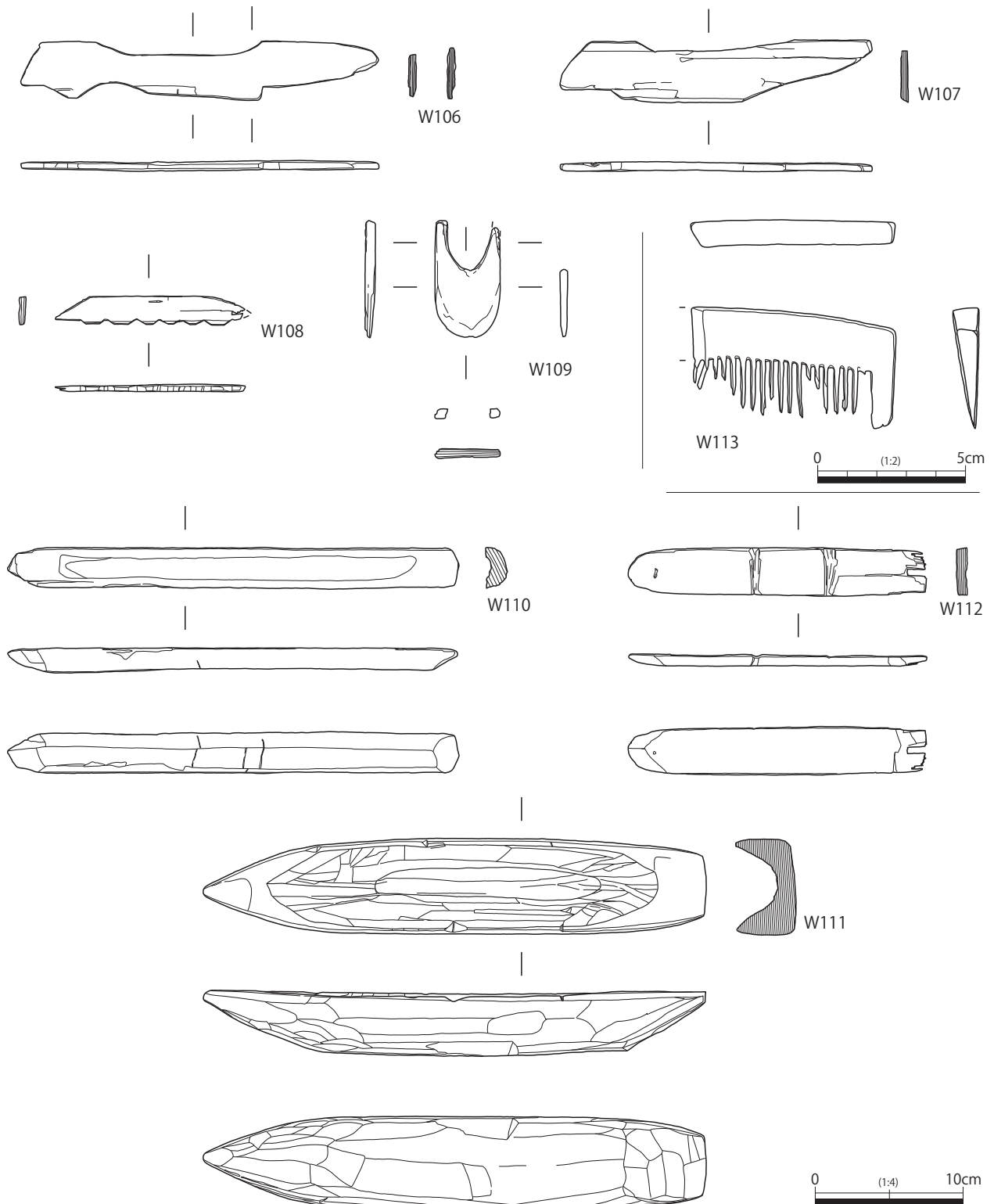


第4-51図 武器形(2)(IX層、谷部(上層))

2-4 鳥形・エブリ形・鋤形・舟形・櫛(第4-52図 W106~113)

人形等の主要な器種に当てはまらないその他の木製祭祀具として、鳥形(W106・107)、エブリ形(W108)、鋤形(W109)、舟形(W110~112)を図化し、併せて木製祭祀具との関連性がうかがえる櫛(W113)についても、ここに掲載した。

W106・107は、馬形のような下腹部に明瞭な切り込みがなく、側面観が飛翔する姿に見えることから



第4-52図 鳥形・エブリ形・鋤形・舟形・櫛

ら鳥形と判断した。ともに腹孔はなく、顔その他の表現はない。

W108はエブリを、W109は鋤先といった農具を表現したものであろう。このような農耕関係の形代は、図示した2点のみに限られる。

舟形は3点図化した。W111のように明らかに舟の形状を認められる例から、舳先部分を丸く加工することにより舟形と見做したW112まで、その姿は多様である。

櫛(W113)は、47・48流路および谷部(上層)を含めてこの1点のみ確認出来、人形や馬形等の木製祭祀具と共伴している。肩部が角張る横櫛の破片で、歯は3cmあたり11本と粗い。

2-5 齋串(第4-53~55図・第4-3表 W114~143)

齋串は、今回の調査で出土した木製祭祀具中、最も多く確認している器種である。整理するにあたり、まず、扁平な板材の両側縁に細かな切り欠きを連続して施すもの(a型)、左右に切り掛けを施すもの(b型)、棒状もしくは箸状(c型)、切り出し状(d型)の大きく4つに分類した(第4-3表)。また、それ以外に齋串かと考えられ得る木製品(W118・119)も併せて抽出し、ここに図示した。

a型は、切り欠き部分と思しき破片を含めても出土量が最も少なく、その大半は谷部(上層)から出土した(W134・135)。図示した3点は遺存状態の最も良好な資料群であるが、切り欠きの長さの程度にばらつきがある。48流路出土のW120も両側縁の切り欠きからa型としたが、一端の幅が狭まりつつあることから、齋串以外の可能性もある。

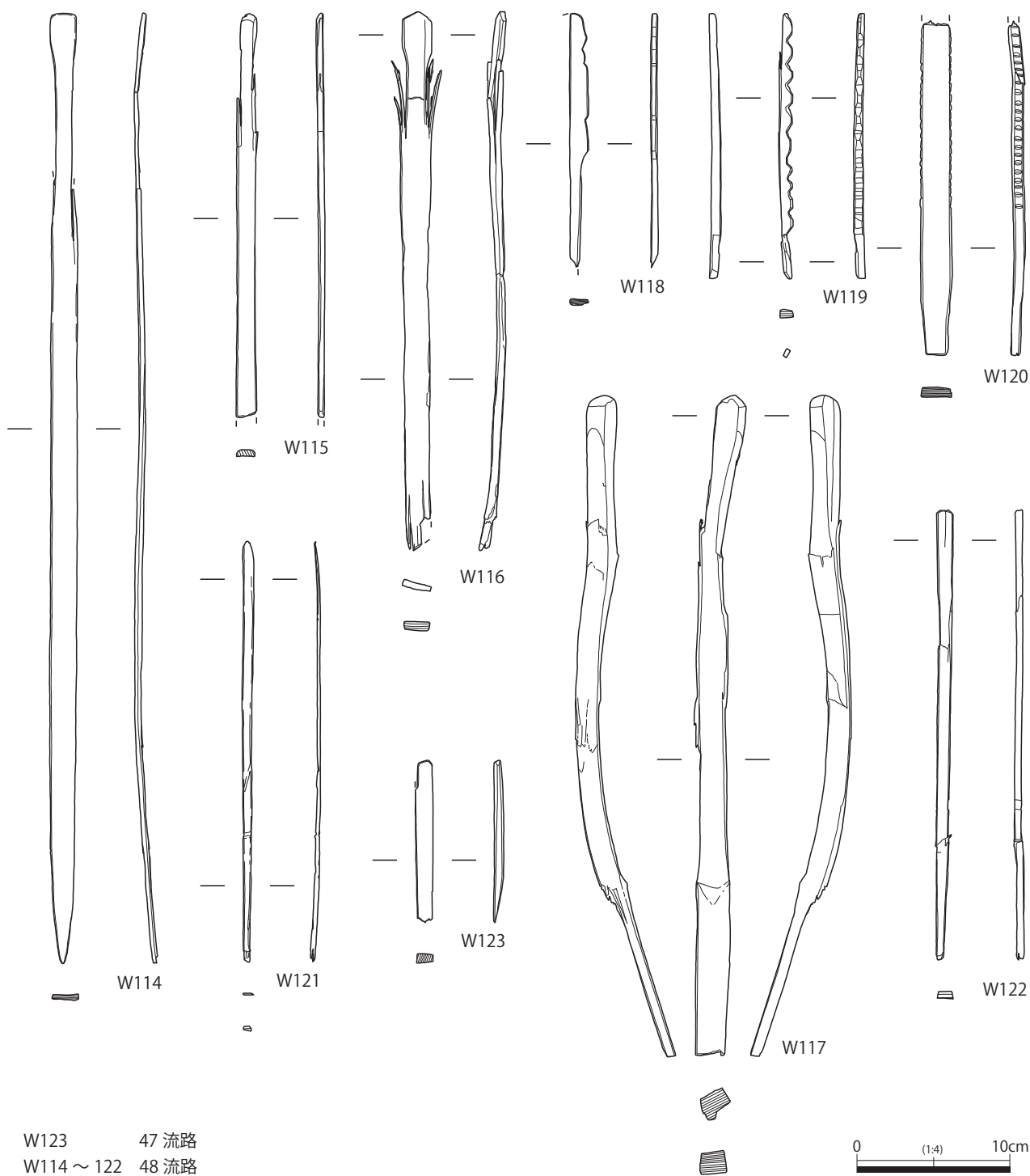
b型は、全長30cm未満のものから60cmを越える大型品まであり、出土量も豊富である。大半は頭部(先端)付近の両側縁に一对の切り掛けを施すが、W131のように極稀に複数箇所施すものもある。この中で、48流路から出土したW117は材のゆがみこそ著しいが、幅や厚さはほとんど変わらない。薄く削り取る前の「齋串の塊」のようなものか。

c型も、b型同様出土点数が多い。薄板を用いず細長い角材を使用する点で、他の齋串とは異なる。頭部(先端)は扁平に仕上げ、基部は尖らせる。30cm近いものから、W123のように扁平かつ10cm程度のもものもある。

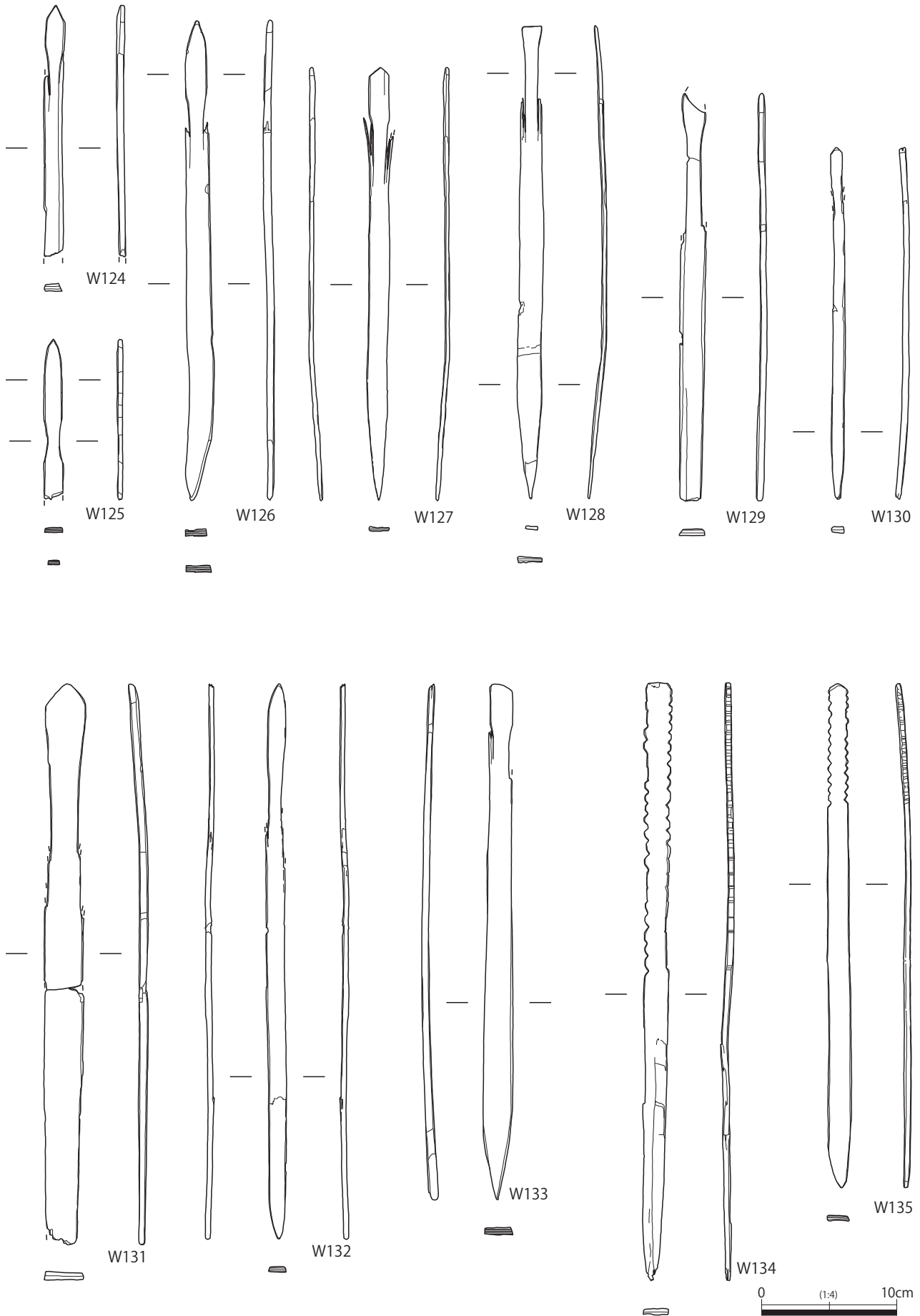
d型は、平面形が台形を呈するものと平行四辺形の2種類があり、両端の切り欠く角度や幅は一定しない。W143は齋串(d型)に分類したが、齋串以外の可能性もある。

第4-3表 型式別齋串点数表

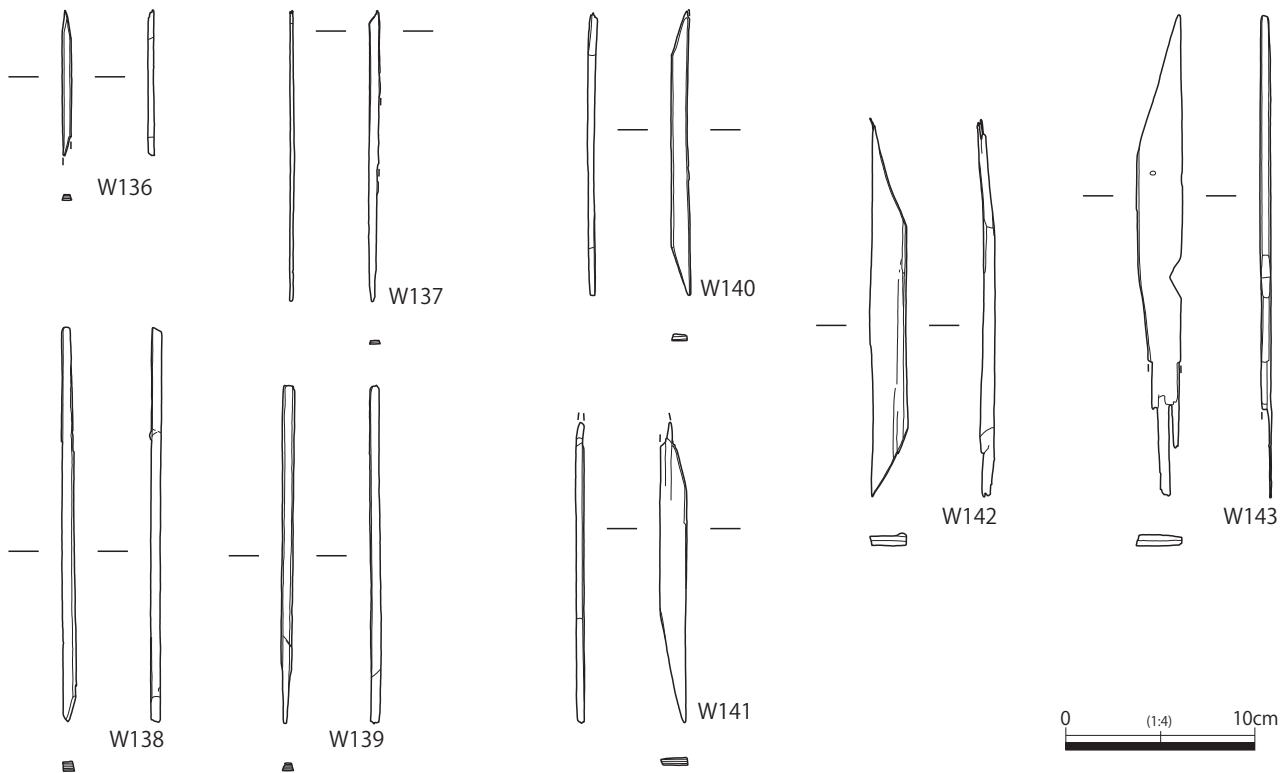
	a型	b型	c型	d型	計
47・48流路	1	33	111	28	173
Ⅸ層	0	2	0	0	2
谷部(上層)	5	46	136	39	226
計	6	81	247	67	401



第4-53図 斎串(1)(47・48流路)



第4-54図 斎串(2)(谷部(上層)1)



第4-55図 齋串(3)(谷部(上層)2)

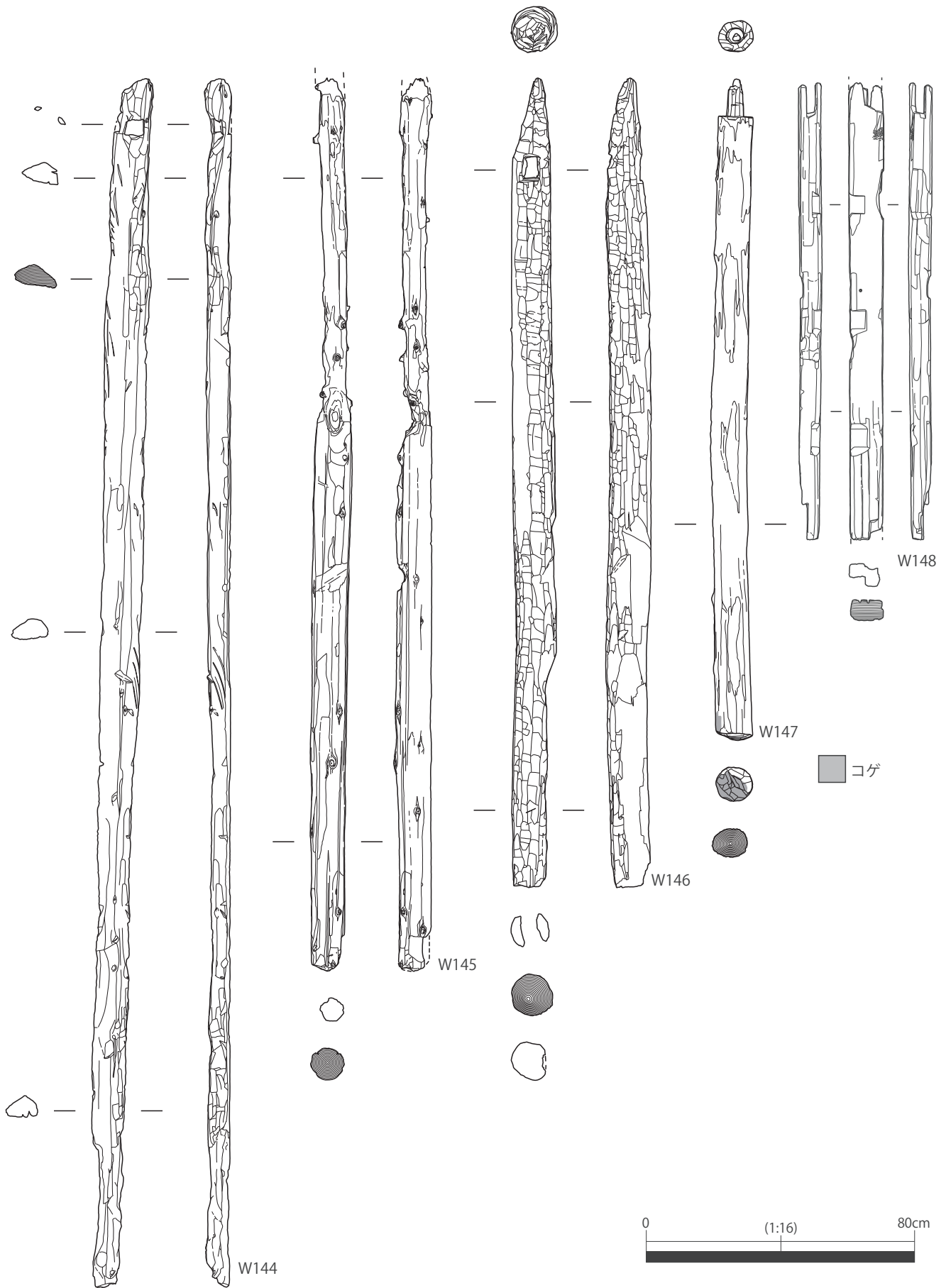
3 建築部材・杭(第4-56~58図 W144~163)

W144~W163は、建築物に関連する木製資料群である。具体には軸部建築部材、開口部材、梯子といった各種部材が出土しており、組成内容からは、高床式建物に関連する部材が多いと察する。ただし、出土木器における建築部材の総体的な出土量は少なく、概して遺存状態も不良なものが多い。

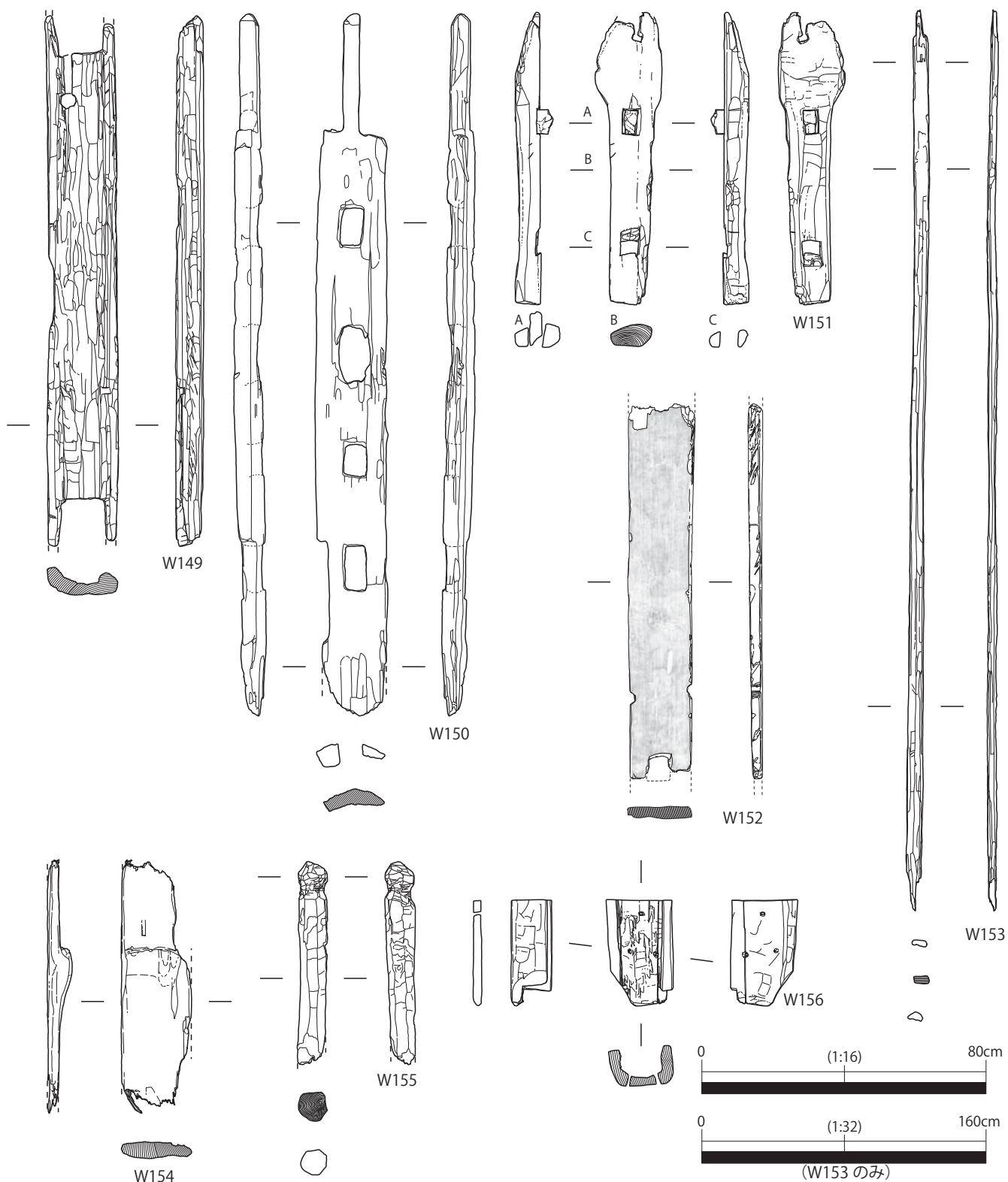
W144~148は柱材である。遺存長での言及になるが、2~3m台の長さを測るものが多く見受けられる。これらは谷部(下層)において、弥生時代中期~古墳時代前期の土器と共伴しているものが大半である。W144・146・148には貫孔、もしくは輪薙込の継手・仕口が観察出来る。このうち、W148の上端に見られる継手・仕口は輪薙込ではなく、貫孔の破損部とも捉えられるが、遺存状態が不良のため断定は困難である。W147については、正面上端に丁寧な加工で柄が作り出されている。下端部も破損していない。下端よりやや上方には、機能時における地下と地上境の風蝕差と考えられる表面の色調変化がある。W145の表面には、素材となる材の節が多く残存するのに対し、W146は手斧で表面を丁寧に加工している。

W149は、楣もしくは蹴放しの可能性がある部材である。正面上方の孔が貫通していることから、楣であろうか。ただし、横断面が緩やかなU字状を成すこと等から考えて、木樋に転用された可能性もある。W150~152は床に関連する部材である。このうちW150およびW151は台輪、W152は床板と考える。W151の孔内には方形状の材が差し込まれた状態で出土した。W152の表面には、やや粗い切削痕が観察出来る。この資料の正面下端には貫孔状の加工が、またその上方20cm付近には両側縁からの挟りがある。

W153は大引もしくは柱と推定する長大な建築部材で、遺存長は5mを超える。正面上下両端を尖頭化させる加工が施されている。横断面はややいびつな半円形、もしくは長方形を成す。軸部に欠き



第4-56図 建築部材(1)



第4-57図 建築部材(2)

第4章 1区の調査成果

込みに相当する加工痕跡は見受けられない。W154は刻み梯子の一部である。足掛部分は一段のみ視認出来る。使用頻度が高いためか、足掛部分の角は摩耗したように丸みを帯びている。W155は先端が有頭棒状に加工されていることから、垂木の一部と考える。先端の加工はほぼ全周から加えられているものの、やや粗く均質的ではない。W156は木樋である。接続する他の部材に結合させるために穿たれたと考えられる小孔が、3箇所確認出来る。

W157～163は杭・矢板である(第4-58図)。このうちW157～161は46杭列を構成する代表的形態の杭もしくは矢板である。杭群の多くは芯去材を用いているが、W160のような芯持材も使用している。ただし、46杭列における芯持材の割合は低い。W161のようなみかん割材の選択も見受けられる。W162については、組み合わせの部材として使用した後、杭に転用したものである。貫通および未貫通の柄穴が複数方向に残っており、その一端を削り出して尖頭化している。W163は谷部(下層)出土の杭であるが、表面には、杭として不必要な加工痕跡が見られるのに加え、他の杭との法量の違いから考えて、本来は柱などの建築部材を転用した杭と考える。

4 農具(第4-59図 W164～167)

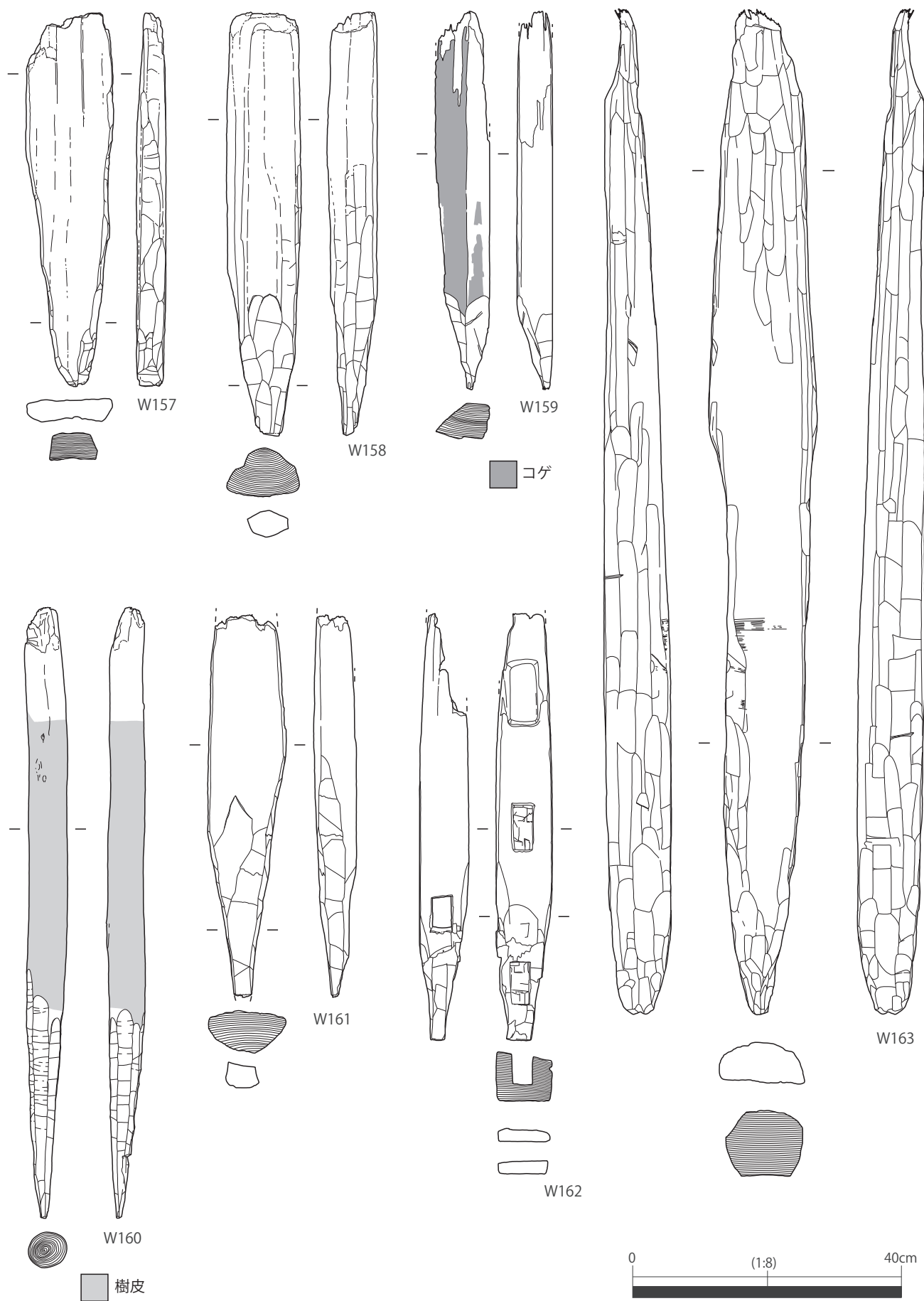
W164～W167は、農耕に関連する木製品である。W164は田舟である。本来の半分以下の遺存状態であると考えられるが、両端は残存しており、全長は復元出来る。内面の一部が焦げていることから、刳貫時の状態を示しているのであろう。W165は杵型田下駄の縦杵材である。足板を載せる棒状材の入る孔が5箇所残っているが、正面図上下端は破損している。残りの3箇所の孔内には、棒状材が残存している。いずれもやや角柱状の材が入っている。W166は足板である。杵と接合させるための小孔が、正面に計8箇所穿たれている。いずれの孔内にも、接合にかかる部材等は残っていない。W167は高足型田下駄の部材である。正面図中央に、やや細長い孔が穿たれている。両端に向かって先細りするが、一端(正面図上端)のみ先端が急激に細くなるよう加工されている。

5 漁労具(第4-59図 W168)

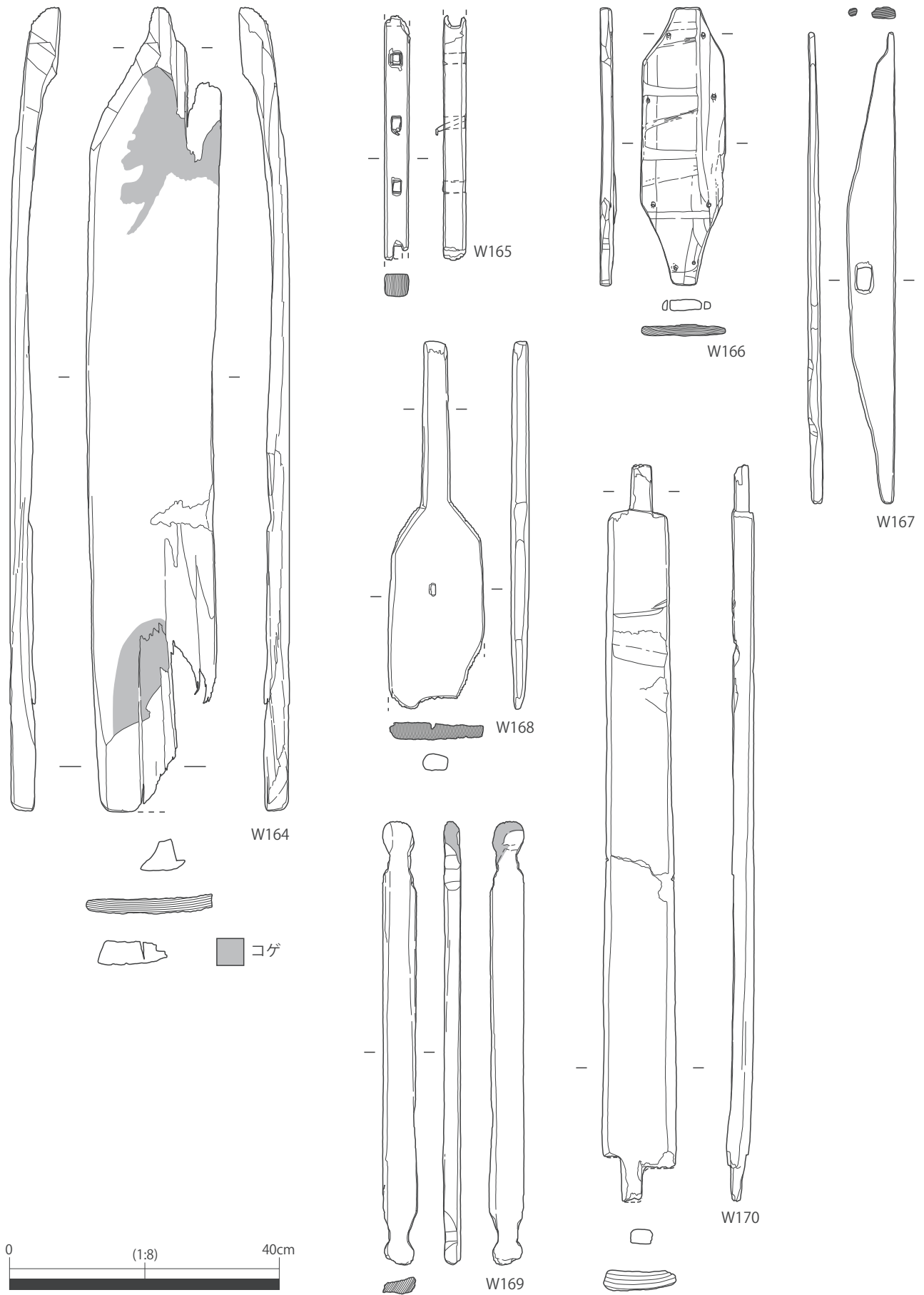
W168は櫂状製品と考えられる。正面下半が身、上半が柄と考えるが、柄の上方、また身の下端は欠損している。櫂の種類の中では、平面形は長方形を呈し、柄から身へはゆるやかに移行し、なで肩状となるタイプであろう。身部中央やや上方には、2×1cmの孔があるが、裏面側まで貫通していない。

6 紡織具(第4-59図 W169・170)

W169および170は紡織具と推定する部材である。W170は板状の素材を用い、その板材(身部)両端より細長く直線的に伸びる加工がある。上端の把手加工は幅の中央付近に施されているが、下端の把手加工はやや左に寄っている。W169も板状素材を用い、両端に刳り込みがある資料である。いずれの資料もその加工の特徴から、経巻具もしくは布巻具と考える。



第4-58図 杭・矢板



第4-59図 農具・漁労具・紡織具

7 容器(第4-60図 W171~175)

W171~W175は容器類である。W171~173は曲物、W174と175は刳物で、後者はいわゆる槽・盤類に該当する。

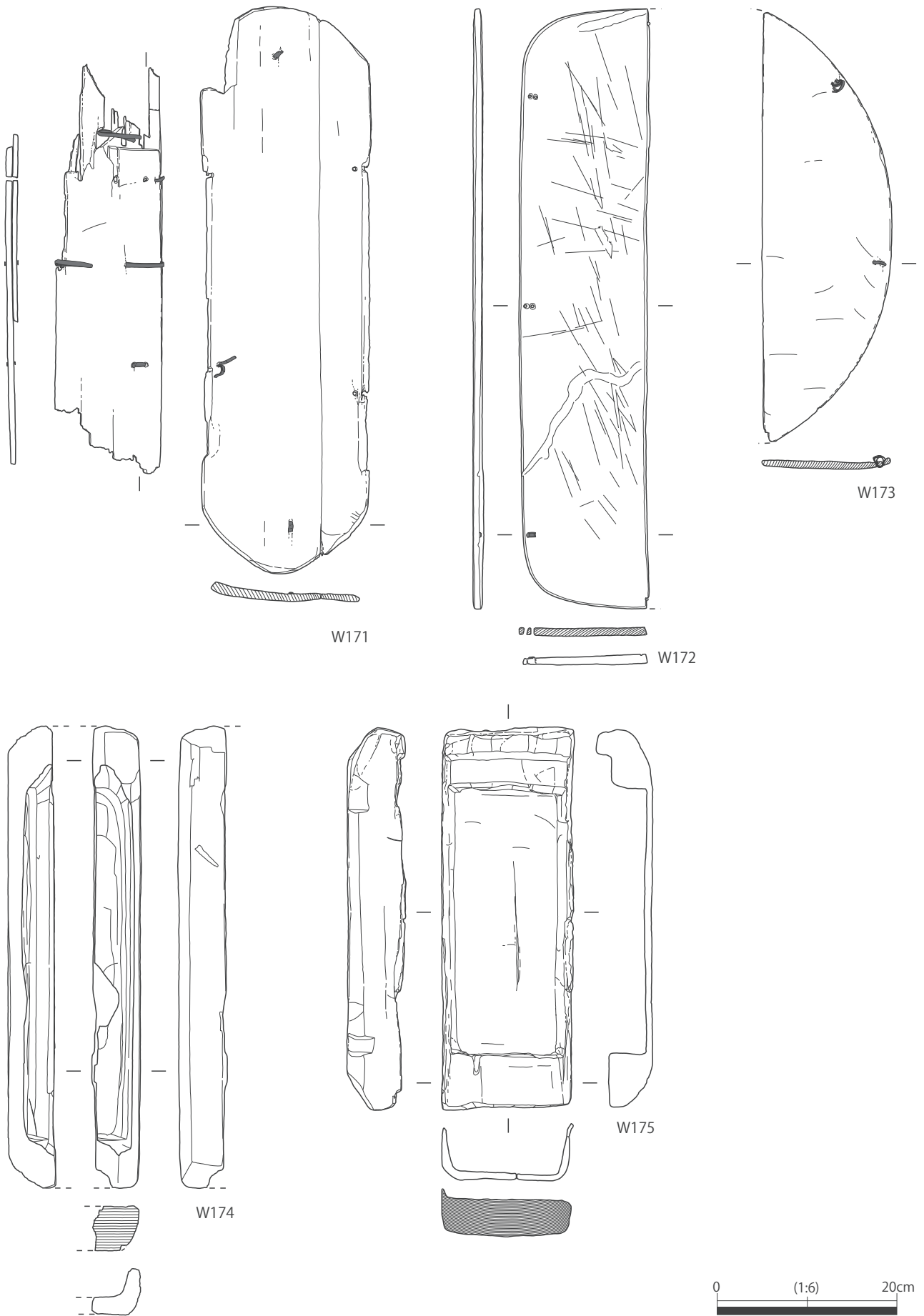
W171は、底板(右図)と側板(左図)のセット関係がうかがえる資料である。孔の間隔・位置関係から鑑みて、底板の左側縁と側板の右側縁が樺皮紐によって結合していたと察する。底板正面図緑側縁付近には、2箇所孔が穿たれており、底板右側縁についても、左側縁同様の側板が付くものと考えられる。底板正面図上下端部付近にも、端部より5cm程度内側に1箇所ずつ孔があり、いずれにも樺皮紐が残存している。側板は両端を欠失しており、短軸に向かう端部の加工状況は不明である。厚さ5mm程度の薄板を、2枚しっかりと重ね合わせている。現況においても、少なくとも4箇所で重ね合わせのための孔が確認出来る。

W172は底板である。全体の半分程度の遺存度と察する。正面形状から長方形曲物の可能性が示唆され、類例は良田平田遺跡(鳥取市：高尾編2014)の古代の溝から出土している。正面図左側縁付近に、3箇所の孔の配置を確認出来る。切目というよりは孔に近い状態である。それぞれの箇所で2つの近接する孔がセットを成し、正面図下端付近の孔のように、樺皮紐が通っていたのであろう。板の表面には、長軸方向にやや斜行する線状痕(刃物痕)が複数視認出来る。

W173は円形曲物の底板である。いわゆる「樺皮結合曲物」(町田・上原編前掲)で、円盤内面周縁に段を有しないことから、樺皮結合曲物B類に該当しよう。樺皮の残存する孔が2箇所確認できるうえ、正面図下端にもその可能性が高い挟りが見受けられる。現存する円周からは、直径50cm弱の曲物であったと推定する。

W174は、全長約50cmを呈する刳物である。刳り込みの加工はやや粗い。

W175は全長約42cmを呈する刳物である。側面および底面は非常に薄く仕上げられており、厚さは1cmに満たない。このため、底面の中央付近は縦方向に割れかかっている。刳り込み部分の正面図上下両端は、製品の長軸方向両端部から6~7cmの位置で垂直に上がる。特に上端は、2段に仕上げられている。



第4-60図 容器、槽・盤類

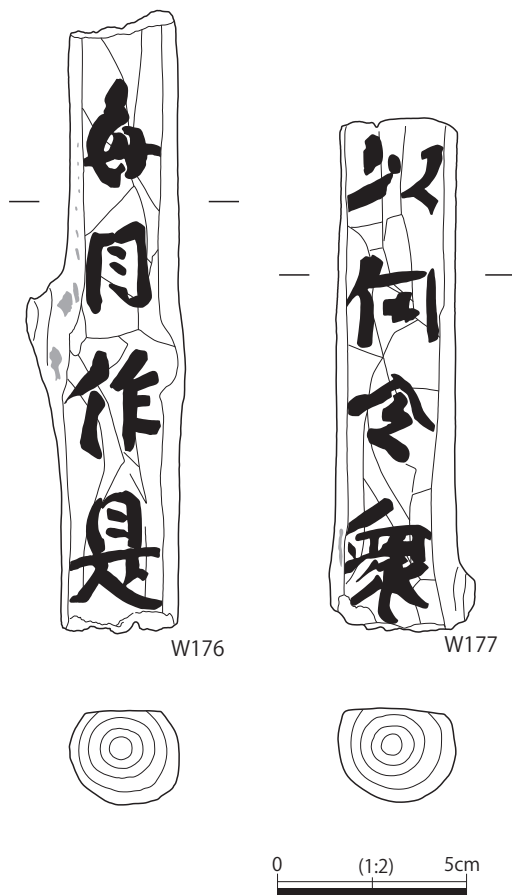
8 その他(第4-61・62図 W176~178)

W176および177は、共に広葉樹の枝材の一面を整形した棒状材（法華経棒）である。前者には「每自作是(念)」を、一方後者には「以何令衆(生)」を、それぞれの整形した平坦面に墨書する。いずれのくだりも、法華経如来寿量品第十六(『自我偈』)の一節「每自作是意以何令衆生得入無上慧速成就仏身」の一部を示す(註1)。両者は接合関係を成さない。W176・177ともに、7世紀後半に埋没したと考える谷部(上層)出土として取り上げたが、遺物の性格を考慮すると、むしろⅧ層出土の可能性が高い。

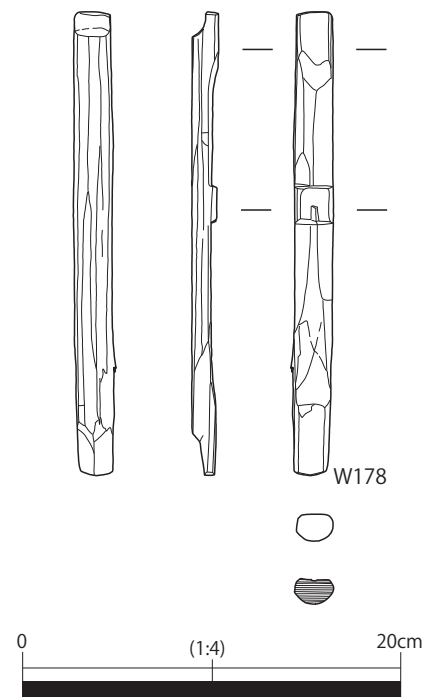
W178は、用途不明の棒状材である。正面図上下両端および中央付近に丁寧な加工が施されている。上端は裏面側から正面側に向かって湾曲するように削り出している一方、下端は裏面側の中央に稜が形成されるよう、端部に向かって加工が施されている。正面側は、中央やや上方に方形の凸部を作り出している。抽象的な形状からは、舟形の可能性も示唆される。

【註】

註1：奈良文化財研究所山本崇氏の御教示による。



第4-61図 法華経棒



第4-62図 不明木製品

第7節 遺物観察表

第4-4表 土器観察表(1)

挿図番号	掲載番号	出土地区	遺構・層位	器種	器種	器種	量量 (cm)	特徴	胎土	焼成	色調	残存率	備考	取上番号
4-33	Po1	T30-6d-3A-8f	Ⅷ層	須恵器	坏		高：△2.7 口：※8.4 底：※8.4	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：体部回転ナデ、底部回転ナデのち不定方向のナデ	密	良	内外面：5Y8/1 灰白色	20%	外面底部墨書「南」	1292
4-33	Po2	T30-6d-3A-8e	Ⅷ層	瓦質土器	鍋		高：△2.7 口： 底：	内外面：回転ナデ	密	良	外面：N5/ 灰色 内面：N4/ 灰色	10%未満	外面煤付着	938
4-33	Po3	T30-6d-3A-7f	Ⅷ層	瓦質土器	羽釜		高：△3.0 口： 底：	外面：口縁部～体部ヨコナデ 内面：指オサエ	密	良	外面：N5/ 灰色 内面：N8/ 灰白色	10%未満	外面煤付着	1307
4-33	Po4	T30-6d-3A-8j	Ⅷ層	土製品	土馬		長：15.7 幅：7.0 厚：5.6	外面：ヘラケズリのちナデ	密	良	全面：10YR7/2 にぶい黄褐色	80%	前足・後足それぞれ1本欠損	734
4-33	Po5	T30-6d-3A-6i	Ⅷ層	土製品	土馬の脚		長：4.6 幅：1.7 厚：1.7	外面：ナデ	密	良	全面：25Y7/3 浅黄色	10%未満		781
4-34	Po6	T30-6d-4A-1i	Ⅸ層	須恵器	高台付坏		高：△2.6 口： 底：7.9	外面：体部～底部回転ナデ 内面：不定方向のナデ	密	良	外面：7.5Y6/1 灰色 内面：5Y5/1 灰色	50%		1552
4-34	Po7	T30-6d-4A-1i	Ⅸ層	須恵器	蓋		高：△2.6 口：※12.4 底：	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、つまみ付近回転ナデ 内面：口縁部～天井部回転ナデ	密 (3mm以下の砂粒含)	良	内外面：7.5Y5/1 灰色	40%	つまみ剥離	1572
4-34	Po8	T30-6d-3A-7j	Ⅸ層	土製品	土馬		長：9.6 幅：3.9 厚：3.0	外面：ヘラケズリのちナデ	密	良	全体：10YR7/3 にぶい黄褐色	50%	頸部・両足・尾部欠損	1935
4-34	Po9	T30-6d-3A-7j	Ⅸ層	土製品	土馬の脚		長：3.1 幅：1.9 厚：1.7	外面：ヘラケズリのちナデ	密	良	全体：7.5YR6/4 にぶい橙褐色	10%未満		1935
4-35	Po10	T30-6d-3A-10e	48流路	弥生土器	高坏		高：△9.4 口：※25.8 底：	外面：口縁部キザミ目、ヨコナデ、坏部～脚部縦方向のヘラミガキ 内面：口縁部ヨコナデ、坏部縦方向のヘラミガキ、底部ミガキのちナデ、脚部ナデ	密 (3mm以下の砂粒含)	良	内外面：10YR5/2 灰黄褐色	坏部50%	外面坏部煤付着	1657
4-35	Po11	T30-6d-3A-10f	48流路	須恵器	蓋		高：2.5 口：10.4 底：	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリ、つまみ回転ナデ 内面：口縁部～天井部回転ナデ、天井部ナデ	密 (4mm以下の砂粒含)	良	内外面：7.5Y6/1 灰色	95%		1261
4-35	Po12	T30-6d-3A-9e	48流路	須恵器	鉢		高：5.7 口：7.6 底：	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部不定方向のヘラケズリ 内面：口縁部～底部回転ナデ	密 (5mm以下の砂粒含)	良	内外面：5Y6/1 灰色	100%		1505
4-35	Po13	T30-6d-3A-10e	48流路	須恵器	壺		高：△3.4 口： 底：※9.8	外面：体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：回転ナデ	密	良	内外面：5Y7/1 灰白色	50%	内面底部墨書「大垣」	1656
4-35	Po14	T30-6d-4A-2g	48流路	須恵器	高台付坏		高：4.2 口：11.9 底：8.6	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁部～底部回転ナデ	密 (3mm以下の砂粒含)	良	内外面：N6/ 灰色	100%	外面体部自然袖付着	1446
4-35	Po15	T30-6d-3A-10e	48流路	須恵器	壺		高：△16.1 口： 底：	外面：回転ナデ、肩部に沈線2条 内面：回転ナデ	密	良	内外面：N5/ 灰色	40%	外面自然袖付着	1657
4-35	Po16	T30-6d-4A-3g	47(新)流路	須恵器	蓋		高：2.7 口：14.7 底：	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転糸切りのちナデ 内面：口縁部～天井部回転ナデ	密	良	内外面：5Y7/1 灰白色	95%	本来は完形品 外面天井部墨書「□井」	1850
4-35	Po17	T30-6d-4A-1g	47(新)流路	須恵器	蓋		高：2.0 口：14.2 底：	外面：口縁部回転ナデ、天井部回転糸切り 内面：口縁部～天井部回転ナデ	密	良	内外面：N7/ 灰白色	60%		1828
4-35	Po18	T30-6d-4A-3g	47(新)流路	須恵器	坏		高：4.4 口：12.2 底：7.2	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁部～底部回転ナデ	密	やや良	内外面：5Y8/1 灰白色	95%	本来は完形品	1847
4-35	Po19	T30-6d-4A-1f	47(新)流路	須恵器	坏		高：4.6 口：12.4 底：7.4	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁部～底部回転ナデ	密 (8mm以下の砂粒含)	良	内外面：N7/ 灰白色	90%		1615
4-35	Po20	T30-6d-4A-3f	47(新)流路	土師器	坏		高：4.7 口：※12.8 底：※7.7	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁部～底部回転ナデ	密	良	内外面：2.5Y7/2 灰黄色	30%	外面底部墨書「□」	1288
4-35	Po21	T30-6d-4A-2g	47(新)流路	土師器	坏		高：4.5 口：12.0 底：6.0	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁部～底部回転ナデ	密	良	内外面：2.5Y7/3 浅黄色	90%	口縁部打欠き 内外面体部墨痕 体部外面黒斑	1872
4-35	Po22	T30-6d-4A-1f	47(新)流路	須恵器	皿		高：2.1 口：12.6 底：7.2	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁部～底部回転ナデ	密 (6mm以下の砂粒含)	良	内外面：10YR7/2 にぶい黄褐色	100%		1613
4-35	Po23	T30-6d-4A-2g	47(新)流路	須恵器	皿		高：2.3 口：12.9 底：8.5	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁部～底部回転ナデ	密	良	内外面：N6/ 灰色	100%		1914
4-35	Po24	T30-6d-4A-3g	47(新)流路	須恵器	高台付皿		高：2.8 口：12.8 底：8.4	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁部～底部回転ナデ	密 (2mm以下の砂粒含)	良	内外面：N5/ 灰色	95%	口縁部打欠き、 転用硯、内面・ 外面底部墨痕 内面自然袖付着	1913
4-35	Po25	T30-6d-4A-1f	47(新)流路	土師器	甕		高：△21.4 口：27.2 底：	外面：口縁部～体部上半ナデ、指オサエ、 体部下半～底部ケズリのちナデ、指 オサエ 内面：口縁部～底部ナデ、指オサエ	密	良	内外面：10YR5/3 にぶい黄褐色	80%	外面および内面 体部下半煤付着	1611
4-35	Po26	T30-6d-4A-2g	47(新)流路	土師器	皿		高：1.7 口：8.6 底：5.7	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁部～底部回転ナデ	密	良	内外面：10YR5/3 にぶい黄褐色	100%		1446
4-35	Po27	T30-6d-4A-2f	47(新)流路	土師器	皿		高：1.8 口：8.6 底：5.4	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁部～底部回転ナデ	密	良	内外面：2.5Y7/2 灰黄色	100%		1873
4-35	Po28	T30-6d-4A-3g	47(新)流路	土師器	皿		高：2.0 口：8.6 底：4.8	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部回転糸切り 内面：口縁部～底部回転ナデ	密	良	外面：5Y5/2 灰オリーブ色 内面：2.5Y5/2 暗灰黄色	100%		1851
4-35	Po29	T30-6d-4A-3g	47(新)流路	土師器	皿		高：2.0 口：8.6 底：4.9	外面：口縁部～体部回転ナデ、底部ナデ 内面：口縁部～底部回転ナデ	密	良	内外面：10YR5/3 にぶい黄褐色	90%	口縁部ゆがみ 顕著	1849
4-35	Po30	T30-6d-4A-1f	47(新)流路	土師器	坏		高：3.6 口：14.4 底：	外面：口縁部ヨコナデ、体部指オサエ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、指 オサエ	密 (3mm以下の砂粒含)	良	内外面：2.5Y7/2 灰黄色	40%		1604

第4-5表 土器観察表(2)

挿図番号	掲載番号	出土地区	遺構・層位	器種	法量 (cm)	特徴	胎土	焼成	色調	残存率	備考	取上番号	
4-36	Po31	T30-6d-3A-7h	谷部(上層)	縄文土器	深鉢	高:△2.8 口:※26.6 底:	外面:貼付凸帯上にキザミ目、体部条痕文 内面:口縁部ヨコナデ、体部条痕文	密 (3mm以下の砂粒含む)	良	外面:10YR6/2 灰黄褐色 内面:10YR6/1 褐色	10%未満		1762
4-36	Po32	T30-6d-3A-9h	谷部(上層)	弥生土器	甕	高:△9.7 口:※28.6 底:	外面:口縁部キザミ目、口縁部ヨコナデ、体部ナデ、指オサエ 内面:口縁部横方向のハケメのちナデ、体部ナデ、指オサエ	密 (4mm以下の砂粒多く含む)	良	内外面:10YR4/2 灰黄褐色	10%未満	内面体部接合痕	1751
4-36	Po33	T30-6d-3A-7f	谷部(上層)	弥生土器	甕	高:△25.4 口:※18.2 底:	外面:口縁部一部上半ヨコナデ、体部上半横方向のヘラミガキ、刺突文、体部下半縦方向のヘラミガキ、体部下端縦方向のハケメ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ナデ	密	良	内外面:10YR7/2 にぶい黄褐色	80%	外面体部および内面体部下半煤附着	1747
4-36	Po34	T30-6d-3A-10i	谷部(上層)	弥生土器	甕	高:△5.8 口:※17.2 底:	外面:口縁部1条の沈線、口縁部縦方向のハケメ、頸部ナデ、体部キザミ目のちハケメ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部ハケメのちナデ、体部ヘラケズリ	密 (1mm以下の砂粒含む)	良	内外面:10YR5/2 灰黄褐色	10%未満	外面に赤彩薄く残る	1800
4-36	Po35	T30-6d-3A-10i	谷部(上層)	弥生土器	甕	高:△5.3 口:※15.4 底:	外面:口縁部3条の凹線、頸部ヨコナデ、体部上半ハケメのちキザミ目 内面:口縁部横方向のハケメ、体部ヘラケズリ	密 (2mm以下の砂粒含む)	良	内外面:7.5YR5/3 にぶい褐色	10%未満	内面口縁部煤附着	1801
4-36	Po36	T30-6d-3A-7i	谷部(上層)	土師器	甕	高:32.0 口:16.3 底:	外面:口縁部-頸部ヨコナデ、体部-底部不定方向のハケメ 内面:口縁部-頸部ヨコナデ、体部-底部ヘラケズリ、底部指オサエ	密 (3mm以下の砂粒多く含む)	良	内外面:10YR7/2 にぶい黄褐色	80%	外面体部および内面体部下半煤附着	1826
4-36	Po37	T30-6d-4A-3g	谷部(上層)	土師器	高坏	高:12.9 口:16.4 底:8.9	外面:坏部口縁部-体部ヘラケズリのちナデ、体部-底部ナデ、脚柱部縦方向のハケメのちヘラミガキ、脚柱部ナデ 内面:坏部ヘラミガキ、脚柱部上半ヘラケズリ、下半ナデ、脚柱部横方向のハケメ	密	良	内外面:10YR7/2 にぶい黄褐色	80%		1870
4-36	Po38	T30-6d-4A-2h	谷部(上層)	土師器	高坏	高:14.9 口:21.2 底:13.0	外面:口縁部-坏部体部ヨコナデ、坏部底部ハケメのちヘラミガキ、脚柱部縦方向のハケメのちヘラミガキ 内面:口縁部-坏部体部横方向のヘラミガキのち斜め方向のヘラミガキ、底部ヘラミガキ、脚柱部ヘラケズリ、脚柱部横方向のハケメ	密	良	外面:10YR8/2 灰白色 内面:5Y6/1 灰色	70%	内面脚柱部ヘラ記号	1754
4-36	Po39	T30-6d-3A-8i	谷部(上層)	土師器	壺	高:△12.9 口:11.4 底:	外面:口縁部ヨコナデ、頸部-体部不定方向のハケメ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 (5mm以下の砂粒含む)	良	外面:2.5Y7/1 灰白色 内面:10YR6/2 灰黄褐色	60%		1811
4-36	Po40	T30-6d-3A-9g	谷部(上層)	土師器	甕	高:24.4 口:※17.4 底:	外面:口縁部-体部上半ヨコナデ、体部上半-底部不定方向のハケメ 内面:口縁部ヨコナデ、体部-底部ヘラケズリ	密 (3mm以下の砂粒多く含む)	良	内外面:10YR6/2 灰黄褐色	80%	体部外面煤附着	1717
4-36	Po41	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	土師器	脚付埴	高:△4.9 口:11.8 底:	外面:口縁部-坏部上半ヨコナデ、坏部下半ナデ、指オサエ、坏部下端-脚部ハケメ 内面:口縁部-坏部ヨコナデ、底部ヘラミガキ、ナデ	密 (4mm以下の砂粒多く含む)	良	外面:7.5YR7/4 にぶい褐色 内面:10YR8/2 灰白色	坏部95%		1652
4-36	Po42	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	土師器	脚付埴	高:8.4 口:12.6 底:7.5	外面:口縁部-坏部上半ヨコナデ、坏部下半ヘラケズリのちナデ、坏部底部-脚部ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ、坏部上半-底部ヘラミガキ、脚部ヨコナデ	密 (3mm以下の砂粒含む)	良	内外面:5YR7/6 褐色	80%		1654
4-36	Po43	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	須恵器	蓋	高:4.4 口:12.6 底:	外面:口縁部-天井部回転ナデ、天井部回転ヘラケズリのち回転ナデ、天井部ヘラ切りりのちナデ 内面:口縁部-天井部回転ナデ、天井部回転ナデのちナデ	密 (7mm以下の砂粒含む)	やや不良	内外面:5Y7/1 灰白色	100%		1668
4-36	Po44	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	須恵器	坏身	高:3.8 口:10.8 底:	外面:口縁部-底部回転ナデ、底部ヘラ切りのちナデ 内面:口縁部-底部回転ナデ、底部ナデ	密 (2mm以下の砂粒含む)	良	内外面:N5/ 灰色	100%		1668
4-36	Po45	T30-6d-3A-9g	谷部(上層)	須恵器	坏身	高:4.0 口:11.8 底:	外面:口縁部-底部回転ナデ、底部ヘラ切りのちナデ 内面:口縁部-底部回転ナデ、底部ナデ	密	良	内外面:N6/ 灰色	100%	口縁部外面漆附着	1718
4-36	Po46	T30-6d-3A-6j	46杭列	須恵器	短頸壺	高:△7.5 口:※6.4 底:	外面:口縁部-体部上半ヨコナデ、体部-底部回転ヘラケズリのち回転ナデ 内面:口縁部-体部回転ナデ、底部ナデ	密	良	内外面:N5/ 灰色	50%		732
4-37	Po47	T30-6d-4A-3g	谷部(下層)	縄文土器	深鉢	高:△13.9 口:※29.4 底:	外面:口縁部キザミ目、口縁部貼付凸帯、口縁部-体部上半ナデ、体部下半条痕文 内面:口縁部-体部ナデ、指オサエ	密 (5mm以下の砂粒含む)	良	内外面:10YR5/2 灰黄褐色	10%未満	体部上半接合痕内外面煤附着	2009
4-37	Po48	T30-6d-4A-1j	谷部(下層)	縄文土器	深鉢	高:△12.9 口:※31.3 底:	外面:口縁部キザミ目、口縁部貼付凸帯、体部上端ナデ、体部条痕文 内面:ナデのち指オサエ	密 (3mm以下の砂粒含む)	良	外面:10YR7/3 にぶい黄褐色 内面:10YR4/2 灰黄褐色	10%未満	外面煤附着	2058
4-37	Po49	T30-6d-4A-1j	谷部(下層)	縄文土器	深鉢	高:△5.7 口: 底:	外面:口縁部ナデ、口縁部貼付凸帯、体部条痕文 内面:条痕文	やや密 (2mm以下の砂粒含む)	良	内外面:2.5Y7/2 灰黄色	10%未満		2058
4-37	Po50	T30-6d-3A-7i	谷部(下層)	縄文土器	深鉢	高:△5.4 口: 底:	外面:口縁部貼付凸帯上にキザミ目、体部上端刺突文、体部条痕文 内面:条痕文	密 (3mm以下の砂粒含む)	良	外面:10YR7/3 にぶい黄褐色 内面:2.5Y7/3 浅黄色	10%未満	外面体部煤附着	1889
4-37	Po51	T30-6d-3A-6i	谷部(下層)	弥生土器	甕	高:△6.7 口: 底:	外面:口縁部キザミ目、口縁部-体部上端ナデ、指オサエ、体部縦方向のハケメ 内面:口縁部ヨコナデ、体部上端横方向のハケメ	密 (3mm以下の砂粒含む)	良	外面:10YR6/2 灰黄褐色 内面:10YR7/1 灰白色	10%未満		1812
4-37	Po52	T30-6d-3A-9f	谷部(下層)	弥生土器	甕	高:△8.7 口: 底:	外面:口縁部キザミ目、体部上端に3条の沈線、体部ハケメ 内面:ナデ	密 (3mm以下の砂粒含む)	良	内外面:10YR7/2 にぶい黄褐色	10%未満		2071
4-37	Po53	T30-6d-4A-1i	谷部(下層)	弥生土器	壺	高:△6.9 口:※14.0 底:	外面:口縁部-頸部ヨコナデ、2条の凹線 内面:口縁部ヨコナデ、以下風化のため調整不明	密 (3mm以下の石英多く含む)	良	内外面:7.5YR6/3 にぶい褐色	10%未満		2040
4-37	Po54	T30-6d-3A-9g	谷部(下層)	弥生土器	壺	高:△13.0 口: 底:	外面:胴部上半に削り出し凸帯、羽状文、その他風化のため調整不明 内面:指オサエ、その他風化のため調整不明	密 (4mm以下の砂粒含む)	やや良	内外面:2.5YR6/8 褐色	10%未満	風化顕著	2072

第4章 1区の調査成果

第4-6表 土器観察表(3)

挿入番号	掲載番号	出土地区	遺構・層位	器種	法量 (cm)	特徴	胎土	焼成	色調	残存率	備考	取上番号	
4-37	Po55	T30-6d-3A-8i	谷部(下層)	弥生土器	壺	高:△16.5 口: 底:	外面:ヘラミガキ、貼付凸帯 内面:ヘラミガキ、指オサエ	密 (2mm以下の砂粒多く含む)	良	内外面:10YR8/3 浅黄褐色	10%未満		2032
4-37	Po56	T30-6d-3A-10i	谷部(下層)	弥生土器	甕	高:△8.3 口:※14.8 底:	外面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部縦方向のハケメ、ヘラミガキ 内面:口縁部ヨコナデ、体部縦方向のハケメのちナデ、指オサエ	密 (3mm以下の砂粒含む)	良	外面:10YR6/3 にぶい黄褐色 内面:2.5Y5/1 黄灰色	10%未満	外面煤付者	2052
4-37	Po57	T30-6d-4A-3g	谷部(下層)	弥生土器	甕	高:△8.8 口:※18.2 底:	外面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部ハケメ 内面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部ハケメのちナデ、指オサエ	密 (2mm以下の砂粒含む)	良	内外面:2.5Y8/2 灰白色	10%未満		2009
4-37	Po58	T30-6d-4A-1j	谷部(下層)	弥生土器	壺	高:△9.3 口:22.6 底:	外面:口縁部縦線、口縁部指オサエ、頸部縦方向のハケメ、2条の貼付凸帯 内面:口縁部ナデ、頸部ナデ、指オサエ	密 (3mm以下の石英含む)	良	内外面:7.5YR8/1 灰白色	口縁部100%		2048
4-37	Po59	T30-6d-4A-3h	谷部(下層)	弥生土器	壺	高:△5.9 口:※27.0 底:	外面:口縁部縦線、口縁部不定方向のハケメのちナデ、頸部縦方向のハケメ、指オサエ、貼付凸帯 内面:口縁部貼付凸帯、列点文、口縁部ナデ、頸部ハケメ、横方向のヘラミガキ	密	良	内外面:10YR5/2 灰黄褐色	口縁部50%		1342
4-37	Po60	T30-6d-3A-10i	谷部(下層)	弥生土器	甕	高:△9.4 口:※16.0 底:	外面:口縁部3条の凹線、口縁部ヨコナデ、体部縦方向のハケメ 内面:口縁部横方向のハケメ、体部ヘラケズリ、ナデ	密 (4mm以下の砂粒含む)	良	内外面:7.5YR7/3 にぶい橙色	10%未満		2052
4-37	Po61	T30-6d-3A-9g	谷部(下層)	弥生土器	甕	高:△7.5 口:※18.4 底:	外面:口縁部7条の平行沈線、頸部ヨコナデ、体部キザミ目 内面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 (3mm以下の砂粒含む)	良	内外面:2.5Y7/2 灰黄色	10%未満		2067
4-38	Po62	T30-6d-4A-1i	谷部(下層)	土師器	甕	高:21.8 口:※14.4 底:	外面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部上端横方向のハケメ、キザミ目、体部～底部不定方向のハケメ 内面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部上半ヘラケズリ、体部下半～底部ヘラケズリ、指オサエ	密	良	内外面:10YR8/1 灰白色	60%	外面体部下半煤付者	2040
4-38	Po63	T30-6d-4A-3g	谷部(下層)	土師器	甕	高:△4.4 口:※14.5 底:	外面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ 内面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良	外面:10YR7/2 にぶい黄褐色 内面:10YR6/2 灰黄褐色	10%未満	外面煤付者	2009
4-38	Po64	T30-6d-4A-1i	谷部(下層)	土師器	甕	高:△5.3 口:※15.5 底:	外面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部縦方向のち横方向のハケメ 内面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良	内外面:10YR8/2 灰白色	10%未満	外面煤付者	2040
4-38	Po65	T30-6d-3A-9h	谷部(下層)	土師器	甕	高:△4.7 口:※21.0 底:	内外面:ヨコナデ	密	良	内外面:2.5Y8/1 灰白色	10%未満		2073
4-38	Po66	T30-6d-4A-3g	谷部(下層)	土師器	甕	高:△10.2 口:10.8 底:	外面:口縁部～頸部ヨコナデ、刺突文、体部ハケメ 内面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密	良	内外面:10YR5/2 灰黄褐色	10%	頸部～体部接合痕 内外面煤付者	1903
4-38	Po67	T30-6d-3A-9h	谷部(下層)	土師器	甕	高:26.0 口:15.2 底:	外面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部不定方向のハケメ 内面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部ヘラケズリ、体部下半指オサエ	密	良	外面:7.5YR8/2 灰白色 内面:7.5YR7/3 にぶい橙色	100%	外面体部下半煤付者	2086
4-38	Po68	T30-6d-3B-10a	谷部(下層)	土師器	高坏	高:△8.0 口:11.2 底:	外面:口縁部ヨコナデのちヘラミガキ、坏部体部～脚部ハケメのちヘラミガキ 内面:坏部横方向のヘラミガキ、脚部ヘラケズリ	密	良	内外面:10YR7/2 にぶい黄褐色	60%	脚柱部穿孔あり	2031
4-38	Po69	T30-6d-3B-10a	谷部(下層)	土師器	小型丸底壺	高:8.4 口:9.4 底:	外面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部不定方向のハケメのち一部ナデ 内面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ、指オサエ	密 (3mm以下の砂粒含む)	良	内外面:10YR7/3 にぶい黄褐色	90%		2030
4-38	Po70	T30-6d-3A-9g	谷部(下層)	土師器	小型丸底壺	高:8.4 口:6.0 底:	外面:口縁部～体部上半ヨコナデ、体部上半ヘラミガキ、体部下半～底部ハケメ 内面:口縁部ヨコナデ、体部～底部ヘラケズリ	密	良	外面:2.5YR5/8 明赤褐色 内面:10YR8/2 灰白色	100%	全体的に赤彩	2066
4-39	Po71	T30-6d-4A-1F	68土坑	弥生土器	甕	高:27.5 口:※17.3 底:4.9	外面:口縁部～頸部ヨコナデ、体部上半縦方向のハケメ、体部中央キザミ目、体部下半縦方向のヘラミガキ 内面:口縁部ヨコナデ、体部～底部ナデ	密	良	内外面:10YR7/2 にぶい黄褐色	30%	内外面煤付者	1823
4-39	Po72	T30-6d-4A-2F	59溝	弥生土器	甕	高:△3.9 口: 底:	外面:口縁部～体部上半ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 (3mm以下の石英含む)	良	内外面:10YR7/2 にぶい黄褐色	10%未満	外面煤付者	1923
4-39	Po73	T30-6d-4A-2f	59溝	弥生土器	甕	高:△4.6 口:※14.0 底:	外面:口縁部3条の凹線、口縁部～体部上半ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ、体部ヘラケズリ	密 (3mm以下の石英含む)	良	内外面:10YR6/3 にぶい黄褐色	10%未満	外面煤付者	1921
4-39	Po74	T30-6d-3A-6h	49溝	弥生土器	甕	高:△3.7 口: 底:	外面:口縁部4条の沈線、口縁部～頸部ヨコナデ、体部縦方向のハケメ 内面:口縁部ヨコナデ、指オサエ、体部ヘラケズリ	密 (2mm以下の砂粒含む)	良	内外面:7.5YR7/4 にぶい橙色	10%未満	外面煤付者	1780
4-39	Po75	T30-6d-3A-7h	49溝	弥生土器	甕	高:△2.9 口: 底:	外面:口縁部4条の沈線、口縁部～頸部ヨコナデ 内面:口縁部ヨコナデ	密 (3mm以下の砂粒多く含む)	良	内外面:7.5YR7/4 にぶい橙色	10%未満		1781
4-39	Po76	T30-6d-3A-7i	Ⅻ層	縄文土器	深鉢	高:△4.8 口: 底:	外面:口縁部貼付凸帯上にキザミ目、体部上端刺突文、体部条痕文 内面:口縁部ナデ、体部条痕文	密 (3mm以下の砂粒含む)	良	外面:10YR6/2 灰黄褐色 内面:10YR7/2 にぶい黄褐色	10%未満	外面煤付者	1763
4-39	Po77	T30-6d-4B-1a	9面	弥生土器	壺	高:27.8 口:14.7 底:10.2	外面:口縁部キザミ目、口縁部～頸部指オサエ、体部ヘラミガキ、底部ナデ 内面:口縁部ヨコナデ、頸部～底部ヘラミガキ、指オサエ	密 (4mm以下の砂粒含む)	良	内外面:2.5Y7/2 灰黄色	80%	外面黒斑	1822

第4-7表 石器観察表

挿図番号	掲載番号	出土地区	層位・遺構	器種	法量 (cm)	重量 (g)	特徴 (石材鑑定は財団職員の見目による)	備考	取上番号
4-40	S1	T30-6d-4A-1i	南北サブトレンチ1	敲石	長: 5.7 幅: 5.7 厚: 3.8	162	棒状礫素材、凝灰岩製		1517
4-40	S2	T30-6d-4A-2h	Ⅷ層	砥石	長: 5.8 幅: 4.8 厚: 1.7	57.5	JIS規格砥石目100~120程度、花崗岩製		791
4-40	S3	T30-6d-4A-3f	6面精査中	石錐	長: 10.3 幅: 5.6 厚: 2.0	139	稜線磨減進行、安山岩製		1623
4-40	S4	T30-6d-3A-10d	48流路	石包丁	長: 5.0 幅: 3.7 厚: 0.7	18.3	残存率約1/3、凝灰岩製		1577
4-40	S5	T30-6d-3A-9f	谷部 (上層)	二次加工剥片	長: 6.1 幅: 5.3 厚: 1.3	42.1	安山岩製		1863
4-40	S6	T30-6d-4A-3g	谷部 (下層)	二次加工剥片	長: 6.2 幅: 3.5 厚: 1.0	26.7	風化進行、安山岩製		1901
4-40	S7	T30-6d-3A-6h	Ⅷ層	石鏃	長: 1.3 幅: 2.1 厚: 0.3	0.9	基部のみ残存、安山岩製		779
-	S8	T30-6d-3A-6j	X層	台石	長: 210.1 幅: 186.5 厚: 78.0	4050	周縁一部欠損、平坦面中央やや凹む、花崗岩製	写真図版32-2	1984

第4-8表 鉄器観察表

挿図番号	掲載番号	出土地区	層位・遺構	器種	法量 (cm)	重量 (g)	特徴	備考	取上番号
4-41	F1	T30-6d-3A-9e	48流路	刀子	長: 30.9 幅: 3.5 厚: 0.9	刀: 206 鞘: 297 (保存処理後)	呑口式、目釘孔あり	鞘片付着、保存処理済	1556

第4-9表 木器観察表(1)

挿図番号	掲載番号	出土地区	遺構・層位名	種別	法量(cm)	特徴	年輪/寸	木取り	樹種(※)	備考	取上番号
4-42	W1	T30-6d-3A-8e	41流路	漆器椀	高: △21 口: 底:	内外面とも赤漆で草花を描く	24	板目	広葉樹	保存処理済	583-1
4-42	W2	T30-6d-3A-9e	41流路	漆器椀	高: △205 口: 底:	内面に赤漆が残る	15	板目	広葉樹	保存処理済	583-2
4-42	W3	T30-6d-3A-8e	44流路	漆器椀	高: △18 口: 底:	内面にわずかに赤漆が残る	10	追柁目	広葉樹	保存処理済	1214
4-42	W4	T30-6d-3A-10f	V層	漆器椀	高: △33 口: 底:	内面にわずかに赤漆が残る 内外面とも焦げあり	26	板目	広葉樹	保存処理済	623
4-56	W144	T30-6d-3A-8-9i	谷部 (下層)	柱材	長: 360.1 幅: 130 厚: 8.1		19	みかん割材			1931
4-56	W145	T30-6d-3A-9i	谷部 (下層)	柱材	長: 265.0 幅: 11.4 厚: 11.1		12	芯持材			1933
4-56	W146	T30-6d-3A-8i	谷部 (下層)	柱材	長: 240.8 幅: 12.8 厚: 12.7		14	芯持材			1928
4-56	W147	T30-6d-3A-8i	谷部 (下層)	柱材	長: 198.0 幅: 10.9 厚: 10.1		35	芯持材			1929
4-56	W148	T30-6d-3A-10h	谷部 (上層)	柱材	長: 135.1 幅: 10.5 厚: 6.8		20	板目		転用材か	1696
4-57	W149	T30-6d-3A-10g	48流路	椀	長: 149.2 幅: 20.1 厚: 7.9		20	追柁目			1322
4-57	W150	T30-6d-4A-2h	Ⅷ層	台輪	長: 195.3 幅: 20.2 厚: 8.0		15	柁目			1606
4-57	W151	T30-6d-4A-1h	谷部 (上層)	台輪	長: 81.2 幅: 18.6 厚: 7.1		8	芯持材			1551
4-57	W152	T30-6d-3A-9h	谷部 (上層)	床板	長: 104.8 幅: 18.1 厚: 4.1		11	柁目			1691
4-57	W153	T30-6d-4A-3g	谷部 (下層)	大引	長: 565.0 幅: 9.0 厚: 5.2		12	板目			1952
4-57	W154	T30-6d-3A-10j	Ⅷ層	梯子	長: 71.2 幅: 19.7 厚: 6.9	足掛部分1段のみ	18	柁目			1473
4-57	W155	T30-6d-3A-9e	48流路	垂木	長: 57.4 幅: 8.0 厚: 9.5		14	芯持丸太材			1531
4-57	W156	T30-6d-3A-8h	Ⅷ層	木樋	長: 30.0 幅: 18.5 厚: 2.4	3箇所穿孔あり	20	柁目			1548
4-58	W157	T30-6d-3A-6j	46杭列	矢板	長: 55.5 幅: 13.0 厚: 4.4		15	板目	針葉樹		3001
4-58	W158	T30-6d-3A-6j	46杭列	杭	長: 63.0 幅: 11.2 厚: 7.5		11	みかん割材			3010

※樹種鑑定は財団調査員の見目による

第4章 1区の調査成果

第4-10表 木器観察表(2)

挿図番号	掲載番号	出土地区	遺構・層位名	種別	法量 (cm)	特徴	年輪/寸	木取り	樹種(※)	備考	取上番号
4-58	W159	T30-6d-3A-6j	46杭列	杭	長:56.1 幅:8.0 厚:5.3	焦げあり	14	芯去材			3062
4-58	W160	T30-6d-3A-6j	46杭列	杭	長:91.2 幅:5.8 厚:5.7	一部樹皮が残る	12	芯持丸太材			3086
4-58	W161	T30-6d-3A-6j	46杭列	杭	長:56.7 幅:11.5 厚:6.3		11	みかん割材			3011
4-58	W162	T30-6d-3A-10f	48流路	杭	長:63.5 幅:9.4 厚:7.4	転用材	13	板目			1280
4-58	W163	T30-6d-3A-10f	48流路	杭	長:63.5 幅:9.4 厚:7.4	転用材	17	板目			1280
4-59	W164	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	田舟	長:119.8 幅:18.5 厚:5.0	焦げあり	15	板目			1672
4-59	W165	T30-6d-3A-9g	48流路	田下駄	長:36.0 幅:3.8 厚:3.4		25	柁目		枠型	1267
4-59	W166	T30-6d-3A-9e	48流路	田下駄	長:41.0 幅:12.4 厚:2.4		18	板目		足板	1267
4-59	W167	T30-6d-3A-8j	谷部(上層)	田下駄	長:69.4 幅:7.2 厚:1.9		20	板目		高足型	1834
4-59	W168	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	襦袢製品	長:54.2 幅:14.2 厚:2.7		15	柁目			1673
4-59	W169	T30-6d-4A-5g	谷部(下層)	経巻具もしくは布巻具	長:65.3 幅:5.1 厚:2.6	先端一部焦げあり	9	追柁目			1905
4-59	W170	T30-6d-3A-10i	谷部(下層)	経巻具もしくは布巻具	長:110.0 幅:11.0 厚:3.5		5	板目			2035
4-60	W171	T30-6d-3A-9g	谷部(上層)	曲物底板	長:62.5 幅:18.9 厚:1.1	樺皮紐残存	16	追柁目			1739
4-60		T30-6d-3A-9g	谷部(上層)	曲物側板	長:45.2 幅:11.7 厚:0.8	樺皮紐残存	2	柁目		側板2枚重ね	1739
4-60	W172	T30-6d-3A-10h	Ⅸ層	曲物底板	長:66.2 幅:14.3 厚:1.2	縦じ孔3箇所、うち樺皮紐残存1箇所	23	追柁目			1576
4-60	W173	T30-6d-3A-10e	48流路	曲物底板	長:47.3 幅:14.3 厚:0.8	樺皮紐残存	19	追柁目			1580
4-60	W174	T30-6d-3A-9h	谷部(上層)	槽	長:51.35 幅:5.4 厚:5.2		9	柁目	針葉樹		1709
4-60	W175	T30-6d-3A-9i	谷部(下層)	槽	長:42.6 幅:14.7 厚:6.5		16	板目	針葉樹		2049
4-61	W176	T30-6d-3A-8f	谷部(上層)	棒状材	長:16.5 幅:4.1 厚:2.5	墨書「毎自作是」	5	芯持丸太材	広葉樹	法華経如来寿命品第十六の一部	1719
4-61	W177	T30-6d-3A-8f	谷部(上層)	棒状材	長:13.5 幅:3.8 厚:2.5	墨書「以何令衆」	5	芯持丸太材	広葉樹	法華経如来寿命品第十六の一部	1719
4-62	W178	T30-6d-3A-10g	48流路	棒状材	長:24.6 幅:2.05 厚:1.4		22	板目		舟形か	1284

※樹種鑑定は財団調査員の目視による

第4-11表 木製祭祀具観察表(1)

挿図番号	掲載番号	出土地区	出土層位・遺構	種類	法量 (cm)	特徴	備考	取上番号
4-43	W5	T30-6d-3A-7g	Ⅷ層	人形	長:△15.5 幅:3.7 厚:0.7	頭部に工具痕?あり 大平(1993)分類Ib		1256
4-43	W6	T30-6d-4A-2g	47流路	人形	長:△11.2 幅:2.5 厚:0.4	大平(1993)分類Ia		1160
4-43	W7	T30-6d-4A-2g	47流路	人形	長:△14.0 幅:2.8 厚:0.6	大平(1993)分類Ia		944
4-43	W8	T30-6d-4A-2g	47流路	人形	長:△16.0 幅:△3.1 厚:0.5	人面刻画か? 大平(1993)分類Ic		1047
4-43	W9	T30-6d-4A-2g	47流路	人形	長:△17.7 幅:2.9 厚:0.6	頭部に線刻か? 大平(1993)分類Ic		1041
4-43	W10	T30-6d-4A-2g	47流路	人形	長:△35.5 幅:2.7 厚:0.6	人面刻画 大平(1993)分類Ic		1052
4-43	W11	T30-6d-4A-2g	47流路	人形	長:△32.5 幅:1.9 厚:0.5	人面刻画 大平(1993)分類Ic		1069
4-43	W12	T30-6d-4A-2g	47流路	人形	長:△13.7 幅:2.3 厚:0.4	人面刻画 大平(1993)分類Ic		1083
4-43	W13	T30-6d-4A-2g	47流路	人形	長:△11.0 幅:3.1 厚:0.3	頭部に工具痕?あり 大平(1993)分類Ic?		1000

第4-12表 木製祭祀具観察表(2)

挿入番号	掲載番号	出土地区	出土層位・遺構	種類	法量 (cm)	特 徴	備 考	取上番号
4-43	W14	T30-6d-4A-2g	47流路	人形	長:△30.3 幅:3.1 厚:0.6	大平(1993)分類Ic		1027
4-43	W15	T30-6d-4A-2g	47流路	人形	長:△33.9 幅:1.9 厚:0.4	人面刻画 大平(1993)分類Ic		1068
4-43	W16	T30-6d-4A-2g	47流路	人形	長:△56.6 幅:2.6 厚:0.5	人面刻画 大平(1993)分類Ic	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1072-1
4-43	W17	T30-6d-3A-10f	48流路	人形	長:△39.0 幅:3.4 厚:0.3	大平(1993)分類Ic	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1242
4-43	W18	T30-6d-3A-10f	48流路	人形	長:△20.8 幅:△3.7 厚:0.4	人面墨画 大平(1993)分類Ic?		1237
4-43	W19	T30-6d-3A-10f	48流路	人形	長:△13.9 幅:△3.2 厚:0.5			1262
4-44	W20	T30-6d-3A-9e	48流路	人形	長:△16.8 幅:3.9 厚:0.6			1507-1
4-44	W21	T30-6d-3A-10f	48流路	人形	長:△23.8 幅:△3.1 厚:0.6	人面刻画 大平(1993)分類Ia		1234
4-44	W22	T30-6d-4A-3g	48流路	人形	長:26.3 幅:2.8 厚:0.8	人面刻画 大平(1993)分類Ib		1373-1
4-44	W23	T30-6d-4A-3g	48流路	人形	長:24.5 幅:2.7 厚:0.6	人面刻画 大平(1993)分類Ib		1373-2
4-44	W24	T30-6d-3A-10f	48流路	人形	長:13.4 幅:△1.1 厚:0.4	人面刻画 大平(1993)分類Ia		1278-1
4-44	W25	T30-6d-3A-10g	48流路	人形	長:△47.8 幅:5.3 厚:0.8	人面刻画 大平(1993)分類Ic	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1283
4-44	W26	T30-6d-3A-10e	48流路	人形	長:17.0 幅:2.2 厚:0.6			1485-1
4-44	W27	T30-6d-4A-1f	48流路	人形	長:△23.5 幅:△1.8 厚:0.7	大平(1993)分類Ic		1590-1
4-44	W28	T30-6d-3A-10f	48流路	人形	長:△34.8 幅:2.5 厚:0.5		スギ科スギ属スギ、保存処理済	1251-1
4-44	W29	T30-6d-3A-10f	48流路	人形	長:△33.7 幅:2.4 厚:0.3		スギ科スギ属スギ、保存処理済	1251-2
4-44	W30	T30-6d-3A-10f	48流路	人形	長:△55.3 幅:2.5 厚:0.7	人面刻画 大平(1993)分類Ic	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1278-2
4-45	W31	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	人形	長:17.5 幅:△2.3 厚:0.4	大平(1993)分類Ia		1670-1
4-45	W32	T30-6d-3A-9h	谷部(上層)	人形	長:23.8 幅:2.9 厚:0.5	人面刻画 大平(1993)分類Ia		1710-2
4-45	W33	T30-6d-3A-9i	谷部(上層)	人形	長:△21.0 幅:2.1 厚:0.3	大平(1993)分類Ia		1378-1
4-45	W34	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	人形	長:△19.4 幅:4.7 厚:0.5			1670-4
4-45	W35	T30-6d-3A-9h	48流路	人形	長:25.6 幅:5.1 厚:1.3	人面刻画か?		1403-1
4-45	W36	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	人形	長:△29.3 幅:3.7 厚:0.7	人面刻画 大平(1993)分類Ib		1670-5
4-45	W37	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	人形	長:△29.3 幅:2.9 厚:0.5	大平(1993)分類Ib		1670-3
4-45	W38	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	人形	長:△24.2 幅:3.8 厚:0.5	人面刻画 大平(1993)分類Ib		1670-2
4-45	W39	T30-6d-3A-9h	谷部(上層)	人形	長:△15.8 幅:△1.6 厚:0.6	大平(1993)分類Ib		1710-1
4-45	W40	T30-6d-4A-1i	48流路	人形	長:△11.9 幅:2.2 厚:0.6	人面刻画か? 大平(1993)分類Ib		1495-1
4-46	W41	T30-6d-4A-2g	47流路	馬形	長:19.0 幅:2.5 厚:0.9	腹孔内に棒状木片残存「裸馬」		1079
4-46	W42	T30-6d-4A-2g	47流路	馬形	長:19.6 幅:2.1 厚:0.6	腹孔あり、たてがみ?あり「裸馬」		1015
4-46	W43	T30-6d-4A-2g	47流路	馬形	長:△12.0 幅:△2.8 厚:△0.6	腹孔あり、破片「裸馬」		1145
4-46	W44	T30-6d-4A-2g	47流路	馬形	長:21.1 幅:3.1 厚:0.9	頭部に目を線刻か? 腹孔あり「裸馬」		14
4-46	W45	T30-6d-4A-2g	48流路	馬形	長:20.2 幅:2.2 厚:0.4	鞍後方に穿孔?あり「飾馬」		1020
4-46	W46	T30-6d-3A-9d	48流路	馬形	長:14.7 幅:2.4 厚:0.5	腹孔あり「裸馬」		1442-2

第4章 1区の調査成果

第4-13表 木製祭祀具観察表(3)

挿図番号	掲載番号	出土地区	出土層位・遺構	種類	法量 (cm)	特 徴	備 考	取上番号
4-46	W47	T30-6d-3A-9e	48流路	馬形	長: 12.2 幅: 2.8 厚: 0.6	腹孔あり「裸馬」		1457-2
4-46	W48	T30-6d-3A-9g	48流路	馬形	長: 15.3 幅: 3.1 厚: 1.1	腹孔あり「裸馬」		1491
4-46	W49	T30-6d-3A-9g	48流路	馬形	長: △15.6 幅: 2.4 厚: 0.9	腹孔あり「裸馬」		1316
4-46	W50	T30-6d-3A-10f	48流路	馬形	長: 19.6 幅: 2.1 厚: 0.8	腹孔内に棒状木片残存「裸馬」		1263
4-46	W51	T30-6d-3A-10e	48流路	馬形	長: 18.4 幅: 3.4 厚: 0.8	腹孔内に棒状木片残存「裸馬」		1485-2
4-46	W52	T30-6d-3A-9d	48流路	馬形	長: 13.2 幅: 2.2 厚: 0.6	「裸馬」		1442-1
4-46	W53	T30-6d-3A-9e	48流路	馬形	長: 18.5 幅: 2.7 厚: 0.5	「裸馬」		1457-1
4-46	W54	T30-6d-3A-9f	48流路	馬形	長: 17.3 幅: 3.5 厚: 0.8	背の凹み後方に穿孔?あり 腹孔あり「裸馬」		1266
4-47	W55	T30-6d-3A-10g	48流路	馬形	長: 17.9 幅: 2.3 厚: 0.8	腹孔あり 中央付近に腹孔を入れるための目印か? 「裸馬」		1244
4-47	W56	T30-6d-3A-10f	48流路	馬形	長: 24.2 幅: 4.0 厚: 0.8	腹孔あり「裸馬」		1345
4-47	W57	T30-6d-4A-1f	48流路	馬形	長: 18.4 幅: 2.8 厚: 0.6	腹孔あり「裸馬」		1370-1
4-47	W58	T30-6d-3A-9e	48流路	馬形	長: 22.3 幅: 3.3 厚: 0.7	「裸馬」		1507-2
4-47	W59	T30-6d-4A-1g	48流路	馬形	長: 15.6 幅: 3.2 厚: 0.8	「裸馬」		1541
4-47	W60	T30-6d-3A-9e	48流路	馬形	長: 19.6 幅: 3.0 厚: 0.8	腹孔あり「裸馬」		1394-1
4-47	W61	T30-6d-4A-1f	48流路	馬形	長: 19.6 幅: 2.7 厚: 0.6	腹孔あり「裸馬」		1370-2
4-48	W62	T30-6d-3A-9h	Ⅸ層	馬形	長: 15.6 幅: 3.0 厚: 0.8	「裸馬」		1549
4-48	W63	T30-6d-4A-2i	Ⅸ層	馬形	長: 14.9 幅: 3.0 厚: 0.6	腹孔あり「裸馬」		1521
4-48	W64	T30-6d-3A-10i	Ⅸ層	馬形	長: 19.9 幅: 2.8 厚: 0.6	腹孔あり「裸馬」		1550
4-48	W65	T30-6d-3A-10i	7面精査	馬形	長: 15.1 幅: 2.7 厚: 0.9	腹孔あり「裸馬」		1625
4-48	W66	T30-6d-4A-1i	7面精査	馬形	長: 18.7 幅: 2.2 厚: 0.6	腹孔あり「裸馬」		1627
4-48	W67	T30-6d-4A-2h	谷部(上層)	馬形	長: 16.3 幅: 2.4 厚: 0.5	腹孔あり「裸馬」		1755-2
4-48	W68	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	馬形	長: 16.4 幅: 2.5 厚: 0.5	頭部に目を線刻か? 斜め方向の線状痕顕著 腹孔あり「裸馬」		1670-13
4-48	W69	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	馬形	長: 14.2 幅: 2.3 厚: 0.6	背の後方に穿孔?あり 腹孔あり「裸馬」		1669-3
4-48	W70	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	馬形	長: 23.5 幅: 2.5 厚: 1.1	腹孔あり「裸馬」		1670-12
4-48	W71	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	馬形	長: 14.8 幅: 3.0 厚: 0.6	腹孔あり「裸馬」		1669-1
4-48	W72	T30-6d-3A-9h	谷部(上層)	馬形	長: 17.1 幅: 3.0 厚: 1.1	「裸馬」		1689-1
4-48	W73	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	馬形	長: 17.7 幅: 2.7 厚: 0.5	「裸馬」		1670-14
4-48	W74	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	馬形	長: 20.1 幅: 2.3 厚: 0.6	腹孔あり「裸馬」		1670-8
4-48	W75	T30-6d-4A-2h	谷部(上層)	馬形	長: 19.4 幅: 3.3 厚: 0.7	腹孔あり「裸馬」		1755-1
4-48	W76	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	馬形	長: 16.3 幅: 2.3 厚: 0.8	腹孔あり「裸馬」		1670-11
4-49	W77	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	馬形	長: 20.5 幅: 3.2 厚: 0.5	腹孔あり「裸馬」		1670-7
4-49	W78	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	馬形	長: 18.5 幅: 2.2 厚: 0.7	腹孔あり「裸馬」		1670-10
4-49	W79	T30-6d-4A-1i	谷部(上層)	馬形	長: 20.2 幅: 2.9 厚: 0.6	腹孔あり「裸馬」		1670-6

第4-14表 木製祭祀具観察表(4)

挿入番号	掲載番号	出土地区	出土層位・遺構	種類	法量 (cm)	特 徴	備 考	取上番号
4-49	W80	T30-6d-3A-9h	谷部 (上層)	馬形	長: 21.8 幅: 3.5 厚: 0.8	腹孔あり 「裸馬」		1689-2
4-49	W81	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	馬形	長: 15.3 幅: 2.7 厚: 0.7	腹孔内に棒状木片残存 「裸馬」		1670-9
4-49	W82	T30-6d-4A-2h	谷部 (上層)	馬形	長: Δ 16.6 幅: 2.4 厚: 0.9	「裸馬」		1755-3
4-49	W83	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	馬形	長: 15.2 幅: 2.7 厚: 0.6	「裸馬」		1378-6
4-49	W84	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	馬形	長: 17.0 幅: 2.0 厚: 0.6	「裸馬」		1495-2
4-49	W85	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	馬形	長: 14.4 幅: 3.0 厚: 0.5	「裸馬」		1495-3
4-49	W86	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	馬形	長: 20.6 幅: 2.4 厚: 0.8	腹孔あり 「裸馬」		1378-2
4-49	W87	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	馬形	長: 19.0 幅: 3.4 厚: 0.8	「裸馬」		1378-5
4-49	W88	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	馬形	長: 18.8 幅: 2.8 厚: 0.6	「裸馬」		1378-3
4-49	W89	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	馬形	長: 19.1 幅: 2.9 厚: 0.7	尾部に工具痕か? 腹孔あり 「裸馬」		1495-4
4-49	W90	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	馬形	長: 15.9 幅: 3.0 厚: 0.7	「裸馬」		1669-4
4-50	W91	T30-6d-4A-2g	47流路	刀形	長: Δ 15.8 幅: 2.0 厚: 0.5	B型		918
4-50	W92	T30-6d-4A-3g	48流路	刀形	長: Δ 10.0 幅: 1.9 厚: 0.5			1374-2
4-50	W93	T30-6d-3A-10f	48流路	刀形	長: Δ 10.4 幅: 1.5 厚: 0.4			1319-5
4-50	W94	T30-6d-3A-9g	48流路	刀形	長: 47.7 幅: 2.4 厚: 0.6	A型	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1511-1
4-50	W95	T30-6d-4A-3g	48流路	刀形	長: Δ 34.6 幅: 2.6 厚: 0.9	B型	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1374-1
4-51	W96	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	刀形	長: 21.5 幅: 2.3 厚: 0.3	A型		1669-2
4-51	W97	T30-6d-3A-8i	Ⅸ層	刀形	長: Δ 24.0 幅: 3.3 厚: 0.8	B型		1468
4-51	W98	T30-6d-3A-9g	谷部 (上層)	刀形	長: Δ 21.3 幅: 2.5 厚: 0.8	B型?	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1738-2
4-51	W99	T30-6d-3A-9g	谷部 (上層)	刀形	長: Δ 29.2 幅: 2.1 厚: 0.9	B型		1738-3
4-51	W100	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	刀形	長: 45.2 幅: 2.1 厚: 0.7	A型	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1669-10
4-51	W101	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	刀形	長: 53.4 幅: 2.8 厚: 0.5	B型	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1669-9
4-51	W102	T30-6d-3A-9g	谷部 (上層)	刀形	長: Δ 40.4 幅: 2.2 厚: 0.7	B型	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1724
4-51	W103	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	刀形	長: 37.4 幅: 1.4 厚: 0.5	B型		1495-7
4-51	W104	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	刀形	長: 33.9 幅: 1.6 厚: 0.4	A型		1378-17
4-51	W105	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	刀形	長: 30.6 幅: 1.5 厚: 0.5	A型?		1669-11
4-52	W106	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	鳥形	長: 24.2 幅: 3.8 厚: 0.8			1669-2
4-52	W107	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	鳥形	長: 21.1 幅: 4.0 厚: 0.6			1378-4
4-52	W108	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	エブリ形	長: Δ 12.8 幅: 1.9 厚: 0.5			1382-1
4-52	W109	T30-6d-3A-10f	48流路	鋤先形	長: 7.9 幅: 4.4 厚: 0.7		スギ科スギ属スギ、保存処理済	1241
4-52	W110	T30-6d-3A-9h	谷部 (上層)	舟形	長: 30.5 幅: 2.8 厚: 1.7			1251-4
4-52	W111	T30-6d-3A-9h	谷部 (上層)	舟形	長: 34.0 幅: 6.5 厚: 4.2			1728
4-52	W112	T30-6d-3A-10g	48流路	舟形	長: 20.2 幅: 3.2 厚: 0.8			1284-3

第4章 1区の調査成果

第4-15表 木製祭祀具観察表(5)

挿図番号	掲載番号	出土地区	出土層位・遺構	種類	法量 (cm)	特 徴	備 考	取上番号
4-52	W113	T30-6d-4A-1f	48流路	櫛	長:△6.9 幅:3.5 厚:0.9			1590-3
4-53	W114	T30-6d-3A-9g	48流路	齋串	長:62.2 幅:1.7 厚:0.5	b型	ヒノキ科アスナロ属、保存処理済	1511-2
4-53	W115	T30-6d-3A-9e	48流路	齋串	長:△26.5 幅:1.4 厚:0.4	b型		1507-3
4-53	W116	T30-6d-3A-10f	48流路	齋串	長:△35.2 幅:2.0 厚:0.7	b型	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1319-3
4-53	W117	T30-6d-3A-10g	48流路	齋串	長:43.2 幅:2.2 厚:2.1	齋串の塊? b型		1248
4-53	W118	T30-6d-3A-10f	48流路	齋串?	長:△16.6 幅:△1.3 厚:0.5			1278-4
4-53	W119	T30-6d-3A-9e	48流路	齋串?	長:17.3 幅:0.9 厚:0.6			1507-5
4-53	W120	T30-6d-3A-10f	48流路	齋串	長:△21.3 幅:2.0 厚:0.8	a型?		1278-3
4-53	W121	T30-6d-3A-10f	48流路	齋串	長:27.5 幅:0.7 厚:0.3	c型	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1301-2
4-53	W122	T30-6d-3A-9e	48流路	齋串	長:29.5 幅:1.1 厚:0.5	c型		1507-4
4-53	W123	T30-6d-4A-2g	47流路	齋串	長:10.6 幅:1.2 厚:0.6	c型		1109
4-54	W124	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	齋串	長:△18.5 幅:1.5 厚:0.6	b型		1381-3
4-54	W125	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	齋串	長:△11.9 幅:1.5 厚:0.5			1378-20
4-54	W126	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	齋串	長:35.5 幅:1.9 厚:0.6	b型		1669-3
4-54	W127	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	齋串	長:32.0 幅:2.0 厚:0.4	b型	ヒノキ科アスナロ属、保存処理済	1378-16
4-54	W128	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	齋串	長:35.0 幅:1.8 厚:0.4	b型	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1669-5
4-54	W129	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	齋串	長:△30.2 幅:1.9 厚:0.6	b型		1381-2
4-54	W130	T30-6d-3A-9g	谷部 (上層)	齋串	長:26.0 幅:0.9 厚:0.5	b型	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1738-4
4-54	W131	T30-6d-3A-9g	谷部 (上層)	齋串	長:△41.4 幅:3.0 厚:0.7	b型		1738-1
4-54	W132	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	齋串	長:41.0 幅:1.9 厚:0.5	b型	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1669-8
4-54	W133	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	齋串	長:38.1 幅:2.2 厚:0.7	b型		1669-4
4-54	W134	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	齋串	長:44.2 幅:2.0 厚:0.5	a型		1381-1
4-54	W135	T30-6d-4A-1i	谷部 (上層)	齋串	長:38.3 幅:1.7 厚:0.6	a型	スギ科スギ属スギ、保存処理済	1669-7
4-55	W136	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	齋串	長:△7.7 幅:0.5 厚:0.3	c型		1378-19
4-55	W137	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	齋串	長:15.3 幅:0.6 厚:0.2	c型		1378-18
4-55	W138	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	齋串	長:20.8 幅:0.7 厚:0.5	c型		1378-15
4-55	W139	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	齋串	長:17.8 幅:0.7 厚:0.6	先端付近に工具痕 c型		1378-21
4-55	W140	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	齋串	長:15.0 幅:1.0 厚:0.6	d型		1378-22
4-55	W141	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	齋串	長:△15.9 幅:1.4 厚:0.4	d型		1378-25
4-55	W142	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	齋串	長:20.0 幅:2.0 厚:0.8	d型		1378-23
4-55	W143	T30-6d-3A-9i	谷部 (上層)	齋串	長:△25.5 幅:2.4 厚:0.6	d型?		1378-24

第5章 自然科学的調査の成果

第1節 常松菅田遺跡の古環境解析

1 はじめに

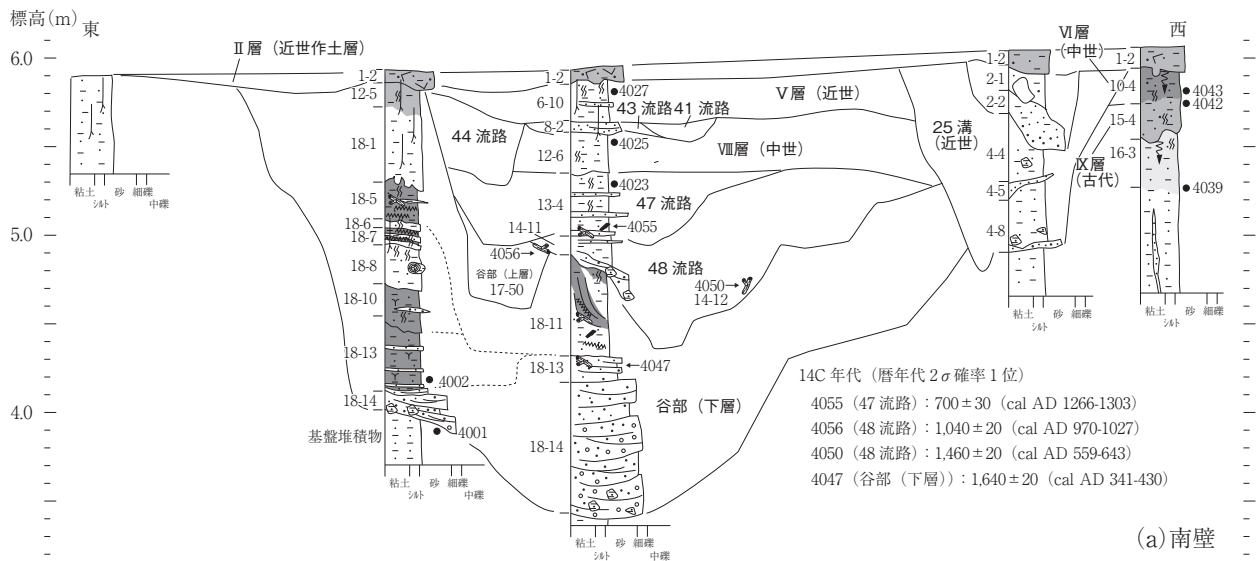
今回の分析調査では、常松菅田遺跡(1区)における堆積物や遺構の形成年代、当時の堆積環境や古植生に関する情報を得ることを目的として、放射性炭素年代測定、珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析を実施した。

2 試料

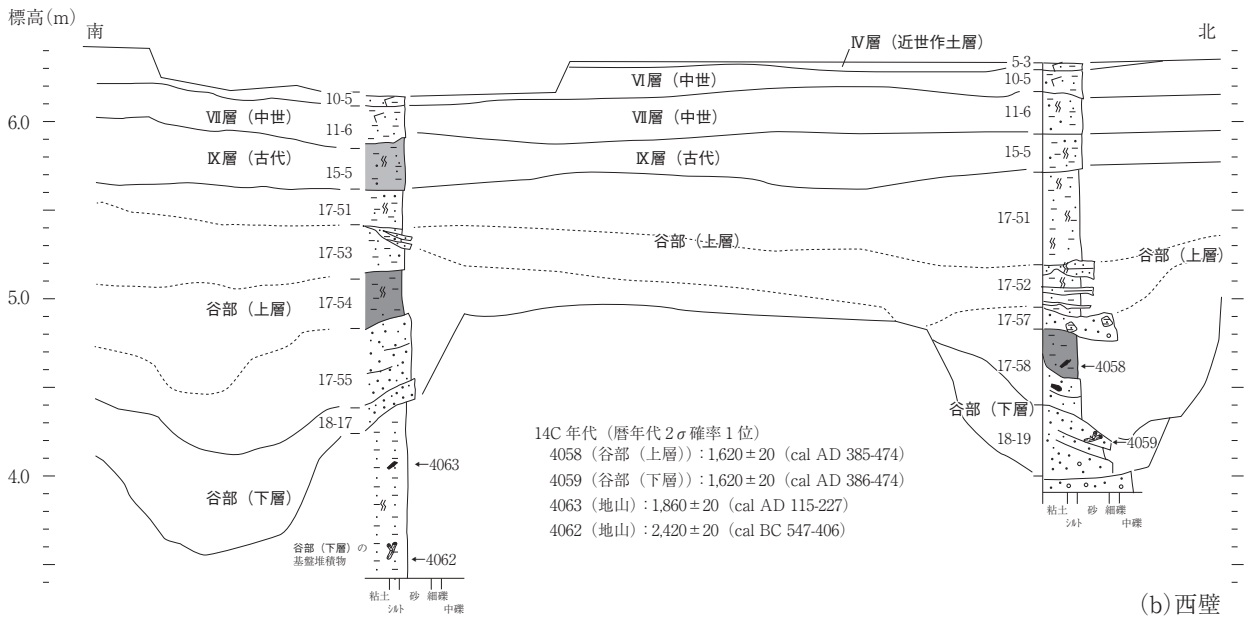
今回の分析試料一覧を第5-1表に示す。また、南壁・西壁・47(新)流路断面の堆積物の累重状況を発掘調査時の所見および断面写真に基づいて模式柱状図として第5-1図に示す。今回の分析調査を実施する流路および溝等の遺構の充填堆積物中には、古地震痕跡と考えられる変形構造が認められる。例えば、南壁の48流路に切られている谷部(下層)(18-11層)で確認される左上がりの円弧状の剪断面や、基盤堆積物中で確認される砂脈は地震動に起因するものと推定される。一般的に含水比が高い泥質堆積物は、何らかの応力で流動したり塑性変形を生じたりする。また相対的に含水比が低く、

第5-1表 分析対象一覧

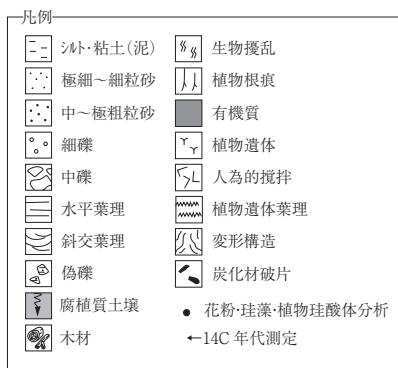
遺跡名	地区	地点・遺構名	層位	取上 No.	種別	分析項目
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-3A-6e	1畦畔	C断面-3層	291	堆積物	珪藻・花粉・植物珪酸体分析
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-2g	47(新)流路土層断面図1	49層	1421	堆積物	珪藻・花粉・植物珪酸体分析
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-3f	47(新)流路土層断面図1	6層	1423	堆積物	珪藻・花粉・植物珪酸体分析
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-2g	47(新)流路土層断面図1	28層	1437	堆積物	珪藻・花粉・植物珪酸体分析
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-4g	南壁	(地山)	4001	堆積物	珪藻・花粉・植物珪酸体分析
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-4g	南壁 谷部(下層)	18-13層	4002	堆積物	珪藻・花粉・植物珪酸体分析
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-4g	南壁 47流路	13-4層上	4023	堆積物	珪藻・花粉・植物珪酸体分析
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-4g	南壁 Ⅷ層	12-6層上	4025	堆積物	珪藻・花粉・植物珪酸体分析
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-4g	南壁 V層	6-10層上	4027	堆積物	珪藻・花粉・植物珪酸体分析
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-4i	南壁 Ⅸ層下	16-3層下	4039	堆積物	珪藻・花粉・植物珪酸体分析
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-4i	南壁 Ⅸ層	15-4層上	4042	堆積物	珪藻・花粉・植物珪酸体分析
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-4i	南壁 VI層	10-4層下	4043	堆積物	珪藻・花粉・植物珪酸体分析
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-3f	47(新)流路土層断面図1	10層	1312	生木(スノキ属)	14C年代測定
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-3f	47(新)流路土層断面図1	42層	1313	炭化材(クリ)	14C年代測定
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-2f	59溝	埋土	1919	炭化材(ハンノキ亜属)	14C年代測定
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-1e	61土坑	埋土	1988	炭質物(不明)	14C年代測定
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-1f	68土坑	埋土	2012	炭化材(モチノキ属)	14C年代測定
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-4g	南壁 谷部(下層)	18-13層	4047	生木(クリ)	14C年代測定
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-4h	南壁 48流路	14-12層	4050	生木(広葉樹)	14C年代測定
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-4g	南壁 47流路	13-4層	4055	炭化材(クリ)	14C年代測定
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-4A-4g	南壁 谷部(上層)、 48流路の層界	17-50・14-11層界	4056	生木(クリ)	14C年代測定
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-3B-8a	西壁 谷部(上層)	17-58層	4058	生木(ブドウ属)	14C年代測定
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-3B-8a	西壁 谷部(下層)	18-19層	4059	生木(ブドウ属)	14C年代測定
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-3B-10a	西壁	(地山)	4062	生木(広葉樹)	14C年代測定
常松菅田遺跡(1区)	T30-6d-3B-10a	西壁	(地山)	4063	炭化材(ササ類)	14C年代測定



(a) 南壁



(b) 西壁



14C年代 (曆年代 2σ 確率 1 位)
 1312 (47 (新) 流路): 830 ± 20 (cal AD 1165-1255)
 1313 (47 (新) 流路): 1,450 ± 20 (cal AD 573-649)

(c) 47(新)流路

第5-1図 調査地点の断面模式図

剪断速度が速い時には脆性破壊が起こる。それらが地震動によるという可能性は、次のような条件によって高まる。①新しい時代の土木工事等の外力を受けていない。②人為的、その他の生物的な擾乱とは形態の特徴が異なる。③斜面の物質移動、流水、凍結融解の影響を受けていない。④変形は原位置で起こり、新旧の堆積物が同時に変形している。⑤地震動の振動(押し引き)、回転、垂直振動の圧力による変形が認められる。⑥地域の同じ年代の層準に広く分布する。本遺跡周辺では、桂見遺跡や東桂見遺跡、高住平田遺跡等で複数の古地震痕跡が確認されている。今回の調査地点で確認されている古地震痕跡もこれらの地震のいずれかに比定される可能性があるが、地震イベントの年代を決める上で重要な変形ゾーン上端を特定することが出来ないため、言及は控える。

分析試料の詳細は、放射性炭素年代測定用試料が、1312(47(新)流路 10層)、1313(47(新)流路 42層)、1919(59溝)、1988(61土坑)、2012(68土坑)、4047(南壁 谷部(下層)18-13層)、4050(南壁 14-12層 48流路)、4055(南壁 13-4層 47流路)、4056(南壁 17-50層 谷部(上層))、4058(西壁 17-58層 谷部(上層))、4059(西壁 18-19層 谷部(下層))、4062(西壁 地山)、4063(西壁 地山)の13点である。13点中7点が生木、5点が炭化材、1点が炭質物である。

珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析試料は、291(1 畦畔 3層)、1423(47(新)流路 6層)、1437(47(新)流路 28層)、1421(47(新)流路 49層)、4027(V層 6-10層上)、4025(南壁 VIII層 12-6層上)、4023(南壁 47流路 13-4層上)、4002(南壁 谷部(下層)18-13層)、4001(南壁(地山))、4043(南壁 VI層 10-4層下)、4042(南壁 IX層 15-4層上)、4039(南壁 IX層下層 16-3層下)の12点である。

3 分析方法

(1) 放射性炭素年代測定

メス・ピンセット、超音波洗浄等により、根や土壌等後代の付着物を、物理的に除去する。塩酸(HCl)により炭酸塩等酸可溶成分を除去、水酸化ナトリウム(NaOH)により腐植酸等アルカリ可溶成分を除去、HClによりアルカリ処理時に生成した炭酸塩等酸可溶成分を除去する(酸・アルカリ・酸処理 AAA: Acid Alkali Acid)。塩酸、水酸化ナトリウムの洗浄は薄い溶液からはじめ、最終的には1 mol/Lの溶液を用いる。

これらの試料を燃焼させて二酸化炭素を発生させ、真空ラインで精製する。その後鉄を触媒として還元し、グラファイトを得る。得られたグラファイトをカソードにプレスしてターゲットを作成する。タンデム加速器のイオン源に装着し、14Cの計数、13Cの濃度(13C/12C)、14Cの濃度(14C/12C)の測定を行う。測定時に、標準試料である米国国立標準局(NIST)から提供されるシュウ酸(HOX-II)とバックグラウンド試料の測定も行う。

放射性炭素の半減期はLIBBYの半減期5,568年を使用する。また、測定年代は1950年を基点とした年代(BP)であり、誤差は標準偏差(One Sigma: 68%)に相当する年代である。

暦年較正に用いるソフトウェアはCALIB var.7.01である。また、このソフトウェアで用いられる較正曲線の最新のものは2013年に発表されたIntcal13(Reimer *et al.* 2013)である。なお、年代測定値は、国際的な取り決めにより、測定誤差の大きさによって値を丸めるが(Stuiver and Polach 1977)、将来的な較正曲線ならびにソフトウェアの更新に伴う再計算が出来るようにするため、丸めない値(1年単位)を記す。

(2)珪藻分析

湿重約3gをビーカーに計り取り、過酸化水素水と塩酸を加えて試料の泥化と有機物の分解・漂白を行う。次に、分散剤を加えた後、蒸留水を満たし放置する。その後、上澄み液中に浮遊した粘土分を除去し、珪藻殻の濃縮を行う。この操作を4～5回繰り返す。次に、自然沈降法による砂質分の除去を行い、検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下して乾燥させる。乾燥した試料上に封入剤のプリウラックスを滴下し、スライドガラスに貼り付け永久プレパラートを作製する。

検鏡は、油浸600倍または1,000倍で行い、メカニカルステージを用い任意に出現する珪藻化石が200個体以上になるまで同定・計数した。なお、原則として、珪藻殻が半分以上破損したものについては、誤同定を避けるため同定・計数は行わない。200個体が検出できた後は、示準種等の重要な種類の見落としがないように、全体を精査し、含まれる種群すべてが把握できるように努めた。

珪藻の同定と種の生態性については、Horst Lange-Bertalot(2000)、Hustedt(1930-1966)、Krammer & Lange-Bertalot(1985-1991)、Desikachary(1987)等を参考にする。

群集解析にあたり個々の産出化石は、まず塩分濃度に対する適応性により、海水生、海水～汽水生、汽水生、淡水生に生態分類し、さらにその中の淡水生種は、塩分、pH、水の流動性の3適応性についても生態分類する。結果は、生態分類も含め、同定・計数結果の一覧表、および主要珪藻化石群集の分布図として表示する。また、試料中の化石全体の保存状態と産出頻度を相対的に表したものを記号化して表に記載する。

(3)花粉分析

花粉分析は、試料10ccを秤量し、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの篩による篩別、重液(臭化亜鉛、比重2.3)による有機物の分離、フッ化水素酸による鉍物質の除去、アセトリシス(無水酢酸9：濃硫酸1の混合液)処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman(1952、1957)、Faegri and Iversen(1989)等の花粉形態に関する文献や、島倉(1973)、中村(1980)、藤木・小澤(2007)等の邦産植物の花粉写真集等を参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、および花粉化石群集の層位分布図として表示する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(4)植物珪酸体分析

各試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これをカバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、プリウラックスで封入してプレパラートを作製する。400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤(2010)の分類を参考に同定・計数する。

分析の際には、分析試料の乾燥重量、プレパラート作成に用いた分析残渣量、検鏡に用いたプレパラートの数や検鏡した面積を正確に計量し、堆積物 1 gあたりの植物珪酸体含量(同定した数を堆積物 1 gあたりの個数に換算)を求める。

結果は、植物珪酸体含量の一覧表で示す。その際、100個体以下は「<100」で表示する。各分類群の含量は10の位で丸める(100単位にする)。また、各分類群の植物珪酸体含量の層的变化を図示する。

4 結果

(1) 放射性炭素年代測定

結果を第5-2表、第5-2図に示す。同位体補正を行った結果を見ると、1312が 830 ± 20 BP、1313が $1,450 \pm 20$ BP、1919が $2,080 \pm 30$ BP、1988が $2,760 \pm 30$ BP、2012が $2,240 \pm 30$ BP、4047が $1,640 \pm 20$ BP、4050が $1,460 \pm 20$ BP、4055が 700 ± 30 BP、4056が $1,040 \pm 20$ BP、4058が $1,620 \pm 20$ BP、4059が $1,620 \pm 20$ BP、4062が $2,420 \pm 20$ BP、4063が $1,860 \pm 20$ BPである。

暦年較正とは、大気中の ^{14}C 濃度が一定で半減期が5568年として算出された年代値に対し、過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中の ^{14}C 濃度の変動、及び半減期の違い(^{14}C の半減期 5730 ± 40 年)を較正することによって、暦年代に近づける手法である。測定誤差 2σ 確率1位の暦年代は、1312がcal AD 1165-1255、1313がcal AD 573-649、1919がcal BC 181-39、1988はcal BC 944-832、2012はcal BC 321-206、4047はcal AD 341-430、4050はcal AD 559-643、4055はcal AD 1266-1303、4056はcal AD 970-1027、4058はcal AD 385-474、4059はcal AD 386-474、4063はcal AD 115-227、4062はcal BC 547-406である。この他、較正年代の中央値を表に示す。較正年代の確率分布は面積で表されるが(第5-2図)、ちょうど面積が二分される場所の年代値が中央値(median)である。

年代測定試料のうち、由来不明の炭質物1点を除く12点については、あわせて樹種同定を実施した。同定結果は試料一覧と共に第5-1表に記した。生木と炭化材は、広葉樹・分類群(ハンノキ亜属・クリ・ブドウ属・スノキ属)とササ類に同定された。なお、取上No.4050、4062の2点については、道管と放射組織が認められることから広葉樹であるが、保存状態が悪く種類は不明である。同定された各分類群の解剖学的特徴を記す。

- ・ハンノキ亜属(*Alnus* subgen. *Alnus*)カバノキ科ハンノキ属

散孔材で、道管は単独または2~4個が放射方向に複合して散在する。道管は階段穿孔を有し、壁孔は対列状に配列する。放射組織は同性、単列、1~20細胞高のものと集合放射組織とがある。

- ・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)ブナ科クリ属

環孔材で、孔圏部は3~4列、孔圏外で急激に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1~15細胞高。

- ・ブドウ属(*Vitis*)ブドウ科

環孔材で、孔圏部は2~3列であるが、孔圏内にも小径の道管が存在する。小道管は単独または2~4個が放射方向に複合する。道管は単穿孔を有し、壁孔は階段状に配列する。放射組織は同性、1~6細胞幅、100細胞高以上になる。

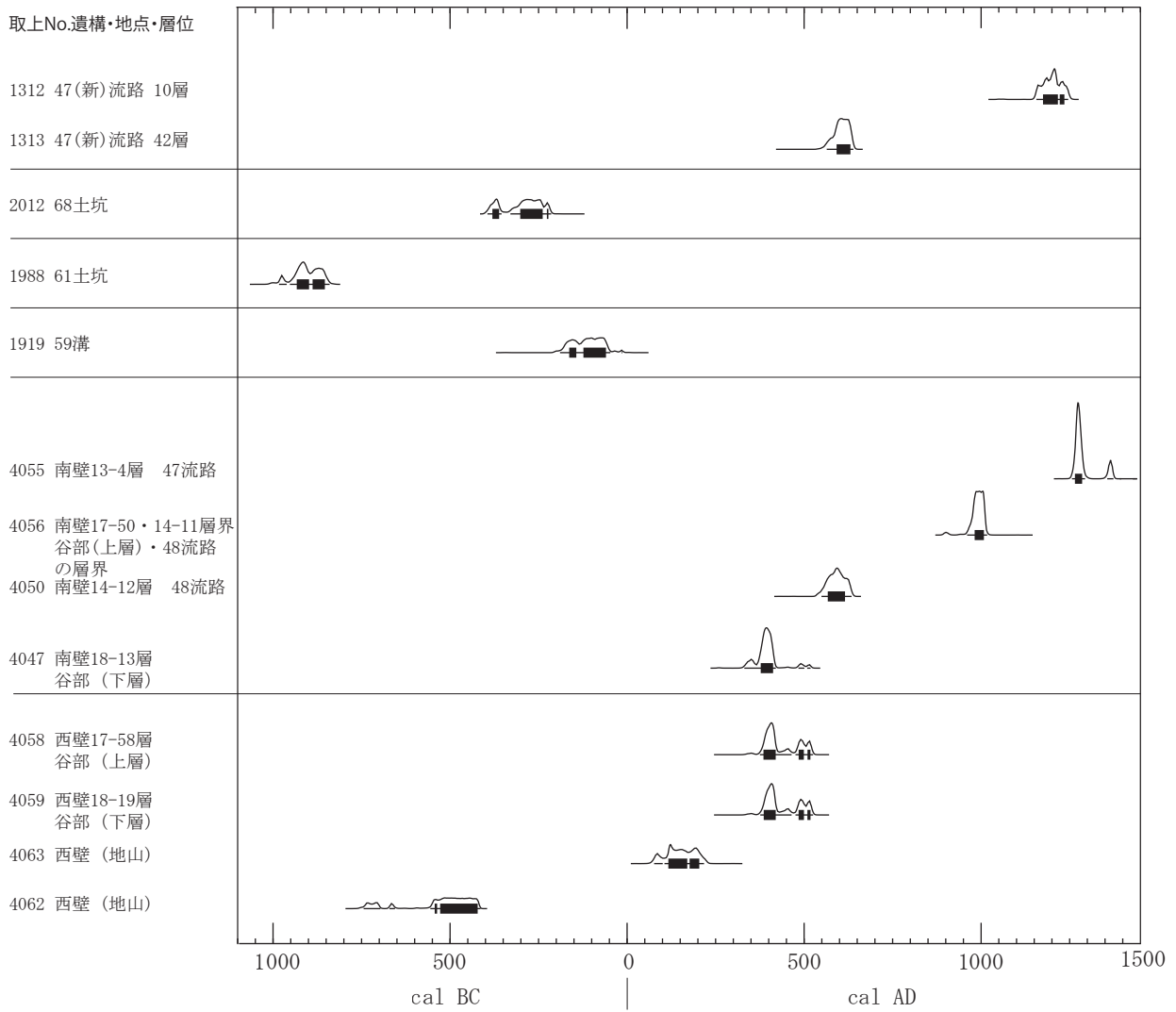
第5-2表 放射性炭素年代測定および暦年較正結果

取上 No.	種別	前処理	補正年代BP (暦年較正用)	$\delta 13C$ (‰)	測定年代 BP	暦年較正年代						Code No.									
						年代値							相対比	中央値							
						σ	cal	AD	-	cal	AD				cal	BP	-	cal	BP		
1312	木材	AAA	830 ± 20 (834 ± 23)	-28.99 ± 0.60	900 ± 20	σ	cal	AD	1,184	-	cal	AD	1,226	cal	BP	766	-	724	0.810	740 calBP	IAAA - 150326
						2σ	cal	AD	1,231	-	cal	AD	1,245	cal	BP	719	-	705	0.190		
1313	炭化材	AAA	1,450 ± 20 (1,446 ± 23)	-27.97 ± 0.48	1,500 ± 20	σ	cal	AD	601	-	cal	AD	640	cal	BP	1,349	-	1,310	1.000	1335 calBP	IAAA - 150327
						2σ	cal	AD	573	-	cal	AD	649	cal	BP	1,377	-	1,301	1.000		
2012	炭化材	AAA	2,240 ± 30 (2,237 ± 26)	-27.53 ± 0.70	2,280 ± 20	σ	cal	BC	372	-	cal	BC	353	cal	BP	2,321	-	2,302	0.208	2226 calBP	IAAA - 150330
						cal	BC	293	-	cal	BC	230	cal	BP	2,242	-	2,179	0.747			
						cal	BC	218	-	cal	BC	214	cal	BP	2,167	-	2,163	0.045			
						2σ	cal	BC	386	-	cal	BC	346	cal	BP	2,335	-	2,295	0.235		
1988	炭化材	AAA	2,760 ± 30 (2,758 ± 25)	-30.17 ± 0.36	2,840 ± 20	σ	cal	BC	925	-	cal	BC	890	cal	BP	2,874	-	2,839	0.554	2847 calBP	IAAA - 150329
						cal	BC	880	-	cal	BC	845	cal	BP	2,829	-	2,794	0.446			
						cal	BC	975	-	cal	BC	953	cal	BP	2,924	-	2,902	0.075			
						2σ	cal	BC	944	-	cal	BC	832	cal	BP	2,893	-	2,781	0.925		
1919	炭化材	AAA	2,080 ± 30 (2,080 ± 27)	-24.80 ± 0.47	2,080 ± 30	σ	cal	BC	155	-	cal	BC	135	cal	BP	2,104	-	2,084	0.226	2051 calBP	IAAA - 150328
						cal	BC	115	-	cal	BC	51	cal	BP	2,064	-	2,000	0.774			
						cal	BC	181	-	cal	BC	39	cal	BP	2,130	-	1,988	0.996			
						2σ	cal	BC	7	-	cal	BC	5	cal	BP	1,956	-	1,954	0.004		
4055	炭化材	AAA	700 ± 30 (698 ± 25)	-25.72 ± 0.64	710 ± 20	σ	cal	AD	1,274	-	cal	AD	1,295	cal	BP	676	-	655	1.000	665 calBP	IAAA - 150333
						2σ	cal	AD	1,266	-	cal	AD	1,303	cal	BP	684	-	647	0.861		
4050	木材	AAA	1,460 ± 20 (1,464 ± 24)	-29.26 ± 0.68	1,530 ± 20	σ	cal	AD	576	-	cal	AD	625	cal	BP	1,374	-	1,325	1.000	1349 calBP	IAAA - 150332
						2σ	cal	AD	559	-	cal	AD	643	cal	BP	1,391	-	1,307	1.000		
4056	木材	AAA	1,040 ± 20 (1,041 ± 23)	-28.03 ± 0.60	1,090 ± 20	σ	cal	AD	991	-	cal	AD	1,017	cal	BP	959	-	933	1.000	949 calBP	IAAA - 150334
						2σ	cal	AD	970	-	cal	AD	1,027	cal	BP	980	-	923	1.000		
4047	木材	AAA	1,640 ± 20 (1,644 ± 23)	-26.12 ± 0.51	1,660 ± 20	σ	cal	AD	387	-	cal	AD	422	cal	BP	1,563	-	1,528	1.000	1548 calBP	IAAA - 150331
						cal	AD	341	-	cal	AD	430	cal	BP	1,609	-	1,520	0.947			
						cal	AD	493	-	cal	AD	510	cal	BP	1,457	-	1,440	0.037			
						2σ	cal	AD	518	-	cal	AD	528	cal	BP	1,432	-	1,422	0.016		
4058	木材	AAA	1,620 ± 20 (1,622 ± 24)	-27.89 ± 0.54	1,670 ± 20	σ	cal	AD	395	-	cal	AD	429	cal	BP	1,555	-	1,521	0.744	1527 calBP	IAAA - 150335
						cal	AD	494	-	cal	AD	509	cal	BP	1,456	-	1,441	0.168			
						cal	AD	519	-	cal	AD	527	cal	BP	1,431	-	1,423	0.088			
						2σ	cal	AD	385	-	cal	AD	474	cal	BP	1,565	-	1,476	0.683		
4059	木材	AAA	1,620 ± 20 (1,621 ± 24)	-29.54 ± 0.67	1,700 ± 20	σ	cal	AD	395	-	cal	AD	429	cal	BP	1,555	-	1,521	0.717	1526 calBP	IAAA - 150336
						cal	AD	494	-	cal	AD	509	cal	BP	1,456	-	1,441	0.182			
						cal	AD	519	-	cal	AD	527	cal	BP	1,431	-	1,423	0.100			
						2σ	cal	AD	386	-	cal	AD	474	cal	BP	1,564	-	1,476	0.671		
4063	炭化材	AAA	1,860 ± 20 (1,856 ± 23)	-11.09 ± 0.63	1,630 ± 20	σ	cal	AD	126	-	cal	AD	179	cal	BP	1,824	-	1,771	0.673	1790 calBP	IAAA - 150338
						cal	AD	186	-	cal	AD	213	cal	BP	1,764	-	1,737	0.327			
						cal	AD	86	-	cal	AD	110	cal	BP	1,864	-	1,840	0.116			
						2σ	cal	AD	115	-	cal	AD	227	cal	BP	1,835	-	1,723	0.884		
4062	木材	AAA	2,420 ± 20 (2,423 ± 24)	-27.76 ± 0.49	2,470 ± 20	σ	cal	BC	535	-	cal	BC	528	cal	BP	2,484	-	2,477	0.048	2441 calBP	IAAA - 150337
						cal	BC	520	-	cal	BC	414	cal	BP	2,469	-	2,363	0.952			
						cal	BC	736	-	cal	BC	688	cal	BP	2,685	-	2,637	0.137			
						2σ	cal	BC	663	-	cal	BC	647	cal	BP	2,612	-	2,596	0.033		
							cal	BC	547	-	cal	BC	406	cal	BP	2,496	-	2,355	0.830		

- 1) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1を使用。
- 2) BP年代値は、1950年を基点として何年前であるかを示す。
- 3) 付記した誤差は、測定誤差 σ (測定値の68%が入る範囲)を年代値に換算した値。
- 4) AAAは、酸、アルカリ、酸処理、AaAは、アルカリの濃度を薄くした処理、CoExはコラーゲン抽出処理、HClは酸処理を示す。
- 5) 計算には、RADIOCARBON CALIBRATION PROGRAM CALIB REV7.1を使用。
- 6) 計算には表に示した丸める前の値を使用している。
- 7) 1桁目を丸めるのが慣例だが、暦年較正曲線や暦年較正プログラムの再計算や比較が行いやすいように、1桁目を丸めていない。
- 8) 統計的に真の値が入る確率は σ は68%、 2σ は95%である。
- 9) 相対比は、 σ 、 2σ のそれぞれを1とした場合、確率的に真の値が存在する比率を相対的に示したものである。
- 10) 中央値は、確率分布図の面積が二分される値を年代値に換算したものである。

・スノキ属(Vaccinium)ツツジ科

散孔材で、道管はほぼ単独で年輪界一様に分布し、その分布密度は高い。道管は単穿孔および階段穿孔を有する。放射組織は異性、単列で8細胞高前後のものとして5~7細胞幅、30~60細胞高のものが



第5-2図 暦年較正結果の比較

ある。

・ササ類(Gramineae subfam. Bambusoideae)

原生木部の小径の道管の左右に一对の大型の道管があり、その外側に師部細胞がある。これらを厚壁の繊維細胞(維管束鞘)が囲んで維管束を形成する。維管束は柔組織中に散在し、不斉中心柱をなす。また、試料の外観的特徴を見ると、節の部分に稈鞘の基部が残っていることから、稈鞘が伸長しても脱落しないササ類に同定される。

(2)珪藻分析

結果を第5-3-1・2表および第5-3図に示す。分析が行われた12試料には、珪藻化石は含まれていたものの、その量は平均して少なく、7試料からは100個体以上が検出されたものの、他5試料は50個体未満である。認められた化石の保存状態は、そのほとんどは半壊しているだけでなく、溶解の痕跡が認められることから、状態としては極不良である。検出された分類群は、淡水生種を主として、極低率に淡水から汽水生種、汽水生種および海水生種を伴う種群で構成される。

291(1畦畔)からは、21個体が認められたのみである。分類群の構成は、淡水生種を主として、低

第5-3-2表 珪藻分析結果(2)

種類	生態性			環境指標種	地点・層位・取上No.											
					47(新)流路断面				南壁							
	塩分	pH	流水		1畦畔	6	28	49	6-10上	12-6上	13-4上	18-13	地山	10-4下	15-4上	16-3下
			291	1423	1437	1421	4027	4025	4023	4002	4001	4043	4042	4039		
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>dissimilis</i> H.Kobayasi	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia gibba</i> var. <i>linearis</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	8	-	3	3	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia lundii</i> Hustedt	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	1	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Pinnularia microstauron</i> (Ehr.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	ind	S	-	-	-	-	2	-	-	-	-	1	-	
<i>Pinnularia rupestris</i> Hantzsch	Ogh-hob	ac-il	ind	O	-	1	-	1	-	1	-	-	-	1	-	
<i>Pinnularia stomatophora</i> (Grun.) Cleve	Ogh-ind	ac-il	l-ph	O,P	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	
<i>Pinnularia substomatophora</i> Hustedt	Ogh-hob	ac-il	l-ph	N,O,U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Pinnularia viridiformis</i> Krammer	Ogh-ind	ind	ind	N,O,U	-	1	-	5	2	1	2	-	-	1	-	
<i>Pinnularia viridis</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	ind	O	-	-	-	3	3	-	-	1	-	1	-	
<i>Pinnularia</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		6	18	-	14	9	15	3	8	-	13	21	
<i>Placoneis elginensis</i> (Greg.) Cox	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Planothidium lanceolatum</i> (Breb. ex Kuetz.) Lange-Bertalot	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	1	2	-	-	-	-	-	-	
<i>Reimeria sinuata</i> (Greg.) Kociolek et Stoermer	Ogh-ind	ind	r-ph	K,T	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Rhopodia gibba</i> (Ehr.) Mueller	Ogh-ind	al-il	ind	O,U	-	-	-	3	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Rhopodia quisumburgiana</i> Skvortzow	Ogh-hil	al-il	ind	O,U	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Sellaphora laevissima</i> (Kuetz.) D.G.Mann	Ogh-ind	ind	ind	U	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Sellaphora pupula</i> (Kuetz.) Mereschkowsky	Ogh-ind	ind	ind	S,U	-	-	-	1	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Stauroneis acuta</i> W.Smith	Ogh-ind	al-il	l-ph	O	-	-	-	3	-	-	-	-	-	1	-	
<i>Stauroneis obtusa</i> Lagerst	Ogh-ind	ind	ind	RB	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> (Nitz.) Ehrenberg	Ogh-ind	ind	l-ph	N,O,U	-	7	1	1	-	1	1	-	-	3	2	
<i>Stauroneis phoenicenteron</i> var. <i>signata</i> Meister	Ogh-ind	ind	l-ph	O	-	1	-	-	-	-	-	1	-	3	-	
<i>Stauroneis</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		3	3	3	4	2	2	1	2	-	4	5	
<i>Stausosira construens</i> Ehrenberg	Ogh-ind	al-il	l-ph	U	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Stausosira construens</i> var. <i>venter</i> (Ehr.) Hamilton	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	-	-	-	-	-	-	-	-	2	-	
<i>Stausosirella pinnata</i> (Ehr.) Williams & Round	Ogh-ind	al-il	l-ph	S	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
<i>Surirella</i> spp.	Ogh-unk	unk	unk		-	3	-	2	2	1	3	-	-	-	-	
海水生種					0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	
海水～汽水生種					0	1	0	0	1	1	0	0	0	0	0	
汽水生種					0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
淡水～汽水生種					3	0	1	0	7	0	3	0	0	0	7	
淡水生種					18	130	20	137	123	120	128	38	24	107	160	
珪藻化石総数					21	132	21	137	132	121	131	38	24	107	167	

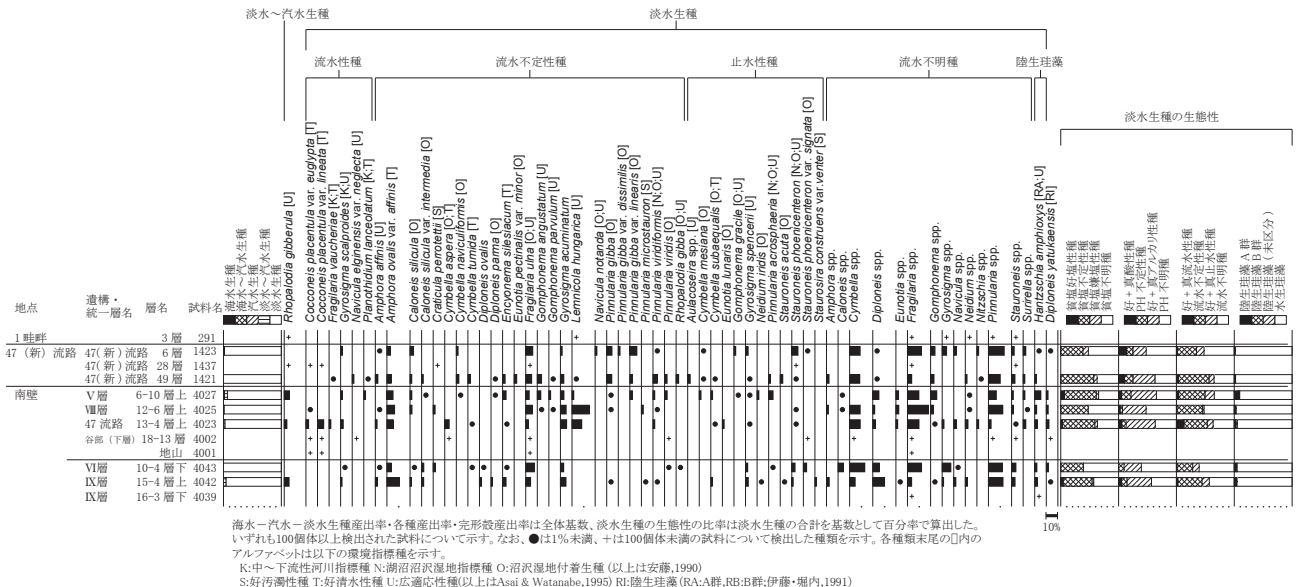
凡例

塩分・pH・流水に対する適応性

- HR.: 塩分濃度に対する適応性 pH: 水素イオン濃度に対する適応性 C.R.: 流水に対する適応性
- Euh.: 海水生種 al-bi: 真アルカリ性種 l-bi: 真止水性種
- Euh-Meh: 海水生種・汽水生種 al-il: 好アルカリ性種 l-ph: 好止水性種
- Meh: 汽水生種 ind: pH不定性種 ind: 流水不定性種
- Ogh-hil: 貧塩好塩性種 ac-il: 好酸性種 r-ph: 好流水性種
- Ogh-ind: 貧塩不定性種 ac-bi: 真酸性種 r-bi: 真流水性種
- Ogh-hob: 貧塩嫌塩性種 unk: pH不明種 unk: 流水不明種
- Ogh-unk: 貧塩不明種

環境指標種

- A: 外洋指標種 B: 内湾指標種 C1: 海水藻場指標種 C2: 汽水藻場指標種
- D1: 海水砂質干潟指標種 D2: 汽水砂質干潟指標種
- E1: 海水泥質干潟指標種 E2: 汽水泥質干潟指標種 F: 淡水底生種群 (以上は小杉, 1988)
- G: 淡水浮遊性種群 H: 河口浮遊性種群 J: 上流性河川指標種 K: 中～下流性河川指標種
- L: 最下流性河川指標種群 M: 湖沼浮遊性種 N: 湖沼沼沢湿地指標種 O: 沼沢湿地付着種
- P: 高層湿原指標種群 Q: 陸域指標種群 (以上は安藤, 1990)
- S: 好汚濁性種 T: 好清水性種 U: 広適応性種 (以上はAsai,K. & Watanabe,T.1995)
- RI: 陸生珪藻 (RA:A群, RB:B群、伊藤・堀内, 1991)

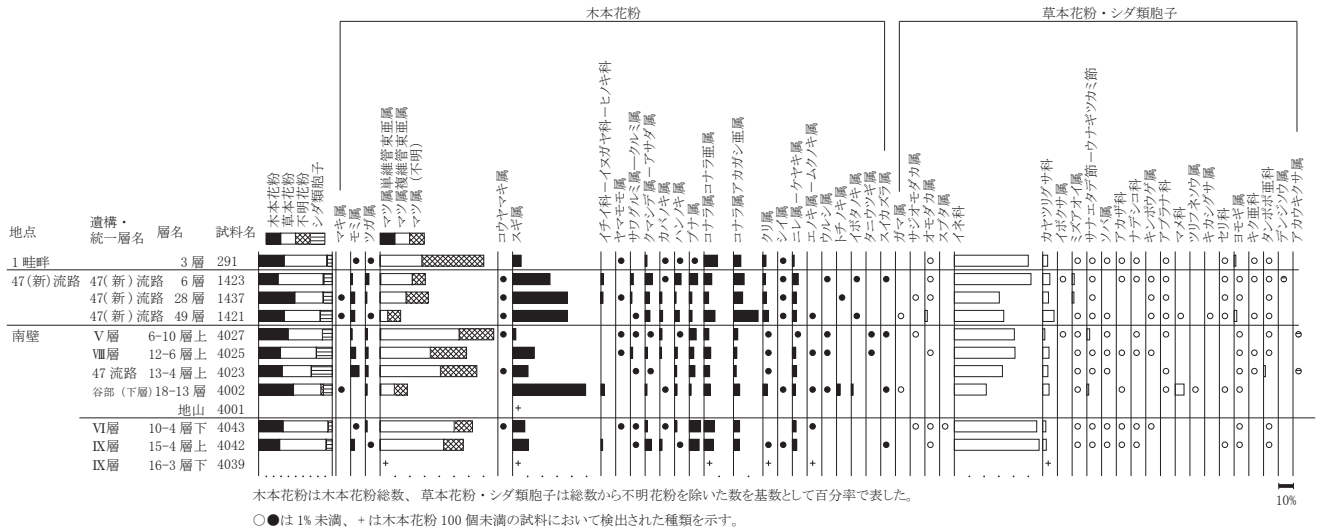


第5-3図 主要珪藻化石群集の層位分布

第5章 自然科学的調査の成果

第5-4表 花粉分析結果

種類	地点・層位・取上No.												
	1畦畔 291	47(新)流路断面			南壁								
		6 1423	28 1437	49 1421	6-10上 4027	12-6上 4025	13-4上 4023	18-13 4002	地山 4001	10-4下 4043	15-4上 4042	16-3下 4039	
木本花粉													
マキ属	-	-	1	1	-	-	-	1	-	-	-	-	
モミ属	1	3	8	6	3	9	12	-	-	1	7	-	
ツガ属	1	6	3	1	4	5	4	3	-	4	1	-	
マツ属単維管束亜属	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	-	-	
マツ属複維管束亜属	68	53	51	11	147	90	86	22	-	158	116	1	
マツ属(不明)	101	22	44	19	65	65	52	21	-	39	36	-	
コウヤマキ属	-	1	1	1	1	-	1	-	-	1	-	-	
スギ属	14	63	108	80	6	39	22	118	2	26	29	2	
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	4	4	-	-	-	-	5	-	-	3	-	
マオウ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
ヤマモモ属	1	-	1	-	1	2	-	-	-	1	-	-	
サワグルミ属	-	5	3	1	2	3	1	-	-	-	2	-	
クルミ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	1	-	-	
クマシデ属-アサダ属	3	12	8	7	2	4	2	3	-	5	11	-	
カバノキ属	2	2	4	4	4	3	-	1	-	1	4	-	
ハンノキ属	2	11	3	7	2	5	3	4	-	5	1	-	
ブナ属	2	14	5	4	13	8	8	3	-	24	18	-	
コナラ属コナラ亜属	22	13	9	16	9	12	8	10	-	22	17	1	
コナラ属アカガシ亜属	12	18	18	36	8	6	4	10	-	13	11	-	
クリ属	5	4	7	8	1	2	1	7	-	-	1	1	
シイ属	1	1	2	2	-	-	-	2	-	-	1	-	
ニレ属-ケヤキ属	3	10	8	6	1	6	6	5	-	8	8	-	
エノキ属-ムクノキ属	-	-	-	1	-	2	-	2	-	2	-	1	
キハダ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカメガシワ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	1	-	
ウルシ属	-	1	-	-	1	1	-	2	-	-	-	-	
モチノキ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	
カエデ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
トチノキ属	-	-	1	-	-	-	-	6	-	-	-	-	
ノブドウ属	-	-	-	-	-	-	-	5	-	-	-	-	
ツタ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
シナノキ属	-	2	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
グミ属	-	-	-	-	1	-	-	-	-	2	-	-	
ツツジ科	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
ハイノキ属	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
エゴノキ属	2	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
イボタノキ属	-	1	-	1	-	-	-	3	-	-	-	-	
トネリコ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
タニウツギ属	-	-	-	-	2	1	-	-	-	-	-	-	
スイカズラ属	-	1	-	-	1	-	-	1	-	-	1	-	
草本花粉													
ガマ属	-	-	-	1	-	-	-	3	-	-	-	-	
サジオモダカ属	-	-	2	-	2	-	-	-	-	1	-	-	
オモダカ属	1	3	2	10	-	1	-	-	-	1	2	-	
スブタ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
イネ科	343	482	179	205	280	365	213	105	-	527	540	-	
カヤツリグサ科	23	45	23	47	10	38	23	21	-	20	23	2	
イボクサ属	-	2	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	
ミスアオイ属	2	13	7	1	2	2	2	1	-	2	6	-	
ユリ属	-	1	-	1	-	-	-	-	-	1	-	-	
クワ科	2	-	-	2	-	1	-	10	-	1	1	-	
サナエタデ節-ウナギツカミ節	1	4	2	4	13	5	5	6	-	4	6	-	
ソバ属	1	-	-	1	3	2	1	-	-	4	2	-	
アカザ科	2	1	-	-	-	1	-	1	-	1	1	-	
ナデシコ科	2	2	-	-	1	1	-	-	-	3	1	-	
キンボウゲ科	1	-	-	2	1	-	-	1	-	-	-	-	
アブラナ科	3	2	2	1	1	-	1	1	-	-	-	-	
バラ科	1	-	-	1	-	-	-	1	-	-	-	-	
マメ科	-	-	-	2	-	-	-	29	-	-	-	-	
ツリフネソウ属	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	
キカシグサ属	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	
アカバナ属-ミズユキノシタ属	-	-	-	-	-	1	-	-	-	-	-	-	
アリノトウグサ属	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
セリ科	1	5	3	1	-	-	-	2	-	-	1	-	
オオバコ属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
ゴキツル属	-	-	-	-	-	-	-	3	-	-	-	-	
ツルニンジン属	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	-	-	
ヨモギ属	8	7	3	11	3	2	3	1	-	4	3	-	
キク亜科	1	2	-	1	-	3	1	-	-	-	-	-	
タンポポ亜科	4	1	1	3	3	7	8	-	-	1	5	-	
不明花粉													
不明花粉	7	10	4	4	1	2	4	18	-	3	4	-	
シダ類胞子													
ヒカゲノカズラ属	-	-	1	-	-	-	-	-	5	1	-	1	
デンジソウ属	-	1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
ゼンマイ属	-	1	-	2	1	4	5	-	-	1	1	-	
イノモトソウ属	-	1	1	-	1	3	1	1	1	-	-	4	
アカウキクサ属	-	-	-	-	1	-	1	-	-	-	-	-	
他のシダ類胞子	46	104	69	97	88	185	178	59	107	52	77	16	
合計													
木本花粉	240	248	290	215	276	264	210	238	2	314	269	6	
草本花粉	397	571	225	297	320	430	257	186	0	574	591	2	
不明花粉	7	10	4	4	1	2	4	18	0	3	4	0	
シダ類胞子	46	107	71	99	91	192	185	60	113	54	78	21	
合計(不明を除く)	683	926	586	611	687	886	652	484	115	942	938	29	



第5-4図 花粉化石群集の層位分布

率に淡水～汽水生種を伴っている。

47(新)流路埋積物の1421および1423からは100個体以上が検出されたものの、1437からは、21個体が検出されたのみである。検出された分類群は、いずれの層準もほとんど淡水生種と言ってもよいが、極々低率に海水～汽水生種、汽水生種および淡水～汽水生種を伴っている。

南壁では、4002、4001および4039は低率(50個体未満)にしか検出されないが、他は堆積物中の絶対量が多いとは言えないものの、辛うじて100個体以上が検出された。

群集の構成は、ほとんど淡水生種としてもよい組成であるが、層準によっては極々低率に淡水～汽水生種、海水～汽水生種および海水生種が認められた。

(3) 花粉分析

結果を第5-4表および第5-4図に示す。花粉化石の保存状態は堆積物の時代を考えると普通である。花粉分析試料のうち、木本花粉が200個体を越えた試料は4001、4039を除く11試料である。これら11試料の木本花粉組成は、木本花粉ではスギ属とマツ属が木本花粉のほとんどを占める。スギ属とマツ属の量比は試料によって異なり、291、4023、4025、4027、4042、4043ではマツ属が優勢なのに対し、1421、1437、1423ではスギ属がマツ属よりやや多く、4002ではスギ属が優勢である。その他、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属一ケヤキ属等が検出される。

草本花粉の種類構成は、全ての試料でほぼ同じである。イネ科が多産し、その中には栽培種であるイネ属を含む。その他、カヤツリグサ科、ヨモギ属等の風媒花花粉が多く見られる。ガマ属、サジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、アカウキクサ属等の水生植物が検出される。イネ属以外の栽培種は、ソバ属が検出される。

4001、4039は、花粉化石の保存が悪く、種類数も少ない。シダ類胞子が認められる程度である。

(4) 植物珪酸体分析

結果を第5-5表および第5-5図に示す。

第5章 自然科学的調査の成果

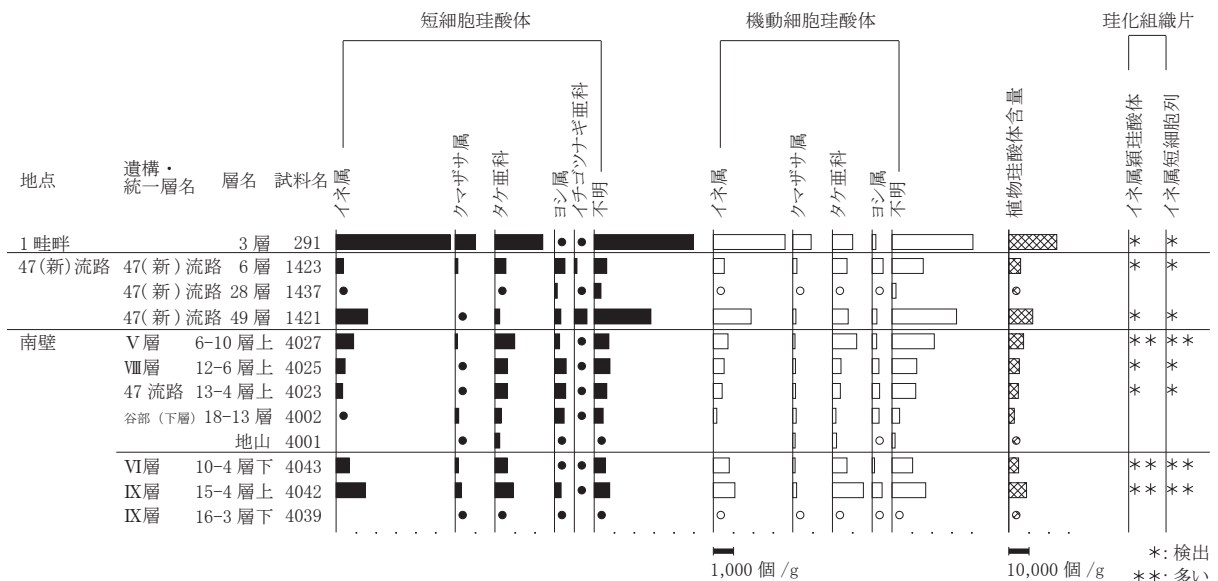
各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態が悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。291(1畦畔)での植物珪酸体含量は、約24,000個/gである。検出される分類群の中では栽培植物であるイネ属の産出が目立ち、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。その含量は、短細胞珪酸体が約5,700個/g、機動細胞珪酸体が約3,600個/gである。また珪化組織片として、穎珪酸体や短細胞列も検出される。この他には、クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、イチゴツナギ亜科等が認め

第5-5表 植物珪酸体分析結果

分類群	地点・層位・取上No.												
	1畦畔	47(新)流路断面			南壁								
		291	6	28	49	6-10上	12-6上	13-4上	18-13	地山	10-4下	15-4上	16-3下
イネ科葉部短細胞珪酸体													
イネ属	5700	1600	400	<100	900	500	300	<100	-	700	1500	-	
クマザサ属	1000	<100	100	-	100	<100	<100	200	<100	200	300	<100	
タケ亜科	2400	200	600	<100	1000	600	600	300	200	600	900	<100	
ヨシ属	<100	300	500	100	300	600	600	500	<100	<100	300	<100	
イチゴツナギ亜科	<100	600	100	<100	<100	<100	<100	<100	-	<100	<100	-	
不明	5000	2900	600	300	700	800	600	500	<100	600	800	<100	
イネ科葉身機動細胞珪酸体													
イネ属	3600	1900	600	<100	700	500	400	200	-	800	1100	<100	
クマザサ属	900	200	200	<100	100	100	100	200	100	100	200	<100	
タケ亜科	1000	800	700	<100	1200	400	400	200	200	700	1600	<100	
ヨシ属	200	200	600	<100	200	300	400	300	<100	100	500	<100	
不明	4100	3300	1600	200	2100	1200	1200	400	200	1000	1700	<100	
合計													
イネ科葉部短細胞珪酸体	14400	5700	2300	600	3000	2600	2200	1500	500	2100	3900	200	
イネ科葉身機動細胞珪酸体	9800	6300	3600	300	4400	2700	2600	1200	500	2800	5000	200	
植物珪酸体含量	24200	12000	5900	900	7400	5300	4800	2700	1000	4900	8900	400	
珪化組織片													
イネ属穎珪酸体	*	*	*	-	**	*	*	-	-	**	**	-	
イネ属短細胞列	*	*	*	-	**	*	*	-	-	**	**	-	

数値は含量密度(個/g)を示し、10の位で丸めた値で示している(100単位にする)

<100:100個/g未満、-:未検出、*:検出、**:多く検出



乾土 1gあたりの個数で示す。●○は100個未満を定性的に示す。

第5-5図 植物珪酸体含量密度の層位分布

られる。

47(新)流路では、1421が約12,000個/gと最も多く、1423が約5,900個/g、1437が900個/gである。全ての試料でイネ属が産出し、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が見られる。その含量は、ばらつきが大きく、機動細胞で約100～2,000個/g、短細胞で約100～1,500個/gである。また、珪化組織片として穎珪酸体や短細胞列も検出される。この他には、クマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、イチゴツナギ亜科等も認められる。

南壁溝群では、植物珪酸体含量は増加傾向にある。4001では約1,000個/gであるが、徐々に増加し、4027では約7,500個/gとなる。地山である4001では、タケ亜科やヨシ属等がわずかに認められるに過ぎない。イネ属は、短細胞珪酸体や機動細胞珪酸体が検出されるが、その含量も増加する傾向がある。また珪化組織片として穎珪酸体や短細胞列も検出され、最上部で多く検出される。この他には、各試料からクマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、イチゴツナギ亜科等が認められる。

一方、溝の肩部に近い堆積物でも、上位の方が植物珪酸体量が多い。各試料からはイネ属が産出するが、これも増加傾向にある。また珪化組織片として穎珪酸体や短細胞列が多く検出される。この他には、各試料からクマザサ属を含むタケ亜科やヨシ属、イチゴツナギ亜科等が認められる。

5 考察

(1) 堆積時の水文環境

1 畦畔地点

近世の1畦畔構成堆積物からは、流水不定または止水性の*Pinnularia*属および*Stauroneis*属等である。本試料は、珪藻化石の産出率が特に低いため詳細な堆積環境は不明であるが、若干の考察を行うと以下のように考えられる。まず、本試料のように産出率が低いことについての考えられる原因としては、①堆積時に珪藻自体が少なかったまたは堆積速度が速いために、取り込まれる量が少なかった、②堆積後に大半の殻が分解消失した等である。本試料の場合、層相と検出された化石の保存状態からみて、②堆積後に分解消失した可能性が高いと考えられる。堆積後の珪藻殻の分解消失については、堆積後の続成作用による物理・化学的な影響によるが、経験的に陸成層の場合、堆積場が水域ではない場所では、堆積時から堆積後にかけて、大気に曝されているとバクテリア等の影響により、分解が促進されることが知られている。

一方、本試料から低率に検出された種群は、そのほとんどが止水性で湿地性と思われる種である。このような群集の構成とそれらの産状(産出率が低いこと)を考慮すると、堆積時は基本的には広範な水域であったとは考えにくく、低地部等に見られる湿地様の環境下にあったものと推定されるが、地下水位は低く好氣的な場所が多かった可能性が示唆される。このような環境は本試料が畦畔構成堆積物であることと矛盾しない結果と言える。

47(新)流路断面地点

47(新)流路49層(1421)・28層(1437)・6層(1423)からは、保存不良の混合群集(淡水生種群)が認められた。本調査区では、混合群集のため特徴的に認められる種がはっきりしないが、強いて言えば、淡水生種で流水不定性種の*Amphora ovalis* var. *affinis*、*Fragilaria ulna*、不明種の*Cymbella* spp.、*Fragilaria* spp.および*Pinnularia* spp.等である。

以上の特徴種の生態性あるいは生育環境について概説すると、まず、流水不定性種の*Amphora*

ovalis var. *affinis*は、環境に対する適応能力が高い種であり、基本的に淡水生であるが、汽水～淡水のさまざまな環境の水域から認められる。また、殻のシリカに沈着が厚く、堆積後も特に化石として残りやすい種である。同じく、流水不定性種の*Fragilaria ulna*は、貧塩不定性、好アルカリ性および流水不定であり、広域頒布種の一種で広範のさまざまな水域から見出される。本種は特に生産力の高い種であり、いずれの水域でも主要種となる場合が多い。流水不明の*Cymbella* spp.、*Fragilaria* spp. および*Pinnularia* spp.は、それぞれ数種類で構成されるが、これらの属はいずれも湿地に最も特徴的に認められ、主要な構成種になる属である。

以上の産状に加えて、本調査区の珪藻化石群集の産出傾向として、特に流水に対して、流水不定性種が最優占するものの、流水性種、止水性種、流水不明種および陸生珪藻を伴うことから、分類群の生態性にはばらつきがあることがわかる。このような特徴を示す群集は、明らかに混合群集である。淡水生種群の混合群集とは、基本的に生育環境を異にする種群で構成され、また、検出種数が多い群集とされ(堆積物中からの産出率は低い割に構成種数は多い)、流れ込み等による二次化石種群を多く含む群集とされる(堀内他1996)。混合群集は、一般には低地部の氾濫堆積物等の一過性堆積物で認められる場合が多いが、この場合は検出率が低い傾向(堆積物中の絶対量が少ない)にある。他方、一過性ではなく定常的に堆積物が供給されるような場所の場合、例えば河口付近(デルタの前面)や後背湿地等において同様な環境が長期間続いた場合も混合群集が認められるが、この場合は長い間に徐々に堆積して行く中で珪藻の生産が繰り返し行われること、堆積物の表層部付近での自然の攪乱が行われること、多少の流れ込みもあること等から検出率はやや高い傾向にある。

分析層準の層相は、47(新)流路49層が細粒砂の様相を挟在する泥質砂、47(新)流路28層が低角度のトラフ型斜交葉理をなす有機質砂質泥ないし砂、47(新)流路6層は著しく乱れた(あるいは変形した)、有機質砂質泥ないし砂から成る。このような層相を踏まえると、47(新)流路49層・28層の珪藻化石の検出率が低い(堆積物中の量が少ない)ことや化石の保存状態が不良なことは、低地部等における氾濫堆積物等の一過性堆積物に認められるパターンと考えられる。よって、本分析層準の堆積時は、度重なる氾濫の影響で堆積が進行する低地付近の環境下にあったものと推定される。

南壁地点

本地点の分析層準では、特に産出率が低かった谷部(下層) 18-13層(4002)、地山(4001)およびⅩ層下16-3層下(4039)を除くと、他の層準は、近似した産状を示している。その産状は、前述の47(新)流路の分析層準の結果に酷似しており、保存不良の淡水生混合群集が認められた。特徴的に認められる種もほぼ同様に、淡水生種で流水不定性種の*Amphora ovalis* var. *affinis*、*Fragilaria ulna*、*Lemnicola hungarica*(Ⅷ層上および47流路13-4層上のみ)、不明種の*Cymbella* spp.、*Fragilaria* spp. および*Pinnularia* spp.等である。

特徴種の生態生で前述していない*Lemnicola hungarica*について述べると、本種は、付着性で池や流れの弱い川等で浮葉植物の葉に付着して生育する 경우가一般的である。中汚濁耐性種とされ、水田からも特徴的に出現することから、概ね沼沢湿地性の種と考えられる。

よって、南壁における地山等を除く5層準は、保存不良の混合群集が平均して低率に認められたことから、前述の47(新)流路と同様に分析層準の堆積時は、氾濫や洪水等の影響で堆積が進行する環境下にあったと推定される。そのため、本分析層準のほとんどは一過性の堆積によってもたらされた堆積物である可能性が示唆される。ただし、中世のⅧ層12-6層および47流路埋土最上部(13-4層上部)

堆積時は、沼沢湿地性の種が多産したことから、短期間ではあるものの停滞水域となる時期を挟んでいた可能性がある。

他方、特に産出率が低かった谷部(下層)18-13層(4002)、地山(4001)およびⅨ層16-3層下(4039)については、詳細については推定することは出来ない。検出された種群は、前述の他の層準に近似していることから、堆積環境も同様であった可能性があるものの、谷部(下層)18-13層は有機質泥から成ることから、堆積時・後に分解消失している可能性もある。

(2) 古植生

今回花粉化石が検出される試料を見ると、スギ属が多産する試料と、マツ属が多産する試料に分かれる。スギ属が多いのは、47流路・47(新)流路、南壁流路調査地点の下部であり、マツ属が多いのは、1畦畔3層、南壁流路の上部、南壁の肩部に相当する。これまでの分析例を見ると、約2,000年前を中心としてスギ属の花粉化石や埋没林が、山陰～北陸の日本海側において多く検出されていることや(高原,1998)、青谷上寺地遺跡の分析結果を見ても(安・辻2009、古環境研究所2009)、本来は遺跡周辺の低地にもスギ林が分布していたと考えられる。

今回の花粉化石群集からは、スギ属が多産する時期から、マツの二次林が増加した時期に変化した過程が読み取れる。スギからマツ林への変化は、森林への人為的干渉が過度に起こった結果、遷移が後退してマツの二次林が増加したことが原因と考えられる。ただし、後述するように、今回の花粉化石群集は草本花粉が多く、低地での人間活動の活発化に伴い、周辺の低地が開発されて耕地等へとかわり、草地化が進行したと考えられる。したがって、スギからマツへの変化は、耕地化が進んでいない山地や低地との林縁部等で起こった事象と思われる。年代測定の結果から見ると、スギ属が多かったのは弥生時代終末期～古墳時代前期初頭、マツが増加しているのは古代末～中世初頭と見られるが、これまでの常松菅田遺跡ならびにその周辺遺跡の結果と比べても調和的と言える。

なお、マツ属やスギ属の花粉は本来生産量が多いため、実際の周辺植生の割合よりも花粉化石の割合が多くなっていると思われる。本来は、スギやマツに混じって、ブナ属、クマシデ属—アサダ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、クリ属、シイノキ属、ニレ属—ケヤキ属等も多く生育していたと考えられる。これらは成長が早く、萌芽による再生が容易な種類であるため、傷害に強い。このため、河畔や林縁に明るい林地を構成していたと考えられる。東郷池(鳥取県東伯郡湯梨浜町)の分析結果では、ニレ属—ケヤキ属、ムクノキ属—エノキ属等河畔林を構成する種類に、アカガシ亜属、シイノキ属等の常緑広葉樹を伴う花粉組成が得られており(岩内他1995)、これにスギを加えたものが、遺跡周辺における自然状態での森林植生であると言える。また、植物珪酸体分析で検出されるクマザサ属を含むタケ亜科は、これらの林の林床に生育していたと見られる。なお、同時期にシイ・カシ類の花粉化石が多産する結果があり、海岸沿いの丘陵地等、温暖で安定した場所にはこれらの常緑広葉樹が多く分布していたと考えられる。

今回分析を行った全ての試料において、草本花粉の割合が多いこと、遺構の存在や栽培植物の検出等人間活動の痕跡が多数認められることから、遺跡周辺の低地では林が切り開かれ、基本的には草地であったと思われる。イネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属が多いが、これらは風媒花で花粉生産量が多いため、実際の周辺植生よりも出現率が多くなっている可能性がある。アカザ科やナデシコ科、キク亜科やタンポポ科等も開けた草地を好む種類であり、周辺に生育していたと思われる。

遺跡は谷底平野に接していることから、ガマ属、オモダカ属、ミズアオイ属、アカウキクサ属、ヨシ属等湿地性の花粉化石や植物珪酸体が検出され、これらが生育可能な沼沢域が存在していたと考えられる。また、イネ属の花粉化石や植物珪酸体が検出されることから、周辺での稲作が推定されるが、これらの水生植物は水田雑草として普通に見られることから、水田開発によって増加した可能性もある。その他、ソバ属も当時栽培・利用されていたと推定される。

なお、今回の植物珪酸体分析の結果を見ると、地山以外ではイネ属が検出される。珪化組織片や穎の珪酸体も認められることから、近傍での稲作が推定される。なおイネ属珪酸体の量に変化が見られるが、上位ほど多い傾向がある。これはイネ属だけでなく、他の種類や不明珪酸体も同様であり、結果的に上位ほど植物珪酸体が多いという結果になっている。植物珪酸体は、土壤の風化や粘土化の過程において植物珪酸体の分解が進むと言われている(近藤2010等)。これは、植物珪酸体の増減が周辺植生ではなく、分解等も含めた堆積機構(タフォノミー：taphonomy)の影響を強く受けていることを示している。このことから、イネの植物珪酸体の増減は堆積機構によるもので、稲作の容態等栽培環境によるものではないと思われる。

第2節 1区南壁谷部付近の堆積構造

(独行) 奈良文化財研究所 村田泰輔

1 はじめに

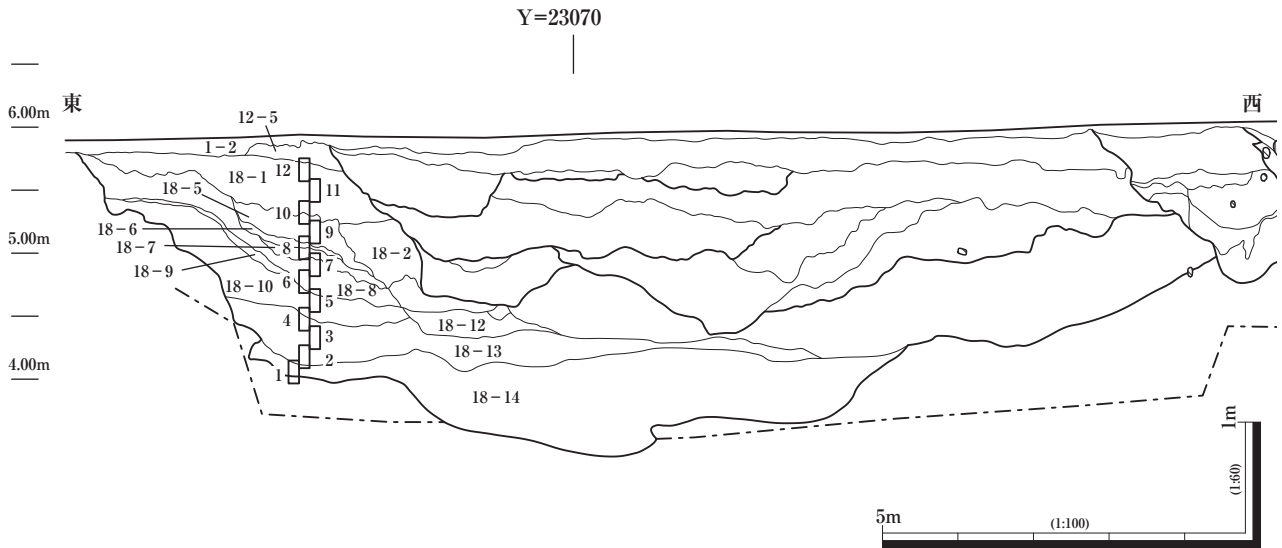
1区南壁で見つかった谷部(下層)の堆積環境について検討するため、谷の東肩の堆積物について基底部より連続的に地質試料の切り出しを行い、層相観察、軟X線撮像観察を行った。その結果、18-6層、18-7層、12-5層を除き、氾濫原堆積であることが明らかとなった。詳細について以下に報告する。

2 試料と方法

試料は1区南壁谷部(下層)の東肩堆積物について、基底堆積物から連続的に12-5層まで採取した(第5-6図)。採取にあたってはスチロール角形ケース11型(14×22×4cm)を用い、土層断面にこのケースを埋め込むようにして土壌試料を切り出した。切り出した試料は、奈良文化財研究所埋蔵文化財センター 遺跡・調査技術研究室にて層相観察を行った後、同センター保存修復科学研究所の有する卓上型X線撮像装置NX-1000(フジフィルム社製)を用い、イメージングプレートによって撮像を行った。イメージングプレートのスキャンには、同研究室の有するFuji BAS Scanner 5000を利用した。撮像の観察にあたっては、IMGデータをフリーソフトImage-J 1.48vにISAC Managerプラグインを搭載しJPG形式に変換した後、Photoshop CS5にて露出および明るさ・コントラストを調整している。

3 結果

試料全体として氾濫原堆積物から成り、河川からの影響と掃流物質の変化、さらに後背地化の様相



第5-6図 南壁土層断面と試料層位

を示していることが明らかとなった。軟X線撮像の結果を第5-7～5-10図に示す。図には、撮像図についてオリジナルと堆積構造を解釈した加筆図を示した。また撮像図の右肩に試料番号を記載し、発掘調査によって検討された分層線に基づく土層番号を2つの撮像図の間に付記し、右側に堆積構造から解釈される層区分をA～Mの記号を与えて付記した。

観察内容について層下位より記す。A層からE2層までは、河川による掃流物質から成る。A層は調査区の最下層(基底)にあたり、基質をシルトとする粗砂混泥である。層相観察ではラミナ構造が比較的明瞭に見られるが、ラミナ毎の構成粒子組成がほぼ同質なため、X線では構造が不明瞭となった。河川からの掃き寄せにより急激に減速した水塊中の浮流粒子が、トラクション流によって堆積したと考えられる。B層は中-粗砂を主体とした砂層で、A層上面を浸食する。2枚の逆級化構造が見られ、分級も良好であることから、トラクションカーペットによる堆積が進んだことを示す。C1層には反砂堆と平滑床構造が見られることから、比較的浅く速い流れの中で、水深が流速、もしくは両方が周期的に増減したことが考えられる。C2層には、傾斜のきついクロスラミナが前置的に堆積している。河川流に対しての土層断面方位がやや傾いているため限定はできないが、おそらくは線状リップルの断面を見ていると考えられる。このため、C1層からC2層にかけて流速が急激に減速もしくは水深が増加したと推定される。D層は植物片を比較的多く挟在する泥層である。構造としては弱いラミナ構造がわずかに見られる程度で、植物遺体が流れ込むと共に、流水の影響がほとんど無くなったことを示唆している。E1層およびE2層は、掃流物質中に多くの植物片が混じる。構造はE1層で平滑床、E2層下部で反砂堆が形成されており、水流の増速もしくは水深の浅化が起こった後、水流の減速と水深の深化がC層同様に繰り返されたと考えられる。

F層は、層下部で弱いラミナを含むが、上部ではほぼ土壌粒団から成る構造の不明瞭な泥層である。植物片を挟在する等、前出のD層に類似する。G1層は細礫、小礫を含む泥層で、全体に植物片を挟在する。層の下部は全体として上方細粒化するが分級の悪い砂礫、上部は平滑床と弱いクロスラミナが見られる。G2層は、全体としてラミナ構造の見られる植物片挟在泥層である。構造としては3つに分けられ、下部は逆級化が複数見られる平滑層が堆積し、トラクションカーペットを形成している。

中部は皿状構造とやや弱いラミナが見られる。植物片も多く挟在し、液状化流堆積物の様相を呈している。上部は弱いラミナを含み、多量の植物遺体を挟在する。低密度混濁流がトラクション流によって変形し、低流域に堆積したとことを反映したと推定される。

H層は、植物片を多数挟在する泥層である。層の下部には分級の悪い弱いラミナ構造がわずかに見られるが、上部は土壤粒団から成り、構造は不明瞭である。前出のD層、F層に類似する。I1層は、細礫、小礫を含む泥層で、全体に植物片を挟在する。層の下部は全体として上方細粒化するが分級の悪い砂礫、上部は平滑床と弱いクロスラミナが見られ、G1層に類似する。I2層は弱いクロスラミナを含む泥層で、中央部分は植物根の貫進を受け、構造に歪みが出ている。G2層の中～上部に似る。

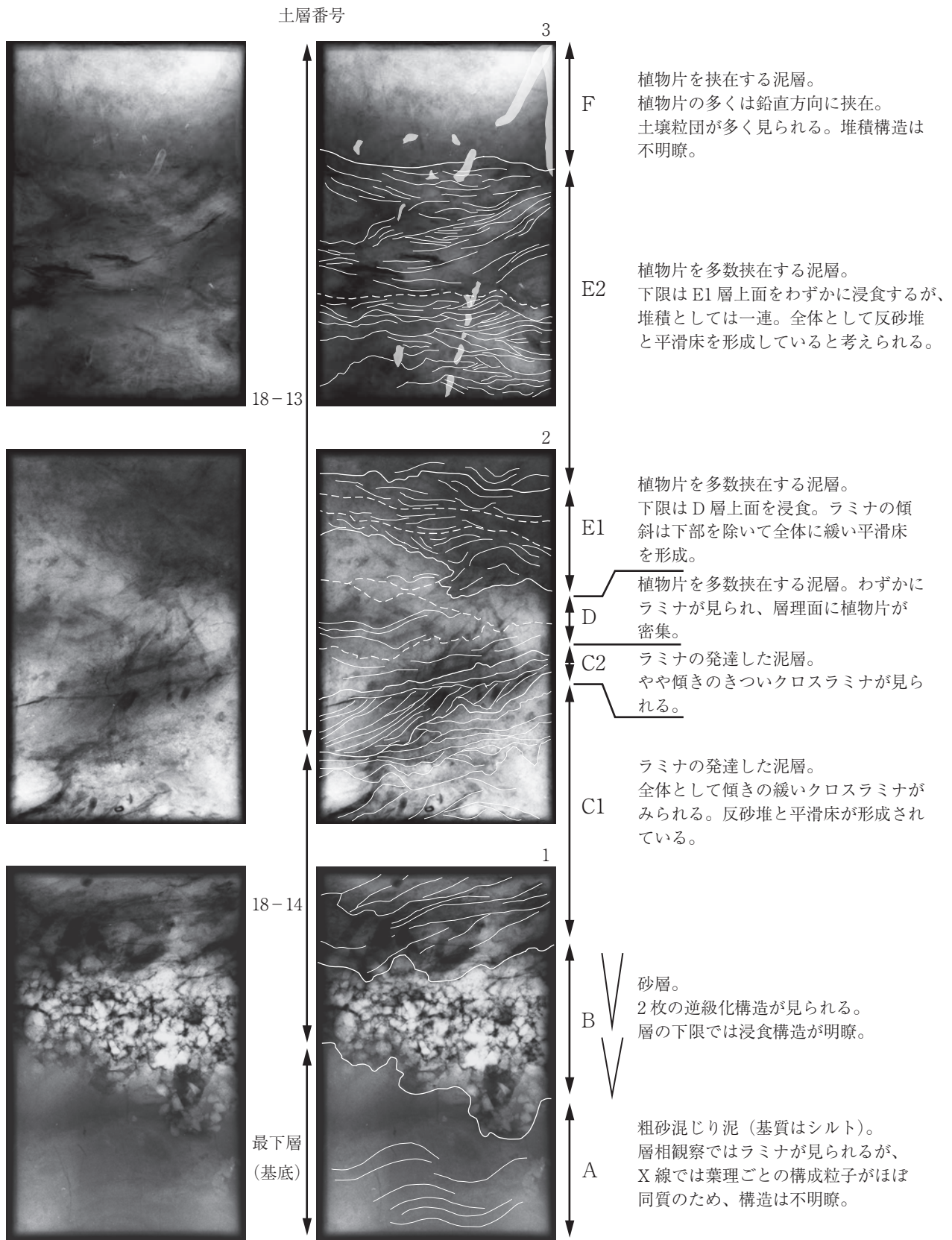
J層は、層理面にしたがって7区分しているが、ほぼ互層になっているため一括して記載する。全体としては植物片を多数挟在する泥層で、特に葉片を主体とした植物片群の類重と泥の簿層により平行ラミナが形成されている。ただし多量の高師小僧に見られる植物根の鉛直的な貫進を受けており、ラミナ構造は寸断され、かなり不明瞭なものとなっている。粒子密度において粗密に明瞭な層位差が見られる。粒子密度の高いJ1、3、5、7層については、層上面が比較的水平に堆積するのに対し、層下面は大きくうねるような凹凸構造が見られる点が特徴的である。K層は、弱いラミナと皿状構造を含む泥層である。植物片については少量含む。構造としてはE2層上部、G2層上部、I1層上部に類似する。

L層は、多数の土壤粒団から成る泥層である。上層からの植物根の貫進が高師小僧として多数見られる。構造は不明瞭で、粒団の集中からわずかに堆積単位が認められるが、実質的には一連の堆積と考えられる。最上層のM層は、上層からの植物根の貫進が見られる泥層である。構造は不明瞭で、鉛直方向への亀裂が見られる。

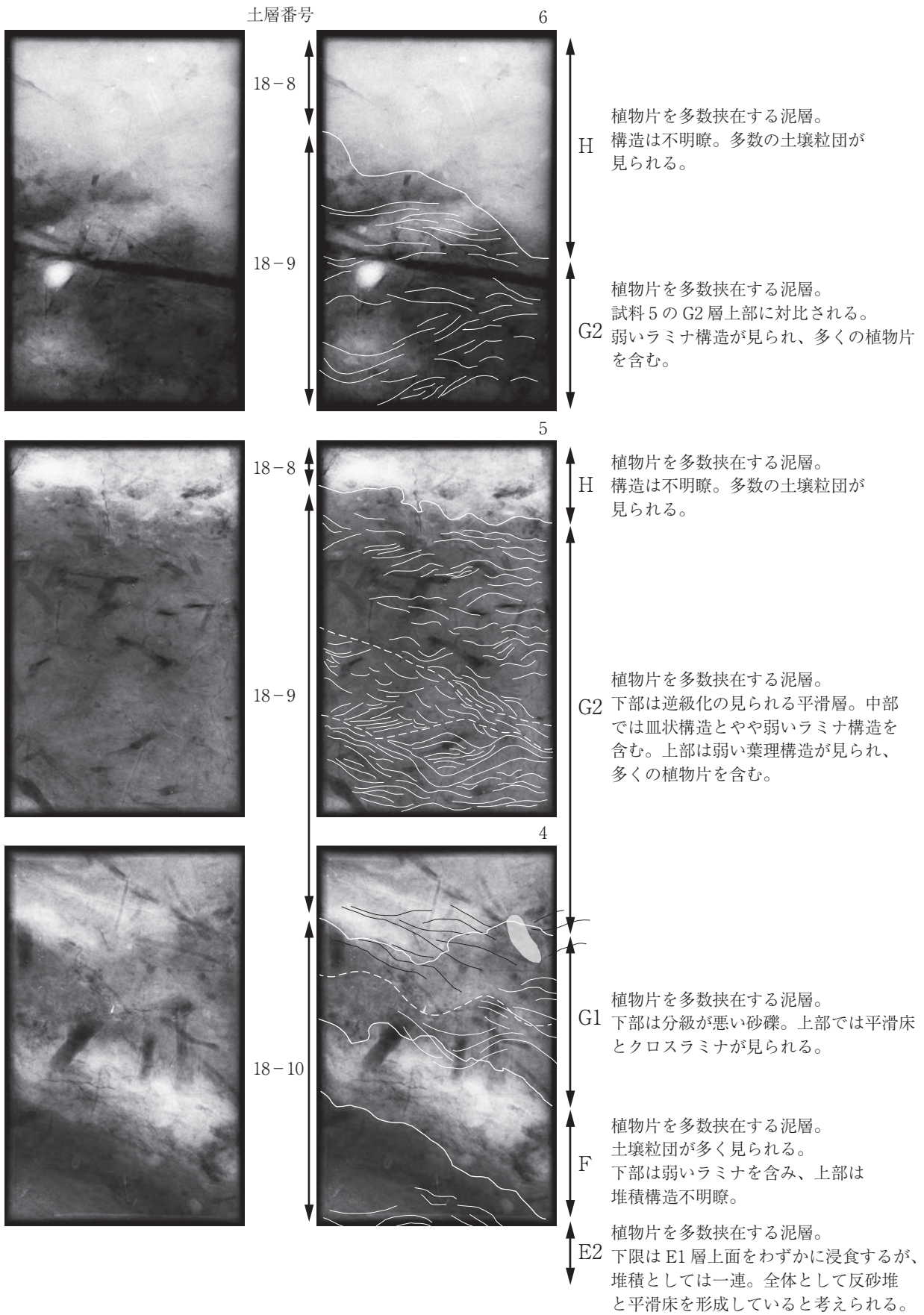
4 推定される堆積環境

堆積構造の観察から、大きく5つの堆積相が推定される。A層に見られるような、シルトを基質とする堆積場としては、沼沢地や湿地といった河川後背地等が推定される。B層は流水による浸食とトラクション沈積による堆積と考えられ、河川の増水もしくは河道の変更により、河川後背地まで川が入り込んだと考えられる。C層、E層、G層、I層、K層は、高密度懸濁流の堆積過程に見られる諸特徴を示している。すなわち河川増水に伴う泥流、土石流の堆積と考えられる。D層、F層、H層については、土壤粒団の発達した土壤が形成されている。陸域での土壤形成が示唆されており、河川後背地に分布する沼沢地や湿地の形成が推定される。一方、J層とM層は、一連の堆積の中で他の堆積層とは異なる構造が見られた。具体的には、どちらの層も高師小僧を多量に含み、J層については土壤粒子の粗密に互層が発達している点が挙げられる。

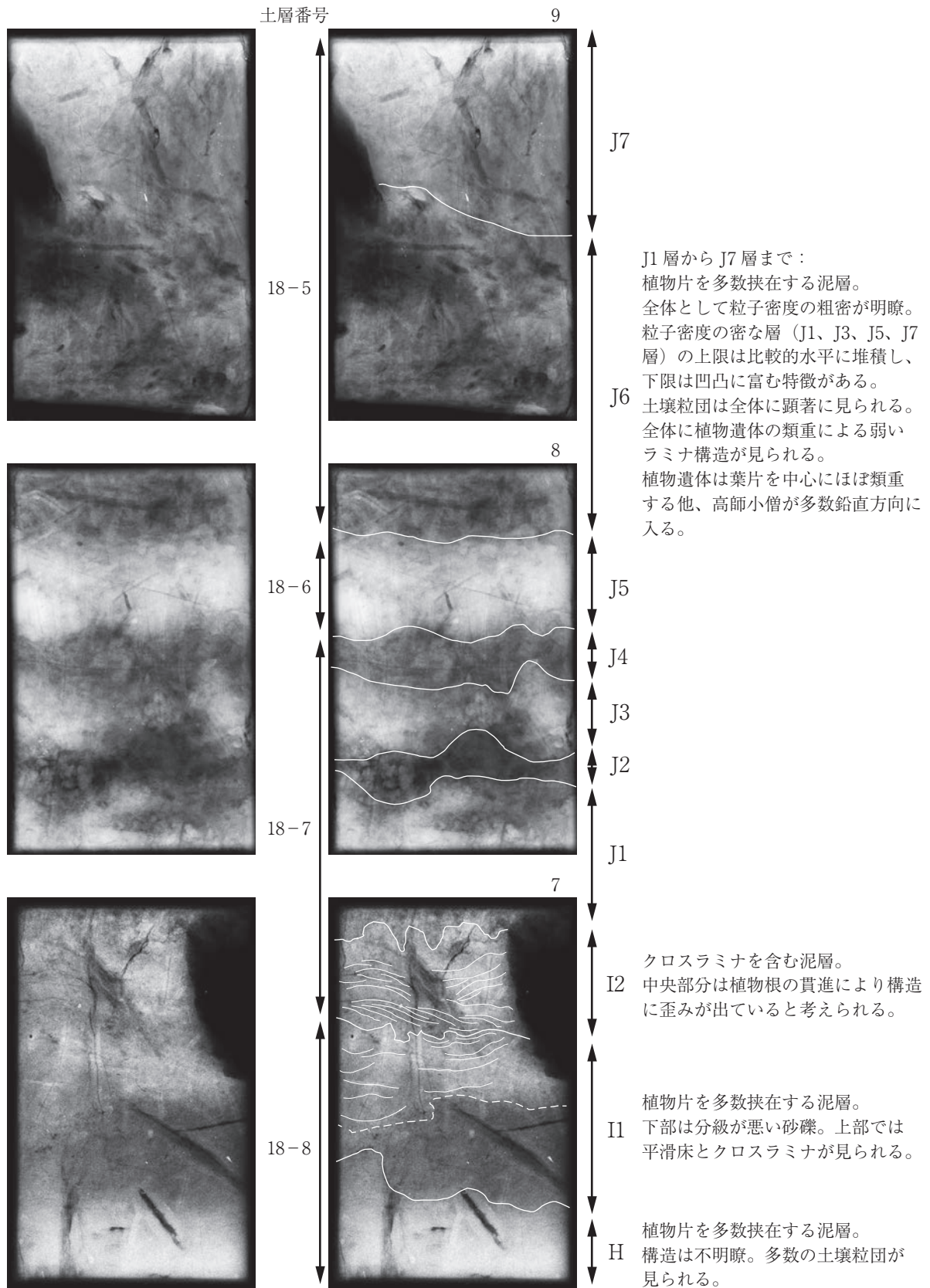
この土壤粒子の粗密は、結果的に土壤空隙率、すなわち含水率の差であろうと推定される。残念ながら土壤試料採取後の時間推移の中で、直接的な水分量の測定は適わなかった。このような互層化は、水分分布にむらのある氾濫原低地においては容易に起こりえると考えられるが、水田耕作等でも床土と肥土の間での互層として見られる傾向がある。耕作地か否かを本調査のみでは限定し得ないが、高師小僧が他の層に比べ、圧倒的に密度が高いことも含め、遺構検証としては検討する選択肢の中に入れておく必要もあろう。いずれにしても、基底層から最上層の12-5層まで、氾濫原低地の堆積であるということが明らかになった。



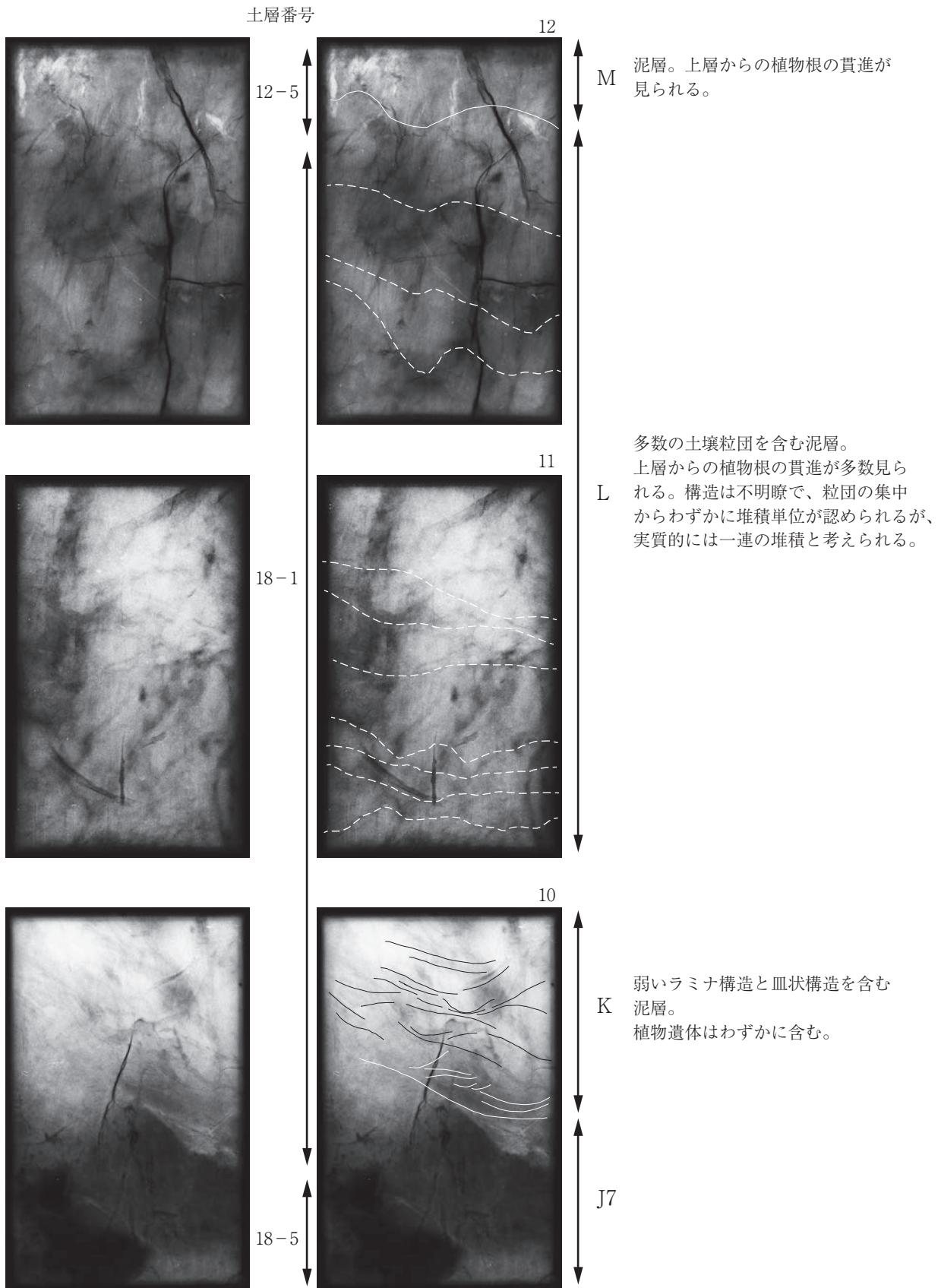
第5-7図 軟X線撮像図(左)と堆積構造を解釈した加筆図(右) (試料層位1~3)



第5-8図 軟X線撮像図(左)と堆積構造を解釈した加筆図(右)(試料層位4~6)



第5-9図 軟X線撮像図(左)と堆積構造を解釈した加筆図(右)(試料層位7~9)



第5-10図 軟X線撮像図(左)と堆積構造を解釈した加筆図(右)(試料層位10~12)

第6章 総括

本書は、平成26年度に実施した常松菅田遺跡1区(以下「1区」)の発掘調査成果にかかる報告書である。平成25年度に調査を実施した常松菅田遺跡2区(以下「2区」)に関しては、既に『常松菅田遺跡I』として、その成果を公にしている(水村編前掲)。その際に、常松菅田遺跡の全体評価や、河内川周辺域所在の諸遺跡との関係性等については、1区の調査成果を得たうえで、総合的に言及すると述べた。本章第1節では、そのような背景を考慮しつつ、変遷というスキームの中で、1区の特質と本遺跡の全体像についてまとめる。最終的に、遺跡の立地する河内川右岸(宝木谷地区)における常松菅田遺跡の性格と機能の評価を行い、調査の総括としたい。

第1節 遺跡の変遷と評価

第1項 1区の特質について

1区の調査では、縄文時代晩期後半以降、弥生時代、古墳時代はもとより、古代、中・近世に至るまで、人々のこの地への断続的な動態を捉えることが出来た。ただし、遺跡の形成期より長期に渡って、調査区内には谷部が占有していたこと、また谷の埋没後も、湿地性堆積と河道、その後現在に至るまで生産域として主に機能している土地であることから、いずれの時代においても、集落本体自体を明確に確認し、人的活動の様相を具体的に解明することはかなわなかった。

そのような遺跡立地の性格を背景とする中で、1区では、7世紀後半から8世紀代にかけての水辺祭祀の場としての機能が、特筆すべき事象として挙げられる。1区の特質と位置付ける木製祭祀具を用いた祭祀行為については、本章第2節において、その性格と展望を詳述する。

第2項 常松菅田遺跡の動態

常松菅田遺跡の曙の時期は、2区の調査成果に1区のそれを加味したとしても、従来の見解である縄文時代晩期後半頃と捉えている。本遺跡において、それ以前の時期に遡って人々の活動痕跡を見出すことは、考古学的にも、環境史的にも実証が非常に困難である。これは、常松菅田遺跡近辺のみの限定的な理解に留まらず、本遺跡の立地する谷底平野の形成過程の実状からも妥当な見解である。むしろ、後述するように、この沖積平野が形成され、汀線が北方へ漸次的に移動してまもなく、当地への人々の流入が開始されたことを物語る結果である。

以下、縄文時代晩期以降、時期が明確な遺構の変遷と合わせ、中世頃までの遺跡の動態を述べながら、常松菅田遺跡の全体像(性格)を考究する。この作業に、隣接する常松大谷遺跡の主要な変遷もリンクさせることで、総合的に常松地区の姿について述べていくこととする。

1 各段階の様相

①縄文時代晩期後半前後

常松菅田遺跡周辺がいつ頃まで水面下にあったのかという問題は、遺跡の成立を検討する際に、不可避のことと考える。この点に関して、遺跡の陸化は早くても約3,200年前以降という具体的年代観

を示したことがある(水村編前掲)。本遺跡西方に位置する青谷平野や東方の湖山池周辺では、縄文海進以降の海水準変動と景観(水域)の変化、そして各地へ流入してくる人々の動態に関する検討が、比較的古くから行われている。当該地域(鳥取市西部)においては、縄文時代後期から晩期にかけて、これら各小平野を北流する河川の掃流物質と海退現象によって氾濫原が北方へ発達し、低湿地の景観を形成するという理解が一般的である(家塚・村田編2011他)。これら地質・古地理学の成果に出土遺物の年代観を加味し検討すれば、青谷平野等と同様な景観が広がっていた宝木谷地区の陸化と人々の進出のタイミングは、縄文時代後期以降と捉えるのが整合的である。さらにより具体的に述べれば、縄文時代後期の土器が1・2区共に全く出土していないことから、常松地区周辺への人々の進出は、縄文時代晩期を遡ることはないものと察する。

2区では、239流路の前身である流路が機能を終え(第6-1図①)、その埋積時期は約2,500年前である。流路の氾濫堆積物が定常的にこの谷底平野に供給され、当時の河口付近には舌状の微高地が南北方向に形成される。これに同調するように、縄文時代晩期後半の凸帯文土器が出土し、当地における人的活動の証拠が初めて示される。ただし、遺物量や遺構密度の貧弱さからしても、この時期は短期間の滞在、もしくは一時的な活動の痕跡を示す程度である。このように、本遺跡の黎明期は、緩やかに開始されたものと評価出来る。

微高地を挟んで東側に該当する1区では、約2,400年前以降に谷部が開析される。その谷部の底面付近および基盤層となるXI層(2区の8層相当層)からは、凸帯文土器が出土している。人々の活動が、微高地を挟んで東側にも及んでいたと捉えることが可能である。

②弥生時代前期後葉～中期前葉

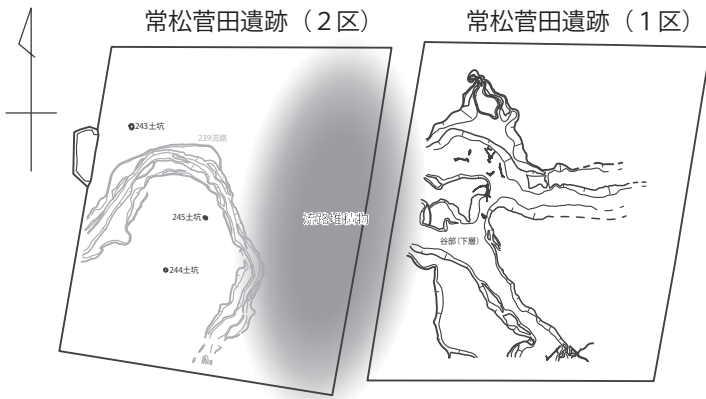
微高地を形成する営力となった縄文時代の流路は、弥生時代に入る頃には完全に埋没するが、規模を縮小しつつも、やや西寄りヘルトを変えながら、239流路がその流れを踏襲する(第6-1図②)。この流路の開析は約2,320年前とされ、東側の谷部形成の時期よりやや遅れた。流路の埋土下層からは遠賀川式土器の壺が出土したように、前段階とは異なり弥生土器が明らかに含まれ、そしてその比率が漸次的に高まる。このことを考慮すれば、XI層からX層は、両時代の移行期にかかる段階といえる。

1区および常松大谷遺跡では、この時期に関連する遺構・遺物共に見当たらない。1区では谷部の存在がその障害となったのか、人々の積極的な介入はなかったものと考えられる。

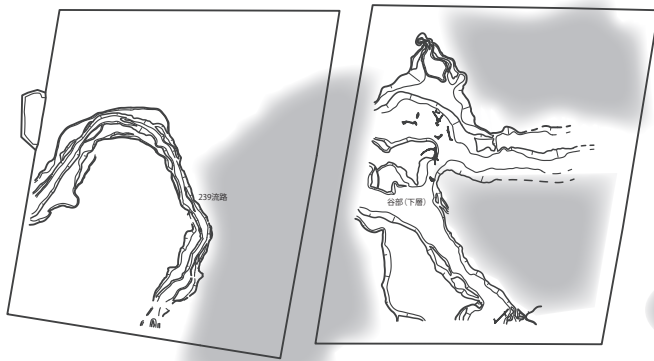
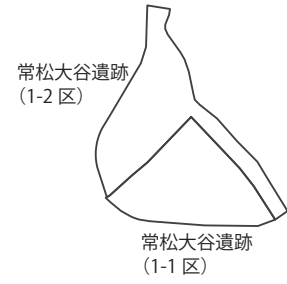
③弥生時代中期中葉

常松菅田遺跡における最初の盛期であり、律令期と共に、人々の活発な活動が確認出来る段階である。1・2区を通じて、当該期を代表する器壁の薄い甕が数多く出土しているうえ、2区の微高地縁辺部では、いわゆるB技法(大賀2001)による管玉工房跡を検出した。遺構についても、微高地上には土坑等が複数築かれ、縁辺部には人為的に掘削された溝も存在する(第6-1図③)。ただし、規則的な遺構配置や建造物は看取されないことから、集落の本体自体は、微高地のエリアが広がる調査区外南方に展開していたと推測する。

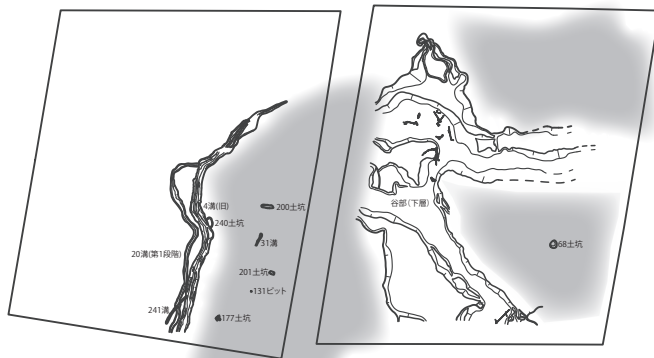
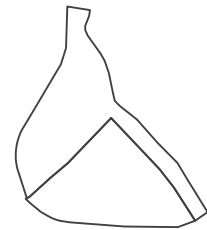
遺構が検出された微高地は、4溝(2区)と谷部(1区)に挟まれる細長い指先状の島状地形としてあり、現存する東西方向の横断幅で、最大約50mを測る。玉作工房が、その微高地縁辺部に位置することは特筆すべきである。微高地の尾根付近は凸部であり、後世の土地利用改変によって破壊されている可能性もあろうが、微高地上で遺構・遺物量がさほど変動しない事実からは、この地が当該期の集



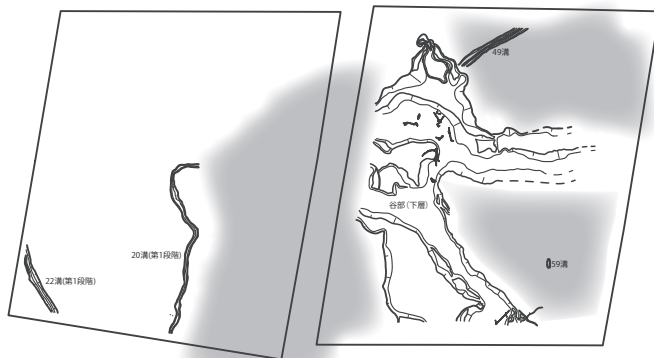
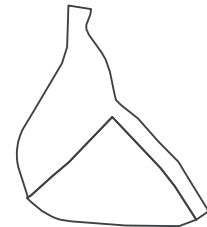
① 縄文時代晩期後半前後



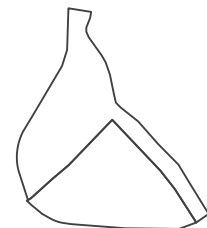
② 弥生時代前期後葉
～中期前葉



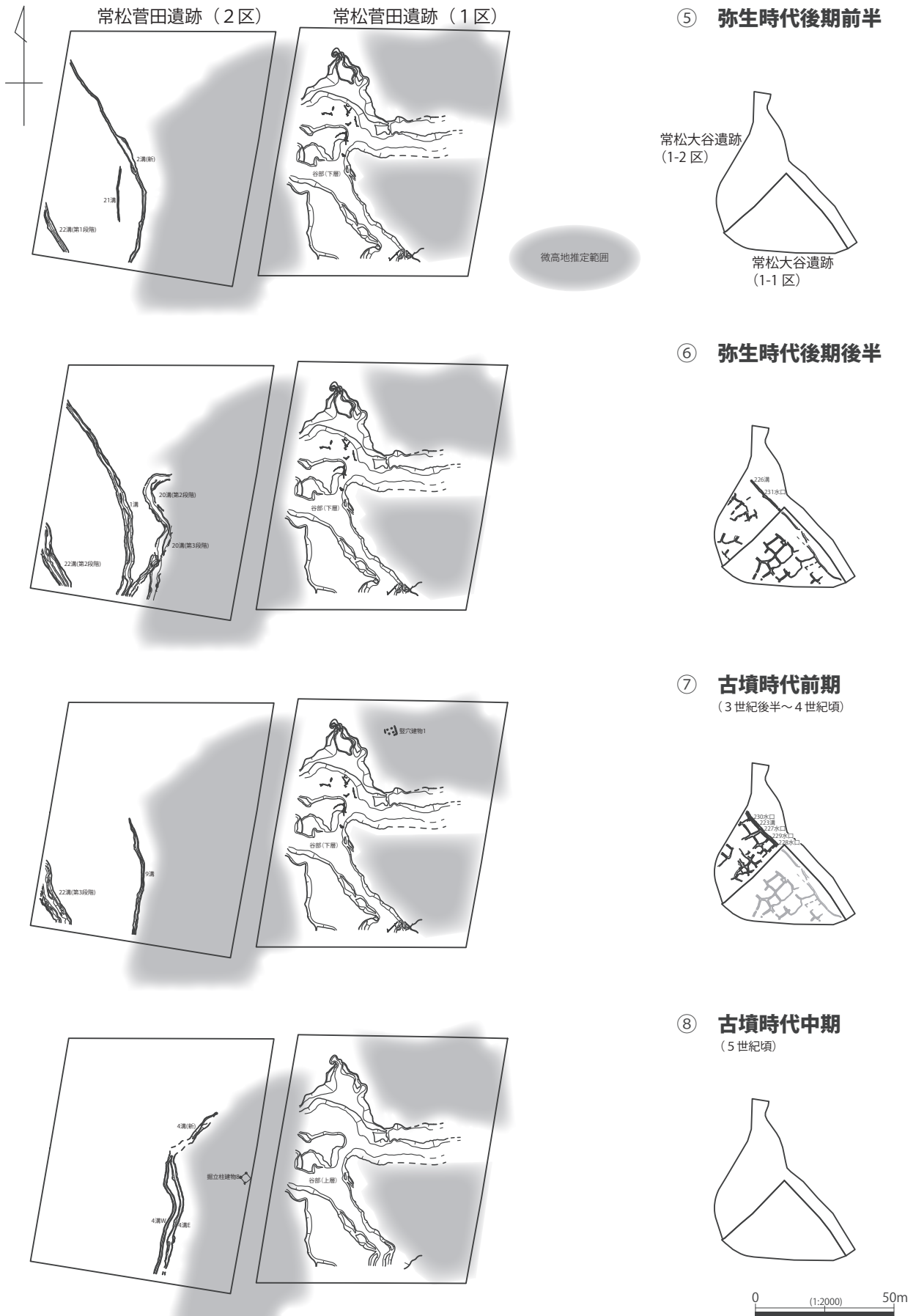
③ 弥生時代中期中葉



④ 弥生時代中期後葉
～後期初頭



第6-1図 常松菅田遺跡と常松大谷遺跡の変遷(1)



第6-2図 常松菅田遺跡と常松大谷遺跡の変遷(2)

落として積極的に利用されたとは言い難い。

2区で認めた玉作の全容は、『常松菅田遺跡I』にて既報のため、本節では詳しく言及しない。ただし、1区においては、玉作関連遺構および関連遺物共に全く出土しなかった点は強調しておきたい。つまり、玉作という生産活動を行っていたのは、2区南東側の一画に限定され、同じく微高地縁辺部に該当する1区の南西側や谷部の東側微高地上には及んでいなかった。この点や関連遺物の組成、また作業要素からしても、常松菅田遺跡における管玉製作は、同時期の管玉生産遺跡(例えば石川県小松市八日市地方遺跡や京都府久世郡久御山町市田齊当坊遺跡)に比して、小規模かつ特化した内容であったという当初からの評価を復唱することが出来る。

④ 弥生時代中期後葉～後期初頭

弥生時代中期中葉に本格化する本遺跡の動態は、引き続き、溝の掘削やその護岸といった活動痕跡により確認出来る。特に、20溝や22溝に代表される明確な人工溝が確認されている2区では、修復や浚渫によるいわゆるインフラ整備で溝の維持管理を施し、微高地と低地部(生産域)間の「境界」確保への執着を垣間見ることが可能である(第6-1図④)。同様の作業痕跡は、長期に渡り低地部に発展した青谷上寺地遺跡(鳥取市)等の低湿地遺跡においても、普遍的に見受けられる。また、規模から鑑みて、これらの溝に「環濠」としての防衛的機能を付与することは困難である。この時期に至り、急激な海退に伴う平野部拡大と人々の進出・定着が、各地において同時進行したことを表している。

1区ではこの時期、49溝が築かれているが、この溝は眼前の谷部に向かって走り、護岸施設は全く見受けられないこと等から、微高地上の水捌け改善の役割を果たしていたと推測する。即ち、前段で提示した溝の役割とは明確に異なることからすれば、溝に対しては複数機能の存在が想定される。具体的には、微高地縁辺部西側の溝には低地部との差別化を図る目的が、一方で微高地上の溝には、より排水機能を求めたと考える。このように、微高地の地点によって、溝に求める役割も異なっていた。

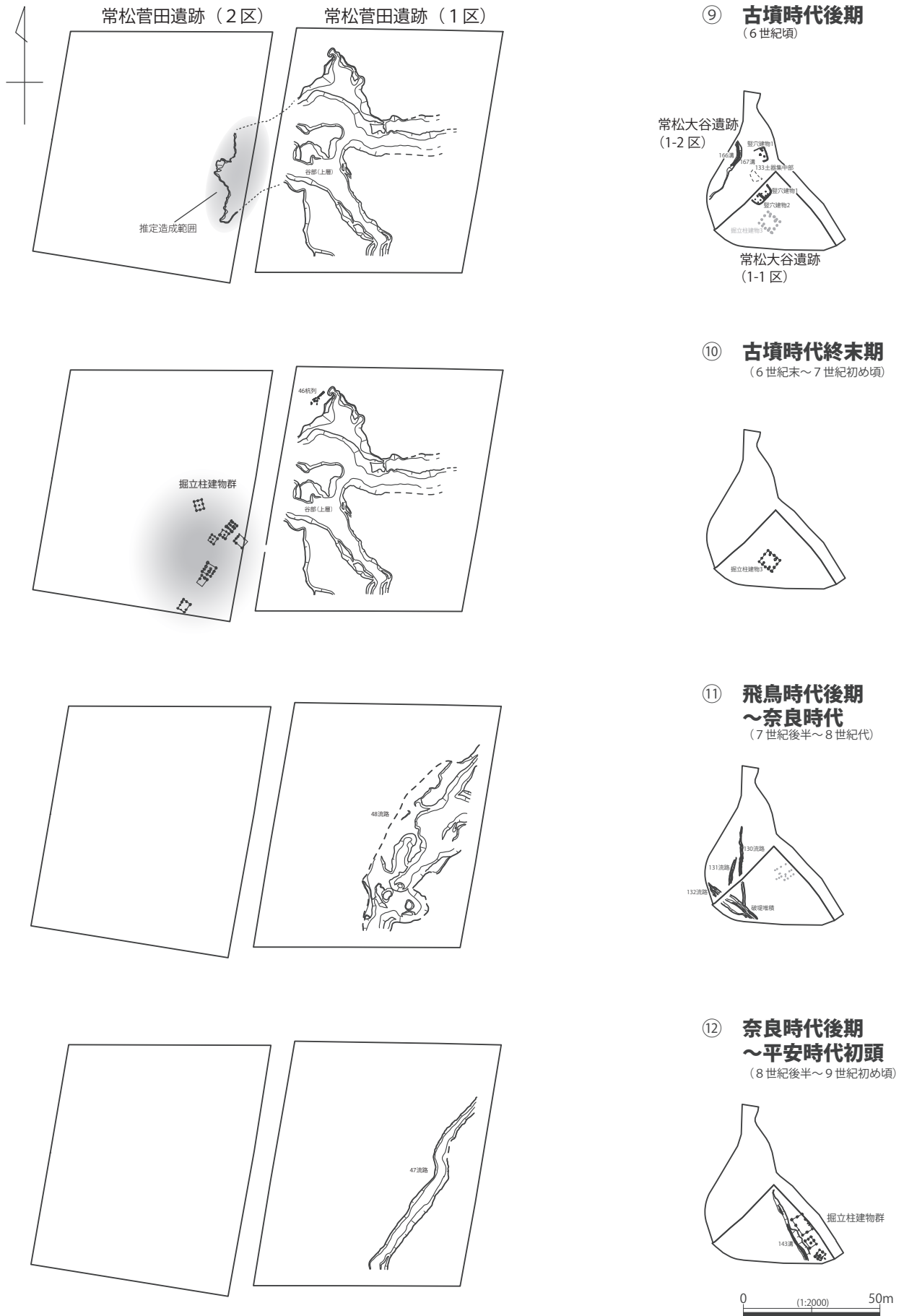
谷部の底面では、この時期の土器と共に長尺の建築部材(W144等)も確認されており、その様相からは、掘立柱建物等を伴う集落の近在を暗示する。地形の高低差や谷底面のレベル差から推定する水流の方向性からは、1区調査区外南側に集落の存在を想起させる一方、W144~147が比較的狭い範囲に集中していることやその付近から土器の出土が多いことから、調査区外北側もその候補地として指摘することが出来る。

⑤ 弥生時代後期前半

弥生時代前期を端緒とする微高地西側の溝群は、この段階も複数条存在する。2溝や22溝といった南東から伸びる溝は、その東側にある微高地を避けるように、いずれも北西方向へと進む(第6-2図⑤)。この方向性は、黎明期の239流路のそれと大きく変わらない。この実状から、溝の形成は完全な地形改変ではなく、前段階の溝の凹部を適宜利用しながら、それに人為的に手を加え築くという特徴が理解出来る。

この時期の微高地上に人々の活動痕跡はほとんど見受けられず、引き続き集落の様相等に関して積極的に言及する術がない。加えて溝内においても、木器や土器等の生活関連道具が廃棄されている状況はほぼ皆無である。このことを重視すれば、2区で検出した溝を、集落域近在の証拠と評価することも難しい。なお、最も遺物出土量が多い溝は、微高地から最遠の22溝である。

その22溝からは木製農具(田下駄)が出土したが、それ以东では農具類は未確認である。また弥生時



第6-3図 常松菅田遺跡と常松大谷遺跡の変遷(3)

代を通じ、明確な水田関連遺構を未検出であることから、低湿地に対する積極的な人々の関与は見受けられないと評価する。

⑥弥生時代後期後半

前段階に増して、微高地西側での溝の構築が活発化する。この段階では、複数の溝がほぼ同一ルートを踏襲することから、複雑な切り合い関係を示す(第6-2図⑥)。溝内の堆積状況は、概して有機質に富む砂層が主を成し、堆積速度は比較的速かったものと察する。

弥生時代後期を通じて、谷部周辺に遺構は存在せず、遺物量も僅少である。微高地は引き続き存在し、谷部との高低差も有していた。以上の様相から、この段階は集落域からかなり離れていたと推察する。一方で、常松大谷遺跡では狭小な谷部の前面付近で水田開発が始まり、その北側丘陵上には、弥生時代後期後半から古墳時代前期の土坑等が確認された(野崎編2014)。人々の活動域が、低地部から丘陵上へと拡充していることを示していよう。

⑦古墳時代前期(3世紀後半～4世紀頃)

引き続き、微高地西端には人為的に溝が築かれるが、前代に比べると、その規模は縮小傾向にある。縄文時代晩期後半から存在する1区の谷部は、この段階になってようやく本格的に埋没が始まるが、谷部を全て埋めるほどの作用ではないことから、微高地側との標高差を未だ有している状況である(第6-2図⑦)。

谷部北側に広がる微高地上では、竪穴建物が1棟検出された。調査区外北側における集落の存在を想起させる。ただし、検出面からの掘り込みの浅さから、この遺構は上方をかなり削平されていることがうかがえる。遺跡全体を見渡しても、この建物以外に人々の活動痕跡を具体的に示す証拠はなく、遺構密度の低さは依然として継続する。常松大谷遺跡では、前代に引き続き水田が検出された。水路を併設する等の計画性はうかがえるが、明確な農具の出土も依然皆無であることも合わせると、生産域開発の手は谷底平野にまで及ばず、谷の一部のみに留まっていたか。

⑧古墳時代中期(5世紀頃)

古墳時代前期後半から中期前半にかけても、微高地西側に相当するエリアには区画のためと考えられる溝(4溝)が築かれている(第6-2図⑧)。しかしこれ以降、埋没した溝を再掘削して護岸するというような動きは鈍くなっていく。こうした土地への意識の変化と後段の造成活動、また上述の谷部埋積作用の進行といった人為および自然為の複数要因が融合し、一帯の平坦化が進行するものと考えられる。

この変化に対する人々の具体的な行動として、微高地上への建物の構築がある。建物の平面プランは2区調査区外東側へと続くため、本来の建物規模や複数建物の共時性等に関しては不確定な点が多いが、弥生時代中期中葉以降ほぼ停滞していた微高地への関与が、この段階で再開されたことを示す。

谷部においては埋積作用が進むものの、依然として谷の景観を保持しており、また谷部の東側および北側には、平坦面(微高地)が存在する。ただしこれらの比較的安定した場所に対して、人々の積極的な流入をうかがわせる証拠はない。広大な微高地の活用は、極めて限定的状況にある。

⑨古墳時代後期(6世紀頃)

この段階は遺構が確認されず(第6-3図⑨)、また遺物量も極少ないことから、本遺跡を人々の活動領域として認知することは難しい。ただし、これ以降の本遺跡における土地利用状況を考えるうえで、地勢上非常に重要な時期である。

この段階に至り、これまで微高地と低地部との「境」に構築、もしくは改修等が施されてきた溝に対するアクションが停止される。溝が無くなることで、景観としては地形の起伏が小さくなり、縄文時代晩期後半以降続いていた「微高地」と「低地」という地形の二極分化は後退していく。1区においては谷部が引き続き存在するものの、このエリアも谷の埋積が進行する。

ただし微視的には、2区の東側部分において、1区から続く谷部の最上層がわずかな落ち込みとなっている(第6-3図⑨)。そのような景観に手を加えること(=造成)の背景には、古墳時代終末期以降連綿と造られる掘立柱建物群がある。この動態に呼応するかのごとく、常松大谷遺跡でも竪穴建物が検出された。

⑩古墳時代終末期(6世紀末～7世紀初め頃)

2区南東側付近の谷部立ち上がり部分は、埋土の様相から、人為的に埋め立てられたと考える。このように、当地に対する人々の関与が再び強うかがわれる段階と評価出来るが、従来とはその関わり方が異なる。つまり、従来は、微高地と低地部の区分を維持する関わり方であったが、ここに至り、逆に土地の均質化遂行へと転換する。ただし、1区では埋め立て造成の状況を確認出来ないことから、依然として浅谷は存在し、巨視的には土地の凹凸を認識できる状態にある。

2区東側に造成された平坦地は、掘立柱建物が集中する場となる(第6-3図⑩)。掘込面レベルや柱穴の深さの均一性、また年代測定結果等を勘案すれば、比較的短期間のうちに構築された一連の建物群と判断する。少なくとも、8棟の建物が1,000㎡程度のエリアに整然と認められる。これら建物同士のプランは重複していないが、隣接し合う建物の距離が非常に狭い箇所もあることから、全棟が同時に存在した光景は復元しにくい。複数段階に渡る建物の建て替えが想定出来る。

この建物群付近では、建物プランに沿う小溝が検出されており、建物外周の様相もうかがえる。最小限の労力で済むよう、谷部の最も縁辺のみ埋め立てて建てるという行動からは、計画的な土地利用が示唆される。また、掘立柱建物のみ構成であることから集落本体とは考えにくく、全て総柱建物であることを重視すれば、倉庫としての役割を示唆するに留める。掘立柱建物は常松大谷遺跡でも検出されており、一帯で土地利用の範囲が拡大していることは明らかである。

⑪飛鳥時代後期～奈良時代(7世紀後半～8世紀代)

前代からやや断絶期間をおいて、再び遺物量が増加する段階である。縄文時代から1,000年以上開口していた谷部は完全に埋まり、地形の凹凸はほぼ消滅した状態である(第6-3図⑪)。その谷部が埋まる直前より、この地は律令祭祀の場(祓所)として利用された。木製形代を用いた水辺での祭祀が、中央での律令祭祀の開始時期(7世紀後半)とほぼ時を同じくして、青谷横木遺跡(鳥取市)等と共に、因幡地域でも実施されていたことを裏付けた。

しかし、この律令祭祀を除けば、集落域、もしくは官衙施設といった公私にわたる人的活動の様子は視認出来ていない。常松大谷遺跡においても、遺跡東側背後の谷上部からの氾濫堆積物が厚く堆積しており、この時期は常松地区一帯で自然為の影響がやや強かった可能性が高く、人々の活動域としての度合は希薄である。1区の谷埋没後、その直上は湿地性堆積や流路へと変貌したことからすれば、この地区への人々の流入は、かなり抑制されていたと捉えるのが妥当である。

ただし同時期には、気多郡大原郷に組み込まれる常松菅田遺跡の上流約2kmにおいて、戸島遺跡および馬場遺跡(上光遺跡群)が確認されている(吉村編1988他)。両遺跡は、「気多郡坂本郷に置かれた官衙施設である可能性が高く、評・郡衙の出先機関(別院)としての性格を第一とし、それが郷衙を

兼ねる形で7世紀後半代から9世紀代にかけて存続し、気多郡の支配と交通の要としての機能を果たした(山中1988)」と位置づけられている。常松菅田遺跡における律令祭祀の時期とも重複することや、遺跡間の距離等を勘案すれば、常松地区においても、これら公的施設の簡便な出先機関が近在した可能性は、依然残されていよう。

⑫奈良時代後期～平安時代初頭(8世紀後半～9世紀初め頃)

常松菅田遺跡にて認められた木製祭祀具による祭祀行為は、平安時代初期頃に衰退の一途をたどる。48流路が埋まった後、そのルート上を流れる47流路が祭祀の場となったものの(第6-3図⑫)、その後は木製祭祀具を用いた祭祀行為は行われなくなる。それと連関するように、当該地内での積極的な土地利用をうかがわせる証拠は希薄となる。

その一方で、常松大谷遺跡の所在する小谷では、溝に沿うように建物が並ぶ。このことから、人々の活動拠点は平野部ではなく、谷部前面の見晴らしの良い場所が選択的に好まれたのだろうか。

⑬平安時代(9世紀～10世紀)

9世紀になると、47(新)流路から9～10世紀代の完形もしくはほぼ完形品の土器が出土しているが、底部のみ欠損し倒立状態であったり、転用硯として使用した後、口縁部を打ち欠かれたりした特異な状態で出土している(巻末写真図版12-3参照)。また、包含層からは土馬も出土している。これらから、引き続き水場と推定される付近では、木製から土製へと素材転換される形を採りながら、祭祀行為が執り行われた可能性が高く、引き続き集落的な性格は希薄な状態が続く。

⑭中世以降

47流路は、埋積作用を繰り返しながら流芯を東へ変えて継続し、その後も41流路や44流路といった別の流路がほぼ同じルートを踏襲して流下する。このため、調査区の南端から北東隅方向にかけてのエリアは、これ以降圃場整備の進められる昭和に至るまで、ほぼ流路としての地勢に統一されている。その傍らでは、流路の左岸を中心に、水田関連遺構(畦・暗渠)が連綿と築かれており、特にその傾向は、近世以降普遍的となる。現在の当地の原風景が、この時期には完成されつつあることを示唆する。

2 まとめ

以上、その黎明期から中・近世に至るまで、人々の在地への関与という観点を重視し、常松菅田遺跡で看取された様々な動態について時系列に沿って振り返り、遺跡像を模索してきた。その際、近接する常松大谷遺跡の変遷も踏まえながら、両遺跡間の類似性や差異を意識的に見出し、その上でこの地区の地域性を明記しようと試みた。ここでは、そのような視点を通して考究した地域史復元の成果や課題について述べ、本報告書のまとめとしたい。

まず巨視的に見れば、両遺跡を含む常松地区においては、縄文時代晩期後半に人々が入植して以降、断続的にその営みの足跡を把握することが可能である。ただし出土遺物や検出遺構の内容、またその量的な点からは、両遺跡を含む一帯を生活中心地として機能・発展したエリアと位置づけるには、その状況証拠が希薄であると理解出来る。

そのような様相を多分に示すエリアにあって、次に個々の遺跡に目を向けてみる。第一に、常松菅田遺跡の2箇年に渡る調査成果から導き出される遺跡の評価を述べてみたい。

既述ではあるものの、常松菅田遺跡における弥生時代中期中葉から後葉にかけての管玉製作と、古

代の木製祭祀具による祭祀行為は、この遺跡特有の具体像として、一義的に取り上げることが出来る。これらは、本遺跡の性格を最も象徴する要素といえる。従来この谷底平野では、地域史復元に寄与する考古学的情報がやや乏しい状況にあったが、一連の発掘調査を通じ、往時の周辺景観を具体的に復元することが可能となりつつあることは重要である。

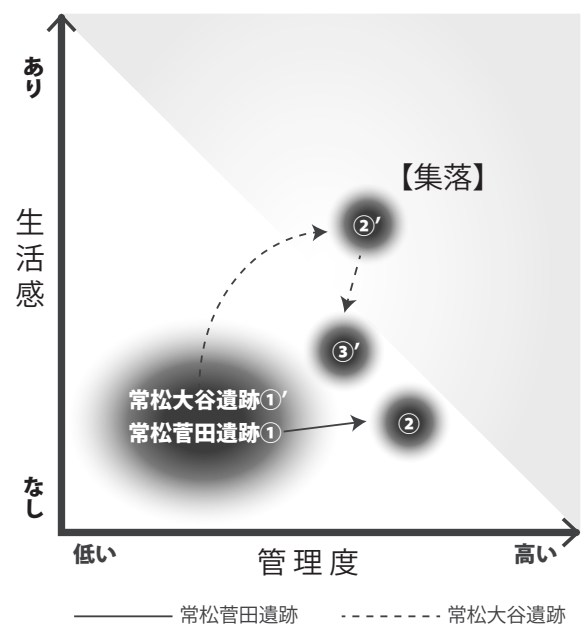
ただし、いずれの景観も、集落としての根幹(=日常性)を体現するものではない。このことは、集落中心域の存在を把握することは出来ていないということと等しい。前述のこの地区の総体的性格が、常松菅田遺跡においては特に該当するのである。

そのような点を考慮すれば、常松菅田遺跡とは、常時一集落の主要な「場」として活用された土地というよりは、現在に至るまで、隣接する河内川の氾濫原としての地形的制約を背景に、選択的に人々の関与が見受けられるような「非居住地的」土地柄と評価できる。換言すれば、生活感の希薄な、やや「便宜的」性格を有している場といえよう(第6-4図①)。

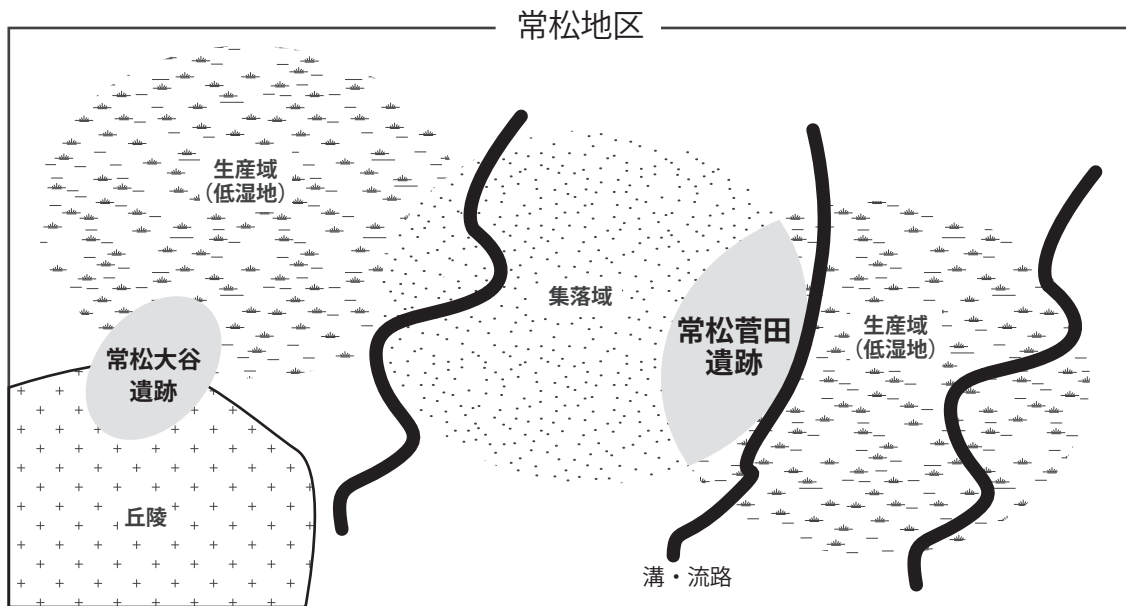
この便宜的性格とは、日常生活を行う上では副次的な活動痕跡(例えば玉作や祭祀)を指し、それ自体が遺跡像の主体を成している。これらの活動は、微高地縁辺部や流路といった古地形に影響されつつも、各活動に最適な場所として選択され、実行された可能性が高い。そこには、人々の生活感をさほど感じない。そして、農業技術の進歩からその管理度は当然高まっているとはいえ、この便宜的な性格自体は、居住性の低い状態として、現代まで踏襲されている(同図②)。古墳時代終末期に「倉庫群」が並ぶ景観はむしろ例外的であって、常松菅田遺跡における土地利用の性格は、時代を通じて大局的にはさほど変化していないといえる。

対照的に常松大谷遺跡に関しては、人々の土地への関与の程度が変化する。当初は、小区画水田としてその利用が開始され、管理度・生活感といった要素は、常松菅田遺跡とほぼ同じかやや高い程度であった(同図①')。しかし、徐々に生産域としての「場」から、建物跡やそれに伴う土器の大量廃棄等に見られるように、人的関わりの強い方向へとシフトする。古墳時代後期以降は、断続的に人々の関与(=日常性)が認められる土地利用へと変貌していくといった点で、常松菅田遺跡ではあまり高くならなかった土地利用における管理度や生活感の変化が見受けられる(同図②')。

その後、常松大谷遺跡は、遅くとも近世には成立していた現常松集落から南方へやや離れることで、人々の居住域から外れ、その日常性は薄まる。これと連動して、土地に対する管理的側面も以前より薄弱となっている(同図③')。このように見ると、常松大谷遺跡の方が、常松菅田遺跡よりも土地に対する人々の関わり方の変異幅が大きい。これは、狭小な谷部の前面という(特殊な)景観が、各時代のニーズとどの程度リンクしていたかに起因するのであろう。換言すれば、常松菅田遺跡では比較的均質な状態であった土地への評価と利用の仕方が、常松大



第6-4図 常松菅田遺跡と常松大谷遺跡の土地利用に関する概念



第6-5図 常松地区で想定される遺跡の立地模式図

谷遺跡ではやや異なる様相を見せた。この両項目の変化の度合いの違いが、両遺跡の差異の一つであると考えられる。

このように、常松菅田遺跡を主眼として常松地区の発掘調査成果を振り返ると、調査前に想定された集落の存在は、いかなる時代にも明確に立証することはかなわなかった。その事実からは、常松菅田遺跡周辺がこの一帯の拠点集落ではなく、また一方で、単純な未管理の低湿地とも認められない中間的性格の地にあることが示された(第6-5図)。この谷底平野の地域史復元が本格的に端緒に付いた現段階では、集落所在地にかかる問題は、未だ主要な検討項目の一つとして留めておく。

ただし、地域史復元という大前提に立ち返った際に、集落が(どこに)あるのかという二項対立の問題意識を主眼に据えるのではなく、集落の位置把握は、あくまで集落域や生産域(低湿地)を含んだ総合的な景観復元を行う上での一つの手段と捉えるべきである。確かに考古学的には、他の種別よりも多くの歴史的情報を有していると認識される「集落」であるが、より大きな目的である地域史復元に向けては、その検討要素の一つとし、今回明らかとなった常松菅田遺跡のような性格の遺跡と同等に扱うべきであろう。

次なる次元として、各時代におけるこの谷底平野全体の様相を解明するに当たっては、常松菅田遺跡を始めとした周辺遺跡の調査成果を丁寧に描き出しながら、共時的に各遺跡を比較検討する作業が求められる。その作業を進める過程で、常松地区のみならず、河内川対岸の瑞穂谷地区における集落の存在や、その他の景観要素に関するより深い理解が進もう。そして、常松菅田遺跡や常松大谷遺跡の個別具体的成果は、この目的に寄与できる面が少なくない。今後、これらの「素材」をさらに読み解く作業を継続しつつ、新たな知見を加えて俯瞰的視点から議論を深めることで、一帯の地域性をより明らかにすることが出来ると考える。(水村)

第2節 木製祭祀具の年代と変遷

1区の性格を最も端的に示す遺物の一つとして、木製祭祀具(形代)が挙げられる。これらは第4章で報告したとおり、主として古墳時代後期～飛鳥時代に埋積した谷部(上層)と、奈良時代の47・48流路から、一定量まとまって出土した(第4章第4-2表参照)。

なお、鳥取西道路関連の調査では、常松菅田遺跡での出土とほぼ時を同じくして、大桧遺跡や青谷横木遺跡といった古代因幡各郡(評)部の要所と推定される遺跡から、木製祭祀具がまとまって出土している(山根・濱・岩垣2014他)。また、岩吉遺跡や善田傍示ヶ崎遺跡での既往の出土事例を合わせると(山田・杉谷編1997、山田編2014)、古代因幡地域は、国内有数の木製祭祀具出土集中域と評価することも出来つつある。常松菅田遺跡の出土量を凌駕する大桧遺跡等との比較検討は、各報告書の刊行を待つとして、本節では、常松菅田遺跡と時期的にも通有する隣国但馬の砂入遺跡(兵庫県豊岡市：藤田編1997)出土資料との比較を通じ、その類似性や違いを示すことで、常松菅田遺跡出土木製祭祀具の特質等を明らかにしていきたい。

第1項 木製祭祀具の年代

常松菅田遺跡の木製祭祀具が出土した遺構・包含層等を今一度古い順に整理すると、以下のようになる。

谷部(上層)は、調査区南端から北西方向に開析し、中央付近で東へ向かう。Ⅸ層は、この谷部(上層)のある調査区西側に堆積する。47・47(新)・48流路は、調査区南端の谷部(上層)とほぼ同じ位置から北東方向へ流れ、流路左岸はⅨ層を切りつつ、調査区中央東側で谷部(上層)と交差し、一部重複する。Ⅷ層は、この流路埋没後の堆積土である。

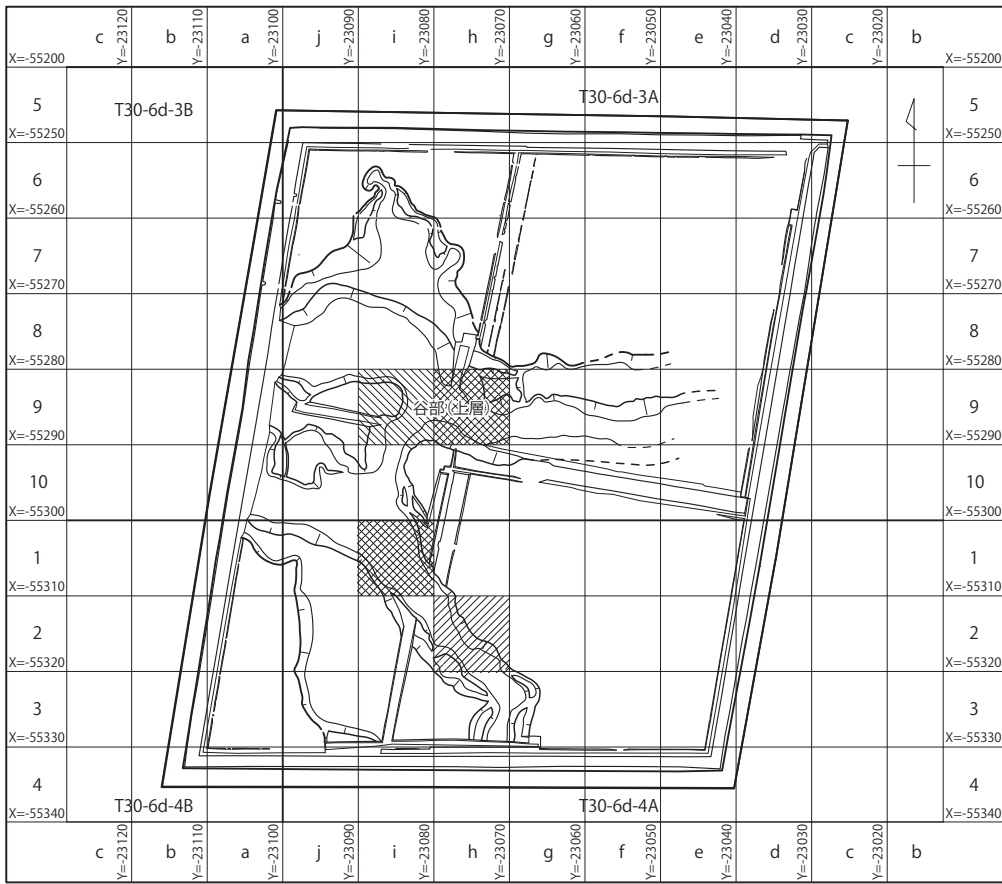
谷部(上層)から出土した土器は、6世紀後半から7世紀前半のものが中心を成し、7世紀後半に下る資料は極わずかであった。この傾向は、Ⅸ層出土土器についてもほぼ同様である。

47(新)・48流路出土土器は、以下の3時期に分かれる。①8世紀後半の須恵器(48流路)、②9～10世紀にかけての須恵器・土師器(47(新)流路)、③11～12世紀代の土師器(47(新)流路)で、①の須恵器壺片と②の倒立状態で出土した土師器甕を除けば、残りは全て坏・皿(供膳具)である。②・③の遺物は、調査区南端付近で検出した47(新)流路蛇行部分から出土したもので、その出土位置からは、各土器群が47流路東側に並ぶことが分かる(第4-20図)。

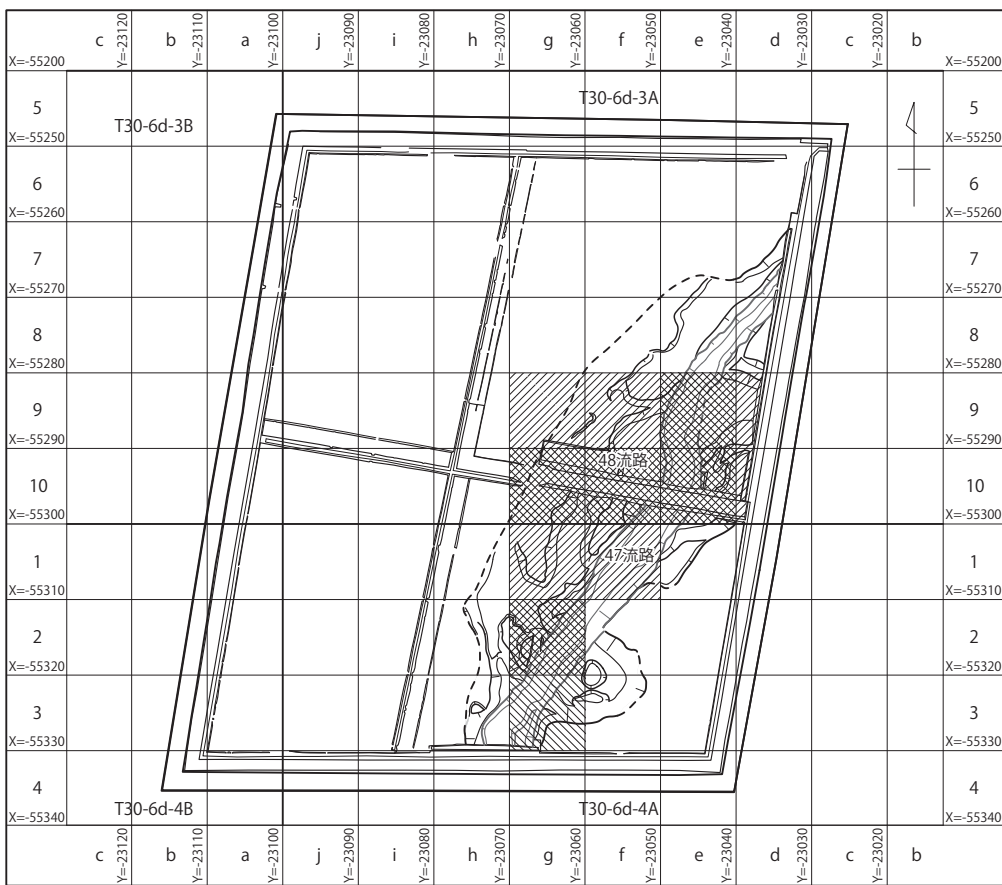
これらの出土遺物に基づき各遺構・包含層等の年代を推定すると、谷部(上層)およびⅨ層については、7世紀後半には埋没もしくは堆積し、また48流路は遅くとも8世紀後半には埋没したと見積もることができる。木製祭祀具がまとまって出土した47流路が埋没したのち、9世紀以降、その流路跡東側を47(新)流路が北流した。この事実は、47・48流路出土馬形に「飾馬」がほとんどないこととも矛盾しない。

第2項 木製祭祀具の出土位置

第4章の調査成果で述べたように、木製祭祀具は47・48流路および谷部(上層)の3箇所から全体の97%(923点/951点)が出土した。出土状況に関してより詳述すれば、これらは調査区内を広く無秩序に分布していたのではなく、各資料群が比較的まとまった状態で見つかっている(第6-6図)。こ



人形出土地区
 馬形出土地区



人形出土地区
 馬形出土地区

0 (1:1000) 20m

第6-6図 木製祭祀具出土分布図(上段: 谷部(上層)、下段: 47・48流路)

のことから、遺物の性質も加味すれば、原位置からさほど移動はしていないものと考え。特に谷部(上層)における木製祭祀具の出土傾向は、極めて当時の「場」とほぼ等しい位置関係を成していよう。

各器種の出土傾向を簡便に述べれば、人形については、谷部(上層)ではT30-6d-3A-9h・9iおよびT30-6d-4A-1i、48流路ではT30-6d-3A-9e・10e・10f・10gおよびT30-6d-4A-3g、47流路では既に述べたようにT30-6d-4A-2gに集中する。馬形は、谷部(上層)では人形とほぼ同様にT30-6d-3A-9hおよびT30-6d-4A-1i・2hから出土している一方、48流路はT30-6d-3A-9d～9g、T30-6d-3A-10e～10g、T30-6d-4A-1f・1g・2gと、比較的広範囲から出土した。

各集中地点の遺物量は、2万点を超える木製祭祀具が出土した砂入遺跡に比べると、非常に少ない。出土量の違いは、47流路を含め、祭祀行為の規模や永続性を反映しているのだろうか。木製祭祀具は、47流路のみならず、谷部(上層)においてもT30-6d-3A-9h・4A-1iの2箇所集中していたことを示している。つまり、47流路の出土状況が祭祀場(祓所)に近いと見做せるならば、谷部(上層)の集中箇所も、同様の解釈が可能であろう。

一方48流路の場合、T30-6d-3A-10e～10gを中心にやや広い範囲から出土しており、上記とは異なった状況を通時的かつ共時的に考慮しなければならない。例えば、祭祀場が広範囲に及んだのか、祭祀行為が長期に及んだのか、あるいは何らかの理由で散乱したのか等である。また、これら多量の祭祀具と、サブトレンチ5付近で多量に出土した大型亜角礫との間には、密接な関わりがあったと推測する。

第3項 木製祭祀具の特徴

今回出土した形代は、①人形、②馬形、③鳥形、④武器形、⑤舟形、⑥農具形(鋤先、エブリ)、⑦齋串の7器種に区分できる。このうち、人形・馬形・武器形・齋串の4器種は、各30点以上出土したため、様々な傾向を抽出できると考える。以下、これら4器種について、谷部(上層)、47流路、48流路出土に分け、各形代の形態的特徴を中心に比較し、各器種の特質を取り上げながら、常松菅田遺跡出土形代の評価を行いたい。

1 人形

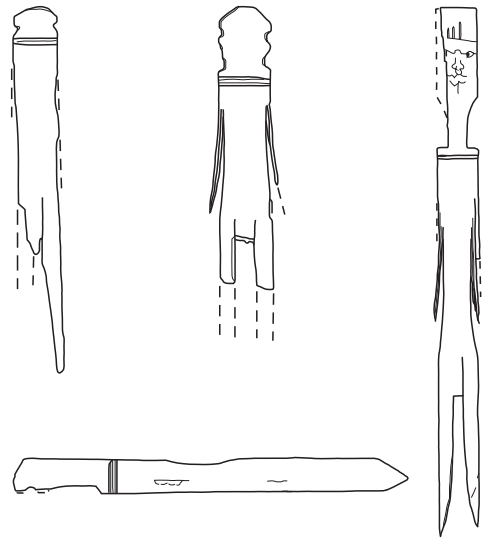
常松菅田遺跡の人形(36点)は、首から肩部を切り欠き、腕を切り掛け、さらに下端部から長軸方向に2本の切り込みを入れ、両端はそのままで中央を折り曲げて2本足を表現する。良田平田遺跡(鳥取市：高尾編前掲)出土例のように、齋串と同様下端を尖らせ、1本足としたものは出土していない(註1)。頭部の形状はさまざまだが、首・肩部の形状から概ね「撫で肩」と「怒り肩」の2種類に分類できる。

谷部(上層)、47流路、48流路から出土したそれぞれの人形を比較すると、次のような変化が認められる。まず、肩部の形態と大きさについては、谷部(上層)出土例は撫で肩で、全長30cm以下幅4cm未満の小型品が主流を占め、48流路は全長30cmを越える大型品が混じる。47流路では怒り肩で、全長30cm以上幅3cm以下の細身の大型品が主体となる。つまり、器体の大型化とともに、体型は面長で細身へと変化する。

顔表現については、刃物による刻みにより目や鼻、口等を作成するものが谷部(上層)から3点、

47・48流路から13点確認できた一方、墨により表現を施された人形は48流路から1点出土したのみであった。時期が下るに従い、顔表現を施すものが増える傾向にあると言える。

砂入遺跡出土の最古段階(大平分類I類)の人形では、頭部が極端に小さく扁平なものや、顔側面に切り欠きを入れるものがあり、最も新しい段階の顔面はエラが張る。頭部と肩部は撫で肩や下がり肩、怒り肩に分かれ、腕は斎串のように複数回の切り掛けを施すものもある(第6-7図)。このように、常松菅田遺跡出土例には見受けられない特徴を持った人形も複数認められる等、両遺跡間の人形では違いが目立つ(第6-1表)。一方で、足作出の加工は、2本の切り込みを入れ中央を折り曲げる等の共通性もある。製作技法や各国(郡)における形態志向等の詳細な説明は、今後の課題としておきたい。



第6-7図 砂入遺跡出土木製祭祀具
(藤田編前掲を再トレース、縮尺不同)

第6-1表 砂入遺跡と常松菅田遺跡の人形の特質

年代	砂入遺跡	常松菅田遺跡	
7世紀前半	形態：撫で肩主体 長さ：平均27cm	谷部(上層)	
7世紀後半	頭部：圭頭+円頭主体 顔：顔表現なし主体		形態：撫で肩主体 長さ：30cm以下 頭部：圭頭+円頭 顔：刻みもしくはなし
8世紀後～9世紀初	形態：怒り肩主体 長さ：平均56cm 頭部：圭頭>台頭>平頭>円頭>砲弾頭 顔：刻み>墨>なし	48流路	形態：怒り肩主体 長さ：30cm以下と30cm以上併存 頭部：圭頭+円頭 顔：刻み(墨書1点あり)もしくはなし
		47流路	形態：怒り肩主体 長さ：30cm以上主体 頭部：圭頭主体 顔：刻みもしくはなし

2 馬形

常松菅田遺跡の馬形は、鞍を表現した「飾馬」と思しき1点(W45)を除き、すべて「裸馬」である。また、人形36点に比して、その2.5倍以上の98点の出土を見ていることは特筆すべきである。安直な関連性を示唆するのは憚られるものの、この数量的特徴が、古代山陰道やそれに伴う駅家等関連施設の近在に繋がる証拠の一つを示しているのか等、今後の追究すべき課題も浮かび上がる。

馬形は人形同様、切り欠きにより頭部や尾部を表現するが、谷部(上層)や48流路から出土した馬形からは、時期差を反映した明らかな形態の変化を指摘することは困難である。換言すれば、鞍の有無以外の属性については、様々なタイプが同時期に存在していた可能性を示唆する。一方、量的には少ないが、47流路出土資料は、48流路以前の直線的(抽象的)な馬形から、曲線的(具象的)な馬形へと緩やかに変化しつつある傾向を指摘できる。また、特に留意すべきタイプとして、頭部側の端部まで切り取って、その幅を減じた馬形を見受けるが(W44・55・57・59・60・81・82)、管見によれば、このタイプの類例は、善田傍示ヶ崎遺跡や青谷横木遺跡に限定される。このことから、同タイプの馬形は、因幡地域特有となりうる可能性がある。

常松菅田遺跡出土馬形の腹部は、横板長軸方向の両端下側(腹部側)2箇所(箇所)に切り欠きを入れ、頭部と尾部を表現する。これら馬形の多くは、腹孔を1箇所(箇所)あけ、直径1~2mm程度の棒を差し込み、地面に立て使用したようである。常松菅田遺跡出土馬形のうち、4点の資料に、腹孔棒の一部が残存していることが確認できる(写真図版37-2参照)。また、腹孔棒が残存していない馬形についても、棒状の自立具を差し込んだために木目が裂け、その後若干収縮した状態にある資料が、数多く認められ

第6-2表 砂入遺跡と常松菅田遺跡の馬形の特徴

年代	砂入遺跡	常松菅田遺跡	
7世紀前半	形態：裸馬 頸部：V字切り欠き 尾部：切り欠きなし	<div style="display: flex; align-items: center;"> <div style="writing-mode: vertical-rl; padding-right: 5px;">谷部(上層)</div> <div> 形態：裸馬 頸部：V字、頭側垂直・尾側斜めの切り欠き 尾部：V字、頭側垂直・尾側斜めの切り欠き 足：1本(腹孔) 大きさ：個体差(全長・幅)少ない 傾向：抽象的 </div> </div>	
7世紀後半	足：1(腹孔)もしくは4本 大きさ：個体差(全長・幅)少ない 傾向：抽象的		
8世紀後半~9世紀初	形態：飾馬 頸部：頭側垂直・尾側斜め 尾部：円形に切り欠く 足：4本 大きさ：個体差(全長・幅)大きい 傾向：写實的	48流路	形態：裸馬(飾馬1点あり) 頸部：V字、頭側垂直・尾側斜めの切り欠き 尾部：V字、頭側垂直・尾側斜めの切り欠き 足：1本(腹孔) 大きさ：個体差(全長・幅)少ない 傾向：抽象的
		47流路	形態：裸馬 頸部：頭側垂直・尾側斜めの切り欠き 尾部：頭側斜め・尾側垂直の切り欠き 足：1本(腹孔) 大きさ：個体差(全長・幅)少ない 傾向：抽象的(腹部側にやや丸み)

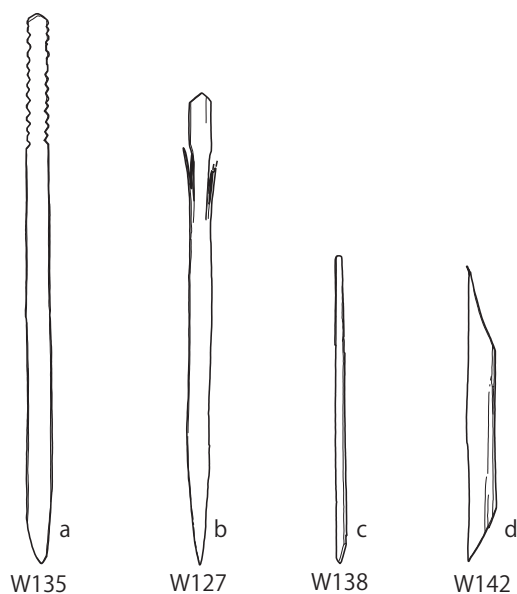
る(註2)。このように、常松菅田遺跡出土の馬形は、基本的に器体下部に腹孔棒を1本差し込み、立てて使用したと考える。ただし、極わずかながら、腹孔の痕跡がない馬形も見受けられた。これらは、地面に寝かせた状態で使用したと想定される。

砂入遺跡出土の馬形(7～8世紀前半)は、常松菅田遺跡例のように、下腹部側に切り欠きを入れて尾部を表現するものはほとんど看取できない(第6-2表)。また、自立の方法も、常松菅田遺跡の場合とは異なるタイプが主流となる。つまり、砂入遺跡出土馬形においては、前述のような1本の腹孔棒を採用する自立タイプは少なく、代わって下腹部両側縁に薄板を差し込んだ「4本足」、腹孔に棒を差し込んだ「3本足」、腹孔のない「2本足」といった多様な自立方法を採用している。近年、青谷横木遺跡出土馬形においても「4本足」に該当する資料を確認したが、その量は客体的であった(註3)。なお、顔を表現した馬形はほとんどなく、47流路(W44)と谷部(上層)(W68)において、刃物にて目を表現したものが2点確認できるのみである。また、墨書による顔表現の馬形は皆無であった。

このように、他遺跡の馬形と比較しつつ見ていくと、常松菅田遺跡の馬形は、時期的な変化や差異よりも、地域性がより強調されるようである。このような性質が、同一国内や同一郡内においても指摘しうるのか、今後は青谷横木遺跡や大柵遺跡等といった、より近隣諸遺跡との比較検討を進める必要がある。

3 武器形

武器形(36点)は、柄の形状から2種類に分類した(A・B)が、顕著な傾向差はない。また、棟が切先まで真っ直ぐな刀形2点、切先付近が左右対称な剣形5点を数えたが、柄の部分のみ出土したものもあり、両者の正確な数は不明である。同様に、先端部分の破片から、武器形と斎串を識別することはほとんど不可能である。



第6-8図 常松菅田遺跡出土斎串の型式分類

4 斎串

既述のごとく、598点出土した斎串は、4種類に分類した(a～d：第6-8図)。これら4種類の斎串について、47および48流路の出土量は、谷部(上層)に比べ全体的な傾向として減少傾向にある。しかし、この流路・谷部における出土比に大きな変化はない。出土量が極めて少ないa型のみ、激減傾向といえよう。

第4項 まとめ

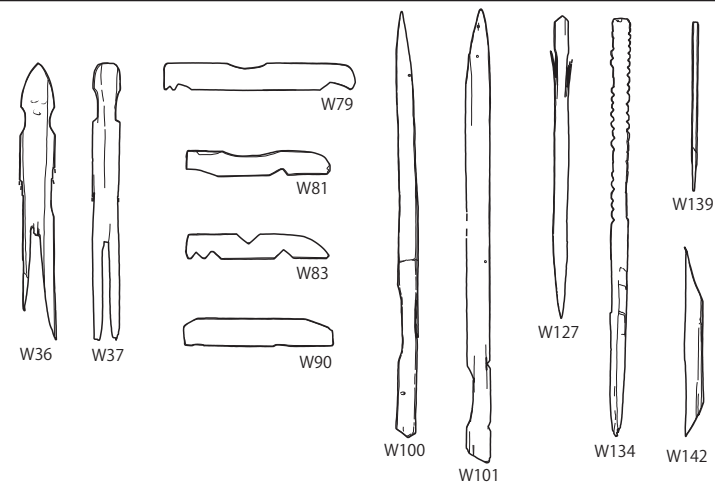

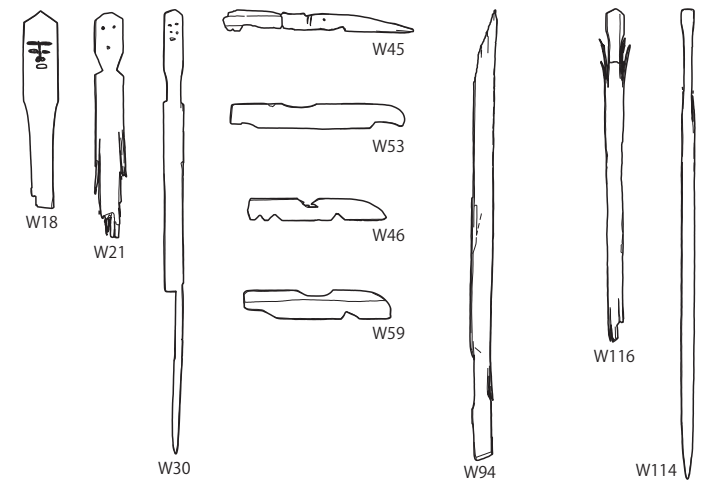
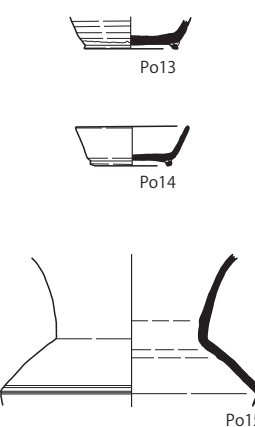
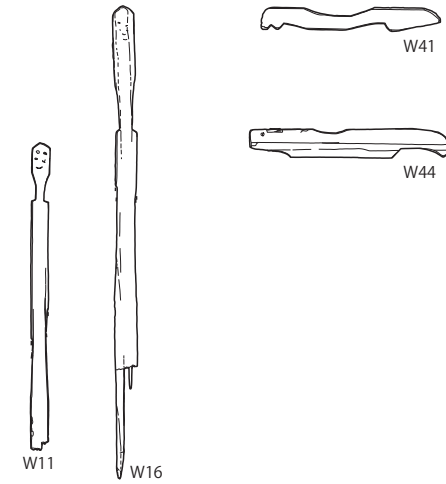
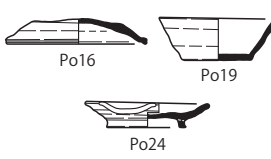

常松菅田遺跡1区の性格を特徴づける木製祭祀具は、7世紀後半から8世紀代にかけての100年前後の間、谷や流路といった水辺付近の場所を祭祀場として選地したうえで、断続的に用いられた。それぞれの木製祭祀具は、谷部(上層)、47流路、48流路の特定の場所に比較的まとまって出土したことから、調査区一帯が、時期を違えながらも祭祀場として機能していたエリアの一部を担っていたと推定した。また、これと同調するように、常松菅田遺跡の東方約100mに位置する常松大谷遺跡においても、同時期に小規模ながら馬形や斎串を用いた祭祀行為を行っており、河内川右岸での祭祀行為は、主に奈良時代を中心に一帯で盛行していたと考える。

常松菅田遺跡で一定量出土した人形と馬形は、多様な個体差を持ちつつも、8世紀後半以降、人形は大型化(長胴化)を、また馬形は具象化を、それぞれ指向する(第6-9図)。つまり、小型の人形(W36・37)と抽象的な馬形(W79・81・83・90)で構成される7世紀後半～末の様相(「常松菅田I期」)から、大型化指向の人形(W11・16・18・30等)と具象化指向の馬形(W41・45等)から成る8世紀後半の様相へと変化する(「常松菅田II期」)。常松菅田I期は、中央における律令祭祀の開始時期とほぼ同調するが、これは官道の整備等を背景に、地方への普及の速度が非常に速く、効率的であったことを示そうか。

常松菅田II期における木製祭祀具の構成は、人形と馬形の諸属性の違いから、さらに分別が可能である。具体的に述べれば、大・小の人形が混在し、抽象的な馬形のみから成る「II-1期」と、大型の人形と具象的な馬形とで構成される「II-2期」とに細分できる。同時期に執り行われた祭祀でのこれらの差異が、祭祀行為の内容自体の違いなのか、または製作者(行為者)の技量なのか、もしくは中央からの影響(指示)なのかは判断しかねる。本稿では、同時期においても、祭祀具の組成内容の違いが存在するという事実を提示するに留める。なお、斎串は類型ごとの消長を確認することができたが、武器形の変化は明瞭ではなかった。

9世紀になると、常松菅田遺跡においては、木製祭祀具を使用した祭祀は行われなくなる。その後、47流路に続く47(新)流路から、9～10世紀代の土器が完形もしくはほぼ完形品の状態で出土した。これらは底部のみ欠損し、倒立状態で出土した土師器甕(Po25)と、それに相接して出土した完形品の須恵器皿(Po22)、また転用硯として使用した後、口縁部を打ち欠かれたもの等である。また、11～12世紀代の土器もほぼ似通った地点から出土している。前述のように、形代類は47流路での出土以降、一切確認出来ておらず、流路を覆うⅨ層中において、土馬が出土した程度に留まる。このため、因幡地方の祭祀関連遺跡では9世紀以降も継続して認められる木製形代類による祭祀は、本遺跡においては、奈良時代末頃までの限定された期間のみであったと指摘することができる。ただし祭祀行為自体は、木製祭祀具から土器・土製品といった異なる仕様へと転換され、引き続き水場付近で執り行われた可能性が高い。

今回の調査成果からは、近年因幡地域一帯で発見が相次いでいる木製祭祀具について、その一様相を明示することができたことと評価している。しかしながら現時点の理解では、よりミクロな視点(気多郡内)での様相、また逆にマクロな視点(因幡や但馬)の中での常松菅田遺跡の動態について、詳細に検討することが出来ていない。今後、常松菅田遺跡から複数の谷を挟んで西方に位置する善田傍示ヶ崎遺跡や大坪イカウ松遺跡(山田編2007)、また気多郡内での律令祭祀の中心的役割を果たしていたと評価されつつある青谷横木遺跡(山柁他前掲)との比較検討を主として、東方の大柁遺跡等も加え、近隣郡(評)部との関係性を捉える姿勢が必要である。いずれも、「古代山陰道」という共通したキーワー

		木製祭祀具						土器	
7世紀後半～末 【常松菅田Ⅰ期】	谷部(上層)								
8世紀後半 【常松菅田Ⅱ-1期】	48流路								
8世紀後半 【常松菅田Ⅱ-2期】	47流路								
9～10世紀	47(新)流路								
11～12世紀	47(新)流路								

第6-9図 7世紀後半から12世紀にかけての木製祭祀具および共伴土器の変遷(S=1/8)

第6章 総括

ドを背景に検討を進めるのが有用である。このように、律令祭祀にかかる研究を遺跡間で横断させるべく、連携的に継続追求することによって、但馬から因幡、さらには伯耆にかけての日本海沿岸地域におけるダイナミックな祭祀の実態が、徐々に明らかになると期待できる。(駒井・水村)

【註】

註1：因幡地域においては、大柵遺跡でも同様なタイプが出土している(未報告。平成28年度末刊行予定)。

註2：図化した資料中、腹孔のあるもの(腹孔棒が遺存するものを含む)は、谷部(上層)が24点中15点、48流路が17点中12点、47流路が4点中4点全てを数える。出土比率的には、時期が下るにつれて高くなるといえようか。

註3：県埋蔵文化財センター坂本嘉和氏の御教示による。



参考文献

- 安藤一男 1990 「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 東北地理学会 pp. 73-88.
- 安藤一男・南雲 保 1983 「埼玉県荒川低地沖積層のケイソウ」『日本歯科大学紀要』12 日本歯科大学 pp. 239-290.
- 安 昭炫・辻 誠一郎 2009 「花粉化石群の記載と古環境」水村直人・河合章行編『青谷上寺地遺跡10』鳥取県埋蔵文化財センター pp. 121-126.
- 家塚英詞・村田泰輔 2011 『青谷上寺地遺跡景観復原調査研究報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告40 鳥取県埋蔵文化財センター
- 伊藤良永・堀内誠示 1989 「古環境解析からみた陸生珪藻の検討 - 陸生珪藻の細分 -」『日本珪藻学会第10回大会講演要旨集』日本珪藻学会 p.17.
- 伊藤良永・堀内誠示 1991 「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『日本珪藻学誌Diatom』6 日本珪藻学会 pp. 23-44.
- 井殿晴子・藤本隆之・杉谷美恵子 1996 『秋里遺跡 鳥取都市計画事業秋里土地区画整理事業に係る埋蔵文化財発掘調査』財団法人鳥取市教育福祉振興会
- 岩内明子・三好教夫他 1995 「東郷池（鳥取県）の年縞粘土層の花粉分析学的研究」『日本地質学会学術大会講演要旨』102 日本地質学会 p. 114.
- 江谷功・永石明夫編 1981 『北短尾遺跡発掘調査報告書（一般国道9号改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査）』気高町文化財報告書Ⅳ 鳥取県気高郡気高町教育委員会
- 大賀克彦 2001 「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第86巻4号 日本考古学会 pp. 321-362.
- 大野哲二編 2016 『下坂本清合遺跡Ⅰ』一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XXI 鳥取県教育委員会
- 小笠原好彦・吉村善雄編 1982 『気高町埋蔵文化財発掘調査報告書-陸逢遺跡-（気高町埋蔵文化財分布調査報告書）』気高町文化財報告書Ⅴ-1～3 気高町教育委員会・滋賀大学教育学部考古学ゼミナール
- 大平 茂 1993 「木製人形年代考（上）」『古文化談叢』第30集 九州古文化研究会 pp. 567-591.
- 大平 茂 1995 「木製人形年代考（下）」『古文化談叢』第35集 九州古文化研究会 pp. 59-78.
- 大平 茂 2008 『祭祀考古学の研究』雄山閣
- 小山正忠・竹原秀雄編 2011 『新版標準土色帖』日本色研事業株式会社
- 河根裕二編 1988 『逢坂地域遺跡群発掘調査報告書 上原南遺跡・上原西遺跡・山宮阿弥陀森遺跡・山宮茶山畑遺跡-一般県道鷲峰気高線道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録-』気高町文化財報告書13 気高町教育委員会
- 河根裕二編 1997 『気高町内遺跡発掘調査報告書』気高町文化財報告書24 気高町教育委員会
- 河根裕二編 1998 『山宮14号墳発掘調査報告書』気高町文化財報告書26 気高町教育委員会
- 河根裕二編 1999 『気高町内遺跡発掘調査報告書』気高町文化財報告書27 気高町教育委員会
- 河根裕二編 2002 『気高町内遺跡発掘調査報告書 上原遺跡・八束水古墳群・酒津所在遺跡・馬場遺跡』気高町文化財報告書29 気高町教育委員会
- 河根裕二他編 1985 『逢坂地域遺跡群発掘調査概報 上原遺跡・上原南遺跡・上原西遺跡・山宮阿弥陀森遺跡・山宮茶山畑遺跡・山宮笹尾遺跡』気高町文化財報告8 気高町教育委員会

- 関西大学文学部考古学研究室編 1979『寺内廃寺発掘調査概報Ⅱ』鹿野町教育委員会
- 黒坂貴裕編 2010『出土建築部材における調査方法についての研究報告』奈良文化財研究所
- 気高町教育委員会編 1975『二本木7号墳発掘調査報告書』気高町文化財報告書 気高町教育委員会
- 気高町教育委員会編 1977『気高町誌』鳥取県気高郡気高町
- 気高町教育委員会編 1987『気高町埋蔵文化財発掘調査報告書』気高町文化財報告書11-1～5 気高町教育委員会
- 気高町教育委員会編 1993『馬場遺跡発掘調査報告書』気高町文化財報告書21 気高町教育委員会
- 気高町教育委員会編 1995『気高町内城館跡調査報告書』気高町文化財報告書23 気高町教育委員会
- 古環境研究所 2009「古環境調査土壌分析」水村・河合編『青谷上寺地遺跡10』鳥取県埋蔵文化財センター pp.149-174.
- 小阪義明編 1990『馬場遺跡発掘調査概報(2)』気高町文化財報告書18 気高町教育委員会
- 小杉正人 1986「陸生珪藻による古環境の解析とその意義－わが国への導入とその展望－」『植生史研究』1
日本植生史学会 pp.9-44.
- 小杉正人 1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用」『第四紀研究』第27巻1号 日本第四紀学会 pp.1-20.
- 近藤錬三 2010『プラント・オパール図譜』北海道大学出版会 p.387.
- 鳥倉巳三郎 1973「日本植物の花粉形態」『大阪市立自然科学博物館収蔵目録』第5集 大阪市立自然科学博物館 p.60.
- 清水富和編 1989『柄杓目遺跡Ⅰ 団体営柄杓目地区土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査の記録』
鹿野町文化財調査報告書第8集 鳥取県気高郡鹿野町教育委員会
- 清水富和編 1991『鹿野町内遺跡発掘調査報告書』鹿野町文化財調査報告書第11集 鳥取県気高郡鹿野町教育委員会
- 清水富和・原田育夫編 1990『柄杓目遺跡Ⅱ 団体営柄杓目地区土地改良総合整備事業に伴う埋蔵文化財緊急発掘調査の記録』
鹿野町文化財調査報告書第10集 鳥取県気高郡鹿野町教育委員会
- 鈴木三男 2002『日本人と木の文化』八坂書房 p.255.
- 高尾浩司編 2014『良田平田遺跡』一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書XV
鳥取県教育委員会
- 高原 光 1998「スギ林の変遷」安田喜憲・三好教夫編『図説日本列島植生史』朝倉書店 pp.207-223.
- 田中宏之 1987「群馬県高崎市北部から発掘された古代水田の珪藻」『群馬県立歴史博物館紀要』8 群馬県立歴史博物館 pp.1-20.
- 谷岡陽一・加川 崇・前田 均・野崎欽五・山田真宏・谷口恭子・神谷伊鈴 2013『平成24(2012)年度 鳥取市内遺跡発掘調査概要報告書』鳥取市教育委員会
- 谷口恭子編 2009『大坪大縄手遺跡 県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(第1冊)』
財団法人鳥取市文化財団
- 津中喜史編 1988『鹿野町内遺跡発掘調査報告書』鹿野町文化財調査報告書第7集 鳥取県気高郡鹿野町教育委員会
- 豊島吉則他 1993『鳥取県のすぐれた自然－地形・地質編－』鳥取県衛生環境部自然保護課
- 中川 寧・内田律雄・東山伸治編 2006『鳥根県における弥生時代・古墳時代の木製品集成』鳥根県古代文化センター調査研
究報告書33 鳥根県教育委員会鳥根県教育庁古代文化センター・鳥根県教育庁埋蔵
文化財調査センター
- 中林 保他編 2006『新修気高町誌』鳥取市
- 中村 純 1967『花粉分析』古今書院 p.232.
- 中村 純 1980「日本産花粉の標度Ⅰ(図版)・Ⅱ」『大阪市立自然史博物館収蔵資料目録』第12・13集 p.91.
- 錦織 勤 2013『古代中世の因伯の交通』鳥取県史ブックレット12 鳥取県

- 野崎欽五編 2014『常松大谷遺跡(丘陵部)－一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』
公益財団法人鳥取市文化財団
- 野島 永 2008「弥生時代日本海沿岸諸地域におけるクラフト・スペシャリゼーションと鉄器文化」『山陰における弥生時代の鉄器と玉』第36回山陰考古学研究集会事務局 pp. 1-10.
- 野々村安浩・仁木 聡編 2009『出雲国誕生と奈良の都』鳥根県立古代出雲歴史博物館企画展展示図録 鳥根県立古代出雲歴史博物館
- 濱田竜彦 2014「山陰地方の突帯土器と縄文時代終末期の様相」『第25回中四国縄文研究会徳島大会中四国地域における縄文時代晩期後葉の歴史像』中四国縄文研究会 pp. 17-36.
- 藤木利之・小澤智生 2007『琉球列島産植物花粉図鑑』アクアコーラル企画 p. 155
- 藤田 淳編 1997『砂入遺跡－小野川放水水路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅰ)－』兵庫県教育委員会
- 平凡社地方資料センター 編 1992『日本歴史地名大系 鳥取県の地名』平凡社
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫 1996「珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について－混合群集の認定と堆積環境の解釈－」『日本文化財科学会 第13回大会研究発表要旨集』日本文化財科学会 p. 62.
- 町田 章・上原真人編 1985『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所
- 水村直人編 2015『常松菅田遺跡Ⅰ』一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅷ
鳥取県教育委員会
- 宮本長二郎 2007『出土建築部材が解く古代建築』日本の美術490 至文堂
- 森本倫弘編 2014『鳥取県鳥取市青谷町青谷上寺地遺跡13 第13・14次発掘調査報告書』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告書 59 鳥取県埋蔵文化財センター
- 山田真宏編 2007『大坪イカウ松遺跡－県営日置谷地区経営体育成基盤整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(第1冊)』
財団法人鳥取市文化財団
- 山田真宏編 2014『善田傍ヶ崎遺跡－勝部川河川改修事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書－』
公益財団法人鳥取市文化財団
- 山田真宏・杉谷美恵子編 1997『岩吉遺跡Ⅳ－湖山変電所新設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査－』財団法人鳥取市教育福祉振興会
- 山中敏史 1988「8 戸島遺跡・馬場遺跡の性格」『上光遺跡群発掘調査報告書』気高町文化財報告書16 鳥取県気高郡気高町教育委員会 pp. 124-142.
- 山中敏史編 2003a『上原遺跡群発掘調査報告書－古代因幡国気多郡衙推定地－』気高町文化財報告書30 気高町教育委員会
- 山中敏史編 2003b『古代の官衙遺跡Ⅰ 遺構編』独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所
- 山柁雅美・濱 隆造・岩垣 命 2014「青谷平野における律令的祭祀－因幡国－」『古代文化』第66巻第3号 公益財団法人古代学協会 pp. 58-65.
- 吉村善雄編 1988『上光遺跡群発掘調査報告書 因幡国気多郡推定坂本郷所在の官衙遺跡』気高町文化財報告書16
気高町教育委員会
- 吉村善雄他編 1988『気高町埋蔵文化財発掘調査報告書 県営逢坂地区・県営瑞穂地区ほ場整備事業等に伴う埋蔵文化財発掘調査』気高町文化財報告書11-1～5 気高町教育委員会
- 米田文孝編 1982『寺内京南遺跡発掘調査報告－ほ場整備に伴う調査－』鹿野町埋蔵文化財調査報告書第4輯 鳥取県気高郡鹿野町教育委員会

- Reimer, J. Paula., Bard, Edouard., Bayliss, Alex., Beck, J. Warren., Blackwell, G. Paul., Ramsey, Bronk. Christopher., Buck, E.Caitlin., Cheng, Hai., Edwards, R. Lawrence., Friedrich, Michael., Grootes, M. Pieter., Guilderson, P. Thomas., Haffidason, Hafliði., Hajdas, Irka., Hatté, Christine., Heaton, J. Timothy., Hoffmann, Dirk. L., Hogg, G. Alan., Hughen, A. Konrad., Kaiser, K. Felix., Kromer, Bernd., Manning, W. Sturt., Niu, Mu. Reimer, W. Ron., Richards, A. David., Scott, E. Marian., Southon, R. John., Staff, A. Richard., Turney, S. M. Christian., van der Plicht, Johannes. 2013 Intcal13 and Marine13 Radiocarbon Age Calibration Curves 0-50,000 Years cal BP. *Radiocarbon* 55(4) pp. 1869-1887.
- Stuiver, M., and Polach, A.H. 1977 Discussion: Reporting of 14C Data. *Radiocarbon* 19(3) pp. 355-363.
- Horst Lange-Bertalot. 2000 Iconographia Diatomologica : *Annotated Diatom Micrographs*. Witkowski, A., Horst Lange-Bertalot, Dittmer Metzeltin: Diatom Flora of Marine Coasts Volume 1. 219 pls. 4504 figs, 925 pgs.
- Hustedt, F. 1930 Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in *Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz*, 7(1), Leipzig, p. 920.
- Hustedt, F. 1937-1938 Systematische und ökologische Untersuchungen mit die Diatomeen-Flora von Java, Bali und Sumatra. I ~ III. *Arch. Hydrobiol. Suppl.*, 15, pp. 131-809, 1-155, 274-349.
- Hustedt, F. 1959 Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeresgebiete. in *Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz*, 7(2), Leipzig, p. 845.
- Hustedt, F. 1961-1966 Die Kieselalgen Deutschlands, Oesterreichs und der Schweiz. unter Berücksichtigung der ubrigen Lander Europas Sowie der angrenzenden Meeres-gebiete. in *Dr. Rabenhorsts Kryptogamen Flora von Deutschland, Oesterreichs und der Schweiz*, 7(3), Leipzig, p. 816.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot 1985 Naviculaceae. *Bibliotheca Diatomologica*, vol. 9, p. 250.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot 1986 Bacillariophyceae, *Susswasser flora von Mitteleuropa* 2(1) p. 876.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot 1988 Bacillariophyceae, *Susswasser flora von Mitteleuropa* 2(2) p. 596.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot 1990 Bacillariophyceae, *Susswasser flora von Mitteleuropa* 2(3) p. 576.
- Krammer, K. and H. Lange-Bertalot 1991 Bacillariophyceae, *Susswasser flora von Mitteleuropa* 2(4) p. 437.
- Desikachary, T. V. 1987 *Atlas of Diatoms. Marine Diatoms of the Indian Ocean*. Madras science foundation, Madras, Printed at T.T. Maps & Publications Private Limited, 328, G. S. T. Road, Chromepet, Madras-600044. pp. 1-13, Plates : 401-621.
- Erdtman G. 1952 *Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms* (An introduction to palynology. I). Almqvist & Wiksells p. 539.
- Erdtman G. 1957 *Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta* (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II) p. 147.
- Feagri K. and Iversen Johs. 1989 *Textbook of Pollen Analysis*. The Blackburn Press, p. 328.
- Asai, K. & Watanabe, T., 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophilous and saproxenous taxa. *Diatom*, 10 pp. 35-47.
- Lowe, R. L., 1974 Environmental requirements and pollution tolerance of fresh-water diatoms. In *Environmental Monitoring Ser. EPA-670/4-74-005*. Nat. Environmental Res. Center office of Res. Develop. U. S. Environ. Protect. Agency. Cincinnati. pp. 1-344.

- Van Landingham, S.L., 1970 Origin of an early non-Marine Diatomaceae Deposit in Broad water County, Montana, U. S. A. *Diatomaceae II Nova Hedwigia Heft 31* pp. 449-473.
- Warashina, T. 1992 Allocation of Jasper Archeological Implements By Means of ESR and XRF. *Journal of Archaeological Science* 19(4) pp. 357-373.
- Wentworth, C.K., 1922 A Scale of Grade and Class Terms For Clastic Sediments. *The Journal of Geology* 30(5) pp. 377-392.



Summary

Tsunematsu-Sugata site (常松菅田遺跡) is the wetland one which is located on the valley plain spreading out at the junction of Mizuho Valley and Hogi Valley in the Tottori City, Tottori Prefecture, Japan. On the valley plain the first figures that people was active on the slight highlands and those of the outskirts intermittently can well recognize after the Latter Stage of Jomon Period.

In the research of Tsunematsu-Sugata site (Area 1) excavated in 2014, it came to light that Palaeo-valley had occupied at this area on a large scale for around 1,200 years since the Latter Stage of Jomon Period. This means, from the archaeological aspects, both valley and slight highland make the landscape from which is clearly different compared with the one of Area 2 in this site.

There are few traces of human activities during Yayoi and Kohun Period at this area. However, it is highly likely to be the existence of settlement in the vicinity of Area 1 because there are an evidence such as a pit-dwelling and earthen pits are scattered on the slight highlands besides wooden materials for embedded-pillar buildings measured no less than 3 metres in length were uncovered from the valley.

After this valley was filled with sediments by the end of 7th century, more than 950 effigies used in purification rites in the river as s subsistence for god or person, which consists of mainly human-shaped(Hitogata 人形) and horse-shaped(Umagata 馬形) effigies in addition to many effigies in the shape of a pointed board (Igushi 齋串). Concentration of their distribution in the river let us recognize the scene of rites(Ritsuryo-Saishi 律令祭祀) *in situ*. Moreover, characteristics of potteries and effigies can ensure that there is little time-lag between Nara, which was the capital in those days, and Inaba (Eastern Tottori) province in terms of the spread of official rites.

Tsunematsu-Sugata site can be placed, through the fruitful archaeological excavations for 2 years, not as central place in the settlement at any period but characterised as one where it is used for bead-making and rite, which can be said to be generally secondary elements in daily life. This would be caused by the geographical features (Palaeo-landscape), in other words, valley and the outskirts of slight highlands in which are hardly suitable for daily and permanent living. (N. Mizumura)



写真図版

写真図版 1 ~ 24 遺跡現地写真

写真図版 25 ~ 44 遺物写真

写真図版 45 ~ 47 微化石顕微鏡写真



1 調査区遠景(北東から)



2 調査区遠景(南から)



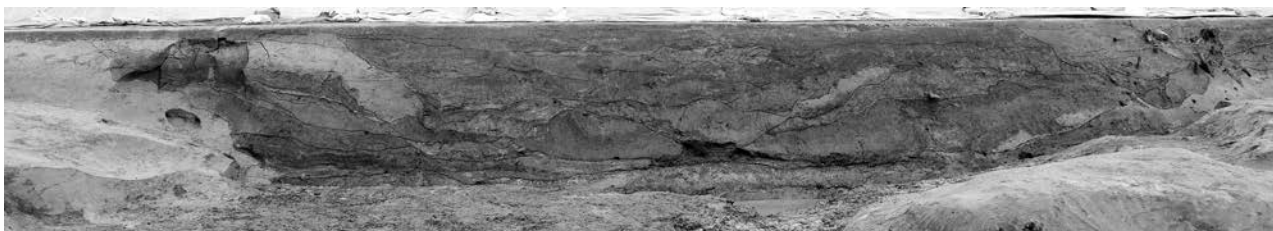
1 調査区遠景(東から)



2 調査区遠景(西から)



1 調査区西壁断面(東から)



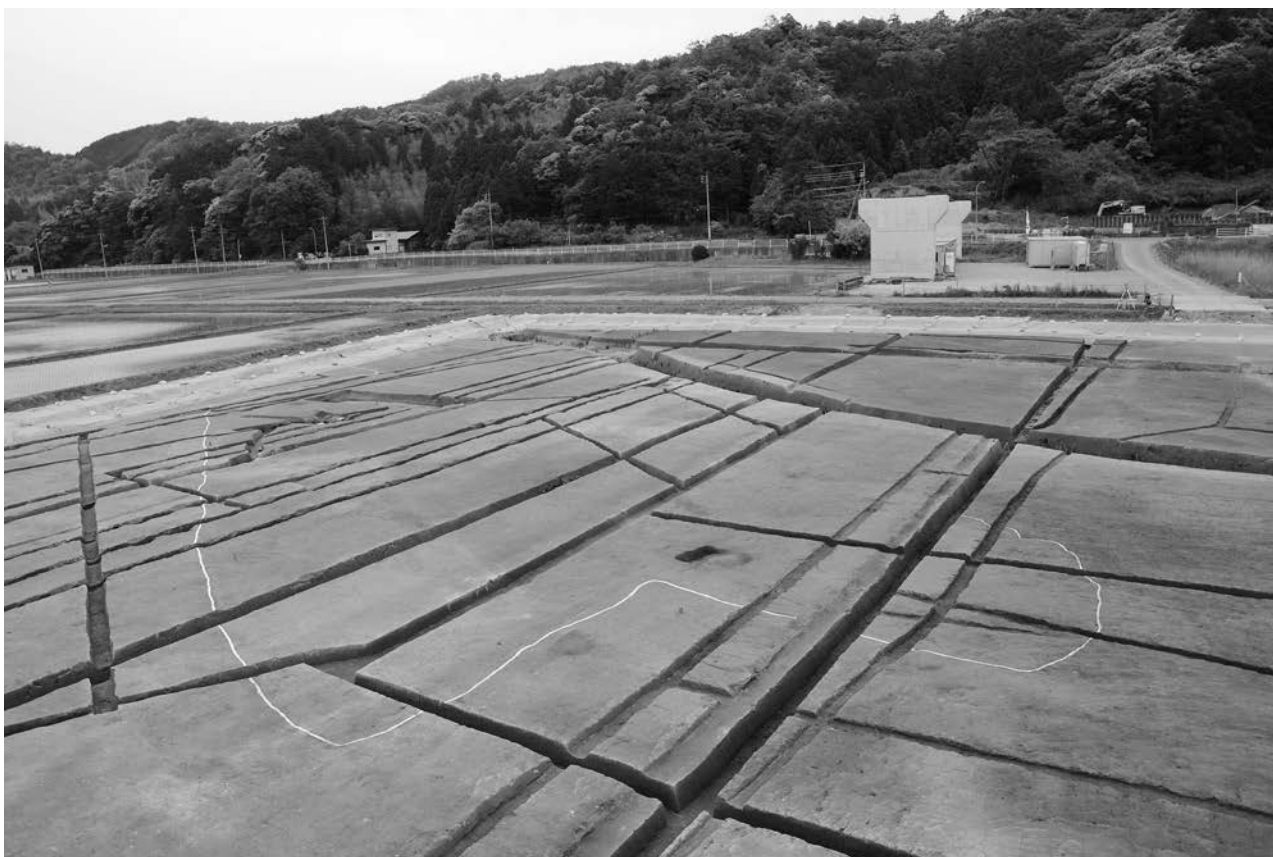
2 調査区南壁断面(北から)



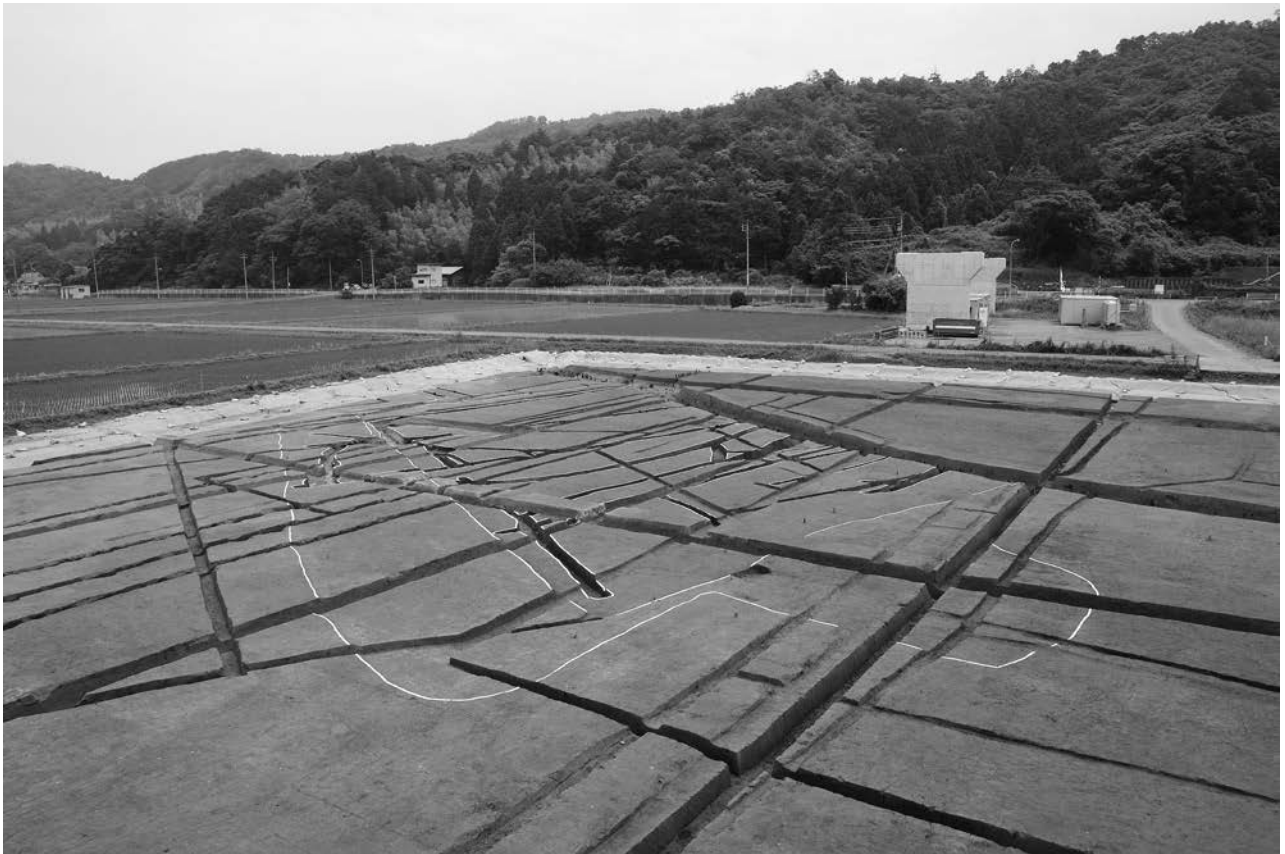
3 調査区南壁断面(部分拡大)



1 調査前風景(北東から)



2 1面完掘状況(南西から)



1 2面完掘状況(南西から)



2 1畦畔土層断面(北から)



3 暗渠検出状況(1)(東から)



4 暗渠検出状況(2)(東から)



5 暗渠検出状況(3)(北から)



1 3面完掘状況(北半)(東から)



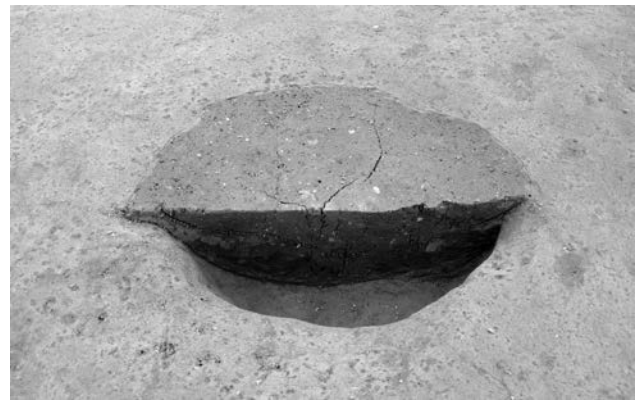
2 3面完掘状況(南半)(北東から)



1 4面完掘状況(北半)(東から)



2 26畦畔検出状況(西から)



3 30ピット土層断面(南から)



4 28土坑土層断面(東から)



5 36土坑土層断面(南から)



1 5面完掘状況(北東から)



2 45土坑土層断面(東から)



3 41～44流路完掘状況(南西から)



4 41流路土層断面および遺物出土状況(南西から)



5 42流路土層断面(南から)



1 Ⅷ層土馬(Po 4)
出土状況(北東から)



2 6面完掘状況(西から)



1 47・48 流路土層 A - A' 断面(1) (南から)



2 47・48 流路土層 A - A' 断面(2) (南から)



3 47・48 流路土層 A - A' 断面(3) (南から)



4 47・48 流路土層 A - A' 断面(4) (南から)



5 47・47(新)・48 流路土層 B - B' 断面(南東から)



1 47・48 流路完掘状況(東から)



2 47 流路木製祭祀具出土状況(北から)



1 47 流路木製祭祀具
出土状況(南東から)



2 47 流路ウシ右下顎
第3後臼歯出土状況
(南東から)



3 47(新)流路土器
(Po22・25)出土状況
(南東から)



1 7面完掘状況(西から)



2 谷部(上層)遺物出土状況(北東から)



3 谷部(上層)土器(Po33)出土状況(東から)



4 谷部(上層)土器(Po36)出土状況(西から)



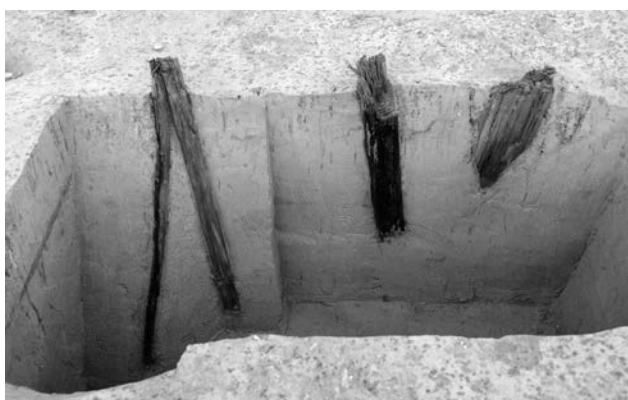
1 46 杭列検出状況(南から)



2 46 杭列断割状況(北西から)



3 46 杭列断割状況(南東から)



4 46 杭列断割状況(北西から)



5 46 杭列断割状況(東から)



1 8面完掘状況(西から)



2 8面完掘(北半)状況(東から)



1 谷部(下層)
W146・147 出土状況
(北東から)



2 谷部(下層)
W153 出土状況
(北から)



3 谷部(下層)倒木およ
び Po34・35 出土状況
(南から)

1 谷部(下層)
W175 出土状況
(南から)



2 谷部(下層)
Po67 出土状況
(南から)



3 68 土坑土層断面
(南西から)

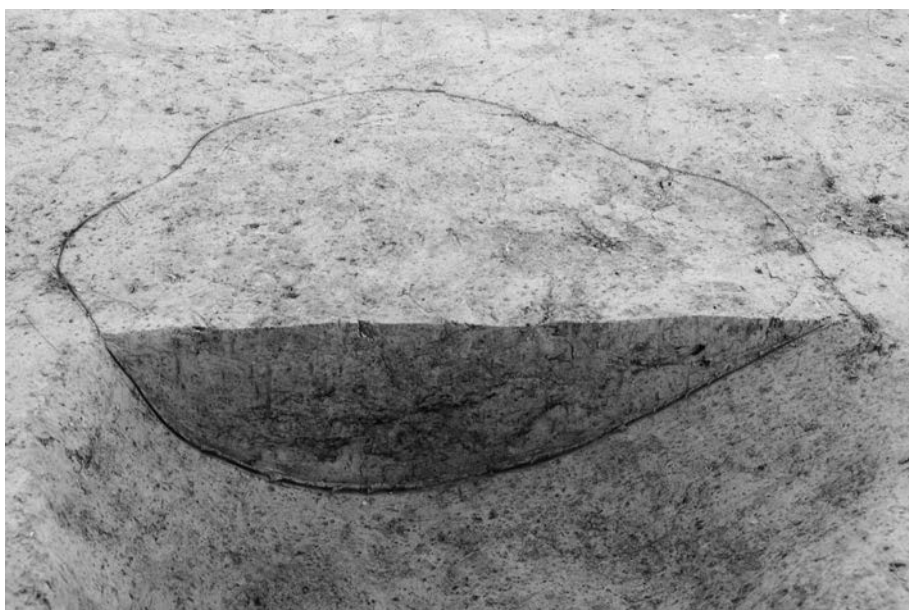




1 66ピット土層断面
(西から)

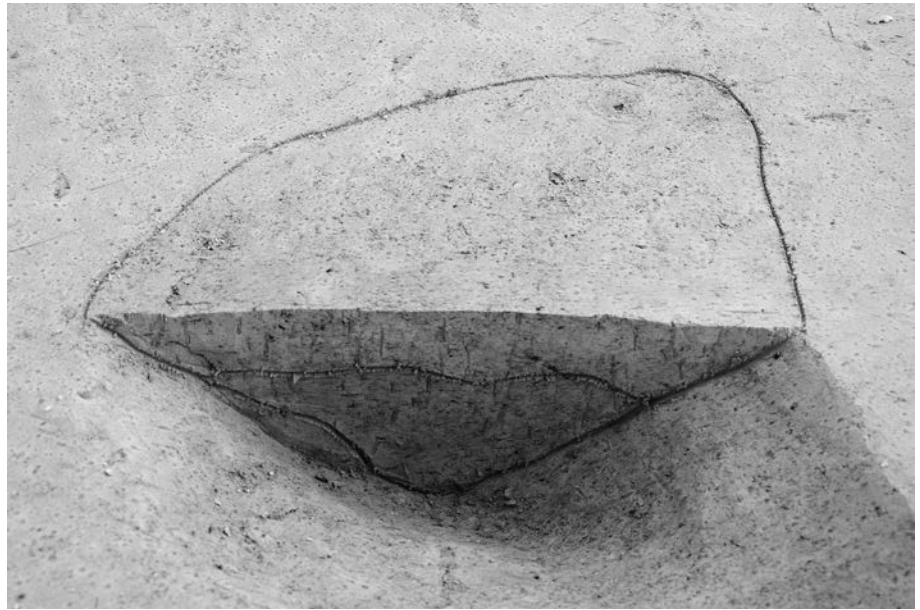


2 63ピット土層断面
(西から)



3 62土坑土層断面
(南から)

1 61 土坑土層断面
(西から)



2 49 溝土層断面
(北東から)

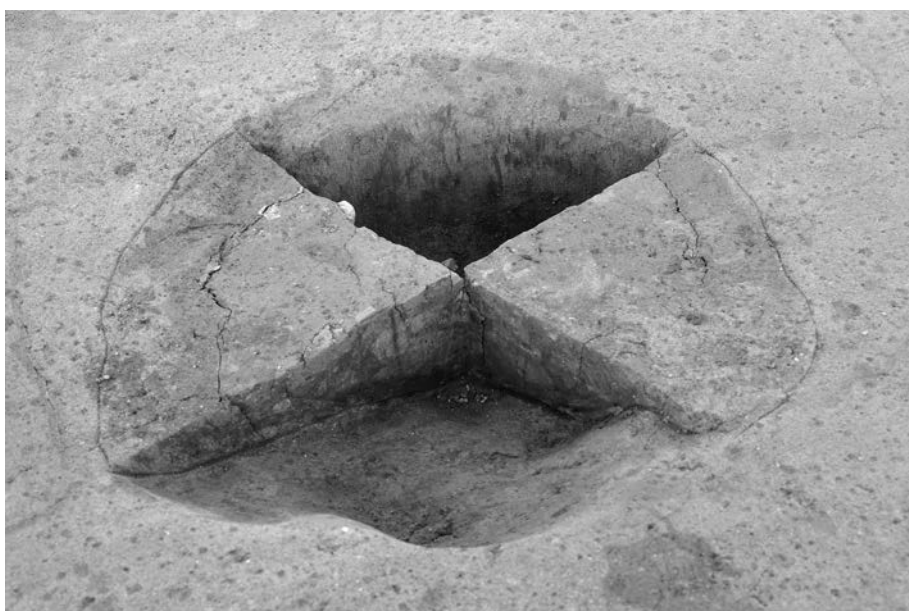


3 49 溝土器 (Po74)
出土状況 (南西から)





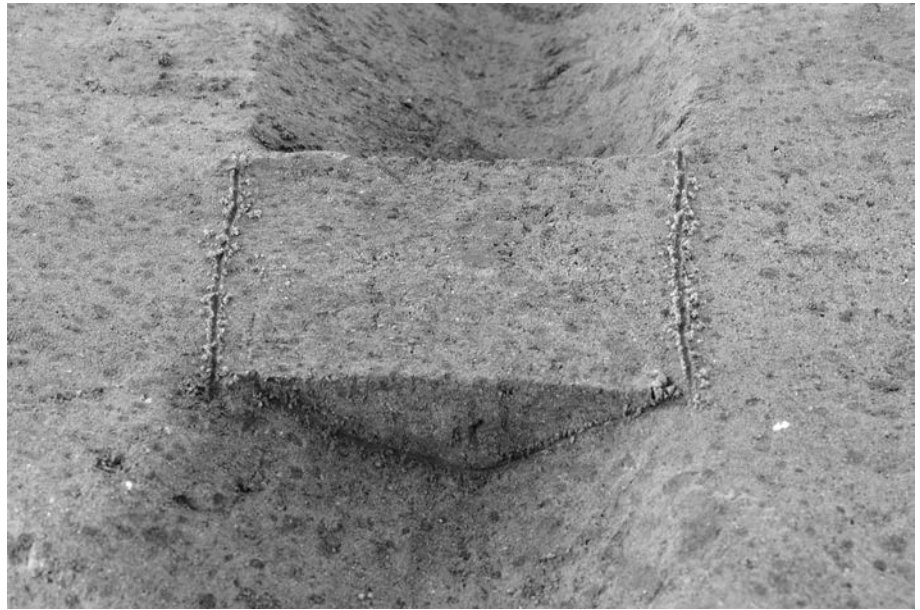
1 竪穴建物 1
50 溝土層断面(南から)



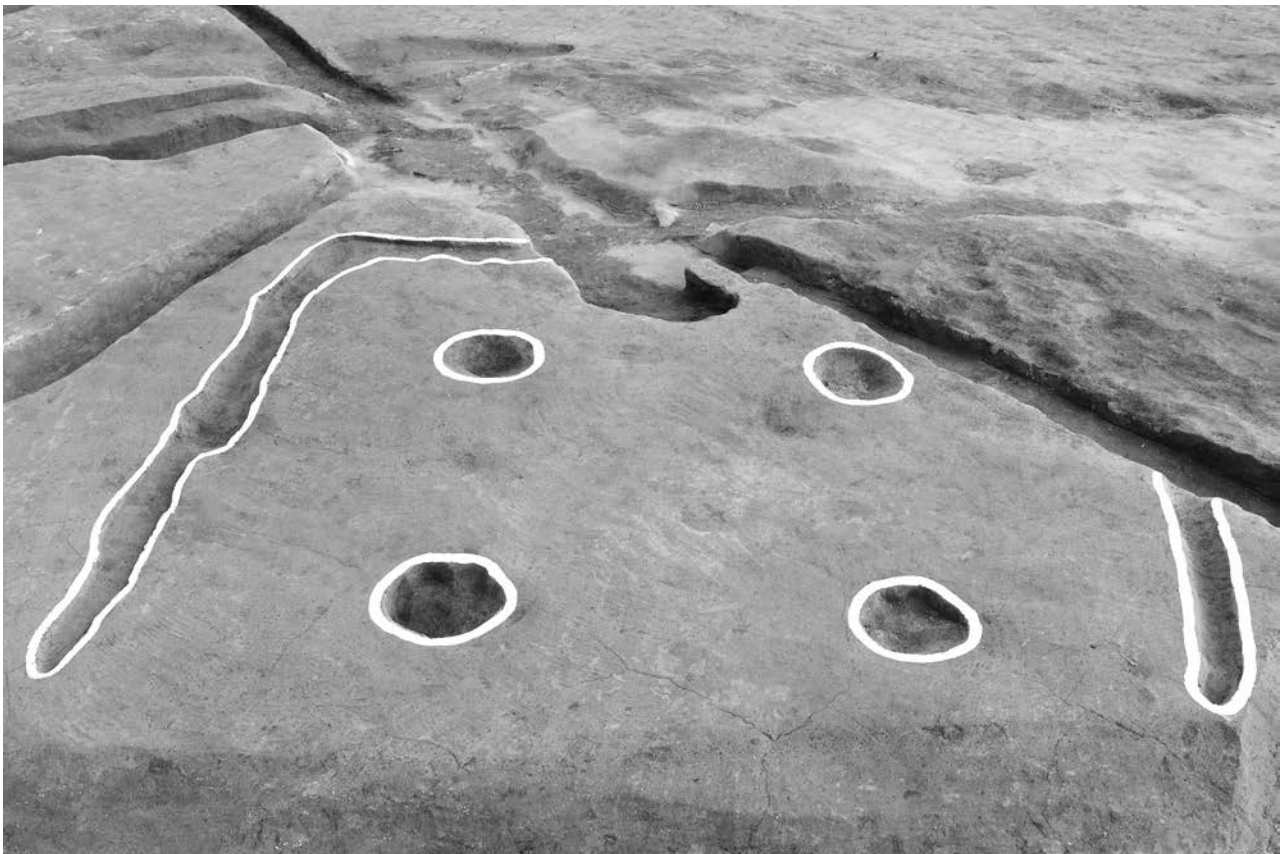
2 竪穴建物 1
53 柱穴 A・C
土層断面(南から)



3 竪穴建物 1
55 柱穴 B・D
土層断面(南から)



1 豎穴建物 1
52 溝土層断面(南から)



2 豎穴建物 1 完掘状況(北西から)



1 59 溝土層断面
(南から)



2 59 溝遺物出土状況
(東から)



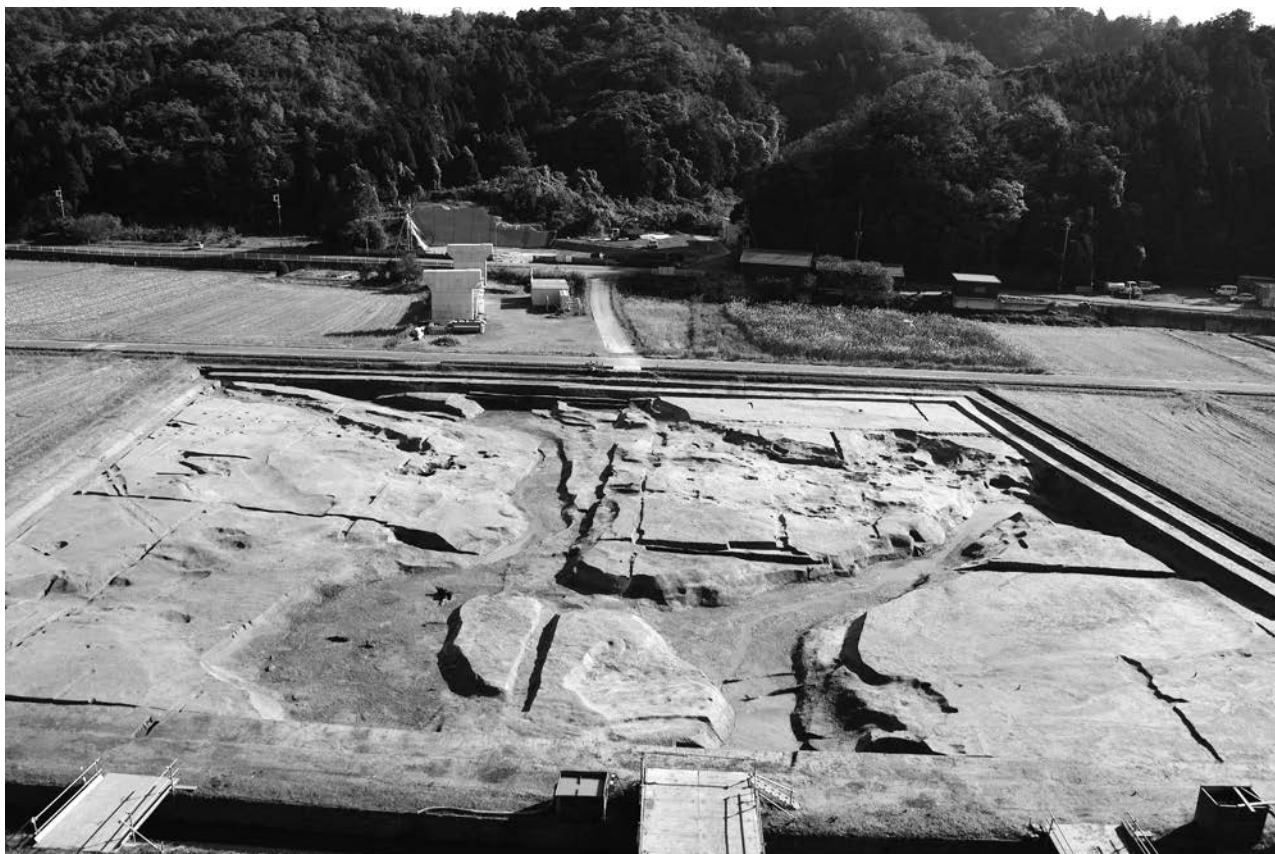
3 67 ピット土層断面
(北から)



1 9面完掘状況(西から)



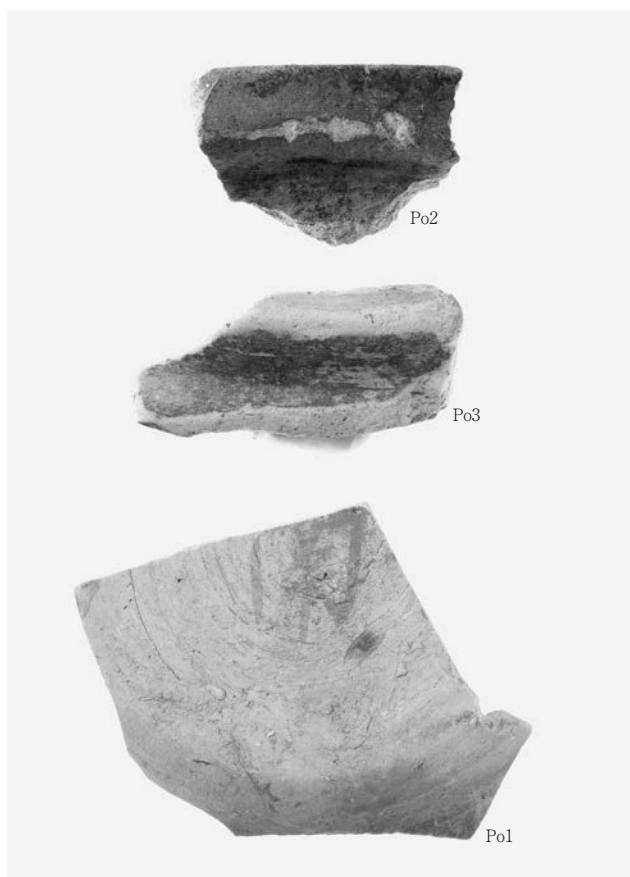
2 9面土器(Po77)出土状況(東から)



1 10面完掘状況(西から)



2 調査区完掘状況(東から)



1 VIII層出土土器



2 IX層出土土器



3 47(新)流路出土土器(1)



1 47(新)流路出土土器(2)



2 48流路出土土器(1)



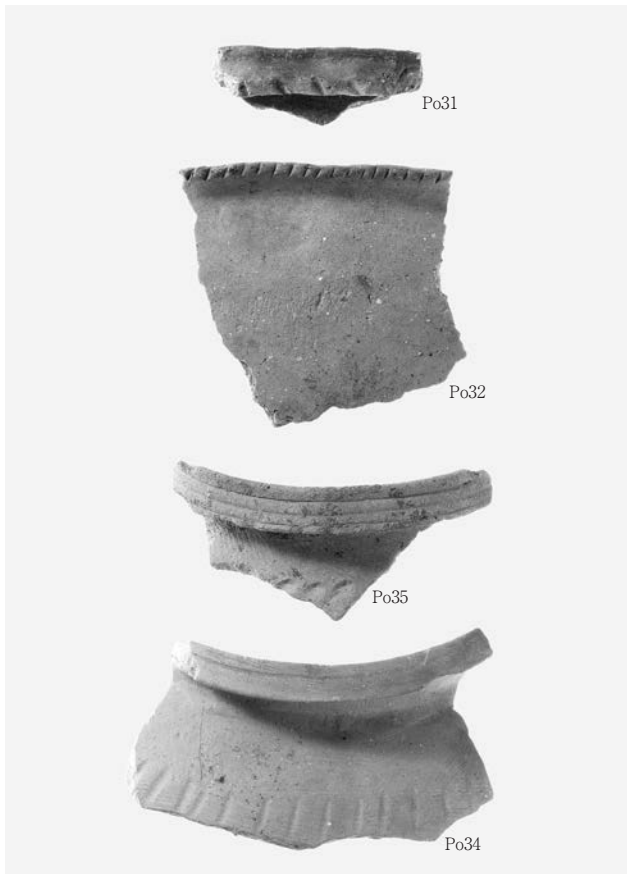
3 48流路出土土器(2)



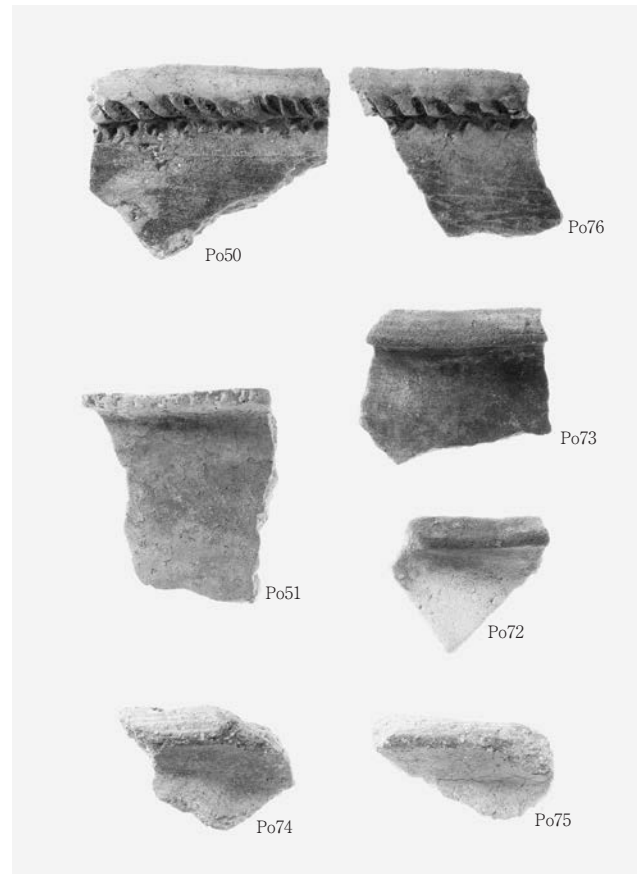
4 46杭列出土土器



1 谷部(上層)出土土器(1)



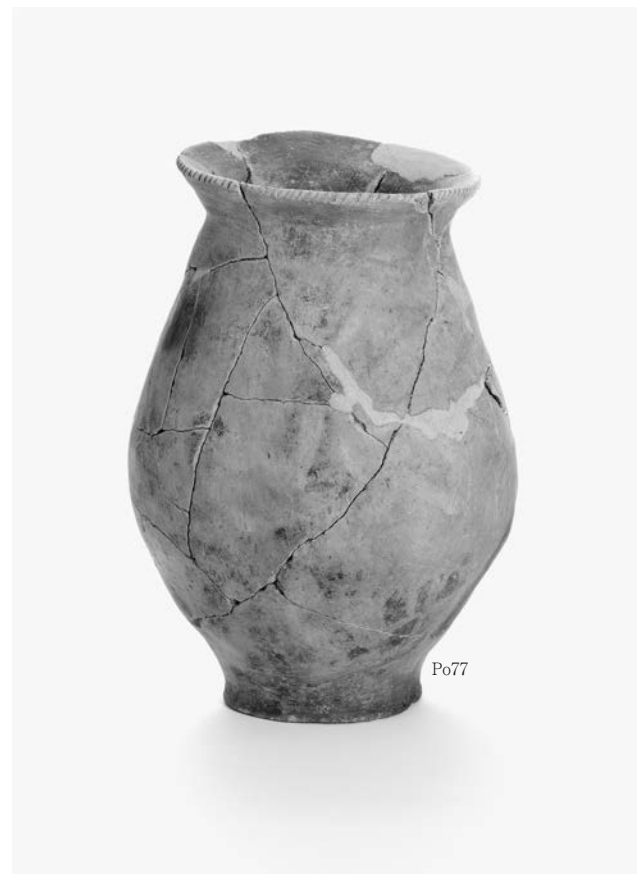
1 谷部(上層)出土土器(2)



2 8面検出遺構・Ⅱ層出土土器



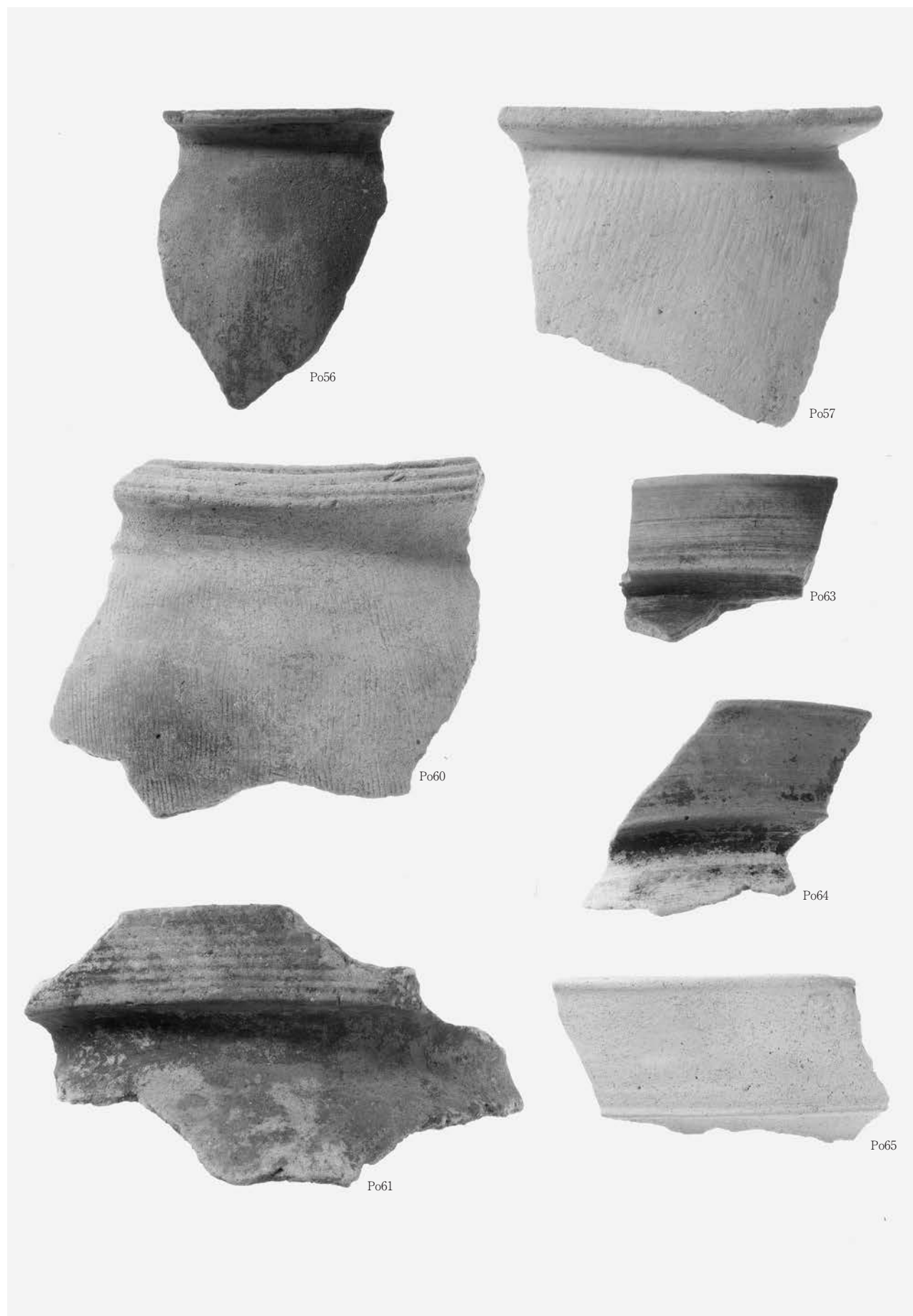
3 68土坑出土土器



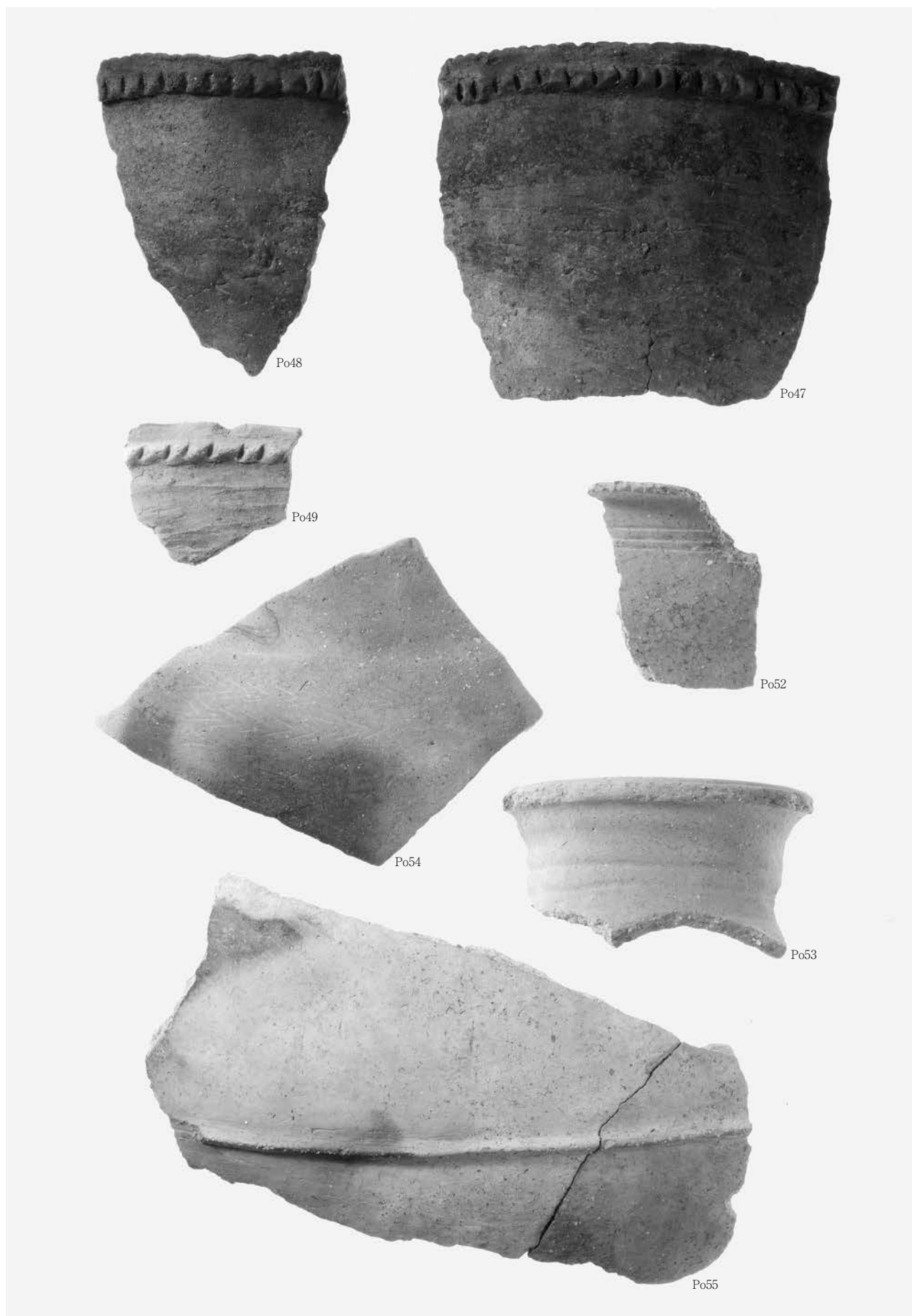
4 9面出土土器



1 谷部(下層)出土土器(1)



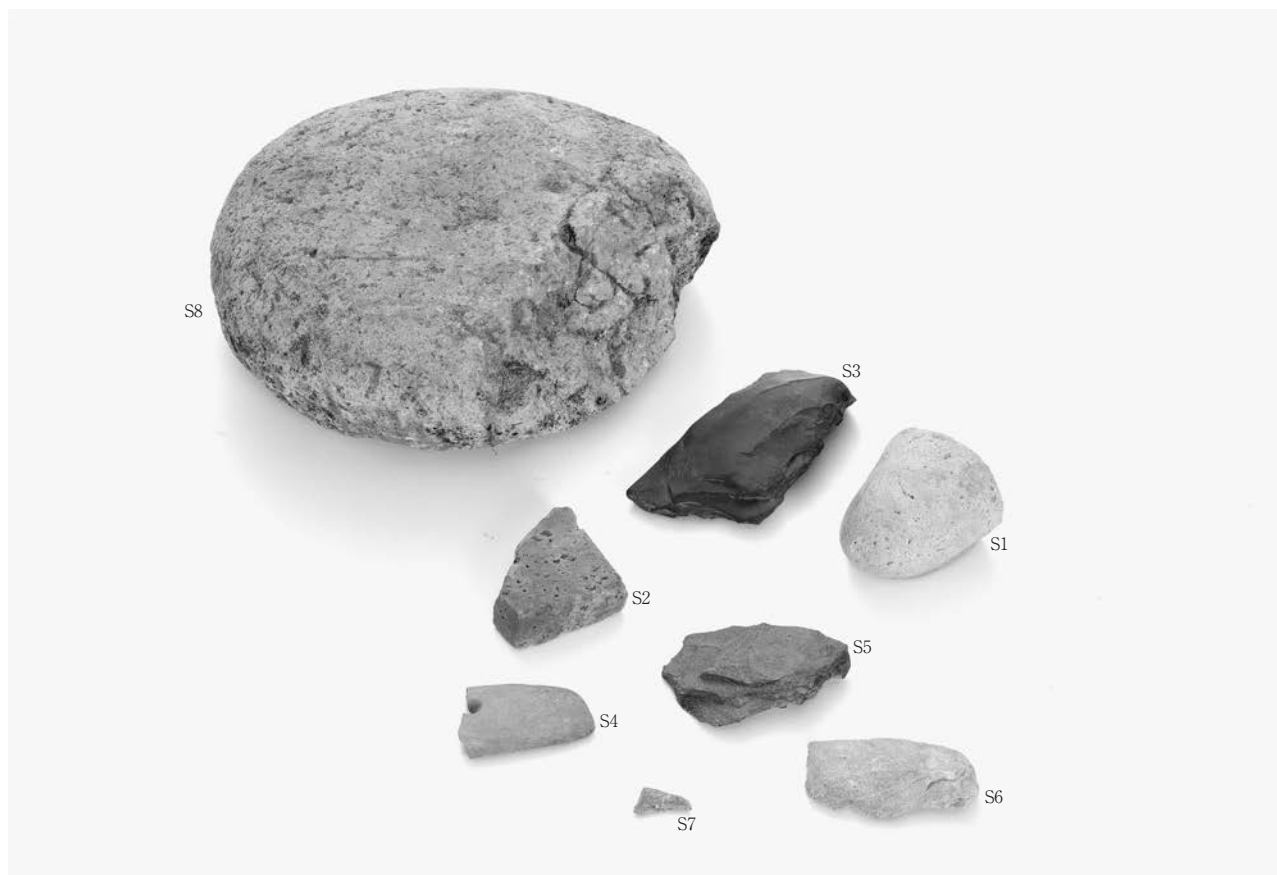
1 谷部(下層)出土土器(2)



1 谷部(下層)出土土器(3)



1 VIII・区層出土土製品



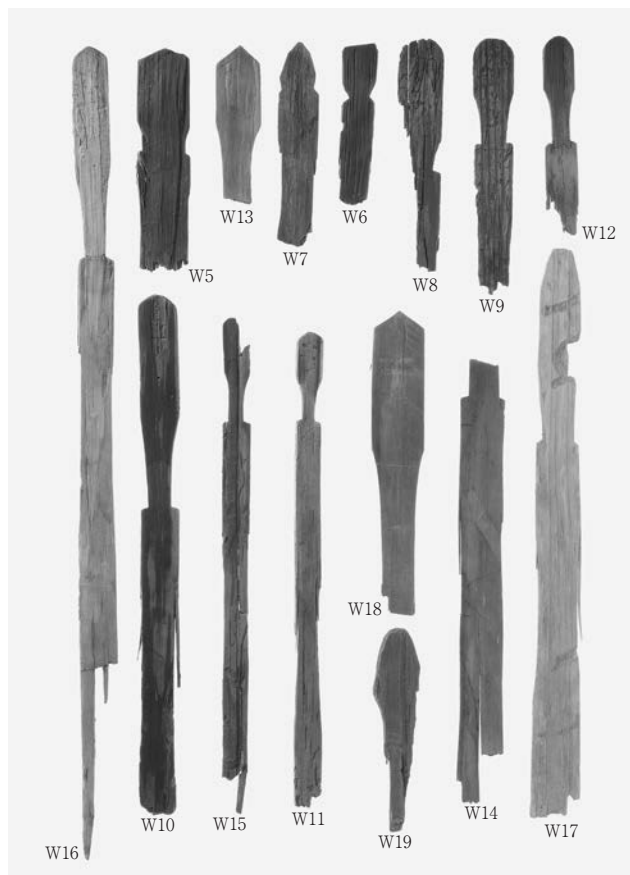
2 出土石器



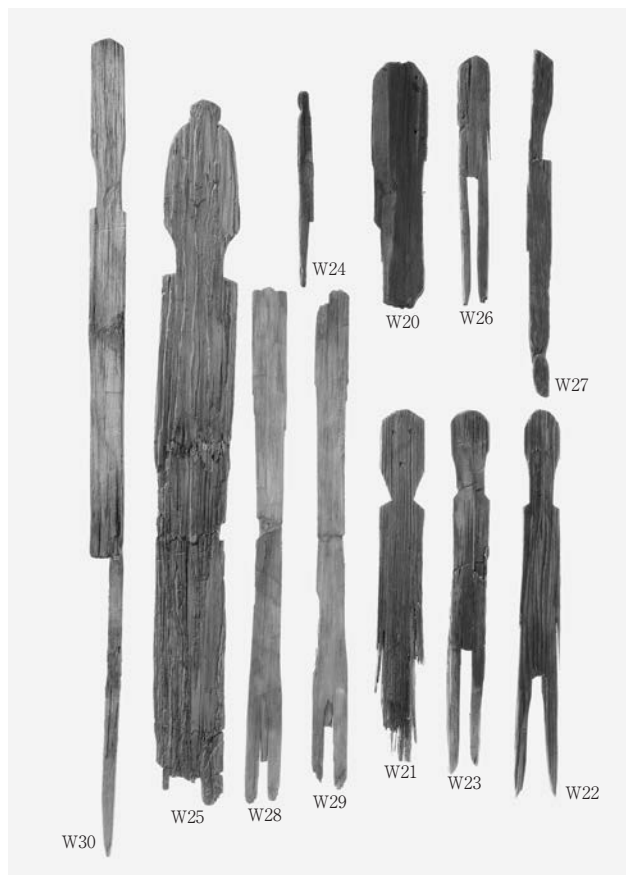
1 出土漆器(内面)



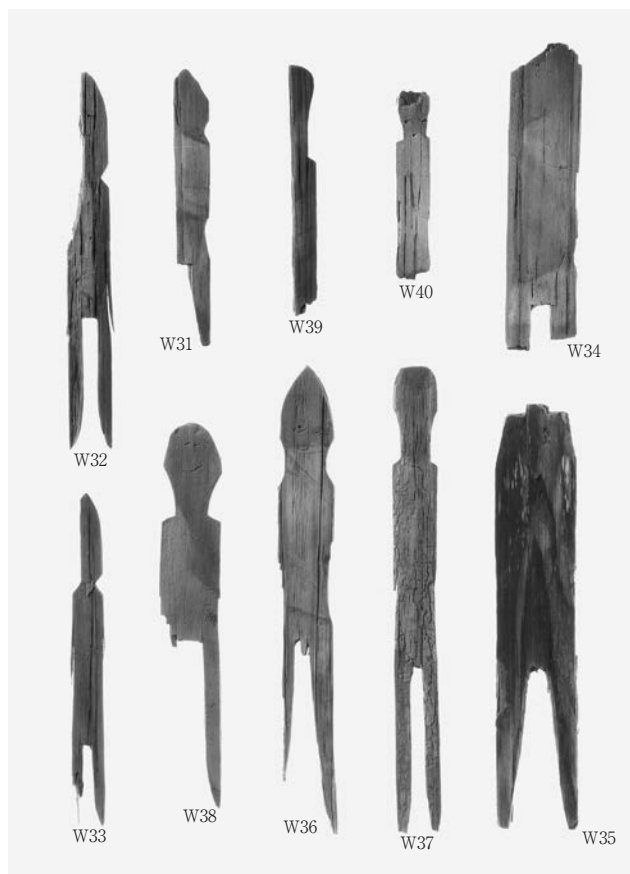
2 出土漆器(外面)



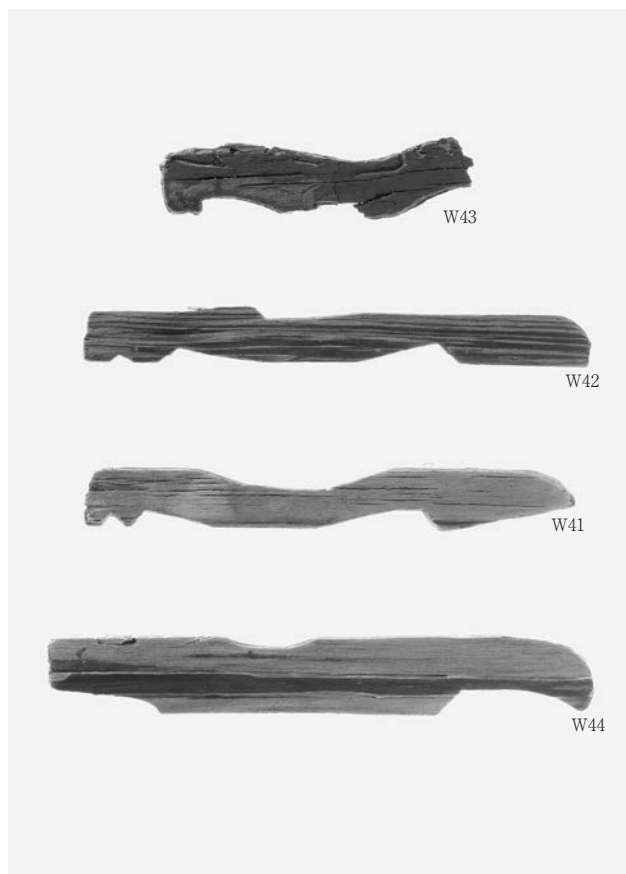
1 47・48 流路出土人形



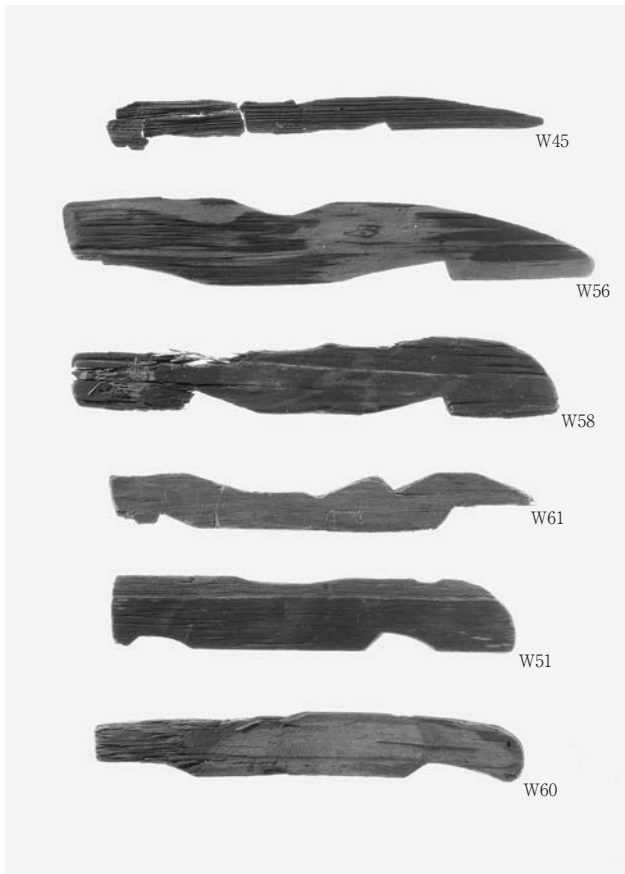
2 48 流路出土人形



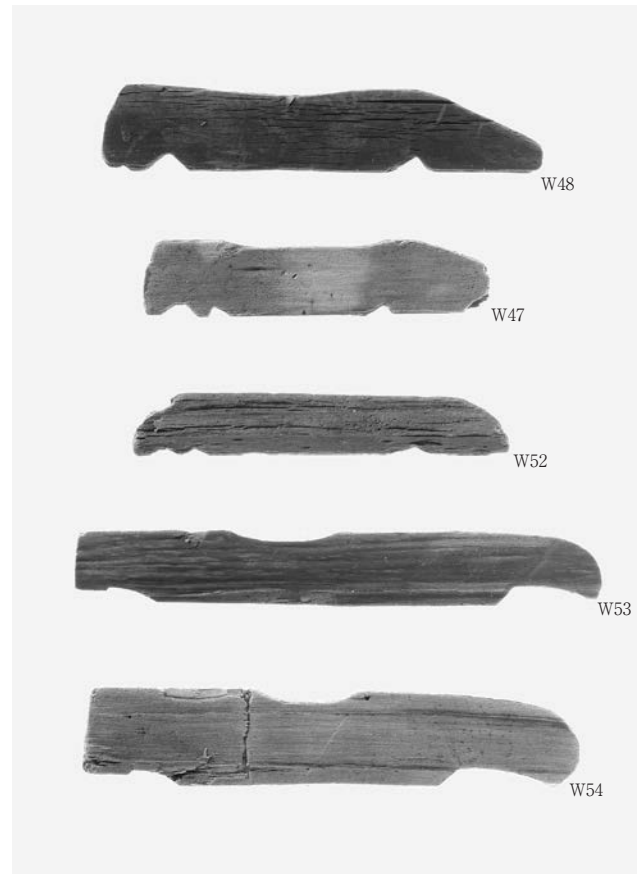
3 谷部(上層)出土人形



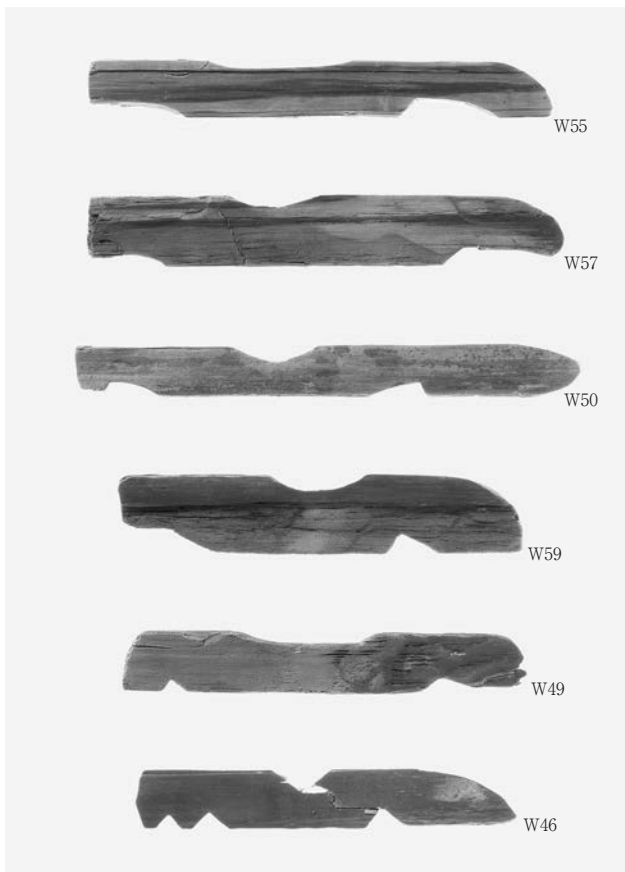
4 47 流路出土馬形



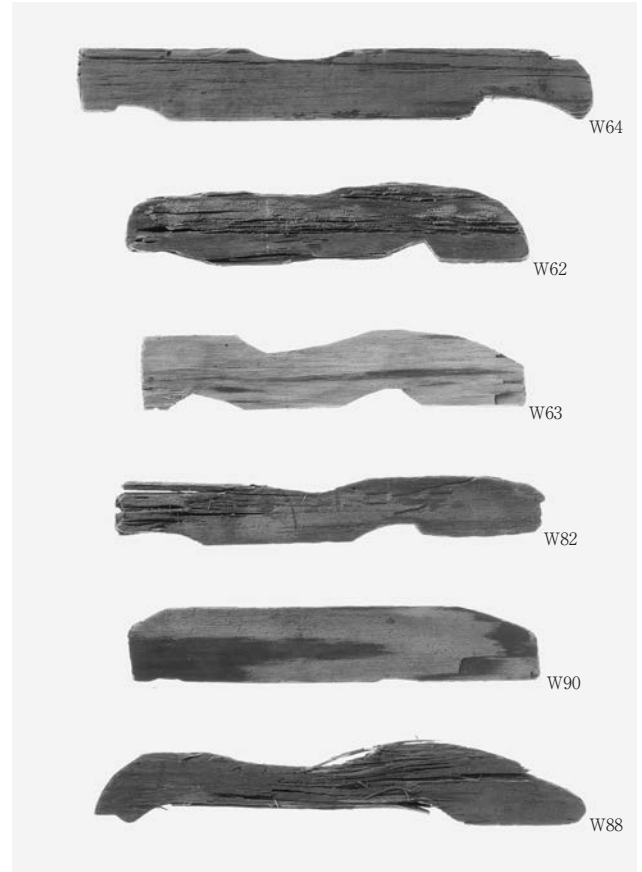
1 48 流路出土馬形(1)



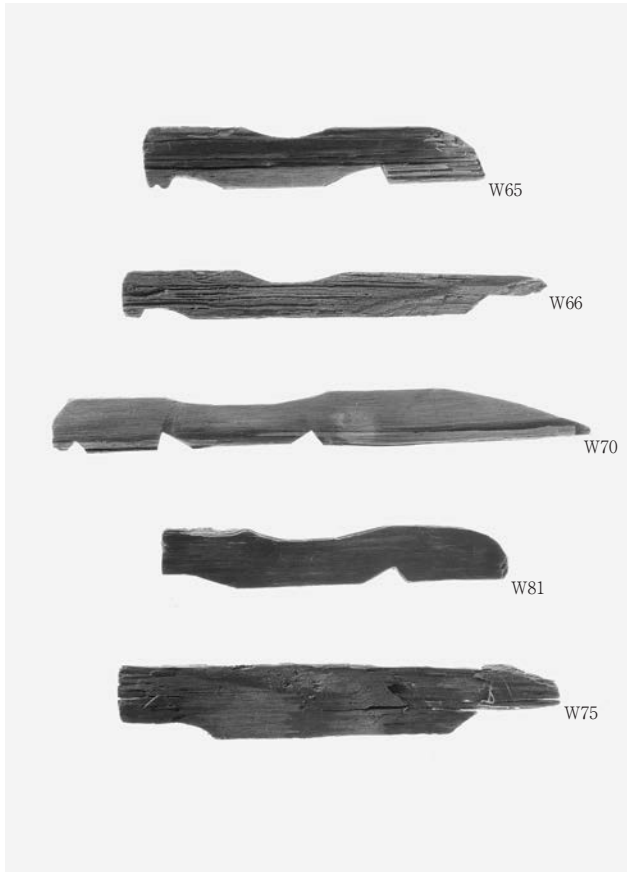
2 48 流路出土馬形(2)



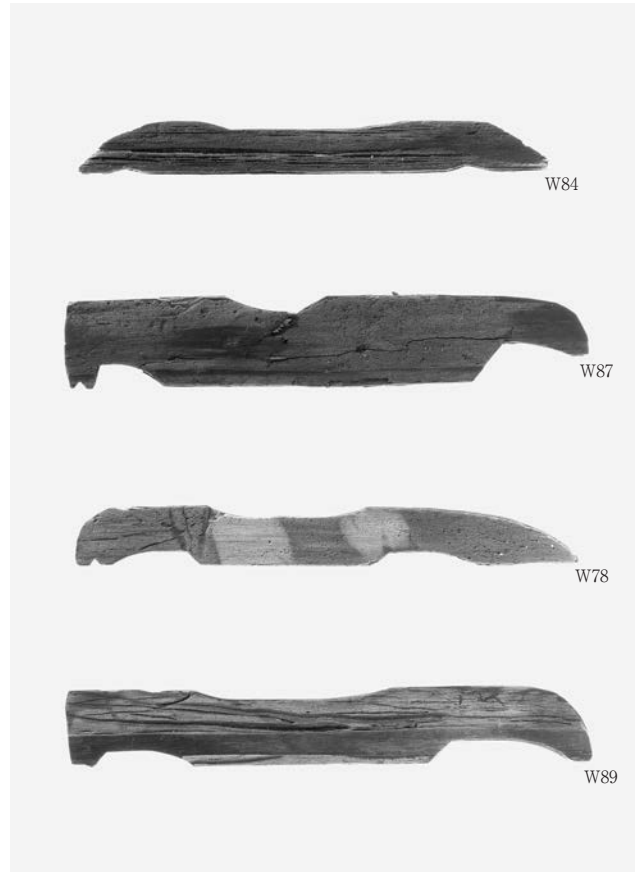
3 48 流路出土馬形(3)



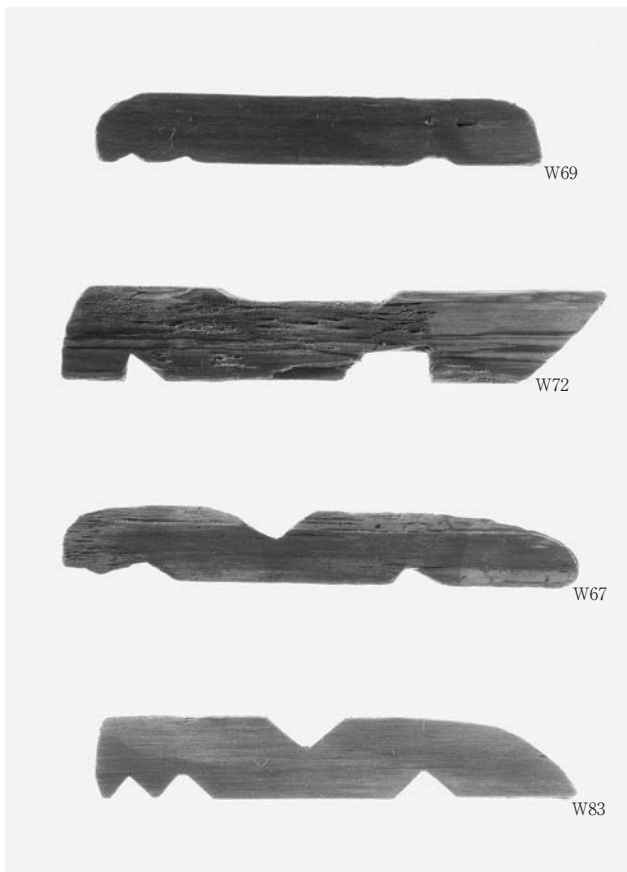
4 区層および谷部(上層)出土馬形



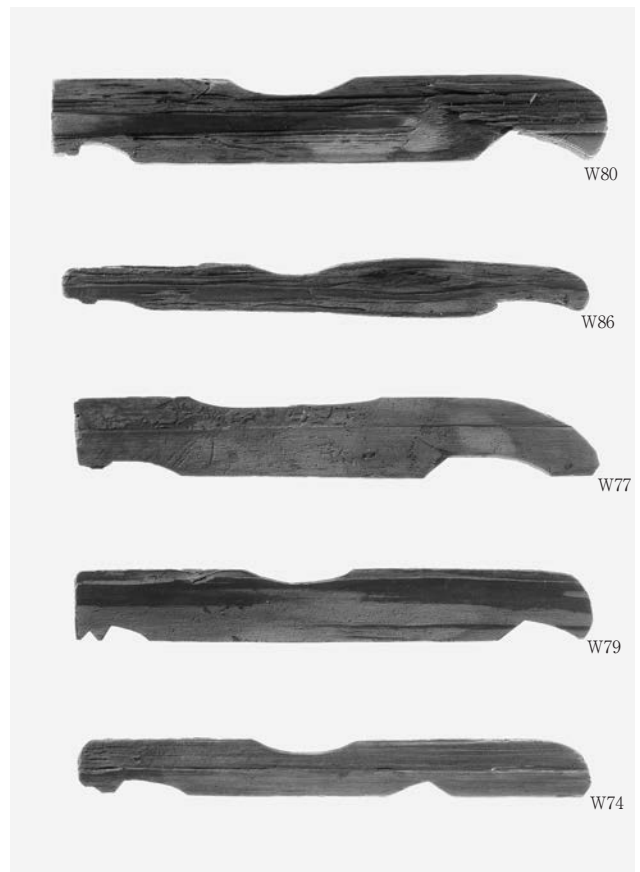
1 7面および谷部(上層)出土馬形



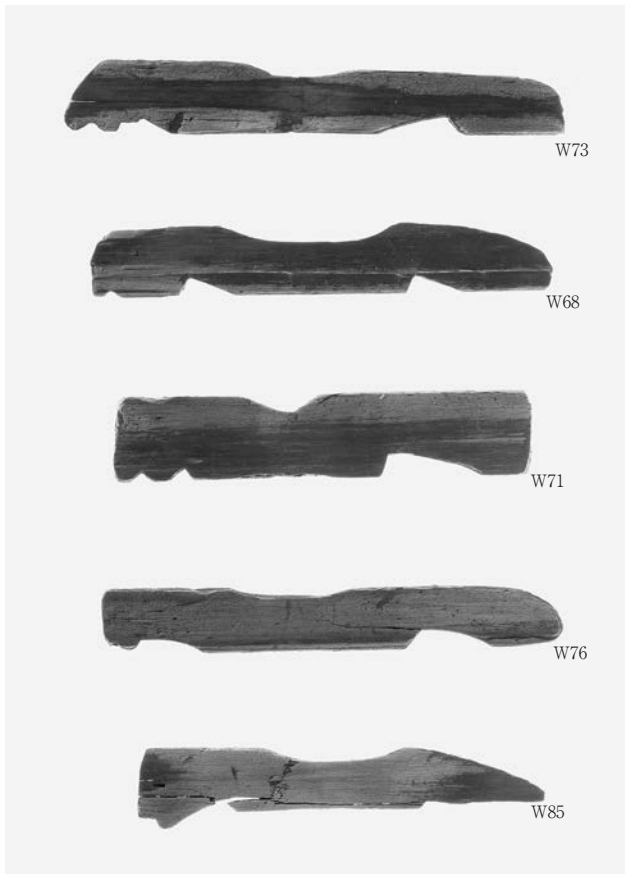
2 谷部(上層)出土馬形(1)



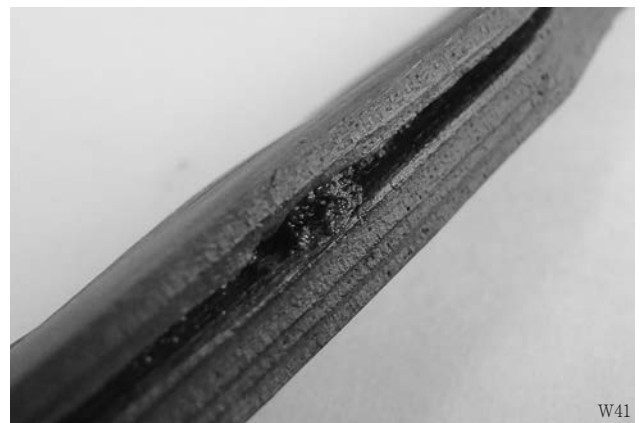
3 谷部(上層)出土馬形(2)



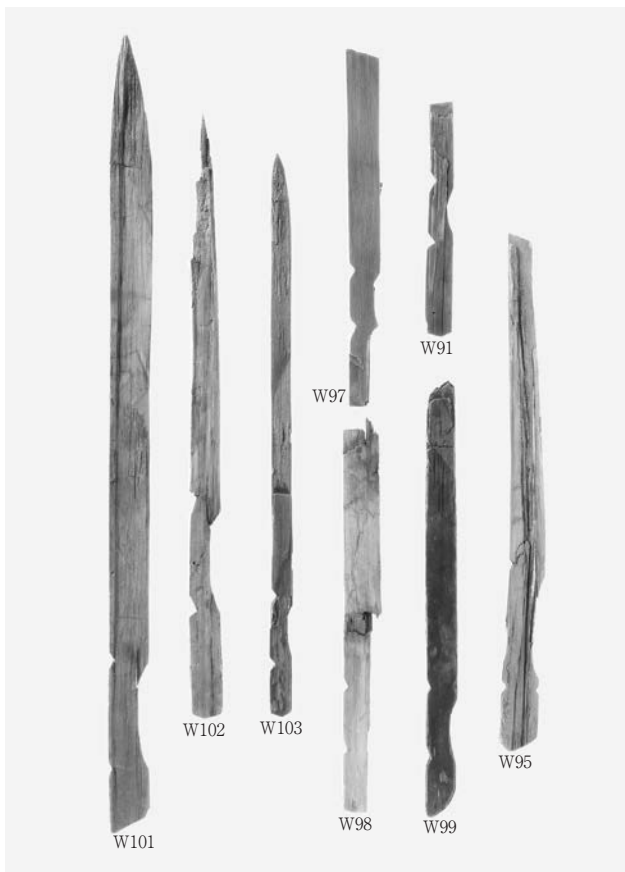
4 谷部(上層)出土馬形(3)



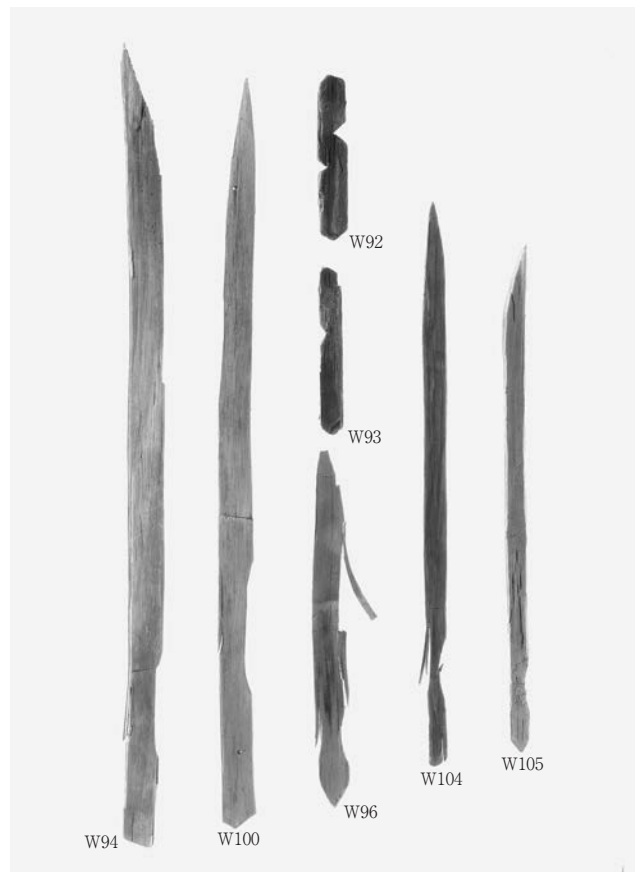
1 谷部(上層)出土馬形(4)



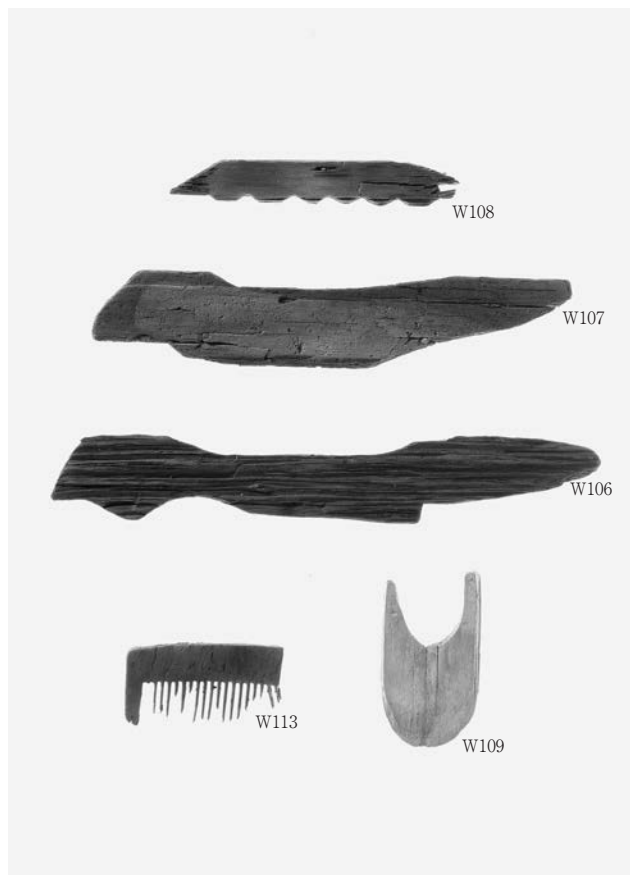
2 腹孔棒残存状況



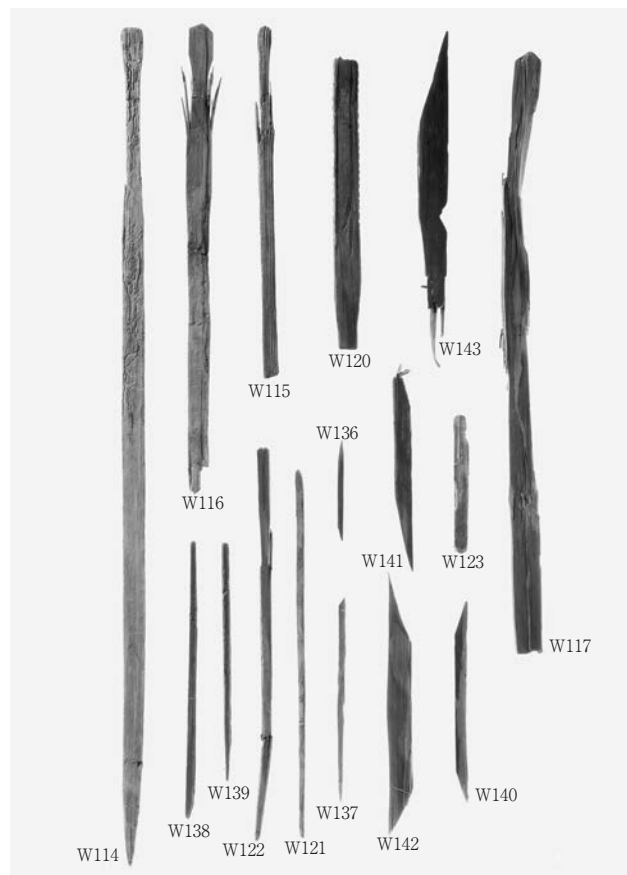
3 47・48 流路および谷部(上層)出土武器形(1)



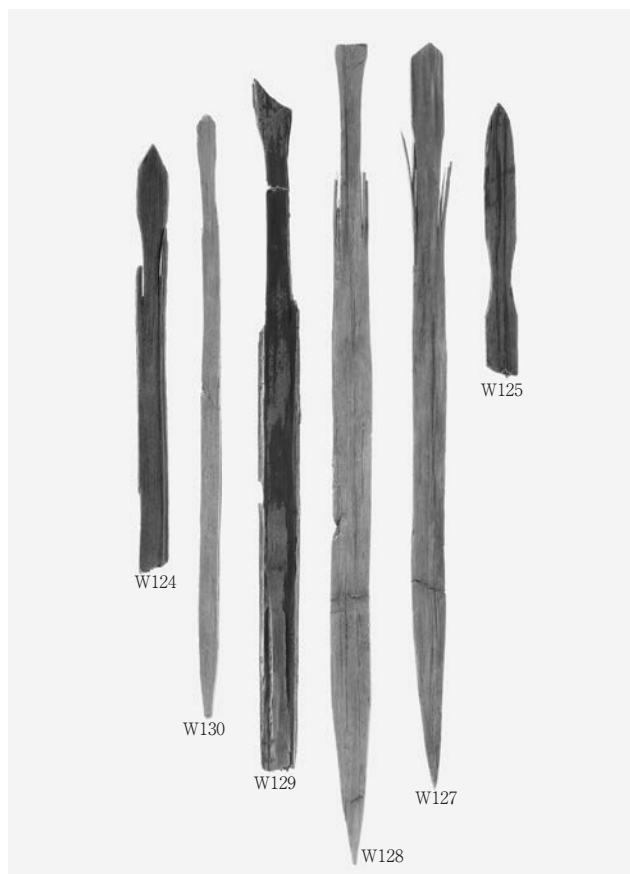
4 47・48 流路および谷部(上層)出土武器形(2)



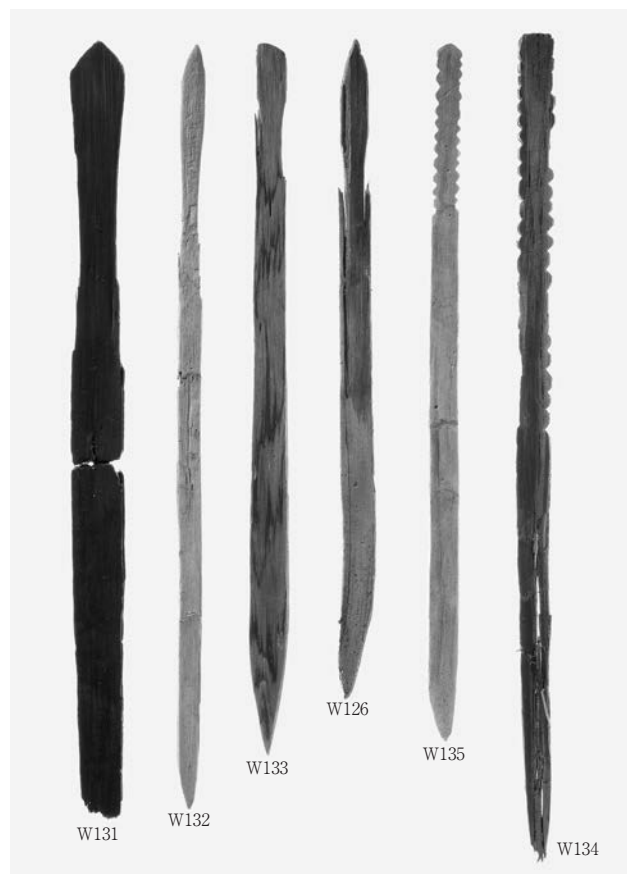
1 エブリ形・鳥形・鋤形・櫛



2 47・48 流路および谷部(上層)出土斎串



3 谷部(上層)出土斎串(1)



4 谷部(上層)出土斎串(2)



1 建築部材(1)



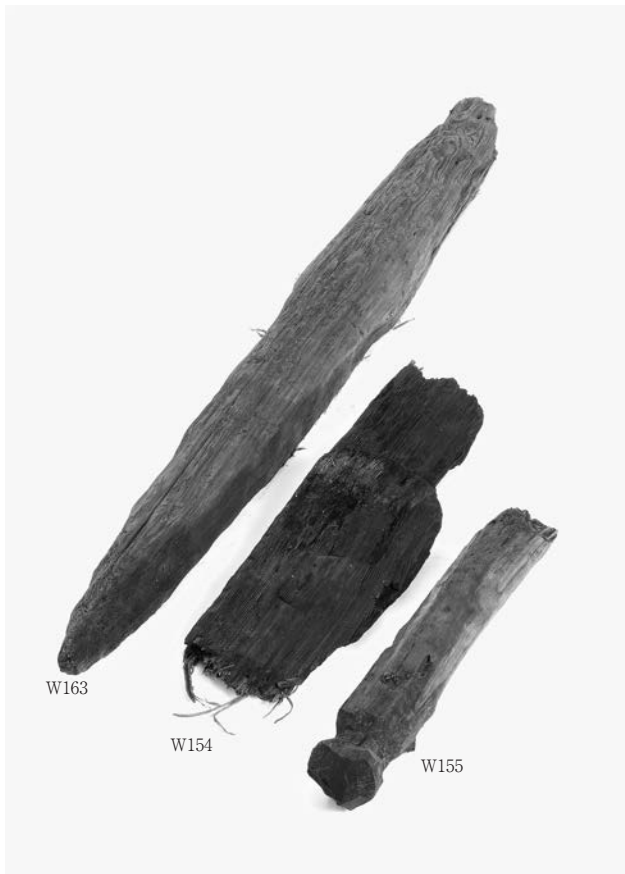
2 建築部材(2)



3 建築部材(3)



4 建築部材(4)



1 建築部材(5)



2 建築部材(6)



3 建築部材(7)



4 建築部材(8)



1 46 杭列出土杭・矢板



2 舟形、容器類、不明木製品



3 農具



4 漁労具



1 紡織具・杭



2 容器類



3 48 流路出土鞘付き刀子



1 文字資料(左：可視光画像 右：赤外光画像)(1)



2 文字資料(左：可視光画像 右：赤外光画像)(2)



3 文字資料(左：可視光画像 右：赤外光画像)(3)

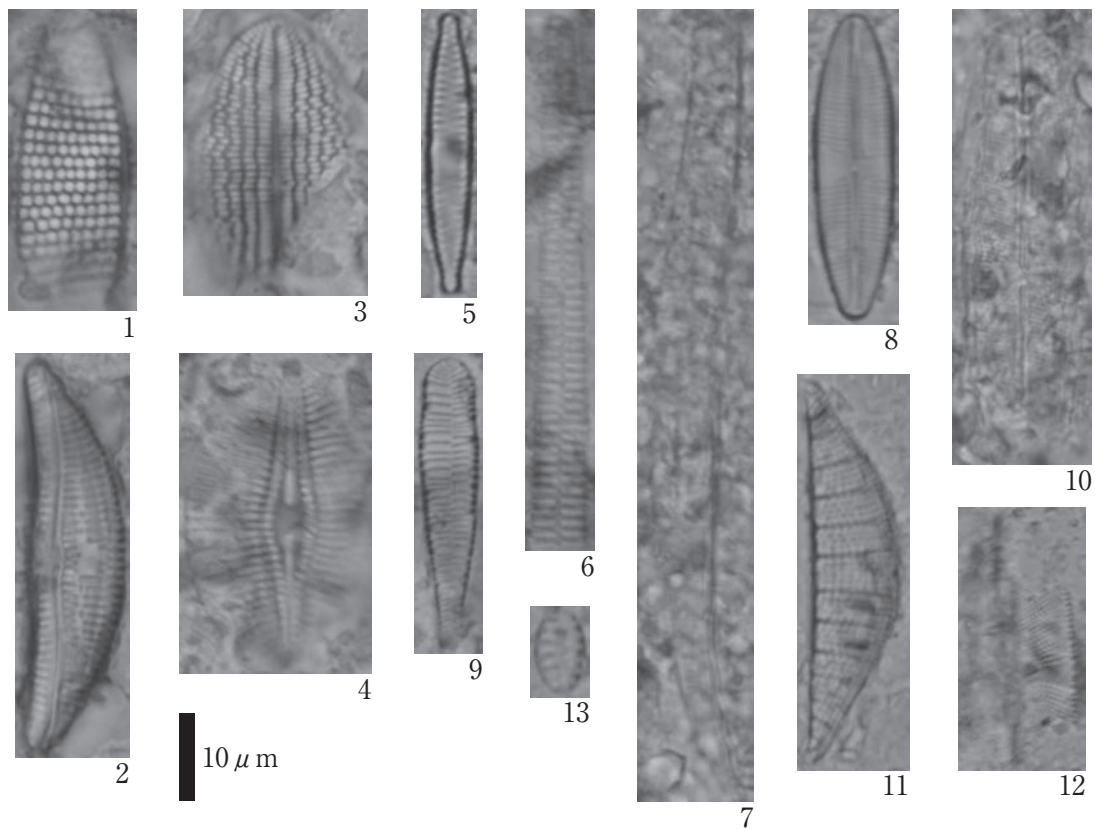


1 文字資料(左：可視光画像 右：赤外光画像)(4)



2 文字資料(左：可視光画像 右：赤外光画像)(5)

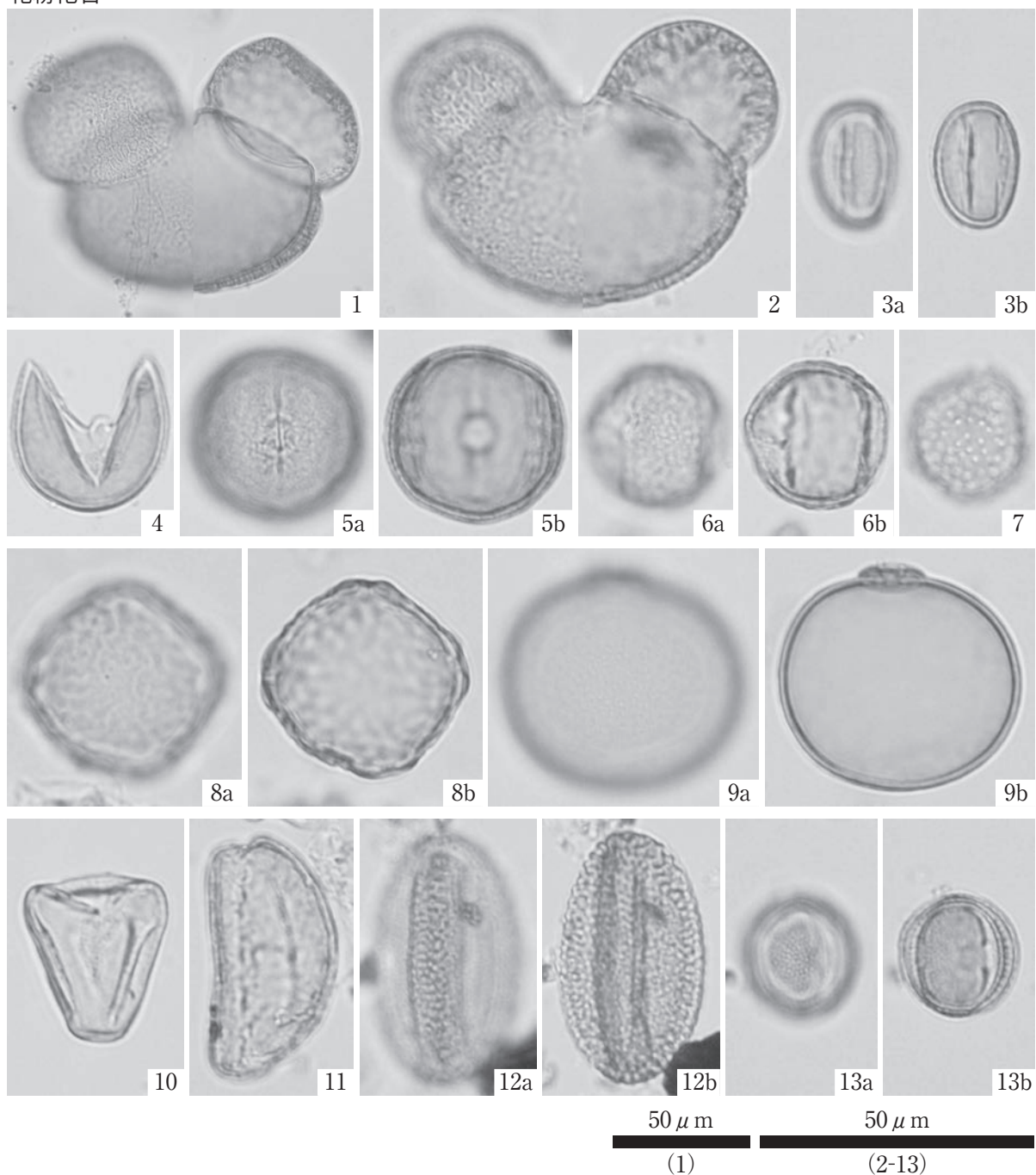
珪藻化石



1. *Achnanthes crenulata* Grunow (1哇畔3層;291)
2. *Amphora ovalis* var. *affinis* (Kuetz.) Van Heurck (47(新)流路49層;1421)
3. *Cocconeis placentula* var. *euglypta* (Ehr.) Cleve (47(新)流路49層;1421)
4. *Diploneis smithii* (Breb. ex W.Smith) Cleve (47(新)流路6層;1423)
5. *Fragilaria vaucheriae* (Kuetz.) Petersen (47(新)流路6層;1423)
6. *Fragilaria* spp. (47(新)流路6層;1423)
7. *Gyrosigma spencerii* (W.Smith) Cleve (南壁15-4層上;4042)
8. *Lemnicola hungarica* (Grun.) Round & Basson (南壁12-6層上;4025)
9. *Meridion circulare* var. *constrictum* (Ralfs) Van Heurck (南壁15-4層上;4042)
10. *Neidium ampliatum* (Ehr.) Krammer (南壁15-4層上;4042)
11. *Rhopalodia gibberula* (Ehr.) Mueller (南壁15-4層上;4042)
12. *Stauroneis phoenicenteron* (Nitz.) Ehrenberg (南壁15-4層上;4042)
13. *Staurosira construens* Ehrenberg (南壁6-10層上;4027)

1 微化石顯微鏡写真(珪藻)

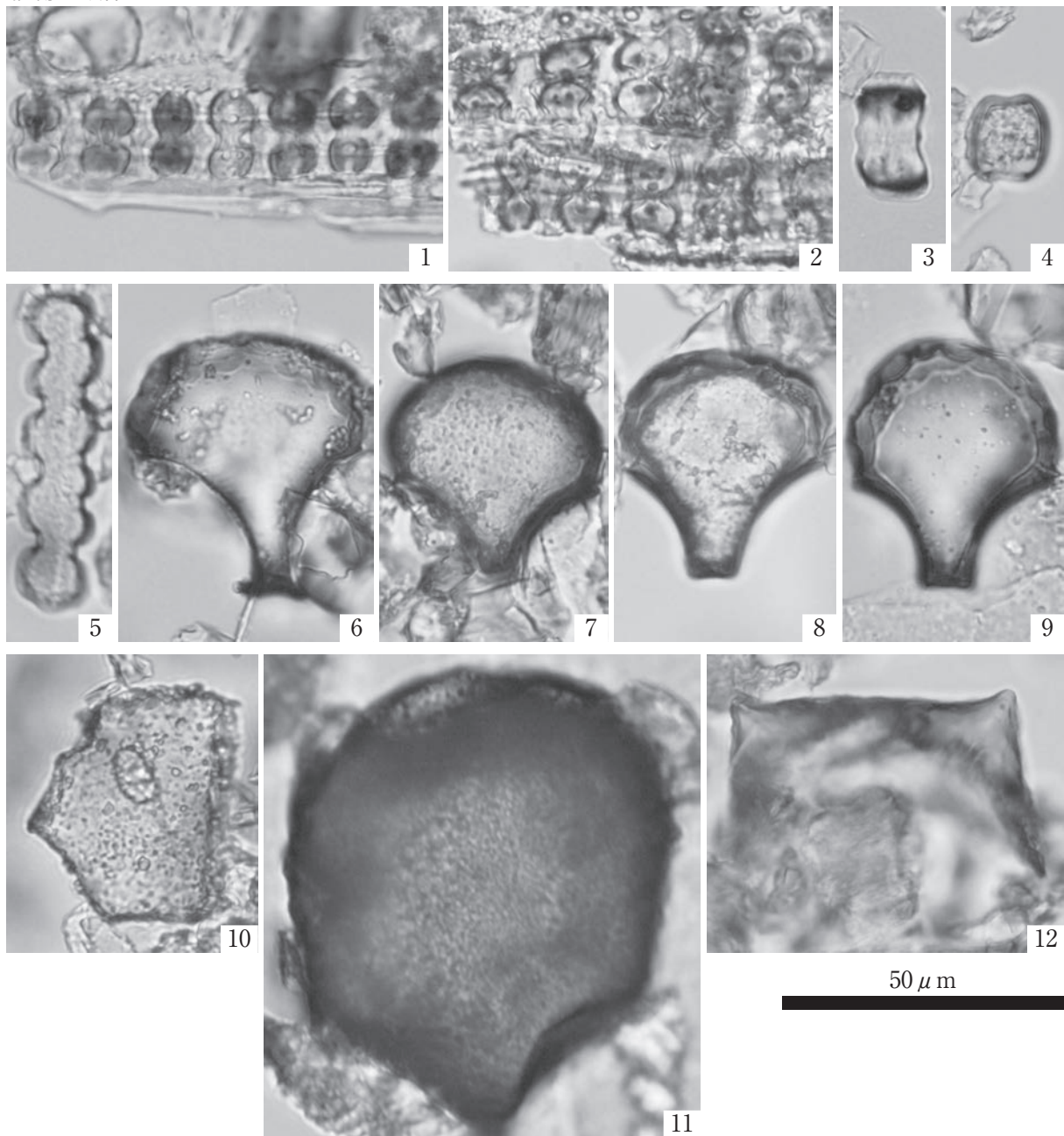
花粉化石



- | | |
|---------------------------------|--------------------------------|
| 1. モミ属(南壁 15-4層上;4042) | 2. マツ属(47(新)流路 49層;1421) |
| 3. コナラ属アカガシ亜属(47(新)流路 49層;1421) | 4. スギ属(47(新)流路 49層;1421) |
| 5. ブナ属(47(新)流路 6層;1423) | 6. コナラ属コナラ亜属(47(新)流路 49層;1421) |
| 7. オモダカ属(47(新)流路 49層;1421) | 8. ニレ属一ケヤキ属(47(新)流路 6層;1423) |
| 9. イネ科(47(新)流路 6層;1423) | 10. カヤツリグサ科(47(新)流路 49層;1421) |
| 11. ズアオイ属(47(新)流路 6層;1423) | 12. ソバ属(47(新)流路 49層;1421) |
| 13. ヨモギ属(47(新)流路 49層;1421) | |

1 微化石頭微鏡写真(花粉)

植物珪酸体



1. イネ属短細胞列(47(新)流路49層;1421)
2. イネ属短細胞列(南壁10-4層下;4043)
3. クマザサ属短細胞珪酸体(南壁10-4層下;4043)
4. ヨシ属短細胞珪酸体(47(新)流路49層;1421)
5. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体(47(新)流路49層;1421)
6. イネ属機動細胞珪酸体(1畦畔3層;291)
7. イネ属機動細胞珪酸体(南壁18-13層;4002)
8. イネ属機動細胞珪酸体(南壁6-10層上;4027)
9. イネ属機動細胞珪酸体(南壁15-4層上;4042)
10. クマザサ属機動細胞珪酸体(47(新)流路6層;1423)
11. ヨシ属機動細胞珪酸体(47(新)流路6層;1423)
12. イネ属穎珪酸体(南壁13-4層上;4023)

1 微化石顕微鏡写真(植物珪酸体)

報告書抄録

ふりがな	つねまつすがたいせき に							
書名	常松菅田遺跡Ⅱ							
副書名	一般国道9号(鳥取西道路)の改築に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	XXII							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編著者名	水村直人、駒井正明、村田泰輔							
編集機関	公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室							
所在地	〒680-1133 鳥取県鳥取市源太12番地 電話(0857)51-7553							
発行年月日	2016(平成28)年10月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
つねまつすがたいせき 常松菅田遺跡	とっとりけん とっとりし 鳥取県鳥取市 けだかちょう つねまつあざ 気高町常松字 すがた 菅田	31201	15-584	35°30'04.6"	134°4'44.8"	140401 ～ 141130	6,710m ²	一般国道9号 (鳥取西道路) 道路改築工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物				
常松菅田遺跡	集落	縄文時代		縄文土器				
		弥生時代	土溝坑	弥生土器、木製品(建築部材)等				
		古墳時代	竪穴建物列	土師器、須恵器、木製品等				
		古代～	流路	形代(人形・馬形・斎串等)、土馬等				
要約	<p>常松菅田遺跡は、瑞穂谷と宝木谷の合流部に広がる谷底平野に位置する。この低湿地遺跡では、縄文時代晩期後半の陸化以降、人々が断続的に微高地とその周辺を利用する姿がうかがえる。</p> <p>今回の調査区(1区)においては、縄文時代晩期以降約1,200年の間、深い谷に占有される古地形が明らかとなった。このため、長期に渡り谷部と微高地両者から成る高低差のある景観が広がり、隣接する2区とは異なる様相を示した。</p> <p>弥生時代から古墳時代を通じて、1区では活発な人間活動の痕跡があまり見受けられなかった。ただし、微高地には単発的に竪穴建物や土坑が存在し、また谷部には3mを超える建築部材が分布していることから、近接地における集落の存在をうかがわせる。</p> <p>古代に入り谷部が埋まると、7世紀後半から8世紀にかけては、調査区内を流れる流路において、規格性の高い木製祭祀具(人形・馬形・武器形・斎串等)が約950点出土した。その分布域も一定範囲にまとまることから、当時の祭祀場(祓戸)を示すと考える。また、相伴土器と形代の形態的特徴から勘案すると、東隣の但馬地域同様、因幡地域にも宮都の律令祭祀開始後、さほど時間差なく祭祀自体が伝来してきたことがうかがえる。</p> <p>1区および2区の調査成果を総括すると、常松菅田遺跡は、いずれの時期も集落中心地となることはなく、むしろ玉作や祭祀等、日常生活においては副次的要素が主体となりうる性格を持つ。それは、微高地の縁辺部や谷部といった遺跡所在地の古地形、つまり集落を構成するには不適と考えられる土地景観が大きく影響していると考えられる。</p>							

一般国道9号（鳥取西道路）の改築に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書XXII
鳥取県鳥取市気高町

常松菅田遺跡Ⅱ

発行 2016年10月31日
編集 公益財団法人鳥取県教育文化財団調査室
発行者 鳥取県教育委員会
〒680-8570
鳥取県鳥取市東町一丁目271番地
電話 (0857) 26-7932
印刷 勝美印刷株式会社

